

Z150-69

蜀山人全集
卷一

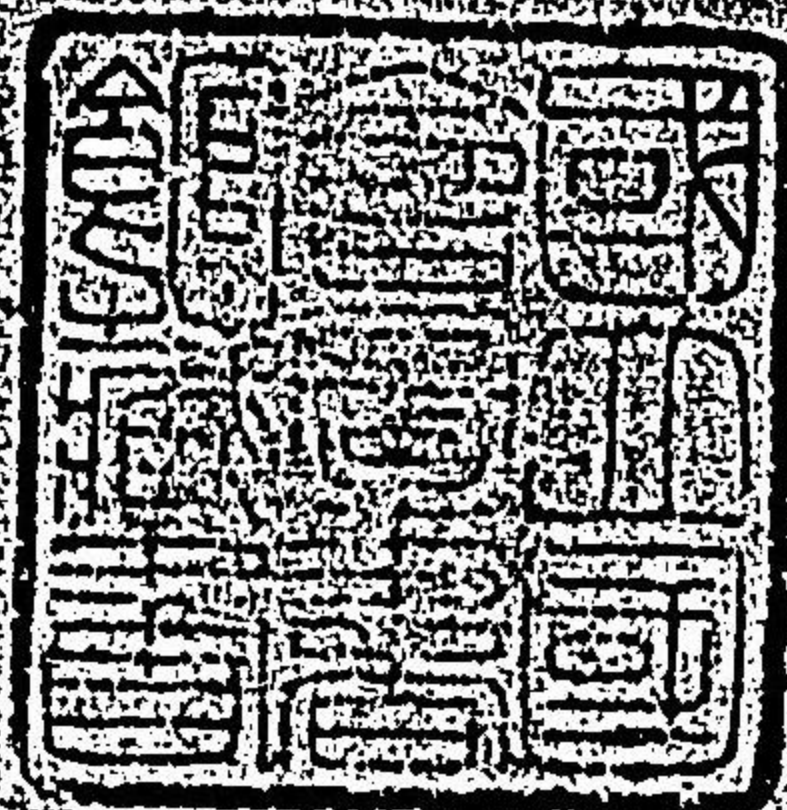
新百家說林

蜀山人全集 卷一

目次

三餐餘興	一頁
改元紀行	七頁
葦の若葉	五十三頁
壬戌紀行	百三十一頁
革命紀行	百八十五頁
小春紀行	二百一頁
調布日記	二百七十一頁
玉川披砂	三百八十三頁
武江披砂	四百十九頁

新百家說林 目次



918.5
0846.1



261239

解題

三餐餘興 寫本 一卷

明和四年の秋下總勝鹿井に武藏玉川に遊びたる時の紀行を漢文にて記したるものなり、外に詩數篇を添ふ。

改元紀行 寫本 二卷

享和元年二月東都を發し、公用を以て大坂へ赴ける時の道の記なり、附録として道中詠したる詩數章を添ふ。

葦の若葉 寫本 六卷

同年三月より十二月に至るの間、大坂滞在中見聞せし神社佛閣等に就て記せるものなり。

壬戌紀行 寫本 二卷

享和二年三月大坂を發し、翌月東都に歸れる間の道の記にして、附録として道中詠したる詩數章を添ふ。

革命紀行 寫本 一卷

文化元年の秋江戸を發し、公用を以て長崎に赴ける時の道の記中、大坂以西をのみ記したるものなり。

小春紀行 寫本 二卷

文化二年十月長崎を發し、翌月東都に歸れる間の道の記にして、附録として詩數數章を添ふ。

調布日記 寫本 三卷

文化五年十二月より翌六年に亘りて數ヶ月間公事を以て武州玉川の邊を巡視し、四月家に歸りし間の見聞を日記體に記述したるものにして、附録として詩數文章等を添ふ。

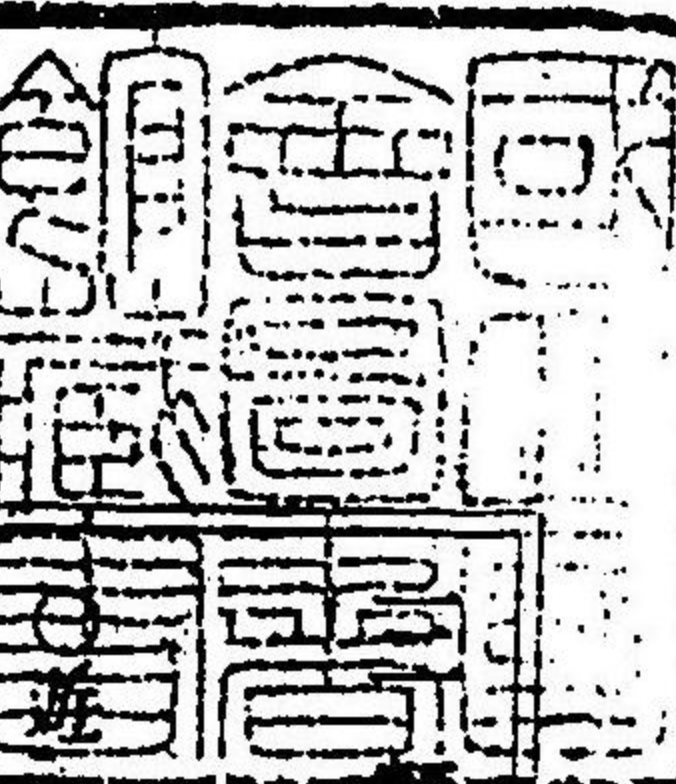
玉川披砂 寫本 二卷

武州多摩附近に於ける、社寺の由來緣起、寶物什器等を輯め記したるものなり。

武江披砂 寫本 七卷

江戸砂子等江戸の地理を記せる諸書に漏れたる江戸の事實を見聞のまゝ記せるものなり。

餐餘興



勝鹿記

明和丁亥秋九月、川仲裕自南紀至東都、同廿八日、顧余牛門、岡公修在坐曰、東都不便山水、無已其勝鹿乎、勝鹿屬北總、去都五里而近、今茲以三十六餐莽蒼、行與子遊、仲裕曰諾、越廿九日、與仲裕會公修、一夜縷々、高談轉清、乃寢、偶有城鼓報五更者、仲裕舉首曰、鷄既鳴矣、余復盥漱、公修既理行厨、高仲幹從焉、東方未明、蓐食而發、步自牛門、歷小石川、一里許至淺草門、過柳橋、則兩國橋也、萬里之勢、若駕青虬、右暨河、左人家、第一橋以達第五橋、一里許渡逆井河、日出之光、照耀蘆中、直取路於東者數里、平田曠野、縣畝寡仇、過野橋而憩茶肆、數百步至市川關、市川之源、出自刀禰、過關乘舟、秋水汎々、中流東望、平楚蒼然、遍覽之亭、巋然獨存、石壁千仞、是爲國府臺、上岸則道口徑、蓋古城門所在、路威夷而修通、落落長松、落蔭左右、有門榜安國山三大字、是總寧寺也、又有二門、

三餐餘興

東西之牌、各約三條、天正中官所令云、門之西、有水、名羅漢水、登堂從倚久之、將問其墟也、公修故嘗遊、謂余、當從後山入、從前入者、不請寺僧、則不得、決策後山、而出東門、北折田間半里許、復南得一徑於松柏中、或高或下、草莽塞之、窮山之高、而有二祠、蓋古城樓所在、傍有石棚、半已沒地、嘗發之得一金甲、然必逢山靈之怒云、東列墳塋、西帶白雪、而直上者芙蓉乎、雉堞歷々、出沒佳氣中、者東城乎、下類刀禰如帶、千餘仞一壁也、於是乎、余獨悲地利不如人和、昔里見氏割據此地、北條氏滅之、城闕爲墟、今也則亡、千餘萬代、唯有山川丘陵之險耳、思古之情、感物而作、四人相與、行厨班荆、遊覽既周、將下後山、俄而林木自振、山鳴溪應、古墓崩、斷岸頽、抑山靈怒魄、而欲廻俗士駕乎、速下後山、從前路出、有一田父偶語者、午前地震、壞我牆壁、於是始知地震、而相與笑之、又取路於東南、行將遊真間之山、北望林中、有一刹、問之田父、曰國分寺、在昔聖武皇時、國造二寺、一曰金光明四天王護國之寺、一曰法華滅罪之寺、總稱國分寺、是其一、而所謂護國之寺者也、仲裕請遊、

余亦諾、北入田間、直到寺門、堂下有古瓦、蓋千餘年、物云、好事者以為硯、余與公修拾之不巳、仲幹履傲徒跣、請之田家、即得履、又從前路到真間後山、崩榛塞路、嶢嶢墳塋、是為弘法寺、堂前有大楓樹、有山門、石磴而下、石磴之上右折、則所謂瀟瀟亭也、亭向西南、一覽殆遍、刀袖千帆出、沒樹抄、享保中、東都 有德公攸暨、即此、下徑左折、有兵胡神祠、傍有一井、名真間井、元祿中、鈴長賴建碑、其銘曰、瓶甕可汲、固志何傾、嗚呼節婦、與水冽清、據稗官、兵胡神烈女也、貌閑麗、人欲誘之、自盟投此井而死、一說為繼母、困、投此井而死、故有真間及繼橋之名云、繼與真間、和訓相通、於義為近、左折一路、有一小橋、名繼橋、有碑、復鈴長賴所建、其銘曰、繼絕與廢、維文維橋、詞林千載、萬葉不凋、入一酒肆、酒薄難醉、相與求茶菓而食、度小橋、夾長松、左折右轉、可三三三、運平原、施以溝渠、有魚數百頭、正與夕照相映、四人脚酸、跣步不止、既到行德浦、少憩人家、食熱湯餅、蓋名品也、日將暮矣、就舟中川、有關、關法過、哺時、則不出、須臾到關、即得出、同舟之客、多是商旅、高談更發、

河上逍遙、過小名河、而達大川、舟行三三三、到小網坊、捨舟而步、仲幹就弟家宿、以孔邇故、仲裕歸神門、余與公修、甲夜歸牛門、南畝子曰、余少好遊山水、而實有濟勝之具、噫天假我一爵、而不能遊、履於天下也、一朝宛其死矣、名山恐難編、視夫勝鹿、去都僅五里、與同好三子、頗窮其幽峻、使我志願畢矣、其在斯遊哉、時皇朝明和四年丁亥九月晦遊之、越閏九月三日東海田覃記、勝鹿六詠

國府臺

萬古荒臺上、空留國府名、悲風吹不盡、日暮起邊聲、

總寧寺

清秋古寺中、落日空山上、不見采樵人、但聞鐘磬響、

刀禰川

悠悠刀禰水、遠自總州來、萬里長風色、布帆破浪回、

真間山

山上丹楓樹、蕭蕭昨夜霜、徘徊人不見、石磴下斜陽、

瀟瀟亭

瀟瀟亭何在、空山坐不移、自傷千里目、非是一時悲、

氏胡祠

粉黛空黃土、祠壇養美人、請看山下井、千古壁心神、

遊玉川記

遊勝鹿後四日、又遊玉川、從行者、房人川生、郡人岡生高生、先是、立子玉為我言曰、子若遊玉川、必宿府中驛、有一主人、頗好書者、岡生介子玉書、而請遊之、約以閏九月四日、川生期三日不至、余即岡生謀、高生狂奴、自傍請往、余謂日暮塗遠禁之、不可、遂往、余亦歸舍、夜已初更、高生將川生來、坐定、川生曰、余偶有事、業已辭諸子玉、恐未達、余笑曰、單也幸子玉之未達已、川生不得已、而將遊之、於是乎高生之喜可知也、高生歸告之岡生、且約質明會岡生、余留川生宿、就寢夜過半、小雨滴々、聲聞板屋、質明始寤、相與蓐食、余起觀夜、明星爛兮、余與川生會岡生、而高生與焉、即發、由牛門而西入四谷、歷內藤驛、抵高井驛、是道峽第一亭也、草木黃落、民家蕭然、數里得村、曰櫻川、有賣餅者、就而啖之、有犬相前後者數里、為村童嗾失之、川生曰、請先武野、後玉川、先玉川者、大道如砥、可厭之甚也、問路田父、田父曰、右平田

曠野、縣敞之地、流泉界道、喬木造雲、紅楸黃雜、與諸峰蒼翠映、萬狀之奇、足與目謀、久之為大野、高生行拾菓、日午、余與三三三、行厨藉草、從櫻川入者、可三四里、所謂武野、而國風所詠、應支野者也、川生左入一間道、復左轉得國分寺、入門登堂、扁曰金光明四天護國之寺、在昔聖武皇所造、一若勝鹿所觀也、堂下多古瓦、余與岡生拾之、堂後題名而去、門之左有碑、篆曰武藏國府中國分寺碑記、銘則仲英服先生所勒也、余嘗謂先生者三四、亡幾先生逝矣、不啻為之墮淚、且據懷舊之蓄念、下山而南半里許、道左徑有華表、所謂六所神祠首選也、大木輪菌、七圍八圍、中鬱結之、多為野火燒、久之出府中驛、古吾先王、郡縣天下、國司所治、是為國府、府中其一驛、是以名云、長亭百餘家、相與求麥麵食、蓋府中佳味也、余與岡生、以酒繼之、川生高生不嗜、起入六所神祠、石華表既頽、唯有二柱、已、祠後題名而出、回顧所入路、森木幽邃、嘗子玉所言逆旅主人者、即此、見子玉口失名、而唯題四人亭耳、蓋亭名也、問之、主人出未歸、其婦曰、尋歸矣、少憩之、偶有群書堆案、相觀而喜曰、我輩々々、問

之、主人歸、通名刺、野維民字子則者也、四人部野村將遊玉川、使主人嚮導之、西行數步而左、逶迤平田、民家其間、玉川之源、出自秩父嶺、秋水未盈、分流者數、有長堤、防未、然、主人先褰裳而涉、四人隨之、洲多白礫、河上乎、三子拾之、余座石而望、前山蒼翠、倒景清流、水聲鏗々、若鳴玉然、有漁人結網者、然未宜得魚、望西南、爲玉山、爲小佛嶺、馮、或者或赤、以夕照映之故、其間芙蓉雪近、則若玉几然、余賦一絕、歌之、歌聲縹緲、雨隨之矣、問主人、以此地諸勝、主人曰、右之敗墟、有清月橋、未足以爲勝、不行而罷、主人少如倦、使之歸家、四人相與、箕踞待月、密雲不露、殊爲可恨、日暮宿府中驛、主人出國分寺碑記示之、余欲寫之、不堪墮淚、即寫之燈下、夜已初更、相與賦詩、二更就寢、五旦早發、復將遊玉川、觀日出也、自昨所從路入、玉川淨如一匹練、紅日徐出、正東、正與芙蓉雪色對、其餘諸峰若燒、爲凝睇者久之、水分流而道欲絕、將跨長堤、匍匐而上、得上間道、而達大道、歷府中布田諸驛、抵仙川村而息焉、是昨日攸暨也、日午、抵高井驛、余脚酸矣、若跛蹇

然、與川高二生相後先、岡生捷甚、先行數百步、抵四谷、雨甚、川生就友人而借雨具、高生從之、余與岡生、出四谷街、而至五級阪、高生狂走逐之、川生後與岡高二生、分手賀邸之墟、八鼓歸家、川生尋到矣、留之宿、而明日歸神門客舍、南畝子曰、業已遊勝鹿、以爲志願畢矣、勝鹿之勝、乃不能當此半、異日遊名山山水、則何有彼善於此哉、嗚呼山水之勝、漸近自然者、非邪、時丁亥之秋、閏九月四日遊之、越七日東海田覃記、同川仲裕、高仲幹、岡公修、遊武野、秋風吹百卉、千里絕人烟、野曠無行客、都遙眺遠天、征途空翠裏、高樹夕陽前、爲是幽情切、轉堪懷舊年、

郊行
聊伴兩三人、行尋來去客、丹楓與白雲、何處無秋色、尚有招提境、武皇安在哉、草從原上滿、門對府中開、古瓦留遺構、深山辨劫灰、蕭蕭松柏裡、懷舊一徘徊、

遊玉川

玉山分夕麗、玉水激清流、安得乘明月、更同仙侶舟、

長川迴一曲、澹澹玉爲沙、散步聽波響、前村日已斜、

長川鳴玉漱、清流十里孤村落、日幽、遊賞偏堪期、枕石、機心舊自不驚鷗、千山映出丹楓色、一曲誰歌白苧秋、還怪扁舟蘆荻裏、聽仙侶下滄洲、

古驛長亭一道通、夜來期宿暫相同、幽情別有凄然思、非復當年舊府中、

去歲南山隱、今年北越行、時人問名姓、東海一狂生、

明和丁亥秋閏九月書贈南條山人、南畝田覃

○夏晚同岡公修滕温之泛舟八首
向晚牛門暑色空、夾溝煙樹起涼風、扁舟一片乘明月、直下清流墨水東、

野火、數株枯柳自嶮、
二州明月照長橋、誰泛樓船遡暮潮、已聽鳳凰調玉瑣、還疑翡翠戲蘭苕、
珠簾相映玉爲人、人影波搖月色新、夾岸樓臺歌吹遍、蘭舟總繫大江濱、
江月涼風醉色寒、一樽傾盡興將闌、白魚忽躍流波上、故入舟中供玉盤、
金波直捲玉山來、三派長流映月回、永代橋南回首望、江天盡處海門開、
擊汰飄飄上碧空、輕舟不繫自西東、清風明月情無盡、一夜携歸滿袖中、
酒中仙侶此相携、醉去歸舟望不迷、楊柳橋邊今夜月、慙慙且送御溝西、

○俠客行
京華游俠日相邀、一飲歸來酒未消、纔向市中人自避、不知驄馬爲誰驕、

○涼州詞
葡萄酒熟滿城秋、多少征人醉戍樓、今日胡天無戰伐、漫歌一曲古涼州、

○七夕同諸子遊山寺得過字

香閣秋陰鎖_二薛蘿、同人令節此經過、風雲意借_二玄談_一、
盡、牛女光窺_二色相_一多、月照_二高松_一、疑_二鶴影_一、鐘流_二下
界_一、雜_二笙歌_一、登臨_一一出諸天外、不_レ羨仙槎逼_二絳河_一、

○寄_二山田君忠_一

長謝青雲昔日情、抽簪散髮賦_二遺策_一、才高一臥終稱
疼、身退千秋欲_レ遂_レ名、曾引_二書生縫掖服_一、兼影_二劍客
曼胡纓_一、更聞門下吹_二龍笛_一、自使_二雌雄匣裏鳴_一、

○壬辰八月二日風雨

萬竅含_レ風風怒號、夜來風雨夢魂勞、城邊忽拔_二千章木_一、
海上高翻_二八月濤_一、流決_二水田_一漂_二黍稷_一、徑荒_二離落_一捲_二
蓬蒿_一、細推_二物理_一何曾定、心事唯須_レ附_二濁醪_一、

伏乞正

田 覃

○郊行示_二叔成_一

七月幽風禾黍秋、相_二將社友_一入_レ郊遊、
貪_二看野興_一與_二班荆路_一、行和_二村農擊_レ壤謳_一、
樹裏枯棹懸_二落照_一、橋邊水碓激_二長流_一、
與_レ君聊欲_レ追_二沮溺_一、無_レ那吾生且未_レ休、

○漁樵

漁海樵山一放歌、長將_二丘壑_一對_二煙波_一、
江流滾滾迎_二垂釣_一、谷響丁丁答_二伐柯_一、

拾_レ菓行隨_二榛路_一去、得_レ魚時向_二酒家過_一、
羨君各自安生計、世上機心不_レ耐_レ多、

○戲詠_二酒中花_一詩

一芥之舟浮_二杯酒中_一、花卉點點動而愈出、
纖妙可_レ愛、名_二酒中花_一、貴游子弟戲也、
芳樽綺席絕_二塵埃_一、怪見_二芥舟泛舉_一杯、
珠藥漸含_二華露_一動、金花忽映_二玉漿_一開、
非_レ關_二廣客憎_二弓影_一、還比_二壽陽_一向_二鏡臺_一、
點點細圍_二纖麗巧_一、何人好剪_二綵霞_一裁、

○古意

昨栽_二桃李樹_一、共約及花時、花散實還結、佳人無見期、
偶座聽_二秋雨_一、蕭蕭倚_二北窓_一、迷心兼_二淨理_一、同照_二一青
缸、

○擬_レ宴_二邊將_一

帳飲更闌月色清、一聲羌笛動_二連營_一、
今宵但盡_二蒲萄酒_一、莫_レ說_二關山萬里情_一、

○七夕

天上佳期看又過、人間幾度望_二星河_一、
秋風日夕絃歌起、何處高樓乞巧多、

改元紀行卷之上

享和とあらたまりぬる年、難波なる権銅の座にのぞ
むべき仰せごとうけ給りて、二月貳拾七日卯の刻す
ぐる頃に出たつ、兒淑定吉弟榮名_二島崎_一甥_二義方_一吉見_二其
の外親しきものこれかれ旅よそひして送れり_二宮原宗
史右衛門須賀屋忠助伊勢_一、折から雨そぼふりて涓城の塵も
屋長兵衛柳屋長次郎等也、うるほふばかりなるべし、市谷赤坂を過ぎ赤羽根の
はしの前なる立場にいこふ、品川大佛の前なる鍵屋
といへる高どのにて、酒くみかほし、あるは歌よみ、
詩つくり、聯句などして別をしまぬにしもあらず、こ
ゝにて送り來れるものをかへす、兒淑宮原氏ばかり
は、大師河原に遊ぶたよりよしとして、大森まで來れ
り、こゝにおくまりたる茶店あり、數寄屋河岸のすき
ものどもまちつけて小竹筒みさかなとり出てす、む
北川嘉兵衛大坂屋甚兵衛などなり、十千亭_二萬屋助_一のあるじ
石川五郎兵衛土塚農夫、はおくれたりとして息もつきあへずして追ひ來れり、
よく一盃の酒を盡して肩輿のうちねふり給ひねか
しといふにかゝりて、酔心地に人々とわかれて六郷

のわたりにのぞめる頃、同里の三子井上子際作右衛門
鈴木猶人文左衛門辻知篤忠左衛門送り來りて手をわか
つ、あかすかへりみかちなからついに輿にゆられて
臥しぬ、従者なるもの、や、目覺し給へ、こゝは金川
の臺にて候といふに驚きて輿の籠をか、け見れば、
いにし東南は海はるかにして本牧のかたに辨天の森
みゆ、明和四のとし、四溟陳人_二名正慈字公修_一南條山人
名孟樟字仲_二後爲僧名紫寬_一、三十年あ
まりのむかしにて予がまだ十九歳の頃なりけり、右
にみゆる山をかいは山といふ、子安一の宮大明神あ
り、入れ川の橋を渡りて浦島觀世音に常燈あり、洲崎
大明神の社勝軍飯綱大權現の宮を過て、富士淺間の
人穴あり、芝生村の本町のはしをわたれば程ヶ谷の
宿ついきなり_二俗に棒鼻_一、右に圓海山道の碑たてり、中の
橋をわたり右かはなる澤湯屋彦右衛門といへる宿り
につく、酉の時に近し、床に掛し書に夷曲うたあり
くたびれてやうく足もおもたか屋
よい程かやの宿をとりけり
いかなる人にやとおかし
廿八日。雨はれくもりてほのくらきにいでたつ、宮

ヶ谷村より左へ折れ坂を上る、權太坂といふ、松の林あり、中里村を過て境木村の立場にいたる、地藏堂あり、是なん武藏相模の國境なるといふに、はしめて異郷にいりぬる心地せらる、焼餅坂を下りて左のかたに永谷八郷の司天神山天満宮にゆく道の碑たてり、日本三體のひとつなりといふ、信濃坂を下れば、左に尼將軍の御本尊正觀音堂あり、又坂東十四番の觀音にゆく道あり、かし屋の立場にいこふ、このあたり左右の山のたゝすまひ、都下のけしきに様かはりて、垣ほの桃くれなゐに、野菜の花黄なり、下飯田村と福田村の間にて莚つゝみの長持ひきつゝき來れり、阿蘭陀人獻上物といへる札たてたり、四夷八蠻も譯をかかねて來る事おさまれる代のいさほしなるべし、桃青翁のほくに、「阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍、しといひし事など思ひあはせらる、右に大山路爲、五處橋供養」とかける碑みゆ、左に十九番櫻堂觀音道あり、松間をすき、土橋をわたり、戸塚の宿に在るに、雨ふりさぬ、左に觀音堂あり、行基菩薩の作なりといふ、右に淡嶋明神の道あり、左に鎌倉道あり、この所より鶴が岡まで二里ばかりとなん、吉川

橋をわたり、伊勢屋源七といふものを訪ふ、問屋のむかひにすめり、年頃和書多くたくはへたるときくにたかはす、去々年金澤文庫の印ある尙書正義一卷公にたてまつりて、金五兩を賜はれるよしなどかたる、萬代和歌集月詣集など北川氏よりかりし事などありしが此人のもてるふみときけり、高どのに折からの雛あそびの調度めくものたてわたして賑はし、茶など煮てすゝめんといへど、さきをいそぎていづ、左に鎌倉道の碑あり、天王の宮、八幡の宮あり、所の鎮守なりとて一番坂二番坂といふをこへつゝゆけば松の林あり、此のあたり松露多しといふ、白この臺といへる所を俗に女殺しといふ、一とせ旅人の女を殺せる所なりと輿かくものいふに、あたりをみれば人家なし、物すごき事いはんかたなく、やうやう行きて、右に青陽院專念寺にゆく道あり、又富士淺間の社みゆ、松原を過て立場あり、かげとりと道あり、左のかたの岨に一木の櫻さきそめたり、げにあつまちのかさしなるべし、千本杉といへるわたり、老杉雲をしのきて高し、藤澤の宿にいたり、橋

を渡り道場坂を上りて、小栗堂に在る、照手姫尼の像あり、左右に掛物をかけたり、左は十人殿原の像右は小栗の事がける繪なるべし、いづれも古雅にしてあらたなるものとは見へず、十人の名を書つゝ。

後藤兵助助高、後藤大八郎高次、片岡加太郎春教、片岡加次郎春高、田鍋平六郎長秀、田鍋平八郎長爲、水戸小太郎爲久、風間次郎正貞、風間八郎正國、池庄司成長

小栗満重の事あまねく人のしる所にして、正しき説をみる事なし、十人の名もいかならんおほつかなし、什寶に鬼かけの轡、崇寧通寶の錢、天狗の爪、古鏡などありといへれど、うきたるものみんもよしなしと見ずして出ぬ、山あひの墓原をへて、藤澤山清淨光寺のうら門より入てみるに、本堂、觀音堂、鐘樓、經藏などつきくし、方丈のかた見やらるゝに、上方に富士見の亭高し、かの白川侯のかせ給へる清音の額もこの所なるべし、堂の側に櫻さき出たり、三門を出て額をあふきみるに、藤澤山とあり、從二位藤原通基卿のかせ給へるとぞ、藤澤の宿屋つくりよろし、白旗大明神の社ありときし、が、輿かくも

のいそぎて見過しぬ、左に辨財天の鳥居ありて江島道といへる碑あり、右に松山あり、伊賀屋の山なりといふ、此あたりにすめる高田武右衛門といへるものは、此邑の大姓にして山多くもちたりなど輿かくものかたる、右に楊柳觀音の堂あり、慈覺大師の作なりといふ、車田を過てひき地川をわたる、小栗殿の乗れる車を洗ひし所なれば、いつも水濁れりといふ、樂師堂あり、毘首羯摩の作なり、道の左に田あり、池の如し、常光明山道あり、よつ屋の立場をこへ、二ツ屋などいふ所にいたる、右に大山道あり、これまで御代官大貫次右衛門の支配する所にて、赤羽根村より西は木原兵左衛門知行所といへる、榜示杭みゆ、松の並木のかげをゆきく、十景坂を過れば、右に大山たかくみわたさる、都人のあざらけき魚の鱈くひたりとてのめきいふ、南郷の立場これなりとききて、名もなつかしき江戸屋といふ家にいれば、げにあざらかなるひしこといへる魚の鱈もて來れり、雨皮いる、籠のうちに携へ來りし酒樽とうで、みさかなに箸さしたつるに、味よのつねならずぞ覺えし、松露といへるものはみつよいつゝこそ

蕨にはすなれ、漆の色も衰へたる椀に、うつたかうも
りたる、さすがにひなびたり、橋をわたりて右のかた
に大鳥居あり、鶴ヶ岡八幡宮にまうでぬる道なるべ
し、右に町屋山梅雲寺路といふ碑たてり、町屋川の橋
をわたる、町屋橋といふ、此のみなみは相模の淵と
いへるとぞ、右に上國寺信隆寺などいへる法華寺み
ゆ、今宿橋を渡り、中島村を過ぎて馬入川にかゝる、
水淺くして砂清し、此川は、古の相模川にして、かの
鎌倉殿正治元年の事など思ひ出らる、平塚の宿をこ
へ元花水のはしといへる土橋をわたりて、名におふ
花水橋をわたる、高麗寺村に入れば、右に高麗寺山た
かく登へて、みどりの色ちかし、左に山下善福寺御
舊跡あり、浄土真宗の寺なるべし、まことや化粧坂
といへる名のみことくしうきこゆれど、つまづく
ばかりの蟻塚にひとし、むかしは此ところより半里
ばかり引いたりたる所なりしを、街道のうちにつせ
るなりときくにぞ、けにさもと思はる、此あたりに
虎御前のやしきあとなとありといふ、大磯の宿を過
て名におふ虎御石見んと延臺寺に入れば、鬼子母神
堂虎池辨財天の宮あり、石に太刀疵矢疵といへるも

のありて、曾我十郎が身かはりにたてるなど、寺僧
のかたるも覺束なし、寺は延山十九世法雲院日道上
人慶長年中に創造せるとぞ、十郎慷慨愛於菟いへる
羅山子の詩の句も思ひ出られておかし、橋をわたり
て、かの三千風かいたなみしと云ふ鴨立庵にいり、
西行法師の像をみる、庵の中に短冊あり
やよひの頃鴨たつ澤に立より侍りて
あはれさは秋ならねどもしられけり
しぎたつ澤のむかし尋ねて 雅章拜
これは飛鳥井亞相のなりまた
寶永二年の秋とほりけるとき
いまでも猶むかしの秋をおもふそよ
鴨立澤のゆふぐれ空 乗 邑
是は松平左近將監とて享保の頃政とれる人なるべし
又色紙あり、西行法師の筆なりといふ
つれもなくなりゆく人の言のはそ
あきよりさきの紅葉なりけり
西行の杖なりとてあるはなくてもありなん、例の三
千風がかな文かたへの石にゑりてたてり、笈さがし
といへるもの見侍りし事ありしに、三千風が歌に

ありし世の鴨の羽音はさもなく

いまは澤邊に馬駕籠そたつ

といへるこそ中々まことの風情ならめ、すこし興さ
めたる心地して、西行堂のまへより海つらを見わ
たせば、けにこゆるきのいそ波、たちさりかたき所な
り、此庵なからましかばあはれさもまさりぬるべし、
や、ゆきて小磯宿なり、右に西國三十三所觀音の道
あり、切通しをすきて左に身代地藏尊たてり、行基
菩薩の作なり、土橋をわたりて、右にたかとり山あ
り、松の一むら高くみゆ、國府新宿といへる立場はむ
かしの國府の跡となん、土橋をわたりて右に吾妻權
現の鳥居あり、吾妻山高くそひえて二町ばかりへた
てり、此神を祈るには夏は綿衣をき、冬は帷子をま
とひて、山の上にこもるといふ、王充が夏爐冬扇の
ことほも思ひあはせられておかし、松の林の中に鹿
松といへる松あり、枝かれて節多し、いかなるゆゑ
にかしらす、右のかたに梅澤山東光寺あり、古木の
藤かれて木をまとへり、ならはしに藤卷寺といふ、
醫王堂あり梅澤の立場は南郷につぎて賑はへり、坂
を下り土橋をわたる、押切の橋といふ、川の名なる

べし、これより西小田原領東川越領といへる榜示あ
り、ゆきゆきて左の海つらをながむればうちよする
波の音たかし、左に親鸞上人御舊跡御勸堂、越後國蒲
原軒寫といへる碑あり、右に歸命堂國府津真樂寺あ
り、是また聞し舊跡なるべし、左に法秀寺といへる
法華宗の寺あり、土橋をわたれば右に、道丁大權現
道の碑あり、これより三里ばかりありといふ、酒匂
川の水落て渾淺し、土橋三ツあり、三月六日には橋
をひくといふ、河原廣くして燈籠などもみゆ、かの
梶原がければそ波はあがりけると云ひけん鞠子川も
これなるべし、山王の橋のほとりにて日くれぬ、小
田原の宿より出むかへて、小田原宿御用といへる挑
灯高く兩行にかゝりて先を拂ふや、城下にいれば、
右の方に番所あり、宮の前といへる何かし屋源四郎
が家にやどりぬ、けふの道十二里にあまりて遠けれ
ば、從者もつかれしにや軒かきてふしぬ。
二十九日。よへより雨こぼすがごとくふりて、をや
みなし、けふは名におふ箱根の山こえんに、かくては
あゆみくるしかるべく、夜あけぬ程はつい松の火も
うちけたるべきなど 從者のかたみにいひあへるも

ことほりなり、これ王尊が馬をいさふ所と思ひおこして、卯時の酒二つぎばかり傾け、従者にもおまかせて出たつに、夜はほのぼのと明けわたたりて、雨もやゝをやみぬ、城下のさまにきははし、右のかたに、八棟つくりの家みゆるは、名におふ外郎の樂うるなるべし、右に大手あり、惣門を出て、右にまがり、左に折れて、山口にさしかゝる、右に地藏堂あり、是より巖石を右にし、谷川を左とす、これ早川の流れなり、川のほとりに菜圃あり、黄花こがねをしくが如し、西南に石橋山高くそびえ、伊豆の海はるかにみわたされて、風景いはんかたなし、風祭の立場にいたる、人家あり、入宇田といふ所より右のかた、長興山淨泰寺にゆく道あり、猶も山を右にし、川を左にして行くに、ふむ所石ならざるはなく、見る所山ならざるはなし、山崎到下峠を下りて甲をこえ、三枚橋をわたる、右に湯もとにゆく道あり、一むら竹のかこひして何某の莊園にやと思ふに、門前に下馬札ありて、金湯山といふ額あり、朝鮮國雪峰書にて、方丈の額も同じ筆なり、これ早雲寺なめりと、輿より下りて入るに、京櫻咲みたれたり、鐘樓の銘をさぐ

りみるに、文字磨滅してわづかに元徳二年の四字みゆ、ふところにせし蠟墨もてうつ、北條五代の墓はいづこと僧にとひ、書院の庭より入りて見るに、若むしたれと文字あさやかにみゆ、後にいとみなたてしものなるべし、齊の七十餘城にもをとらざりし勢を思ふに、涙もといまらず、臺殿松杉入空翠と、南郭か詩つくりしもむべなりけらし、書院の障子に龍虎の畫あり、古法眼の筆なりといふ、寺をいで、湯本の立場にいこふ、こゝに轆轤もて挽ものせし器あまたさゝやかなる玩ひものなとみせに列ねて、めせめせとす、む、故郷のうまごの家つともと、ふたつみつかひて輿のうちに藏む、谷川橋をわたり、しあけ坂沓わり坂などこえて、又土橋あり、此あたり左は山さしにそひ右は谷川にのぞめり、むかひ山高くしていく重ともしらす、川ばたといふ立場にいこふ、左に地藏堂あり、かゝる所にあが佛とたのみて、鉦うちならす道心を見るに、いとあはれなり、すゝも川にかゝれるすくも橋をわたれば、山さしを右にし、谷川を左にす、猶さかしきにのぼれば、女ころばしとかやいへるあたりの、左の岸に一つの石あり、曾我

五郎が割石とよぶ、大澤の石橋をすぎ、猶右のかたの山さしにそひ、左のかたの谷川にのぞみつゝゆくに、陸放翁が山重水複疑無路柳暗花明又一村といへるごとき立場あり畑といへる所なり、輿かぐものもつかれ、従者もやみぬれば、しばらくやすらはんとするに、立つらねたる酒家のうちより、女どもの群れ出でて、百千の鳥の囀る如く、これにいこはせ給へ、かれにあかり給ひねなと口々にいふめり、蔦屋といへるやとにたちいりて餉あさり、酒のむ、欄干によりてみれば、上に千重の山そひえ、下は不測の谷にのぞむ、心なき雲は岫を出、友をもとむる鳥は霧にむせぶ、今朝風まつりの邊より雨やみしか、こゝに至りて全く晴わたりて、停午の日の影、はなやかにさしいつるにそ、つかれもやみ心もいさみぬ、右のかたに大なる石あり、皂角坂、かしの木坂、猿すへり、てうしの口など、さかしきにさかしきをかさねて、やゝ平かなる老が平といふ所にいたる、ここに四阿たて、あま酒ひさくものあり、まばらく輿より下りてあゆむに、右に三子山ちかくして元山なり、石のみありて草木の類なし、左にみゆる山を文庫山

といふ、むかし文庫の蓋とりてかしこに投しかは、ふたこ山となれるなど、輿昇くものかたるもをかし、お玉坂といへるは、罪ある女の刑せられしゆへにかくいふとを、しる水といふは、もと城不見とかけり、昔みやこより使來りて、此はこね山にゆきなやみて、小田原の城見すにかへり、その上使を迎に出し所を、上使の口といふ、今てうしの口といふは、訛るなりなど、輿かぐものいふも夢の中に又夢うらなふ心地す、右のかたに箱根權現にゆく道あり、三町ほどと聞けば、輿をさきなる出口に先だたしめて、村の童を案内とし、細き道をたどり行く、よべの雨に道うるほひたれば、履を著てあゆむ謝公東山の履にもをとらさるべし、左に蘆の湖たゝえて、汀に大きな釜二ツあり、山を右にし、湖を左にしてゆけば、むかひに東福寺あり、右のかたに石坂たかくみえて、權現の社銅瓦ふきなるべし、關こえぬまは、先をいそげば、遙にふしをがみつゝ、もと來し道にかへりて、地藏堂の前にいづ、さいの河原とかいひて、法師の鐘打ち鳴らし、念佛唱ふる聲けうとし、姫路の太守のみたちにつかふる、高須氏に

行あひぬ、馬上相逢無紙筆、といへるからうたの心なるべし、猶くらき坂をのほり、御關所まもれる者のかたに従者をもていひつかはせしに、既に問屋の者よりいひおこしぬれば、改めていふにをよばすと云ふにぞ、笠ぬぎ中貫の脊はきて關をすぐ、長持の櫃はすでにさきたちて通りぬ、是より輿にのり湖を右にして石橋をわたりゆく、左右に寺などみゆ、宿のさま鄙びて、湯本畑の立場にはたちもおよばず、左に紅藤庵といふ額みえしは寺にやあるらん、此あたり夏も蚊蠅なしと聞く、風越の臺を上り、ばらが平にいたれば、霧ふかくして左右をみず、張公が五里の市もかくやらん、こゝは相模伊豆の國境にして、二本の杉たてり、右は焼けたる山の如く、左は深き谷かと、あやうくふむところの石あらし、古木老杉木末をましへて物すごく、衣の袖も冷にうちしめりたるに、雨さへふり出ぬ、太かれ木小かれ木などいふわたりより、輿の戸さし籠て踏み居るに、輿かくものも石につまづき、息杖たて、やうやう下りゆく、輿のすそにはららと音するは小篠の多きなり、これなん箱根竹とて、都人の煙管に磨き用ふるものなり

とぞ、ゆきゆきてあづまやあり、前に石をたゝみて庭めきたり、紀の國の守のいこはせ給へる立場なりとぞ政右衛門が立場と云、猶も小篠の中をわけつゝ下り、山中といふ立場にいたる、山上より此所迄一里十町ばかり下れると云ふ、右にまば切地蔵あり、やゝ行て霧晴れわたり、四方の山々あさやかに見ゆ、富士見だらといへる所のよしき、つるに、ふじの山のみ曇りて見へぬぞ恨みなる、遠く川水の流れ行くは、喜瀬川なるべし、南のかたに幾重ともなくつらなれる山あひより、虹のたちのぼるけしきいはんかたなし、左右に松の並木あり、上長坂を下れば篠原の立場に至る、人家山中よりはつきつきし、左のかたにみはらしやといふ家名あり、げにも見はらしよき所なり、下長坂を下り行く荷つけし馬の膝おりてたふれしあり、くろかりしが黄になんぬといへる詩も思ひ出らる、三ツ屋といへる立場を過て、右に覺源山松雲寺といふ法華寺あり、是より三嶋まで一里半ありといふに力を得て、小まねぐ大まぐれなといふわたりをこえ、左に一の山七面堂あり、攝待の茶をすゝむといふ、一の山の立場をこゆれば坂を下ること急なり、

白ころばしといふ立場あり、塚原なり、今井坂を下り、かはら前の橋を渡り、三嶋の宿につく、右に三嶋の神社あり、神池の橋を渡りてひろ前にぬかつき、けふ事ゆゑなく險き道をわたり來れることなど思ひつけてぬさ奉る、すべて三嶋の宿の人夫は、かゝるけはしき道を日毎に行かよひて世をわたるなり、汗もしとゝにいき杖立てあゆみ、くるしき折々にはのぼればくだるのぼればくだるとひとりごとし侍るを聞くに、實にひとたびはのぼり、ひとたびは下る世の中に、さかしきを行ふて幸をもとむる小人の心こそあさましけれ、右のかたに千貫樋あり、此あたり駿豆兩國の境なるべし、宿のうちに暮うちて、菊地内記泊といへる札あり、これは紀の國の守のみたちにつかえて久しく相しれる友なるが、二とせみとせ見ることなかりしが、日たかければいまだ宿にはつかじと、思ひつゝゆく道にして、輿の籠をあけてこしたてよといふ聲す、あはやと見るにそれなり、あまりうれしく輿さしよせて物語るに、かれもこれもおなじく官遊の人なれば、しばらくも止る事あたはず、蓋をかたむけて語るといひし、古ことも思ひ

出られて、西と東に行きわかれぬ、こゝは木瀬川の東なり、長澤村八幡宮のまします所は、治承四年十月廿一日、九郎判官奥州より下りて、鎌倉殿に初めて對面し給ふ所と聞く、龜鶴觀音へ道一町とかける碑右のかたにみへしかのきせ川の龜鶴が富士の御狩に、工藤左衛門とともに臥したることなど、取りあつむれば、東鑑會我物語りなどよむこゝちす、車かへしといふ所を過て、沼津の城下に入る、水野出羽守の家士、問屋のものと共に出て其よしを申す、川を左にしてゆけば、右に淺間の社あり、けふ箱根の山を越してより、俄に鄙ひたる風俗にして、だみたることばをきく、あかしや金兵衛が家をやどりすとす、三月朔日。天氣よし沼津の宿を出れば、右に淺間の社あり、輿の右なる籠をかゝげて、初めて富士の雪を見る、あしたか山前によこたはれり、道平かにして、きのうのけはしきに似ず、右に諏訪社八幡宮榮昌寺あり、此ほとりの村々葎の楡垣多し、社の鳥居多くは石にして、石もてゑれる横額あり、松長村のほとりより富士をみるに、まばしがほどに雲たちおほひて高根を見ず、村村の家なみ都ちかき田舎の如

くにして、大なる松あり、左右にくれなるの椿さかりなり、椿林といふ、是れまで駿東郡にして富士郡江尻村のあたりは、ふし山の正面と聞くに、雲霧晴れてあざやかにみゆ、あし高山の横たはれるも、いつしか右の方にみやられ、ふもとに野徑の草むら木たちもの古りしは、かのうき嶋が原にして、原といふ宿の名もこれによれる成るべし、男嶋女嶋などありときけど、さだかにも見へわかす、白隠禪師のすみ給ふときく松蔭寺は、宿の中なれば、輿よりおりてあゆむ事あたはず、左のかたに見過しつ、柏原の立場は鰻籠よしと聞きて、ある家に立入て味ひみるに、江戸前の魚とはさまかはりて、わつかに一寸四方ばかりにきりて、串にさしつかねたる糲にさし置り、長くさきたる形とは大に異なり、味も又佳ならず、元よし原のあたり、松林のうちを行くに、まばらく富士を左にみるは、道の曲れる故なるべし、川合橋をわたりて吉原の宿に入る、宿の人家賑ひなし、これより富士をしりへにまた右に見つ、行く、元市場の立場あり、右に富士大宮口の道あり、富南館と額かけし茶店あり、うるい川をわたりて、右に富士の

白酒とてうる家多し、富士山の圃もひさぐ、富士沼のほとりをゆくに、浦風高く松の梢にむせびて、か水鳥の羽音に驚きし平家の事も思ひ出でらる、海道一の早き瀬なりときく、富士川にのぞめば右に水神の森あり、船役のもの舟をならべて、輿ながらかきのせつ、げに棹さしわぶる流れなれど、とかくして向ひの岸に着く、巫峡の水のやすき流れといひし人の心も空おそらし、岩淵の庄屋常盤屋彌兵衛といふ者は、もとよりまれるものなり、庭に大きな蘇鐵あり、立よりて見給ひてよといふにまかせて立よる、かけまくもかしこき神の駿河に、御在城の頃よりありし樹なりとかたる、此あたりの家々栗の子もちをひさく、蒲原より山井迄は家つゞきにして近し、みなあまの子の家にして、夜のやどなまぐさといひけんたぐひなるべし、左は田子の浦つゞき、藻しほやく煙たちのほるけしきなど、いふもさらなり、右にはせを天神道あり、富士淺間社、豊積神社は、延喜式にもみえたり、由井川を渡り、倉澤の立場にいたる、望嶽亭といへる酒家には、松平近江守のくたり給へる従者多くみえたれば、東隣の家といふ、

折から雑遊びの棚ありて、花かめに花こちたくいれたり、例のみさかなによきあわびさだおかやあると問ふに、うりつくしてなしといふもほいなく、雑棚にもせし蛤四ツ五ツ、焼さしめて酒くむ、定家卿の駒なつむ岩城の山とよませ給ひしは、この薩埵峠のことなりとぞ、南郭翁が芙蓉館の壁に、この所より富士を見るかたをえがきて、東海道の景色これにすぎたるはあらしとつねにいへるよし、者山上人のことばまで思ひ出で、輿よりおりてかちにて行く、あまたゝびかへりみるに雲深くして富士をみず、あしたか山、伊豆の岬はるかに見わたされて、浪ここともとにうち寄する海つらに、何やらん鳥のむれゐるは、潜める魚をうかがふなるべし、此山のすそに細き道あり、これいにしへの道なりとぞ、くきか崎、袖師の浦、こぬみの濱も此あたりなり、一番坂、二番坂、蜂か澤、二軒茶屋、山神平、牛房坂、葛籠坂、女夫坂、切通し坂などいふつゝらをりなる道をこえて西村にいたる、家ごとくに鶏冠海苔沖津のをひさく、沖津川を渡るに、蓮臺といへるものかきすへて輿をゆひつけつ、かち人高くささけてゆく、右に身延

山の道あり、沖津の宿にいれば、まづ清見寺はいづくそと問ふに、いましばしが程なりといふ、右のかたに石坂あり、三曲にして門に入れば清見寺なり、庭に大なる梅の木横たはれり、客殿の椽に永世孝享の額あり、又諸佛宅の三字は朝鮮の青螺山人の筆なり、此門前は清見が關の跡なりといふ、春の海つらきよくして、右に三穂の松原さしいで、田子の浦とほし、かかる詠をさしおきて、書院の庭に石をたたみ、水はしらせたらんもいかならんと、さしのぞきまきまににて出ぬ、寺をいてて吟行すれば、夕日なめなるに、石の間を流る、細き川あり、はたうち川といふ、これ菴崎のすみ田川にや、十六夜の日記に、岩こす波の白き絹をうちきするやうに見ゆるといひし、清見淵のながめは、心にしみてかたしく袖の露に月もやどさまほしき夕暮なり、庵原川を渡りて江尻の宿につきぬ、府中屋茂兵衛が家あるとす。二日、空はれたり、夜明けてたつ、けふは紀の國の守の嶋田の宿をたたせ給ひて、鞆子に晝休せ給ふときけは、道にて行あひ参らせんよりは、かたへにさけて行過しまいらせんとて、心いそぎぬ、巴川をわた

りて左に七面の社あり、又久能寺觀音の道と、清水へゆく道あり、三穗神社もみゆ、十七夜山千手禪寺も左のかたにみゆ、土橋をわたりて立場あり、左に草薙神社の道あり、村の名もまた草薙とよぶ、小吉田の立場にいたれば、酒家あり、小き桶に鮎をつけてひさぐ、長門鮎といふ、味よろし、栗原といふ村のあたりにて、垣根に山吹の咲きそめしも、げに栗の實の黄なるゆかりあり、梶原景時がうたれし狐が崎、このわたりならんと輿かく者にとふに、これよりあとの右の方にみえし山を、梶原山といふといへり、ややありて、府中につく、駿府の御城は、慶長のとし、かけまくもかしこき 神のましませしとこそとときにも空恐しく、輿のうちに蹲りてすぐ、實に城下の賑ひ他に異なり、去年焼し所も見えたり、家々に籠細工のものみえたれど、さきをいそげばくはしくもみず、古へ阿倍の市といひしも、此わたりにや、安倍川のこなたの家に、白つく音して、たすきかけたるわかき女の、餅をねるさまおもしろく、しばらく輿をとどむ、新たなる木具にもりて来るは、かの安倍川のもちなるべし、味またよろし、安倍川

の流れを舟にてわたり、鞆子の方にむかふ、高き山に暮ひきわたして、まろく見ゆるを何ぞとよに、此村の薬師佛の開帳なりといふ、村のほとりに、燈籠めくものかけて、墨繪に竹かきたるも輿あり、鞆子の宿にいらり、右の方なる壽徳院といふ寺に、輿かきいれてしばらくいこふ、寺に大きな楠の木あり、木のもとに小祠あり、芭蕉翁が發句に、梅若菜とめでし薯蕷汁いかやがならんと、人してもとむるに、麥の飯に青海苔とろ、かけて來れり、このはたとせあまりさきにあひし、横田三郎兵衛といふものは此宿のものなり、わがのぼれるをききて來り、昔物語りに時をうつしぬ、けふは大井川をわたりて、金谷にとまらんと思へど、紀の國の守の、此宿をたち給はざらんほどには日たけぬべければ、岡部にやとまらん、さあらば先觸の狀いたせし、泊々の宿たがいて、むまやちのわづらひなるべし、など思ひわづらふほどに、ひつじのあゆみ近づく頃、國の守今たたせ給ひぬときくもうれしく、さあらば道をいそぐべしと立出る、右に柴屋寺あり、宗長の跡もしたはれ、吐月峰もみまほしけれど、甲斐なくて見過し

ぬ、かの夢にも人にあはぬといひし、うつの山にかり、輿よりおりて、葛の細道やいつこと、たとつ、道のへの葛楓を手折てかざしゆく、右にまがり、左に折れて、いと心細し、策牛村上方村などいへる所なり、此所に珠敷の如くなるものひさぐは、かの十圍子にして、貫成天地敷といひし、垂加翁の詩も思ひ出らる、十石坂を越え、岡部の宿にかかり、横うらのなはてを過、朝比奈川を渡り、田中をへ八はた橋をわたる、右に藤枝道あり、むかひには八幡道あり、藤枝の方に折れてゆくに、人家や、賑ひあり、近き頃焼けし跡もみゆ、右に蓮生寺あり、せと川をかちわたりして、右に西福寺道あり、左に鎌口堂六地藏あり、日もはや暮なんとするに、こよひかならず大井川を徒わたりせんとて、輿かくもの足はやし、従者もをくれじとはせつきぬ、くらうなりて嶋田の宿につきぬれば、見過せる所多かるべし、嶋田の宿には挑灯たい松星のごとくかけて、河原にむかふ、藤枝のほとりより雨すこしふり出しが、こゝにいたりて西風はげしく、空は墨をすりたらんやうなるに、雨さへふりまさりぬ、輿は蓮臺の上にゆ

ひつけて、高くかけ、たい松うちふりて、河上の方にあゆみゆく、河原の石のおとなりわたりて物すごきに、もろ人よいとよいとといへる聲を出して、高くかけゆくめり、聞しにも似ず、河の水あせて、思ふさまにむかひの岸につく、また河原を右へ、土橋を渡り、足なふみあやまちそなとかたみにいまして、くらき道をたどりたどり、挑灯の光をたのみて、金谷の宿につく、酉の時なかば過る頃なるべし、宿を松屋十右衛門といふ、名におふ大井川も、やすらかにこしたりと思ふもうれしく、袂かつぎてふしぬ是より遠江の國なり

三日、よへの雨はれて、朝の風ひや、かなれば、衣をかさねていづ、金谷坂をのぼる、道ことに險し、ここは初倉山といへる所なりとぞ、坂の上より右のかたを見れば金谷の驛の人家目の下にみえて、よべわたりし大井川の流もみゆ、坂を下れば橋あり、名におふ菊川なり、東鑑に佐々木盛綱が鮭の楚割に小刀をへて鎌倉殿に奉りし事、承久の年中御門中納言宗行卿、吾妻に下るとて、硯乞て宿の柱に書つけ給ふ事、東鑑紀行にその家を尋ぬるに、火の爲めに

やけてかのことの葉ものこらぬよし、源光行がかけ
 る事まで、思ひつゝけてつとむねふたがりぬ、橋の
 むかひの、左のきしに、紅白の色の一枝に咲きまじり
 たる桃の花桃源平さかりなるを見るに、けふは彌生三日
 なりけり、昔は山陰の蘭亭に、永和三日の宴をひら
 き、今は海道の菊川に、享和元年の春を祝ふと、利
 口して過るに、また小き橋あり、菊川の流のめぐる
 なりとまじりに、曲水の事も思ひあはせらる、興より
 下りて菊坂をのほる、俗に青木坂といふ、圓位法師
 が命なりけりと詠し、小夜の中山をこゆるに、こと
 しはじめての旅なれば、うれしきもうきもわすれて
 との給ひし鳥丸光廣卿の、春のあらしも今まのあた
 りきく心地す、山中の家にて脩の餅をひさく、小夜
 中山敵討由來、夜啼石の縁起などことごとし書た
 るものあり、一とせ湯嶋の天神にて開帳ありし時、
 もとめ置きたれば見もやらず、その子育の觀音堂の
 は、道のかたはらにあり、右右の方に高くみゆる
 山を、無間山觀音寺といふ、遠目鏡もて見せしむ、
 ここよりは二里ありといふ無間の鐘の事は、人あ
 まねくしる所なればいはず、去年十二月の初め、も

ろこし人寧波あまた舟に乗りて、遠江國に漂ひ來りし
 を、此彌生の頃、公より送りかへさせ給ふとき、
 その所はいつこにかと、興かくものにとふに、それ
 は横須賀といふ所にて、こゝより左の方八里ばかり
 へたたりたる海手なりといふ、坂を下れば、道の中
 になてる石あり、南無阿彌陀佛といふ文字をえれる
 は、弘法大師の筆なりといふ、これ夜啼の石なり、
 枕草紙にことのままの明神いとたのもしとかき、十
 六夜日記にさやの中山をこゆ事任とかやいふ社のほ
 ども道いとおもしろしといひしは、延喜式内巳等の
 麻知神社なるべし、今の日坂山口にいます八幡宮の
 事なりとぞ、ゆくての道の左の方に鳥居あり、玉垣
 ゑわたして木たち物ふりたる中に、櫻の咲きかゝり
 ぬるけしき、立いりてみまほしけれどかひなし、光廣
 卿の記には、ことのままの社の歌ありて、その次に
 入坂をこえんとて五六町ばかりこなたには、八幡宮
 あり、鳥居に櫻咲かゝりぬ、都をたちてこなたいまに
 見ざりし初さくら、けふの榮これなりとあるは、あや
 まりてこと所の社を教へまいらせしものならん、冷
 泉大納言爲久卿の記には、まさしく日坂山口にいま

す事任のやしろとか、せ給へり、日坂の宿の家々蔵
 餅をひさく、或は葛の粉に豆を和せるときは、伯夷
 かとれるものにはあらじかし、すべて此邊より尾張
 伊勢のあたりまでの屋作り、二階の軒の左右に小壁
 ありて、家名をかきつけたる多し、足いたみの樂、足
 豆散足瘡散などうるもの多し、坂の下右に八幡奥
 院道あり、また無間山觀世音道もあり、左の方に魚の
 形したる大きな山ニツ三ツあり、興かくものたは
 ふれて、鯛山鱒山なりなとかたるは、かの鯨山鯢山に
 や、掛川領にいれば、左に福天權現本道とあり、いか
 なる神ならんかし、山はなの立場をこえて、右に薬師
 道あり、馬喰町といへる長き町つつきに秋葉山風來
 寺道中記といへるものをひさく、掛川の城にいれば、
 家ことに葛布うるもの多し、此の城にしへ今川氏
 眞のこもれる城なりとぞ、今の執政太田備中守殿資愛
 の城なり、大手の門を右にみつづくに、鴟吻なども
 みゆ、折から巳の時の鼓なる音す、われ寛延二年己巳
 上巳の日巳の時に生れしと、母のつねに物語し給ふ
 事思ひ出るに、けふなん遠き所に來にけると思ふに
 も、父母のいませし時の事、まづしのぼる、城下の町

もつきつきし、あるみせ先に三體詩の古き本あるを
 見る、これまで小田原駿府の城下をもへしかど、書物
 ひさく家を見ず、海道はじめの奇觀なるべし、左に
 小笠山道あり、十九首町といへる立場ありとききし
 が、まことにや、行々且行々の心なるべしとおかし、
 そばむぎよしとき、て興の中にてあさる、二瀬川を
 渡れば橋といふむかひに秋葉大權現の銅鳥居たてり、
 ここより九里餘ありとぞ、橋をわたりて左すれば大
 池村なり、右に宗心寺といふ寺あり法華、左に法多山
 厄除觀音の道あり、澤田狭井田をへて綱川の橋を
 わたり、腹川といふ立場にいたる(名寄)はら川やせ川
 里人の心腹川や脊川の水の底清みと、雅經の歌に見へ
 しも此所なるべし、げに脊川とへる川もありとぞ、腹
 川の縁によりて晝餉をくひ、土橋をわたれば右に富
 士淺間の鳥居みゆ、沓部村に觀妙山妙星寺ありて、日
 蓮上人の父母の石塔ありと名勝圖會に記せるを見
 て、興かくものに問ふに、久津部村のさし入にて左が
 はの田の中にあり、門前の石碑をみれば、貫名山妙日
 寺なり、音の同じきと字の似たるによりて訛れるな
 るべし、されど柳枝軒の吾妻路の記にも大御門殿安徳

の東行話説にも妙星寺とあるこそ心得ね、貫名重忠の法號を妙日尊儀といへば、妙日寺なるべし、輿より下りて寺に入るに、左のかたに苦むしたる石塔あり、これ妙日尊儀の墓なり、縁起を按ずるに、大職冠より十二代備中守藤原共資の時、遠州に下り井谷に住す、共資より五代の孫を井伊新太夫惟直といふ、その第三の子を政直といふ、此時はしめて貫名の在所を知行し此所に住す、故に貫名四郎と申す、その子行直同五郎重實の子重忠まで四代の間の屋敷なり、此重忠の時伊勢平氏にくみし、安房國長狹郡東條のほとり市川村に配流せられ、その所にて一子をまうく、日蓮上人これなり、正嘉二年戊午二月十四日重忠配所にて終る、その子重友に遺言して此所に骨を歸し葬る、故に俗名を以て山號とし、法號を以て寺號とし、貫名山妙日寺といふ、又むかしは、此地を王野河原といひしとなん、わか父母世にいませし時、ほくそきやうの御名を唱ふる事のみ枕ことし給ひしが、けふはからずも、祖師の父君の御墓にまうつる事よ、七ツ森を過て右に油山薬師道あり、可睡齋はいつこととへば、是より右のかた、一里ばかり

りへたりたるとそ、袋井の宿を越へ、川合橋を渡りて、右にいかめしき樓門あり、むかし武田家の番匠のたくみなせる所にして、轄一本にてとめたりといふ、祭る所は熊野權現にして、社領七十五石あり、ここは木原といふ所なり、三香野橋をわたり、みかののはしの朽もせて思はぬ道に世をわたるとかこち給ひし、家尊親王のふる事もひき出つべし、みかの坂を上れば、左右に松の木立ありて、右に山のつらなるは、五色山といへるにや、左のかたに湯殿山權現の賽銭箱を出せり、大久保村三本松をも過て、見付の宿に入る、たれか來て見つけの里といひし、阿佛尼の時にはかはりて、今は旅寝もやすかるべし、ここは石龜の味よしとて、もろ人調せしめて、鍋ながら箸たててくふ、酒薄くして唇を沾しがたし、雛棚にさつきの頃のかぶと人形をかざるも興あり、けふはふるさとなるうまこ娘の初の雛なり、あまねく桃花を泛て一人をくならんとひとりごたる、宿の右に池田の宿にかよふ道あり、古の驛路にして、今はかよふ事をいまして、中泉といふ所にかかると、されど立場も酒家もありて、ひそかにかよふもの多しとなん、

かの湯谷御前の母子の墓もありとそ、右に閻王堂あり、左に八幡宮あり、大なる石の鳥居たてり、まこと天龍の川原にのそめば、風はけしくして砂礫を飛ばし、輿の戸を打つ音はらはらと聞ゆ、寒き事膚にとほれり、からうじて舟もてわたりて、むかひの岸につく、川原ひろくして水の流れさだまらず、左に妙恩寺あり法華宗又頭限寺の薬師にゆく道あり、天龍の西町屋村といふ所にて、京と江戸との行程同里なりとさけば、ゆくさきのほとも思はれてたのもし、これよりはてしななき松原をゆくに、風いよいよ烈くして、輿の戸を吹落す事あまたたび、寒さもまさりて冬の日のごとし、同寮なる田中氏にゆきあひしが、互に風をおそれしにや、言葉もかはさで行過す、此あたりかの濱松の音は、さゝんざとうたひし所なるべし、濱松の城には、馬込川わたりていれり、城下の賑ひよのつねならず、板屋町、田町、神明町、傳馬町、旅籠町などたてつつきたり、井上河内守の城なり、こゝは薬店多し、書林もみゆ、今までかかる書林をみず、義太夫切本江戸繪本ありなど書て出せり、國分散といへる樂の本家をさかい屋といふ、月水ながしなどいへる

札をも出せり、右に五社大明神の宮あり、また諏訪明神道あり、鴨江寺觀音道などもあり、石碑の上に二の手もて指さす形をえりて、右のかたに江戸道左のかたに犬居秋葉道とありしもおかしかりき、こよひの宿は本陣にて、伊藤平左衛門といふ、上段と思しき所に、あけ壘あり、から紙に金たみして櫻を畫き、杉戸に牡丹を畫けり、壁に書したるから人の手を見れば、窓臨水曲二琴書調人讀花箭一字句香王蘭谷とあり、(豆按李笠翁伊山別業成寄同社詩)水曲の字もけふにかなへり、あるしけふのことふきとて、菱もちのに蛤そへて出せり、父の翁を木工左衛門といふ、田舎にはめつらしく書をこのみて、宵するまで來りかたる、まめ人のこゝに來り給ふごとに、我まみえ奉らぬはなしとて、押小路阿波實茂卿の書給へるといふ扇とうで、見す。

すすむかやきのふもけふも一昨日も

いた井の清水野澤松陰

とあり、かきねちかく蛙なく聲なとめつらかなり、けふは彌生の三日なれば、故郷のうま子のもとにまどわして、桃の酒くみかはすらしと思ふに、わが初

度の日にさへあれば、従者にしろかねあしとらせて
 いはひぬ、此宿はもとひくまの宿なり。
 四日、天氣よし、寒さはきのふにおとらず、七軒町上
 新町などいふ市を過て鳥井なはてをこえ、若林村に
 いる、道の右にちいさき堂あり、二ツ堂と云、むかし
 奥州秀衡の室、上京の時建立せしといふ薬師阿彌陀
 あり、秀平公御建立と札にはかけり、左の方に蓮池あ
 り、立場をゑるの木といふ、此ほとり榎木多し、野邊の
 堇の色うるはしく、一夜ねにけんむかしをもほゆ、馬
 郡の立場を過て、右に西本徳寺法華あり、舞坂の宿
 はわづかばかりの所にして、今切のわたしにかゝれ
 り、むかし濱名の湖なりしを、明應八年六月十日洪
 水して湖の間きれしより、今切とはいへりとぞ、荒
 井まては一里のわたし舟なり、舟役の者出て、輿は
 ここに、鎗長櫃はここになどいひて、輿ながら舟に
 かきのせつ、此所海路あしかりしを、寶永の頃杭をう
 ちて波をよけしより、平らかにやすらかなりとぞ、菅
 原孝標かむすめのさらしな日記に、とほつうみはい
 といみしく、あらし波高くして、入江のいたづらなる
 洲ともこともものもなく松はらしげれる中より、波の

よせかかるもいろいろの玉のやうに見へて、まこと
 に松の末より、浪はこゆるやうにみえていみしくお
 もしろしといひ、阿佛の尼の記にも濱名の浦ぞおも
 しろき所なりける、波あらししほの海路長閑なる水
 うみの落りたるけちめ、はるはると生つつきたる
 松の木立、繪にかかまほしといひ、左海右湖同一碧長
 虹併飲兩波瀾と、濟北の虎關禪師の詩作りしにもむ
 かしの面影おもひやらる、今も洲を左にし、みほつく
 しを右にして、舟さし出るに、さながら海とも思ひわ
 かす、右の方には入海の浦く見わたされ、重れる山
 のはるかに雪をいただきたるは甲斐の國なるべし、
 やうやう松のひまをこきいでて海面に出れば、波は
 舟をもたぐるやうにて、みをつくしの間をゆくに似
 ず、左の方は海原とほく、空もひとつなるが、やや
 ありてまた洲のごときものうちへだて、松の木立お
 もしろし、むかひに人家の如きものみゆるは、荒井
 の御關所なり、などきくもたのもしく、とかくするま
 に、はやむかひの河原につく、ここにて従者をもめし
 具して、輿より下り、御關所の前をすく、三州吉田の
 城主より、守られるといふ宿を、むなぎよろしとぞ

て、ある酒家に立よりてめすに、味ことによろし、駿
 河なる柏原のものと同日の論にあらず、橋本といふ
 所に濱名の橋の跡ありとききて、輿かくものにとへ
 ば、今の街道は荒居の關より橋本にかかり、右にまが
 りて橋本山教恩寺といふ寺の前にかかれり、いにし
 への海道は荒井の海はたをつたひきて、教恩寺の方
 にまがる四辻よりむかひのかたにゆく道あり、是よ
 り今の海道の左の方をへてゆく、これなんはま名の
 橋の跡なりといふもゆかし、その古道もたどらま
 ほしけれど、おほやけの事にて來れる身なれば、せ
 んすべなし、繪圖にももしおかは、後の人のためにも
 ならんかし、建久元年十月十八日鎌倉殿橋もとの驛
 に宿し給ひし時、遊女ともむらかれ参りしに、梶原
 景時がはしもの君には何をわたすべきと申せしか
 ば、たはた柳川のくれてゆかばやとの給ひしも此所な
 るべし、右にみゆる山を高師山といふ、松多し、古
 歌もあまたあるべし、紅葉寺といふ寺ありときけど、
 道へだたりてかひなし、汐見坂にかかりて、輿より下
 る、遠江七十五里の灘も、目の下にありて、汀の松
 のみどりふかし、右の岨に鹽見觀音あり、又鹽見の

燈籠あり、ここより富士みゆるとききしが、さたかな
 らず、白須賀の宿の名にも似ず、人家の壁の色緒くみ
 ゆるは、手もて赤土をぬれるなり、元政法師の詩に、
 白菅亦是假名字來入黃花紅葉村といへる、秋の頃も
 思ひやらる、境川の橋をわたりて三河の國なり、左
 に小松原觀音道あり、猿が馬場といふ所に柏餅あり
 ととききしが、輿の戸さして見過しつ、右の方に摩
 利支天山高くみゆ、立岩の觀音あり、高さ八丈はか
 りの岩なりとぞ、左の方の空につつきて二ツの山は
 るかにみゆ、田原のさほ山とて、三宅氏の領せる所
 なり、すべて白須賀より二川まで、左右に松の並木
 ありて、人家なし、道もまた遠からず、驛舎も貧し
 くみゆ、二川の宿に入れば、櫻の一もとさかりなる
 あり、ここは白須賀とさまかはりて、人家の壁の色
 黄に見ゆ、右におもしろき山あり、あやしき石所々
 にありて、小松生しげれり、躑躅の花さけるさま、
 築山の庭のごとし、たいまつ山といふ、火打坂のほ
 とり黄色なる石あり、すべて土の色黄なり、左に大
 きなる石二ツあり、是尉と姥石なるべし、左に大岩
 觀音あり、右に石卷山ちかくみゆ、あとにみえし

本宮山は、五十丁のぼるといふ、廿一日祭なりなど、人のいふをきけり、いむれの立場にいこひ、河原町をこえ、新町にいる、人家つらなり、寺も二三あり、右のかたに鏡光山といへる額ありて、縁峯大僧正證譽順阿筆とかけるは、浄土門なるべし、善明寺といふ寺なり、吉田の城の郭にいり、城門に入れば田下町、是より東鍛冶町なり、右に城門あり、又大手の鴟吻みゆ、田本町を過ぎて城門の外に出れば、坂下町、田町などあり、鹽せんべいといへるものをつくりてほし置けり、町のまがり口に左江戸といへる碑あり、書肆を風月堂といふ、名古屋のみせのわかれしにや、紺屋の暖簾にかせはやぞめといふあり、後按大阪にも紺屋かせ染といふあり城下のさま濱松につぐべし、すべて童への玩ひもの多し、獅子の形假面の形ひなびたり、大きな西行の形つくれるあり、紙鳶は半紙の横さまなるに繪きたり、瓶などつくる家多し、吉田橋の長さは百二十間となん、豊川の流れにかかれり、右に豊川いなり道あり、城主は今の執政松平伊豆守殿なり、此城には長篠の城の大手の門ありて、矢玉太刀鎧の跡あり、これを野牛門といふよし、橋のほとりの立場を越え、又橋をわた

り、高はしを過、また橋をわたりて、右に八幡の宮居あり、小坂井村に人家あり、茶屋町の立場にいたれば、左の方に腰瓦の屋づくりしたる薬店あり、良香散といへる薬をひさく、さくら町を過て、神明の宮あり、國府町をこえて御油なはてのまつ原にかかる、左の方の松に櫻のやとり木あり、まないた橋をわたれば、御油の宿なり、問屋場に御秤頂載所といへる札あり、御油より赤坂までは十六町にして、一宿のことし、宿に遊女多し、おなじ宿なれども御油はいやし、赤坂はよろし、此邊よりかみつた、すべて女の笄なかくして江戸の風俗に異なり、江戸繪のむかし繪みる心地す、ややありて赤坂の宿につく、錢屋五郎左衛門が家にやとりをとる、明日は宮の驛にとまるべし、名古屋の諸士の便もあらば、ふるさとにこつてやらん事もやあらんと、驛舎の燈をにかけて文かきつ、玉くしけはこねのけはしきを越え、石はしる大井の川もつ、がなぐわたり、荒井のあらし海の上も平らに、ものせし事などかきさせり。

まことの道に入ぬときにも、あかぬ別れのきぬきの空、かくやありけん涙まつ落ぬ、八王子橋二ツ橋をわたりて長澤をすぎ、元宿にかかる、ここは三河の國の東西をわかつ所にて、昔は宿ありしゆへ元宿といふ、今は赤坂に引たりとそ、家々の軒に芋繩と網をかけてひさく、法藏寺繩とて盗をふせく早繩なりといふ、ここは法藏寺村なり、左の方に二村山法藏寺あり、門の左に曬橋松と札たてたるは、神君のまた幼くおはせし時、此寺にて御手習まし、けるとき、此松に草紙をかけてほし給ふゆへ、御草子かけの松といふ、古き松は枯れて今は植そへたるなり、門前に制札あり

定 御祈願所法藏寺御門前

- 一 守護不入之事
- 一 不可伐採竹木之事
- 一 不可陳執之事
- 一 殺生禁斷之事
- 一 可下乘之事

右條々於遠犯之族者速可處嚴科者也仍如件
永祿三庚戌年七月九日

松平藏人佐

元康御判

元康と申し奉るは、神君の初めの御諱にして、今川義元公より一字を贈れるなりとそ、石坂をのほりて、山門に大神光といへる額あり、左のかたに石をたゝみて水をたたへり、賀勝水といふ、これ御手習の硯水なり、傍に石碑をたつ、その銘にいはいはく

山泉濱出標夷賊服一唱賀勝武尊所祝

神祖學書硯水日掬龍吟雲興永受百福

當山見住叟謹銘

御宮はうしろの山の上にあり、このたひ修理くはへて石坂の下にしめゆひて人をいれず、坂の下にぬかつきつ、そのほとりの石を拾ひ、門の前の松の葉をつつみて家つとす、鐘樓の前にも制札ありしが、あまりに時うつれば見のこして立出つ、山中村をすぎ、左右に山へだたりてみゆ、土橋をわたりて左にみゆる森の中に鳥居あり、山の上に舞木の八幡たたせ給ふ、社領百石ありといふ、山中村は古の宮路山なりといへり、いづれかそれとさたかにわかたし、藤川の宿を過て左に芭蕉句塚あり、ここも三河紫麥

の杜若と記せり、紫麥は高野麥といへるものなりとぞ、左の畑の中に大きな石二つあり、これ西尾道のしるしなりといふ、かんば崎といふ立場を過て、橋をわたる、左に平地御坊の道あり、五町あまりとさけば、ゆきてもみず、名におふ大屋川を渡る、大橋小橋あり、輿かくもの大平川といふは、大平の立場に近ければなるべし、又男川ともいふよし、ちいさきわらはの竹のさきに楊枝齒磨をつけて、人々にかへとすゝむるも輿あり、山を左にしてゆけば石碑たてり、自是西岡崎領とかけり、はるかにむかひを見れば城樓あり、鴟吻なとかすかにみわたさる、これ岡崎の城なり、まこと岡崎城は、本多中務太輔の城にして、その賑ひ駿府につぐべし、町數五十四町二十七曲ありとぞ、城主の家士出むかへて輿の先の左右にたつ、その先には市人二人鐵棒をひきて町々をいましむ、市中さまよろしくみゆ、書肆玉香堂扇和堂などあり、旅籠屋に遊女二人の外なしといふ、大手の門さし入高く、左のかたにみえて、むかひにみゆる城樓は、かのはじめに見しものなるべし、郭を出て矢矧川なり、海道第一の長き橋とさく、矢矧橋は長

さ二百八間ありとぞ、きのふわたりし豊川とけふの大屋川矢矧川をあはせて三川の國とはいへるなり、川にのぞめる茶店あり、しばらくいふに、壁に詩歌あり、矢矧のはしのことはいへり、實に柱に題せし馬相如か事も思ひ出らるゝになん、右に親鸞上人の御舊跡柳堂あり、十王堂あり、慶念山誓願寺に淨瑠璃御前の墓ありとさく、立よりて見るに、本堂の前の右の方にあり、堂に義經像淨瑠璃像あり、古きものとみゆ、寺のうしろなる田の中に松一もとあり、これ姫の殺されし所なり、此わたりより右の方に、大樹寺の山はるかにみえ、さなげ山も遠くみゆ、左に加茂大明神の社あり、自是東岡崎領、自是西福島領といへる石碑ある所、大濱の立場なるべし、衣海道も此わたりなるをみすぐしつ、牛田の立場より四町ばかり北のかたにかの八橋の跡ありとぞ、無量寺といふ寺の池に杜若ありなどさく、さわたり川を跡にして池鯉鮒の宿にいる、左のかたに茨鬼齋といへる樂あり、あしのいたみを治すといふ、宿をいでて右のかたに知立神社あり、多寶塔あり、嘉祥三年に建し所にして、山岡忠左衛門なるもの再建せしと

いふ、御手洗池に石橋かかれり、神籬門あり實に神さひたるさまにみゆ、年ことの四月に馬市ありてこれを池鯉鮒の市といふ、あつま川をわたり、今岡を過て芋川の立場にいふ、名酒うる家あり、梅屋重堺川の土橋は三河尾張の國界なり、あの坂をこえて前後村の立場なり、此右のかたの山に千人塚あり、永録三年五月駿州の大守今川上總介源義元と、尾州清洲の城主織田信長と此の桶狭間に戦ひし時、今川方の戦死のもの塚なりといふ、有松村の升屋といへる家の童出來りて、絞り染の布かふ案内せんといふのを先にたて、桶狭間はいつこと問ふに、落合村と有松村の間、左のかたの松林のうちに石碑ありといふ、輿より下りてみれば、ひろき小松原なり、近頃鳴海の千代倉氏の石表をたてり、その一つには今川上總介義元戦死所明和八年辛卯十二月十八日建人見施主とあり又土塚將家桶狭七石表之一とゑれるもの七ツ、ところとあり、一つは山の上にありとさけば行てみず、松はらには菫澤桔梗などいへる草花咲みたれて、茫々たる芝生なり、神君御在世の時此所を過させ給ふには、必らず御下乗ありしときくに、今

はそのところしる者もなく、輿かくおのこ馬ひくものいたつらにうち過ぬるそあさましき、有松村の人家は藏つくりにして絞り染多し、童の浴衣に竹に虎の形付たる、又は赤さいて白手拭に青く絞り染たるあり、鳴海の宿にいり、鳴海神社笠寺觀音の前をも過て、宮の驛桔梗屋喜七かもとにやとる、今宵は尾張の太守より使角田來り、輿力平野覺といふもの、明日の船よそひのことをとふ、舟役人阿波田利も來れりといふ、名古屋より相しれるもの品々贈れり、覺左衛門繪二尾岡田喜一乾柿一箱金藤百助忍冬酒一壺熱洲先生より鱒一尾耶より桂五より

改元紀行上巻享和のはしめの年彌生
廿一日浪花の客舎に筆をとる

杏花園

改元紀行卷之下

六日、天氣よく、風和かなり、夜明てたつ、左の方に熱田の大鳥居あり、立いらてみまほしけれど、舟にのらんといそげばかひなし、宮の渡し場に、尾州の家士平野左衛門たちて船よそひせるむねを申す、葵の御紋染たる紺地紋幕うちて、四半の幟をたつ、幟の紋は扇をひらきたる形なり、篙工六人左右にたちて船漕めり、實に大船のゆたかに、帆をすこしひらきにかけてゆく、荒井の船には似もつかず、ただ席上に座せるがごとし、春水船如天上坐とうち誦しつ、横満藏といへる洲のほとりを過れば、堤を修理する人夫ども多くみゆ、はるかに桑名の城みゆといふにうれしく、船にうちたる幕の間よりうかがひみるに、四方の海原かすみわたりて、景色いはむかたなし、けさ卯の時船にのりしが、辰のなかばに桑名につく此海尾張伊勢の界なり左のかたに太神宮の大鳥居あり、城門のうちの町の名に片町、吉津屋町などいふあり小刀屋といふ家名めづらし城門を出て新町を過ぐるに、寺五ツ六ツみえたり、鎮照山といふ額あり

しも見えし、郭門を出て鍋屋町に、天武天皇の宮ありとは聞しが見過しつ、左のかたに善光寺一體分身如来あり、矢田町を過るに、音頭音楽といへる看板あり、すべて古道具屋多くみゆ、紺屋もありて賑はしき城下なり、城主は松平下總守也初紀藩の公子にして、唯之し、學を好む、進殿と申しき、詩文をよく成章公子なり、八幡宮の前を過て、福江町にいたり、町屋川の橋を渡りて、おぶけといふ所をみれば家々の女松のかさを焼て、蛤をむしてすすむ、砂川の橋を渡り、朝明川をこえて、富田の立場にいたれば、ここにやき蛤をひさぐ、右のかたに酒屋といへる家名の座しきにはあげ疊などありて、大きなやどりなり、初冬の頃の味ことよろしければ、時雨蛤といふ、初川みたき川三重川などを渡りて、四日市の宿につく、伏見屋伊右衛門の家にやどる、日たかくして、未の時をすぐる頃なるべし、席上の額に、倚秋風の三字、藤忠統書とあり、年頃相しれりける西村馬曹庄左衛門は、此驛の長なり、去年神無月十日にうせにして、その弟なるもの、其子今の庄左衛門を携へ來れり、家に傳ふる所の盃は、先祖西村勝左衛門重氏といふ者、三州西尾の城主兵部太輔田中吉政につかへしが、天

正十八年豊臣殿下の小田原陣にしたがひて、先登の功あり、殿下より盃を賜ふこれなり、そのうち田中氏 神君に屬して、筑波を領せしが、故ありて國除かれしよりこのたか、重氏仕官の志なく、伊勢に歸りて、その子重則より、此驛の長と成り、馬曹茂にいたりて五世なり、今その盃を見るに、徑二寸ばかり、外黒く内赤く、蒔繪の桐の紋あり、くわしくは伏水龍公美の記にみえたり、詩歌多くあつめ置る中に、三軍麾下績誰及折衝魁俠骨香何處猶留一酒盃右題西村茂貞家藏酒盃銀青光録大夫とあり、富小路殿後接宮小路貞直卿なりといふ、その夜は伊達太右衛門、高津伊左衛門など、酒肴などもて來れり、みな西村が親しきものにて、わが家にもむかし來れるものなり。

七日、空晴たり、夜明ていでたつ、宿の右のかたに、諏訪明神の社あり、左に來國光藤吉といへる名みゆ宿のうちに、茶碗屋といふ家名めづらし、きのふの小刀屋に對すべしや、行きて追分あり、右は京左は太神宮に參る道なり、これより神戸白子上野津へ出るといふ、うつべ川か川をわたりて左の山の上に入幡宮あり、此あたり數々の橋かぞへも盡さず、すべて橋の欄干のさま、異所にたがへり、橋板の



上に丸くくりたる木の水ぬきありて、上に銚木あり、男柱なし、いづれも小さき橋なり、杖衝坂にかかりてかちよりゆく、これは日本武尊東征してかへり給ふ時、御足のいとぞ、はせを翁が句に、歩行ならば杖つき坂を落馬かなといへるも此所なり、坂の上に芭蕉の碑あり、ここは饅頭うる家多し、右のかたに白鳥陵道と記せし碑を、綾足建孟といへるもの建しは誤りにて、これは日本武尊の御子、稚武彦王をまつれる祠なりとぞ、御母は橋媛なりといふ、左の方十三町ばかりに、山邊村といふ所あり、山邊赤人のすめる所にして、硯水といへる泉あり、いにしへ禁裏試筆の御硯水に、汲せられしと吾嬬路記にみゆ、石薬師の宿につきて、石薬師寺のうら門より入る、赤得水がかける、石薬師といへる三字の額あり、源童子湖龍筆塚あり、表門より出て左の畑の中に、牛若丸の鞭櫻といふありしか、今は枯れたりといふ、此あたり櫻多し、右の田の中に堂の屋根みゆ、これ笠堂なり、日本武尊白鳥陵も此所なり、土人誤りてひよとり塚といふ、げに此所にて神さりま

しまさんには、杖つき坂のほとりにて行なやませ給ふも、ことほりなるべし、まことや山邊村のあたりはむかし鎌倉殿の名馬生いひつときこえしも、此ところより出たとなん、庄野の宿を過て、森下の立場あり、冷泉爲村卿の紀行に、「降る雨に風さへそひてけふ笠の雫もしけくもりのしたみち」とよませ給ひしは、此所となん、海道をうしろむきにして、たてしほこらあり、何ぞと問へば、八王子なりといふ、ここは中富田村なり、ある醫者のすむ格子に、他行療用斷といへる札かけしもおかし、右のかたに水車あり、此あたり石川主殿頭の領する所とみえて、制札に令條をかき、末のかたにちいさき木の札を打つけて、主殿とかけり、依仰私領中下知如件といへることばを、令條の末に書きそへたり、これより上つかたの私領の制札みな斯の如し、いづみ川の土橋をわたり、小山といふ所にいたる、常念佛堂あり、左に観音堂みゆ、川合橋土をわたりて、和川の地蔵あり、和川の坂をこえて、龜山の城下に入る、石川主殿頭の城なり、城門に入れば右に城門みゆ、これ大手にや、龜山横町を過れば、左のかたに坂あり、寺あり、坂を上りて城門を出れば、

坂を下る事急なり、城下の市中賑ひなし、四角なる形のもの軒にさげて、湯豆腐あり、油揚あり、あるひは豆腐、こんにやくなどかけるさま、鄙びたり、髮結床などありき、立場をとへば能古茶屋といふ、此村の人家に、水車輪板ありと書て出せし看板もめつらし、左のかたに皇徳大神宮あり、太神五十鈴川に遷幸し給ふ時の跡なりとぞ、古馬屋などいふも此のあたりなるべし、左に観音堂あり、坂をこゆれば落針村なり、土橋をわたりて、左のかたに流る、川を關川といふ、又土橋をわたりて、松の並木兩行にたてり此間十八町にして、大岡寺繩手といふ、小野村を過て、岡の宿の入口に追分あり、是より南伊勢道と記して鳥居たてり、右に薬師道あり、此宿に火繩うる者多し、柳屋櫛など書つけたる札もみゆ、ます屋といへる驛舎の額に、直温寛栗とかくべきを、寛栗とかけるもおかし、此あたりの村學究の書なるべし、未の刻ばかりに宿につく、堺屋五郎兵衛とて、質朴なるあるじなり、額に成趣の二字、長秋書とあり、屏風に雪中春酒熟書後故人來、また風俗猶太古心和得天眞、ともに蘭溪書とありて、書も又拙からず、折か

山の趣にもかなへり、こゝを關と名つけぬるは、古へ鈴鹿の關の跡なればなり、新後撰集定家卿の歌に、「えんてすきぬこれや鈴鹿の關ならむふり捨がたき花のかけかな」と詠ませ給ひし花を、えぞ櫻と名づけ、今もありときもゆかし、宿のあるじに案内せさせて、家のしりへの戸口より出て、細きみちをたどりゆく、むかひに高き山ならひたてり、左は大日の森、右はかご山といふ、いにしへ寺あまたありし跡なりとぞ、わづかなる流れに橋わたせるあり、これなん五十鈴川の下流にして、此川上に琴の橋かかれり、夫つすい鹿山きりの古木の丸木橋これもや琴の音にかよふらむい成などかたるに、神風の伊勢の宮居にまうでぬる心地して、いとかたじけなしや、かたへの鎮守の宮を笛吹大明神といふ、六月十五日をもて祭る、いかなる神にかましますらん、碓氷の嶺を笛吹峠とも云ふよし、かねてきつれば、もしくは白鳥のみささき近きたよりに、日本武の尊にてもやはすらん、道のほとむづかしげにて、ささやかなる茅屋四五軒ばかり木を伐りて、のぼきりもてひく聲など、かの山さらに幽なりといひけむ、春の山ふみもおもひあはせらる、稻荷の社の前を過て、地藏院のうしろ

にいたる、かたへの岨に一本の櫻たてり、みきは枯て、根よりさし出たる枝あまたあり、是もまたもゝとせに近かるべし、花は半ひらけて、緋櫻の色うすきなり、これえぞ櫻なりといふに、まづ木のもとに立よりて、あまた、び仰ぎ見る、實にふりすてかたき花のかげなるべし、咲もつくさぬは、のこれる恨みながら、酒を微酔にのむといひけん、から歌の心にもかなひ侍らんかし、見てのみやの心せちに、花ひとふさみふさとり、枯れたる木のはしをも懐にものせしを、あるじのほこりに、一枝手折りておくれるもやさしけなり、さて寺のうしろよりいけば、地藏院なり、庭に池めいたる水あり、この水にても四五丁の早苗とるといふ、あるじ寺なる書院にあり、地藏堂にいたる、世に關の地蔵ぼさつとて、紫野の何がし、大徳の開眼し給ふときくはこれならし、桂昌院殿歸依ましまし、護持院僧正の願ひによりて、かくいつくしき堂とはなれりとぞ、桂昌院殿の御位牌ある寺は、九關山寶藏寺地藏院といふ、此あたり古のむまやちにして、松の一むらたてる所は、鈴鹿の關の跡なりとぞ、こたびおほやけの事うけたまはりてゆく道にもけふなん日高く、旅のやどりにつきぬれ

ば、くるるまつまのわたくし事なるべし、こよひふるさとにかへりて、はらからにも逢ふとゆめみしかば、殘燈をかかけて詩つくれり。

八日。晴天なり、きのふみし關の地藏堂の前をすく、關の地藏町といふ、火繩屋彦四郎御火繩所といへる札などみゆ、右のかたの茶店に、志賀屋といへるあり、一木のさくらさかりにして、ささ波の志賀のみやこも思ひやらる、ゆきゆきて山路に入れば、鈴鹿川左右に流れ、幾瀬といふことをしらす、よりに八十瀬とはいへるよし、右のかたに夷石といふあり、實に蛭子のさまして、山の半腹にあり、次に大黒石といへるもあれど、形や夷にはおとれり、はねかけ橋を渡りて、藤の茶屋をすく、八十瀬川の流にのぞみて、古法眼筆捨山と、ことくしう札かけたるあつまやあり、道より右の方なり、たちいりてみるに、むかひに一つの山たてり、怪石奇石ところどころに踞りて、松の根これがために曲りたはめられ、躑躅の花所えがほなり、五渡溪頭躑躅紅とうちすしつ、詠めやるに、人のたくみなせる山にひとしく、繪にかかばかへりてあさましかるべし、古法眼とや

らんが筆すてたらんも、ことはりぞかし、くつかけむらも過て、坂の下の宿につく、宿の人家に根本すいかくし所、勢州坂下松岡久平などかける札かけたるありき、此外にも櫛うるもの多し、けふは鈴鹿權現の祭なりとて、家々の軒に挑灯など出せり、續後撰に、「鈴鹿川ふりさけみれば神路山神葉わけて出る月かけ」とよめるは、僧正行意の歌となん、坂口にむかへば、右に觀音堂あり、左の方に權現の社、高き山の上にてたてり、石坂あり、石坂の右に身會貴殿あり、左に神樂堂ありて、神主巫女などみゆるは、けふの祭によれるならん、輿より下て、石坂を上りて、權現の社にぬかづく、祭る所三坐、中央瀬織津媛命、左右に黃吹戸命、瀬羅津媛命、相殿倭媛命ときく、攝社に大山祇命、稻荷愛宕などたせ給へり、名におふ鈴鹿山は八丁二十七曲にして、道せまくして險し、清水所々にわきて、雨の日はこえかたかるべし、山をこえて左に田村丸の社あり、峠の茶屋は澤といふ立場にして、醴酒うるもの多し、此所伊勢と近江の國堺なり、左に清淨山十樂寺、子安觀音常念佛などありといふ、鞍骨坂をこえ、蟹か坂を

すきて、猪鼻の立場にいたる、家々に黄なる飾をひさぐ、又經木のごとき物を紙にてはり、黒くぬりて歌などかき、水香といふものに作りてひさぐ、田村川に橋あり、右の方に橋番所あり、橋をわたりて左に行く、杉たてる中を行くに、田村明神の大門なり、土山の宿に入りても、櫛うる家多し、土山龜井くし、又御櫛所お六櫛などかきたる札を出せり、此所のそば名物なり、左のかたに牛頭天王の社あり、いつの頃焼しにか、焼たる家の跡もみゆ、右に高野世繼觀音の道あり、又六地藏あり、三番と書けり、道のゆくての右にみし、松の尾川に假橋あり、河原ひろし、坂を上れば左に谷之宮あり、松尾大明神も此わたりなるべし、これより大野の立場まで、いそぎゆかんとて、輿をはやめてゆく、右に下馬札ある寺あり、これ林丘寺の宮より、寶器をよせられし、慈安寺といへる黄檗派の寺なるべし、しばしたちよらまほしけれども力なし、ここは前野村なり、左のかたに又寺みゆ、ここに家々の軒に、山鳥の尾の長々しきあし鴨の短かき、妻こふ雉のつかひむれある、鶯のつばさを連ね、或は夏鴨海雁などいへる、名もしらぬ

鳥をあまたかけ置て、人にすすむる立場あり、大野といへる所にて、みなこのあたりの山々に入りて、弓も射たるものなりといふ、潘安仁か射雉賦も思ひあはせらる、されば農夫に弓射るもの多しときく、たちいりてとりの羹を食ひ酒のむ、山梁の雌雉の時を得しためしにはあらで、ともすればあらぬ鳥を調してすゝめ、鴨よ雉よとあざむくときけば、三たび嗅てもたちなましを、はしたなく箸たてし事よ、これより右のかたによこおりふして、平かなる山あり、布引山といふもことほりなり、右に岩上といふ所あり、道のかたはらに石あり、子なきもの此石にいのれば、子を得るといふ、いな川をわたりて右に一の碑あり、山口志兵衛重成といふものの碑にして、延寶年中にたつる所なり、細かによまば文字もわかりぬべきを、先をいそげばかひなし、その側より水わき出るを、俗に義朝の首洗水とかいひて、參宮の輩忌て嗽きなどすることなし、右の方には八幡宮あり、新庄といふ所に、奇麗なるみせ一軒あり、これせんざいもち賣る家なりといふ、山川の橋を渡りて、水口の城にいる、ここは加藤能登守の領する

所なり、家士中川平八郎出て其由を申す、坂を上りて大池町などいふ所をすぎ、煙管藤ごりなと名物なり、すべて葛籠細工のもの多し、切疵の薬たまたき薬といへる札、此あたりより上つかたに多くあり、右に鴨長明發心所といへる碑あり、岡観音兼家舊跡などあり、夷町を過て左のかたに大手の門みゆ、右に天満宮あり、市中賑ひなし、馬場さきの立場をこえてゆけば、右に大岡寺山高くみゆ大岡山共これより右の方につづきて岩山あり、兀として草木なし、岩根山といふ、岩根山の西にあたりて、はるかにまろく青き山みゆ、これ三上山といふに、はや湖水にも近づきぬらんとうれしくゆけば、左に飯道寺山高し、これ山伏のつかさのよし、いつみの立場をこえ、横田川を舟にてわたる、川原のけしきおもしろし、川のむかひはみな山にして、大きな岩あり、題目かきし碑あり、この下に鱒岩といふ岩ありとぞ、これより横田川を右にして、山岸を左にしてゆけば、左の山のうちに山上庚申道あり、瑞應山廣徳寺といふ、背面金剛童子は傳教大師の作なりといふ、自是東水口領といへる石の碑あり、このわたりより右のかたをのぞめば、岩根山右に

そびへ、菩提樹山左にかさなりて、その中央に三上山ひとりたてり、田川の立場を過、あら川の橋をわたり、左の方に雲照山妙威寺、萬里小路藤房卿終焉地といへる碑立たり、ここは三上といへる所なり。世のうさをよそにみくもの奥深く

てる月影や山すみの友

と詠給ひし所となん云傳ふ、立寄てみまほしけれど力なし、自是西淀領といへる石碑たてり、砂川をわたれば小橋あり、左に弘法大師二本杉といへるあり、今は一もと枯れてなし、夏見といへる所には、人家の門ことに山水を寛とし、馬にのりたる人形二ツ、くろくともはるからくりをしかけたり、あるは唐子などもあり、みな心太をひさく、むべも夏見とはいへり、右のかたに名酒あり、櫻川といふ、左のかたに夏見山たかく見ゆ、兀山にして上に大なる岩あり、砂川二ツばかりこゆるに水なし、針村を過て自是東淀領といへる碑あり、平松といふ所の松うつくしとて、うつくし松といふよし聞しかば、右のかたに松ばらの見やらるゝを、目とめて見しかど、さのみならざりき、すべてきく所見る所に異なり、又自是西

淀領といふ碑あり、此邊に阿州徳嶋定宿、かしくやとかきし札ある人家を見たり、白知川をわたりて石部の宿に着く、左に阿星山西寺道あり、又東寺といふもありとぞ、此宿のあたりよりして、赤前垂したる女多し、男もまゝみしことあり、こよひは田村屋茂左衛門といへる宿なり。九日の朝とく出でたつ、この宿の家づくり、今までみしさまとはかはりて、藏つくり多し、これより上には此藏多し、松金油うる家みゆ、左のかたに岩山あり、むかし銅ほりし跡ありて、今も石部の金山といふ、多くは石山の土をいただける形したる山みゆ、山の前に川あり、橋をわたりて山のあいたを行き、松の並木ある所に出づ、是本海道にして、八十年あまりこのかた、ひらけし道なり、橋をわたらず、山を左にして川を右にし行くは、野道とてわき道なり、人夫などこのわき道を便として、多くは此のわき道をゆくものあり、かな山村のあたり、人家に慧苴仁と餅花のさ、やかなるをひさぐ、江戸の目黒の面影に似かよひたり、右に御免銘酒鈴鹿川といへる札かけし家あり、又右のかたに高野新善光寺、本尊信濃善光寺一體分身と

ゑりたる碑あり、自是東膳所領といふ碑あり、左の方にはじめて梅の木和中散といへるみせあり、聞しにも似ず小さな見世と思ふに、又おなじみせあり、二軒三軒日のみせよろし、四軒目根元これにつぐ、島林定歳とするせり、五軒目を本家せさいといふ、門口に挑灯を出せり、家居ひろく住なして、僊壽軒といふ額みゆ、大道をへたて、店の前に庭をまうく、庭に薬師堂あり、また座しきあり、山泉といふ額をかけたり、屏風に唐詩を張りませしが、朝鮮人のもてるものとみへて、文字のかたはらに諺文をしるせり、此座しきの椽の前に、石の手水鉢あり、表に功德林寺とあり、裏に元祿十四申天四月八日木前氏とあり、此の庭よりむかひをみれば、三上山正面にあたりて、原吉原の驛より富士山みたらんが如し、まこと都の富士といふもことほりなり、此わたり伊吹艾うるみせ多し、みな龜屋といへる家名なり、小野といふ所をゆく、左に稻荷社あり、又仙傳志脱丸といへる薬うるものあり、驚風の薬となん、ここに手孕村といふあり、むかしある淫婦の腹を男の手して撫しめしに感じて、手をはらめりといふ俗説あり、かの人に酒

をすすめて、手なきものに生れる人にあたへまじしものをと、利口しつゆくに、ここにも酒家あり、菜飯として、串にさして焼たる豆腐の田樂といふものをひさげり、鉤川といふ川をわたる、ここは足利將軍義尚公、ここに城をきづきてすませ給ひしが、病によりて薨じ給へりと聞くに、かの穴太記といふものよむ心地せらる、此川の前に自是南淀領とあり、目川の立場には、菜飯と田樂とありと、今いづくにても目川菜飯とよぶは、此所より起れりとききて、伊勢屋といへる家にいりて、かの菜飯もとむるに、田樂の豆腐あたたかにものして味よろし、ここに目川とも女川とも染め付けたる茶碗もて、茶をすすむ、めづらかなれば二ツとも買ひぬ、銘酒あり御銘菊の水と記せり、右に寺あり、覺如上人四百五十回忌三月八日九日修行とあり、草津川を渡りて右に追分の岐路あり、右は木曾路、左は東海道いせ道なり、此所より右のかたに、矢橋道二十五町とせり、又右の方に家づくり大きな餅屋あり、名づけて姥か餅屋といふ、こゝにもうばがもち屋といふ字を染めつけたる茶碗あり、自是膳所領淀領の入合多し、こ

とごとくは記さず、野路村といふ所にかかれば、砂川ありていささかも水無し、わつかに跨ぐばかりの川なり、右の方に二間あまりに、一間あまりばかりの池あり、野路の玉川の跡にして、六玉川の一つなりときくにも、こゆべき萩もみえねど、いろなる浪の月のむかししのばすもあらず、大かめ川といへる砂川を渡りて、左に濁り江あり、右に辨天の池あり、此池の中島に、むかし日本左衛門とかやいへる白浪の、たちかくれし跡ありときくにも、みどりの林木かくれたり、此あたりより湖水右にみへて左のかたに比叡の山高くみゆ、左に月輪の池あり、立場を月輪といふ、砂川をわたり大江村を過れば、左に檜山あり、檜はらくむらとなくつづけり、いささかなる砂川をわたり、左に田上太神山不動寺道あり、名におふ勢田の大橋は、長さ九十六間、小橋は二十三間ありとぞ、橋の前に田原屋といへる酒家ありしも、かの秀郷のゆかりにやとおかし、橋をわたりて左のかたに、一重の櫻咲みだれて、菜の花の畑所々にみゆ、右にはほの湖かがみの如く、さざなみよするけしきつねならず、この酒家にしばらくいこひ

て、石山にゆくはいかばかりぞと問ふに、こゝより十八町ばかりなりといふに力なく、かへりみがちにでてゆく、膳所の城の白き壁はるかにみえしが、やうやう近くなりもてゆくに、左の方の野道に兼平塚へ三丁とせり、今井四郎が、粟津の原にて戦ひ死せしも、此所なりと思ふに、涙もとどまらず、又國分寺やくし道あり、はせをの翁がすみし幻住菴も此ほとりならんとゆかしく、ゆくゆく膳所の城門を入れば、八大龍王の宮あり、市町諸士の家もみゆ、行くく城門を出れば、右に湖水みえわたりて、江戸高繩の大木戸にうち出たらん心地ぞする、ここにも八大龍王の宮あり、左のかたに義仲寺あり、ききしにも似ずあさまなる所にして、門を入れば左に堂あり、木曾殿の像を安置す、堂の前に墓あり、木曾義仲墓とありて、前なる石燈に奉寄進德音院殿墓前としるせり、此の墓の右に芭蕉墓ならひたり、石燈に元祿十三庚辰正月十二日晴陽素行敬立とありしは、翁の七回忌の年たてしなるべし、その墓のうしろに幻住菴をうつして、庭に一もとの椎の木あり、そのむかひに芭蕉堂あり、翁の像をおけり、門の内の右の方に草菴

の如きものは義仲寺なり、此寺はもと巴御前の結べる菴なれば、古へは巴寺といひしが、弘安の頃より義仲寺とよべりと縁起にはしるせり、義仲墓の側に松あり、兼平が手向の花松といふ、なべての墓には櫛を手向れど、ここには松を手向るとなん、これは木曾殿のなきからを松のもとに埋めて、其の松の枝を手向し兼平が事によれるなりとぞ、木曾殿の位牌には德音院殿義山宣公大居士としるし、其かたはらに兼平の位牌をならべて、岸照道光大居士元暦元年辰正月二十一日とはしるせりとなん、此寺の椽に、其角が書ける芭蕉翁終焉記、または手向の發句集など出し置て、人のもとむるたよりとす、すべて此所のさま、大磯の鴨立菴に似かよひて、かれはこゆるきの磯をうしろにし、これはほの海を前にす、かれもこの名におふ所ながら、問來る人のしげきまに、ものふりしさまならぬぞうらみなる、門をたち出れば、右の方に矢橋の舟つきあり、ここを松本のわたしといふ、石場といへる立場の酒家は、多く湖にのぞみて建つづけたり、源五郎鮎といへる魚を調して酒をすすむるに、遠く琵琶の海つらを望めば、右に三上山

鏡山伊吹の山そびえ、左に比叡比良の高根、ふもとに志賀唐崎堅田の浦迄みわたさるれど、さざ浪よする海べより、北風あらく吹來て、障子はためきわたればさしこめつ、猶あるしに、障子のすきよりうかがへば、矢橋の舟の真帆片帆にゆきかふさまかの瀟湘の八ツのながめをうつせしも、ことわりぞかし、大津の宿にちかくなりゆくまゝ、人のゆきしげくして、家々の門にけうとく粧ひたる女どもならびたちて、旅人をとどむるさまらうかはし、未のなかばばかりに大津の宿、かき屋山本鐵五郎が家にやどり取りぬ、明日はみやこにいらぬべければ、髪くしけつり、湯浴みして、猶日の高きまゝ、名にあふ長等山の花みんとやどりを出て、市の中より近松御坊の前を過ぎて、左の方の山をながむれば、花さかりなり、かれはいつくと問ふに、高観音とこたふ、まづ三井寺のかたにゆかんといそぎつゝゆけば、鳥居たてり、左のかたに新宮あり、さだすきたる女の、紫の帽子はなやかにいただきて來れる、かの源内侍のたぐひにやと目さむる心地す、石坂を上りて順禮觀音の堂あり、左に不動堂あり、右の方に月見の臺、百體觀音

堂、鐘樓などあり、此間に門あり、門を入りて左に十八明神の社あり、又三尾明神の社あり、此所より奥のかたは、女人禁制の地とみへて、制札をたつ、村雲の橋をわたたりて、ゆくゆく左のかたをはるかにみれば堂あり、塔あり、これ唐院なるべし、右に鬼子母神あり、むかひに大きな堂あり、これ金堂なり、その側の井はいはゆる御井にして、三井とも關伽井ともいふ、天智天武持統三帝の産湯に用ひし水なるゆへに、御井とはいへりとなん、堂の右の方に鐘樓あり、銘をみれば慶長七歳、孟夏、廿一日長等山圓城寺長吏准三宮とみゆ、このほとりに一木のさくらたてり、これ夜櫻の若木なり、堂の左のかたなる山の上に、かの俵藤太秀郷が、龍宮より得たるといふ古鐘あり、高さ龍頭迄五尺五寸、わたり四尺一寸、厚さ三寸五分、龍頭一尺一寸五分、うしろのかたにすれ目ありて、螺拂の落たる所とみゆ、これは山門に奪ひし時、山より引上たる時のすれめなりといふ、われめもありしが、今はいゑしといふ、横のかたに鏡の柄ある形にくぼめる所あり、これは一とせ狂女來りて此鏡を撫し時、鏡のかたに取れしなといふ、今も

七月十五日は女まうでをゆるすとぞ、實にみどりの色ふかくして、幾千とせを経たるといふ事をしらす、堂のうちに少年ありて、鏡の由來をとく、もと來しみちをたちかへりて、二王門を横にみつつ、順禮觀音の前にかへり、月見の舞堂に上りて、遠眼鏡に目さしあててみれば、右に兼平の松みえて、松の前なるみちを人のゆきかふさまみゆ、左に唐崎の松かすみわたたりて、茶屋の白壁あさやかなり、比良のたけ堅田の方をもながめやりて、奥の院に入れば、一重八重の花さきみたれたり、天神社源八の宮などあり、尾藏寺の中に鳩尾八幡宮あり、近松寺のかたにむかへば、花より花にわけける心地す、かの源内侍めいたる紫の帽子かけたる女ども、若きも立まじりて、酔しれたる男二人三人、歌うたひつれて來れり、これよりみやこあたりの風俗、みなこれなりけりといふにも、ふもとにみし紫は、遼東のいのこの頭白かりしと、同日の談なるべしとほほゑまる、堂の前に鐘樓あり、貞享年中に鑄しかねなり、側に惠心僧都手植の菩提樹あり、この近松寺の堂にまします觀音を高観音といふ、さきにみし山の花はこれなり、石

坂あり、坂の側に酒家の櫻あり、八詠櫻といふ、此の坂を下りて、歸るべき日もいまだ暮れやらねば、猶山を傳ひ登るに、黄なる土の色して草木もなし、七層の石の塔婆たてり、五大院先徳安然大和尚の文字かすかにみゆ、これより上は草木蒙籠として、空おそろし、柳子かいはゆる道清ふして久く座すべからずといへる言葉も思い出らる、これより湖水をみわたせば、勢田の橋左にみえ、三上鏡山を前にし、比良堅田を左にす、わがやとるべき大津の町は右のかたはらの目の下に見おろされて、いとこころぼそし、昏黒に上方にいたるといひしも、かかるたぐひにや、とく山道を下り、近松寺の前なる石坂より下るに、左の方に蓮如上人舊跡の庵室あり、右に石井あり、近松御坊のかたはらの道より、大津の町にかへれば、乗燭の頭なり、わかゆきてかわるべき、同じつらなる某より文おこして、旅のやどりは浪花の南本町五丁目といふ所なりときくにぞ、すこしは心もおちぬ。十日。天氣よし、夜明てたつ、大津の町は九十餘町とかや、諸侯の藏屋敷などあまたありて、賑ひ他に異なり、けうとく粧ひたる女ども、よべより旅のゆ

ききの人を引とどめて、たはむれ遊ぶさまをみしに、いかなるきぬきぬにやあるらん、八町坂をこへ、山岸を右にし、町家を左にす、浮世又平が書ぞめしといふ大津繪といふものを、江戸繪にまじりてみせに出せり、山きしに清水ながれいでて木たちよしある社あり、關大明神蟬丸宮としるせり、又弘法大師火除名號石あり、のぼれる坂は逢坂にして、右の方は岸高く、下に堀ありて、いと小くらし、左に逢坂常燈四つばかりたてり、右なる山の上に蟬丸大明神の祠あり、左の町にとらや御針師井口大和太極きよ所とかきし札みゆ、坂を下れば大谷町なり、ある人家の軒に手拭多くかけて、下に井あり、これ走り井といふとなん、右の道中に清水流れて、今やひくらんといひし望月の駒も思ひやらる、石橋を渡りて左のかたに、御仕置場あり、此ほとりの人家に大津繪、算盤、縫針をひさぐもの多し、や、行て追分の岐路に至る、立場なり、左は伏見街道なり、蓮如上人御舊跡道としるせり、ここを山城近江の國境といふ、このあたりを山科といふ、田畑の中に人家ややつらなりて、静なる所なり、かの君に響をむくはんとて、

大石何某がかくれ居りけんもことほりぞかし、石橋をわたれば右に諸羽大明神の社あり、天兒屋根命をまつれるとぞ、奴茶屋といふ立場にいたれば、右の茶屋にことごとしき矢の根をかざれり、むかし片岡丑兵衛とかやいへる人、弓射る事をよくせしが、つゝにこゝにかくれしとなん、箕子が奴となりしたぐひにやとおかし、右に吉祥山安祥寺あり、右三條通、左五條通、六條大佛通など、石にゑりてたてり、左のかたに蓮如上人の舊跡に五丁といへる碑あり、ゆきゆきて竹の林にいる、ここを簀の下といふ、右の方に高き山あり、天智天皇の御陵なりとは、興かくものもよくしれり、日の岡の坂を上れば、左の山のそばに一木のさくら、けふをさかりと咲出てたり、花のみやこにいりぬべきまるとたのもし、左のかたに宮古路一仲幕あり、此一仲、みやこぶしといへる一ふしを語り出してより、あづまのかたにも専ら行はれて、土佐節の粗豪なる、江戸ぶしの高華なるもみなこの淫風に化せられて、風俗をさへうつせしかば、延享の頃一たび禁せられしかども、そのながれますくわかれて、その源いよいよ遠く、下里巴

人の曲和するもの多くなりたり、ここを千本まつといふ、松の木たちうるはしくみゆ、粟田口にいれば、左に御仕置場あり、車道ありて、牛車のさしりゆくさまめづらし、往來の男女のありさま、目馴しひなのよそほひにかはりて、都の手ふりさらさらしく、漸長安に近きをしるといひし、唐詩の心なるべし、蹴揚の清水といふ所にいたりて、左のかたにきよなる茶店あり、立よりて旅の装ひぬきかへつ、紋ぞめたる小袖に麻の上下きかへて、輿の中に正しく座し、ゆくゆくみれば、右に三條通りの道あり、左に導引地藏尊の道あり、右に行基菩薩の刻ませ給へる阿彌陀堂、左に三條通り白川道あり、左右の人家賑はしく、三條の大橋に至れり、かの増田右衛門尉が名をちりはめし、蔥法師はいかなるらんと思ふに、此頃修理の事ありて、葭葎もてかこひ、かたへなる假橋を渡れるもほいなし、それより所司代の屋しきにいり牧野備前守、此度御用のむねうけ給りて、大坂にむかふとてみやこを通り候旨をのぶ、西町奉行曲淵和泉守、東町奉行森川越前守のやしきやしき此間に二條も、又かくのごとし、是より日もながければ、みやこのわ

たり一見して、夕にふし見の宿にやどりなんとて、又もとのたびよそほひして、先神泉苑の跡を見れば、池あり、池のむかひに善女龍王の宮、御苑天満宮の宮あり、乾臨閣のいにしへなど思ひいでらる、四條通りの大路をゆき、四條河原を見、芝居の前をすぎ、祇園の旅所の前をゆく、冠者殿といへる額あり、祇園の社にまうで、門邊にいつれば、赤き前垂したる女ども、手をつらねて人をとどむ、左右に葦簾かけ渡したる床に上りて、名におふ豆腐の田楽といふものにて、飯くひ、酒のみつ、女どもの豆腐きる音かしまし、隣の籬のうちに、うかれたるさまの人あまたありしが、女をよびて豆腐きらしめしに、とく眞名板を携へ來りてきる音、七種はやす音にも似かよひたり、物したため終りて、あしとらせんとするに、秤をたすさへきたりぬるもおかし、しろかねの露おもからぬ酒錢なるべし、祇園の社のうしろの方より、智恩院にいりてみるに、山門に華頂山といへる額あり、八重一重の花さきみだれて、雲にわけける心地す、もとのみちにかへりて、左のかたに双林寺道あり、ゆかまほしけれど、先をいそぎてみすぐしぬ、

八坂の塔の高さをみるにも、かの淨藏貴所の行法を試し事まで思ひ出らる、此あたりの人家に、土の人の形をひさぐ、故郷の孫の遊びにもならんかと、ひとつ求めてふところにしつ、夕の日に愛すといひし古事もつつまし、清水寺は小高き所にして、左の方に鐘あり、たちよりにて銘をさぐれば。

東山清水鐘

南無阿彌陀佛

大勸進口鉢上人

文明十戊戌年卯月十日

大工藤原國久

天下泰平

國土安穩

十方檀那

所願成就

南無阿彌陀佛

乃至法界

平等利益

良善

卯所 大法師思善
大法師鏡芳

干時奉行 律師宗慶
阿彌梨宗圓

とあり、蠟墨もてうちなば文字のかたもとどむべきが人のゆききもしげければせんすべなし、清水の舞臺にのぼりて、欄干によりて四方をみるに、春のけしきいはんかたなし、欄干の慈法師に

清水寺舞臺

寛永拾癸酉歲十一月吉日

金寶珠

とあり、ここは餘り人めもしげからねば、蠟墨もてうちしに、いとあざやかにみえし、長き繪馬あり、諸侯の國入とも思しき圖なり、承應六年未卯月八日、辻村茂兵衛筆宿坊成就院とあり、猶あかずして地主權現の山にのぼれば、八重櫻さかりなり、音羽瀧の上なる堂の上より、欄干によりてみわたせば、春の風ゆるやかに吹てちるかふ花びらを、谷のもとより吹たるにぞ、袂もかほる心地して、雲井の上かとあやしまる、坂を下りて大谷といふ所に在る、累々たる塚の石をかさねて、今みし花もたちまちにしほむかと疑ふ、ここは名におふ鳥邊山なり、右の方に日親上人茶毘所あり、左のかたは西大谷とて、西本願寺の

堂あり、これ親鸞上人の茶毘所なりとぞ、いぶせき草の細道をたどり、大路に出で妙法院の宮のあたりをすぎ、近頃やけし大佛の跡をみる、やけ残りたる銅物瓦などみだれふして、目もあてられず、三十三間堂に入てみるに、物ふりたるさまなり、堂の前に石の燈籠あり

豊國 社奉寄進慶長元年甲辰年
八月十八日 三位局

とありしかば、豊國社はいづくと問ふに、今過來し大佛のうしろにありといふもほいなし、あまりにかすかなるゆへに、みすぐせしなるべし、立かへりみんも中々なれば、たちいでて東福寺の方にいそぐ、實にも五山の一にして、かゝる大きな寺院をみし事なし、山門、佛殿、法堂、僧堂など雲のごとくに構へたり、佛殿の釋迦佛長五丈、左右の觀音はその半を減じ、四天王の像はまたその半を減せり、光中の化佛五百軀とかや、端巖微妙の相よのつねの佛像の及べくもあらず、けふ大佛のやけにし跡をみて、うらみしが、ここにいたりてやや夙志を償ふに似たり、名におふ通天橋は桁行十二間二尺、梁一間五尺、深き谷にかかり、額は普明禪師の筆なりとぞ、橋のほとりに

筵しきて、香煎うるものあり、しばらくいこひてむかひの橋を見れば、臥雲橋なり、それより東山いなりまうで、泉涌寺にゆかんとせしが、大門の道遠ければゆかず、稻荷通を南にゆきて、深草にいたれば、まつ元政法師の跡しのぼしく、端光寺はいつくなるらんといふに、寶塔寺のまへなりとききて、寶塔寺にもいかまほしけれど、興かくものもまちかほに、従者もつかれぬれば、寶塔寺の門の前より右のかた、細き道をたどりてゆけば、かすかなる門あり、葦酒を禁るといしふみたてしは、法花律なるべしと、門に入りてみるに、左のかたに本堂あり、僧一人夕の經よむ聲あはれなり、庫裏とおほしき所に、やつれたる僧のありしをみて、元政上人の墓をたつぬるに、右のかたなりといふ、細き道をたどりゆきてみれば、木立ものふりたるかけにかこひして、竹三竿立てり、まへに香爐を置く、不斷の香は霧なるべし、これ上人の墓なりとみるに、涙もとまらさず、あまたびぬかづぎて、たちいでながら、ふところにもせししろかね一つぶとりて、庫裏なる僧にたのみ、上人の牌前に手向よといひすてていそぎ

出れば、日は申の半なるべし、これより伏見まで、
 猶道遠しとくとくと興かくものにいさめられてかき
 のせられ、足を空にいそぎゆきしかば、藤の森のあ
 たりもしらすして、うち過ぬ、伏見の山の桃さかり
 なりとさし、しも、いつこの雲にかへたてけん、鶏犬
 の聲ちかくきこゆる、伏見の町々ゆめの間に行すき
 つつ、富田屋三左衛門の家にやとり、ゆあみしは西
 の刻ばかりなるべし、こよひ戌の刻にはふねよそひ
 して、淀川を下るときくに、心もしつまらず、船役人
 淨田舟水揚方^{年寄文}などいふもの、はや船にのれとい
 ふに、あはたしくやどりを^{右衛門}出て舟にのれば、朧夜
 の空なつかしきを、苦といふものうちおほひて、挑
 灯ともしつ、西も東もわいたためねば、舟のそこに打
 ふしつ、折々瀬の浅きにや、舟のそこきしるおとす、
 かの淀のわたりのまた夜ふかきにといひしむかしも
 しのばれて、いと心ぼそし、つらつら思へば、鳥か
 なくあづまより、ぐるればかへる大津馬の、五十三
 次さしもさかしき山をこえ、ひろき海川を渡り、
 うきもうれしきも今宵ふしみの舟の中に思ひつめ
 たり、わが年もまたいそじあまり三ツなれば、こと

し元日の詩に、世路如經東海道人生五十有三亭とつ
 くりしも、思へば心のうちに動きて、ことばにあら
 はれしものならしと、あまたび起かへり、ふしま
 ろひつつうつゝともなくぬるともなく、いつしか十
 三里の流をくだれるにや、岸のほとりに多くの人の
 聲して、南本町にやとらせ給ふ御方のふねはいづく
 ぞ、御迎にとて参りしとよぶは、八軒屋といふ所なり
 とぞ、ほどなく本町ばしの岸にふねさしよせて、やど
 りのかたに案内して行くに、夜はほのほのとあけぬ、
 けふは十一日なり、やどりは市中なれどもすこしさ
 しいりたる所にて、四間五間なり、二階あり^{無ぬり}こ
 めあり、庭の草木のたゝすまひも、たれ人の物すき
 にや、ここにひと、せ春秋を過す事よと思ふに、か
 はりぬべき人より、あるじまうけして、おももの
 てまいる、心もすするに答たてて、とく此地の御城
 代^{青山下野}西町奉行^{成瀬國繁}東町奉行^{水野若狭}の府にま
 うし、権銅の場に日毎にゆき通ふ、公事のひまひま
 過にし道の事ども思ひ出るまゝ、かいやりすてぬ、
 折からの詩歌も、書つらねまほしけれど、いさや川
 いさと口かためしちかひもあれば、巻の末に附て録

せり、すべておほやけの事をはぶきて、わたくしご
 とのみしるせり、文つたなく、筆とどこほりて、事
 もまたくだくだし、わが子孫たらんもの、あなかし
 こ、おぼろげの人にしめす事なかれ。

附 録

留別

都門楊柳綠如絲。勸酒頻歌古別離。行向浪華江上望。兼葭露白月明時。

又

春風擁傳出江門。鴛鴦揚州不足論。五十三亭東海道。烟花月露亦君恩。

出門口號

朝雨霏霏似渭城。一杯傾盡別離情。明年自有前期在。策筇垂楊對弟兄。

たひ衣たちいつる日は春雨の

けしきはかりに袖ぬらせとや

卯の時のために笠ぬけはつさくら

品川海天館健兒 吉見義方 榊原士立

海天春雨正冥冥。驛路無塵柳色青。

醉方義 醉來惜別望前庭士

こん年はやがてほすべき袖の浦に

なにぬらすらん今日のはるさめ義方

大森の酒にいたく酔て輿の中にねふりつゝ神奈川のほとりにて目さめぬ夷曲ありたれ人

二三合酒のみ過し六合の

わたしもしらすいつかこえにき

戸塚の宿をすきかけとりといふ所にて一木の

櫻さきいてたるをみて

けふよりやゆくてになれん旅ころも

ひもとくはなのさきそむる頃

過藤澤山

此寺舊稱清淨光。新花帶雨傍香堂。至今猶示遊行

跡。藤澤春風古道場。

みちに椿の花さかりなるをみて

はる雨はぬれたる露の玉椿

八千代もあかね色とこそみれ

南郷魚鱈

不食南郷鱈。安知東海鮮。開樽纒下箸。一醉瓦盆前。

過小餘綾磯

松林盡庭又人家。離畔桃花雜菜花。驛路行過梅澤去。遙聞海上浪淘沙。

きのふけふはやこゆるきの磯の波

たちかへるへき時をこそまて

過函嶺

雨霧函山紫翠凝。莓苔路滑石峻嶒。關門百二應須

固。天險尋常不可升。臨水每緣青壁下。攀林又

入白雲層。怪來笑語聞村落。勸酒胡姬盃可憑。

其二

天正神兵下此城。徒傳五世北條名。崖餘二鼎祠壇

古。影落雙峯鏡水清。猿猱已愁蛇倒退。烟霞無

盡鳥哀鳴。鬱紆高岫過關去。紫氣遙生富士平。

ふるさとをふた夜へたてゝ玉筥

はこねのやまの明ほのゝ空

三島道中過關叔成自紀還

東去西來思萬重。途中傾蓋喜相逢。行過三島見仙

客。來自紀南熊野峯。

浮島原望芙蓉

都門日日望芙蓉。芙蓉遙隔萬重峰。出都三日微雨

晴。春雲鶴鶴綠陰濃。舉頭芙蓉不可見。不知何

處神秀鍾。今朝早發沼津驛。兩行夾路數株松。

時褰轎簾望咫尺。芙蓉一片雪猶封。但有蘆山橫大

麓。纒開半面美人容。西子捧心翠黛。葉公好

畫見真龍。行行乍失蘆山色。大麓層雲欲盡胸。

八葉芙蓉屹相向。輪夫下擔客駐筇。欲見芙蓉真面

目。會向浮島原頭逢。

田子の浦といふ所にて

もしは焼あまならなくに旅人の

袖にそかゝる田子のうら波

薩埵山下酒樓

薩埵山前望嶽亭。魚標酒旆接前汀。烟波隔斷蓬萊

路。一帶連峯黛色青。

清見寺

清海關頭祇樹林。青松遠映白沙深。漁舟驛路杜荀

鶴。會入征東軍監吟。

三穗松原

古松原上一漁磯。神女翩躚掛羽衣。謫在人間何所

樂。紫烟深處去無歸。

年月はきよみか關をへたてても

又たちかへり三穗の松原

うつの山をこゆとて

夢の世のゆめにも人にあはぬ哉

うつゝにこへしうつの山道

渡大猪川

日落長亭至島田。西風吹雨暗春天。岸頭懸火明於
盡。直度洪流大猪川。

彌生三日菊川といふところにて

春秋もおなし流ときく川に

けふやうかへん桃のさかつき

さやの中山をこゆとて

これもまた命なりけり年波の

いそちにこゆるさやの中山

ことのまゝのやしるとおほしき前をすくとて

花鳥にあかぬ旅路はわか思ふ

ことのまゝなる神もみそなへ

掛川の城下にてそばむきくふとてれいのされ

ことうたよめるものあり

湯豆腐の葛布ならてさら〜と

一はい汁をかけ川のそば

このあたり葛布うるもの多ければなるべし

三日過袋井驛狂風大起

三日狂風驛路塵。無由野店酒沾唇。遙知故國比隣

會。樂飲浮杯少一人。

度天龍河

大小天 古渡頭。招々客子競行舟。狂風一起揚沙
礫。不似流觴曲水遊。

宿濱松驛

遠江征客度天龍。洛水蘭亭不易逢。旅館殘燈思昨
日。長風吹斷海濱松。

彌生四日の朝とく濱松の宿をたちいつるにゆ

くてに植木多くたてり

はま松のえたさしかはす真木の葉に

霧たつ秋を思ひこそやれ

今切渡舟中作

紫回洲渚古松枝。絶海長風命楫師。千古波瀾同

碧。至今猶憶鍊公詩。

兩波瀾。

はまなの橋のあとをたつねて

いにしへのはまなの橋の跡とへは

風ふきわたる松の一むら

觀潮坂

行上觀潮坂。一層高一層。遠江七十里。遙指一孤燈。

赤坂の宿にて大江定基か事なと思ひいて、

家を出てもろこしまても行人の

心をとめし赤坂のやと

岡崎城一名龍城

麗醜高擢揮長空。二十七盤山郭中。憶昔龍城雲起

日。三河草木八州風。

矢はきのはしをわたるに

ものゝふの矢はきの橋のはしはしら

くちぬ名にこそいらまほしけれ

度桑海

布帆阿那駕長風。萬里桑滄指掌中。解道船如天上

坐。回看春水遠連空。

又

朝發蓬萊宮闕傍。烟波縹緲帶晴光。長年三老齊相

報。繁纜城頭是勢陽。

西村馬曹名貞字節甫者四日市逆旅主人也以去歲十

月死其弟將其子慨然成咏

長亭短亭生死路。東去西去馬蹄塵。光陰百代爲過

客。天地誰非逆旅人。

しらの鳥の陵ありときくに興をはやめてゆけは
かひなし

みさゝきはいつことへはしら鳥の

目わたるよりも早く過にき

關驛尋花

曲徑尋花入。丁丁伐木音。橋隨流水小。松抱故關深。

猶有黃門詠。長傳芳樹吟。低回不敢過。休坐一株陰。

京極黃門のふりすてかたき花のかけとの給ひ

し木をえそ櫻とて今も猶のこれり

言の葉はえそしらぬ身もすすか山

年ふる花のもとにこそよれ

關驛夢還故鄉

驛舍孤燈耿一床。暫時飛夢在家鄉。分明親戚盡情

話。不道江山千里長。

擲筆山

擲筆山頭紫翠迷。當年畫史不能題。茂林疑入麻源

谷。躑躅如過五渡溪。

行經鈴鹿山

驛路鈴聲度鹿山。阪頭征客苦躑躅。口碑猶說將軍

事。不使鬼神據此間。

きのふみつるえを櫻の花一枝を手折て與のす
たれにさせるかまほみてみゆれば
きのふまてえを過かてにみし花も

まほみてのちは匂ひたになき

勢田橋望三上山山一名蜈蚣

蜈蚣嶺秀翠烟重。下有長橋似臥龍。行自琵琶湖上
望。宛然東海小芙蓉。

暮春登園城寺後山

園城精舍帝城隅。近市浮烟占一區。翠黛晴開馬蛇
嶺。蒼波春濤鷓鴣湖。百花時節人相麗。八詠風
光賞自殊。昏黑上方如不至。寧知絕頂有浮圖。

日の岡の坂を上げは千本松といふこゝに一木
の花ささいてたり

春の日の岡へのさくら一もとに

千もとの松もおよふものかは

入京

三條廣路二條城。行度長橋入 帝京。不識 禁門
何處是。紅塵靜處彩雲生。

神泉苑

舊苑神泉長綠蘋。臨風猶憶昔時春。唯餘善女龍王

廟。不見乾闥閣上人。

祇園酒壚

洛下祇園花滿樹。淮南佳味客傾盃。欲羨葦箔當壚
女。素粗金刀切玉來。

春夜乘舟下淀河

伏水春流下淀川。朧朧月色對愁眠。八間樓下天將
曉。一夢宛如五十年。

文化丁丑初春將刪舊稿點

竄二今而思之幾十七年

矣

六十九翁南畝草

葦の若葉卷一之上

かしこき御代のめくみをうけ、やはらける年のほし
め、彌生廿日あまりひとつの日、おしてゐるなにはの
みつのうらのかたに、また夜をこめやまのいつ、
めにあたれる町に、旅のやとりとりしにおほやけわ
たくしの事のひま、とさまかうさまにゆきめく
りし所々、見るものきくものつはらにかいつけて、
蘆の若葉と名つけぬるも、たゞ一とせの波こゆるま
のすさひにして、蘆のかげはに風わたる、きのふの
夢となりなまし。

享和辛酉竹醉日

蜀山居士浪速の旅館にしるす

日 録

- 三月廿一日 兩御堂御靈社
- 廿二日 千日寺 瑞龍寺
- 廿五日 野田藤、久安寺、露天神、法清寺、神明、大藏寺
- 廿六日 櫻本坊、曼陀羅院、北向寺、天王寺、一心寺開帳、新清水寺、茶白山、家隆寺、勝曼院、毘沙門堂、淨園寺
- 廿八日 廣田、今
- 廿九日 高津宮、常國寺、晦日 四橋阿彌陀池、茨住吉、波除山、大渡、竹林寺、天滿御旅所
- 四月五日 天満、光明寺、興正寺、九昌院、源八渡、母恩寺、十五社、鶴塚、櫻の宮、大長寺、神明
- 八
- 九日 遊、天福再
- 十一日 座摩宮寶物、日經行寺、安井天神
- 津村慶明閣
- 十四日 陽龍寺再遊、牛頭天王、三津八幡庚申、推寺
- 十六日 國分寺、正徳寺、北源光寺、古鏡、源光寺

あしの若葉 卷一之上

三月廿一日。難波御堂にまいる、西成郡東は南久太郎町六丁目むかひ、うしろは上難波町なり、世に南の御堂又東御堂と稱す、慶長年中、親鸞上人十世顯如上人の法孫、教如上人の草創なりとぞ、門よりはしめて御堂のさまいつくしくみゆ、右のかたの庭に躑躅花紅なり、都下百人町の事などおもひいてらる、裏の方に洞門あり、洞門を出れば市中にきはし、南波部町座摩神社（座摩宮の神樂所は、櫻町院の御殿を拜領せしなり、故に外の神樂所上り口横にあり、此神樂所はかりは正面に階ありと云々）に入れば、これ又にきはし、祭神は神功皇后といふ、末社に神功皇后あり、近頃たてしにや攝陽群談にはみえず神前の御金張付に松嶋鏡をとさせり津村御坊大阪津村の地、東は御堂前町淨覺町、西は北波部町、北は津村南の町にあり、文明年中、親鸞上人八世の孫、蓮如上人の草創なり、寺内に松楨ありて、南御堂よりはちいさし、されと物まつかにして奥ゆかしくみゆ、本堂左右の

ふすまに雪に竹梅と松なり、堂の上より御城はるかにみゆ、御靈社同所津村町にあり、所祭鎌倉権五郎景政なりと云、毎年六月十七日九月廿七日神祭ありと云ふ、

田笠神社繪馬舎などあり

廿二日晴。道頓堀大芝居木戸に岩組のつくりしものあり、木下隆狭間合戦、中芝居あり、千日に参る、法善寺（難波鑑に云、抑此の法善寺と申せしは寛永年中の頃ほひより、千日の念佛をうりたてしより、人ごぞりて千日寺といへり）淨土宗なり、堂の前に藤の棚あり、花咲か、れり、淨瑠璃大夫の碑多し、釋淨雲俗名蟻風墓あり、寛政八年丙辰十二月廿八日とあり、竹林寺法善寺の隣にあり、衛塚島の竹林寺とは別也、香西哲雲寛永元年に草創せしは、衛塚島の方也九條嶋といふ蓮登山自安寺は、御仕置場と難波新地一丁目との間の小路にあり、妙見大菩薩稻荷大明神の社あり、兩方共に御關の筒出してあり、一番二番三番女どもの妙見菩薩を信するにや、百度参りをなす、其百度参りのさま江戸に異なり、堂のうちをくるりくとめぐるなり、線香夥敷焼けり、鳥居多くたてり、こゝにも藤すこしあり。

千日の墓所に、行基菩薩開基の石碑あり、相撲取などの墓もあり、京の大谷に似たる所なり、裏の方の麥畑をこえ、難波御藏の前を過て橋をわたる、（濱村の源光寺は、行基菩薩の開基にて三昧の本山なり、四月十六日の記に詳なり）慈雲山瑞龍寺は俗に鐵眼と云、難波村にあり、門聯堂聯は木庵寶洲の筆、佛殿の額光明幢の三字は、隱元禪師の筆、表門慈雲山の三字は、開山鐵眼和尚也、委しくは名所圖會に見えたり（略）、淡々翁の墓に、二石二樹あり、二樹は松柏なり、名所圖會に一石一樹とあるは誤なり、又芭蕉塚もあり。

廿五日 朝雨 晝晴夕陰晴不定。朝の雨はれて午の時過る比より、日さし出たれば、けふは野田の藤みんと、過書町梶木町より、船町橋を渡り橋柱に不離萬千橋といかけり、玉水町をすぎ、筑前橋田袋橋を渡りて、梅田橋のむかふに、童部の竹に色帯をつけてかつき来るを何そととへは、天神の開帳にまいるなりとて、顔に殊更に墨をつけ或は片面墨にてぬれるもあり、橋をわたりにて上の天神の開帳に参りて、裏門より出づ、裏門の内右の方に石をたゝみ、つき山をつくれるあり、

上福島の中天神を遙拜し野田道にむかふ、左のかたに下天神の宮みゆ、田のはたに石碑あり、左ふく島右なか山、あまか崎、左藤名所、舟町橋、右ふく島とありて、うらに山六十一郎とゑれり、すなはち左の方に入れば、門前の木よりしてまつ藤咲か、れり、門に入りて見るに木々の末に藤咲か、りて、紫の雲のごとし、又白き藤あり、是は天文二年巳八月九日本願寺合戦の時、此所の藤焼失たりしが、其實はえに白き藤咲きて、其房長しとぞ、春日社あり、三月廿一日より廿七日迄神樂を奏すといふ、碑有り、其文に曰く

貞治三年四月藤波盛の比、足利將軍義詮公住吉詣の時、此地へ立よらせ給ひ、池の姿を小川となぞらへ、和歌を詠し給ふ、住吉詣の記に見へたり、

いにしゑのゆかりを今も紫の

藤浪かゝる野田の玉川とあり、又太閤御遊覽會路利由緒庵と云碑あり、御宸詠所古跡、藤庵の二字の額あり、みきりの池は難波江の池の残れるなりと縁記にゑるせり、かたへに辨財天の宮あり、茶店によりて酒くみぬ、雨ふり來るに立いで、上福島のかたにゆくに又はれぬ、妙徳

寺黄葉宗なり、堂の内に五百羅漢あり、客殿に萬福殿といへる額あり、乙巳年孟秋吉日黄葉隱元老人書とあり、聯あり名所圖會にくわし、久安寺鐵梅庭に梅の木あり、小き寺なり、それより麥畑をつたいて左のかたにゆく、小流の橋を渡り了徳院にいたる、池に杜若さかりなり、紫の藤棚あり、白き藤も有り白きはふさみちかし、花大なりめつらしき藤なり、浦江村(名所圖會に浦江村杜若の名所とあり)大仁寺の方にゆく道有しも、ゆかすしてたいちにゆけば、梅田の墓所にいたれり、火葬の場なり、曾根崎の新地脈はし、兩側ともに倡家あり、左の道より露の天神に在る、こゝはおはつ徳兵衛が心中せし所なりとぞ、近松翁が曾根崎心中に、此世のなごり夜もなごり、死にゆく身をたふれば、あたしが原の道の霜、一足つゝにきへて行く、夢のゆめこそはかなけれ、と書し文また思ひ出らる、又東にゆきて、右に光智山法清寺といふ法華寺あり、鬼子母神堂あり、爰にかしくといへる遊女の墓あり、寛延二年己巳三月十八日 本具妙曉信女かしく墓

追善 人こにゆかしと思ふ八重櫻 ちりてはかなき名は残りけり 施主 油屋 建之 神明の宮に在る、大日本國七所神明宮、武藏江戸芝神明宮、攝津國大阪天滿、山城國朝日、同國平安城、東岩倉、信濃國安曇郡、加賀國金澤とあり、それより北の方大融寺は、佳木山と稱す、二王門の力士古雅なる像なり、千手觀音の堂あり、舟玉社あり、こゝにも藤の棚あり、寺の事は攝陽群談名所圖會等にのせて委しけれど、思ひの外に見所なき寺なり、門前に大界外相不許葦酒入山門の碑あり、幸松寺夕顔寺の前より、北木幡町南木幡町下半町を過ぎ、なには小橋をわたり、大江橋をこえ、淀屋橋をわたりて歸りぬ。 野田古藤 春日叢祠援古藤、野田晴色紫雲層、閑花對酒風中落、老蔓藏蛇霧裏騰、花洛將軍留麗藻、豐臣相國訪殘僧、人生五十餘年興、如此真遊歎未曾、むらさきのゆかりもあれば旅人の 心にかゝる野田の藤浪 廿六日晴涼。天氣よし、けふは立夏なり、南郊の

遊びいかゞならん、名におふ天王寺にまうでなんとて出たつ、内兩替町におほやけの事をはりて、西町奉行の裏の方をすぐ、塀の角に大なる柳の木あり、住吉屋町具足屋町南瓦屋町を、南をさしてゆき、西高津町より左りに折れて、右の方に三級の石坂あり、眞言阪といふ、二級目より左へ入れば、櫻本坊にして生玉九ツ院の一なり。 櫻本坊。高野山寶生院の末寺なり、秋葉權現の社あり、又二月堂金毘羅權現の社あり、仁和寺の御寄附也といふ、夫より眞成院遍照院をへて曼陀羅院にいたる、契沖法師の住職し給へる所と聞けば、其道のりをとはまほしく、堂の後の墓所に入て見めぐらすにみえず、此所は地狭くして堂の椽の下に、石塔多くたてたり。尋わひて寺僧にとふに、いかにも爰に住職はしたれど、其墓は小橋の圓珠庵にありて、水戸家よりたてられし石碑ありとかたる 名所圖會を按ずるに、東高津町眞指町といふ所に、契沖の墓ありと云、重れ辨天社に在る、めぐりに池あり、池の中に蓮あり、宣儀惠比須の像もあり、池にのぞみて茶店あり、橋は東南西に三ツかゝれり、南の橋を渡りて北向八幡宮あり、生玉の社司松下氏守護す、慶長年中に勸

請せり、城中の諸士此所にて、弓馬を學ぶ、今五月五日の流鏑馬は此遺風なりといふ、社内に 東照宮御遷座所あり、社を出て生玉神社にいたる、當社の事は諸書に委しければ、今更云に及ばず、神輿は拜殿の兩方であり、拜殿の中を過て本社あり、八棟造なり、末社北の方天照皇太神宮、豐受皇太神宮、大巳貴命事代主命、少彦名命、南の方は、八幡宮、住吉社、殿鳥社、金毘羅權現なり、本地堂大師堂聖天の社あり、南坊は志宜山法案寺といふ、社頭の北にありとぞ、本地堂の柱に、志宜山法案寺常樂會配役の札をだして置り、本社の左のかたにむかひて、うしろの方に茶店あり、藤屋と云 藤十といへる見はらしよくみゆ、それより寺町を南へ行く、右方にぬけ道あり。かはらけなけといへる札を出せり、ぬけ道の左右に竹林あり、これ月江寺なり、淨土宗の尼寺にて光明山林照院と號す、古へ天王寺城跡にして佐久間信盛がこもる所なりといふ、左の方に藤の棚あり、花盛りなり、棚の前に谷有り、谷の向は竹林なり、此谷に的三ツを高さ竿の先へ挾てたてをき、此的を目あてとして土碗を投るなり 土碗十枚 三錢、土碗賣る家の姥、絲

車にて繰くりわたり、家の前に丸柱のごとき石碑あり、誤落人間世、歲月恍惚々、歲月能弄人、弄能華玄髮、厭此吾將歸、歸便無歲月とかきて、歲月もなく名字もなく、いかなる好事のもの、したりけん、寺内地藏堂、行者堂などあり、行者堂の側に一もとの絲櫻有り此木のもとに石たて、くぼく丸き穴あり、近きあたりのめのはらはの出来りて、其穴に耳さしあて、聞給へといふに、げにもと耳をよせてきくに、風の音のひくことし、莊子が所謂天籟の類なるへし、面にさみせん塚と題して、左のかたに華紅葉曲、

花ももみちも散しほる、とてもちるなら風にまかせてちれかしな、雨にしほれ枝にくちたは色もなや、鳥のふみしくなをつらや、花にはほもさらりとしたかよいわいな

といふ言葉ほれり、後の方に假名して、兄辰巳屋平兵衛は某と共に郭中の人なり、安永八乙亥のとし九月十七日卒、年五十にして死せるを、上寺町の願生寺に葬れり、花楓の曲は、享保年中高貴の人の作なりしを、岸和田侯の御檢校村山はしめて弘せしなり、

兄のつねに三味線を好みし事をも書て、弟通り筋楓屋喜七とあり、この楓屋といへるも花紅葉の縁によるるなるべし、戯に古樂府にうつさは、花楓曲、青花與秋葉、飄散各有時、縱然若飄散、不必厭風吹、雨打莫減色、鳥踏莫動枝、芬芳如可歌、淨盡以爲期、

ともいはまほし、又宗因四世勃翁墓といへるもみゆ、もときし道をたちいて、寺町を南に天王寺村にいたる、一心寺開帳の挑灯道々に出しあり、左のかたに、荒陵山四天王寺（後四月八日に重ねて遊ぶ合せみるべし）石鳥居よりいる、額はいはゆる、釋迦如来傳法輪所當極樂土東門中心の十六字にして、銅版の上に字の形の銅を鋳にて打つけたるやうにみゆ、わが十二三歳の時、龍田詣といへる手本を見し時より此額ある事を知れり、ことしいかなる年にや、五十あまりみつのとしに及て、初て此額を見る事を得たり、これまかしなから 君恩のあまりなりと思ふに、涙もとまらさず。

うつゝにもなにはの寺にめぐり來て

唯夢殿の心地こそすれ

鳥居の前に下馬の石表たてり、うらに寛永十四丁丑年閏三月十五日と、ほのかにみゆ、右に引聲堂あり、本尊は五智如来にして、其左の方に太子御乳母日本尼始玉照姫月益姫日益姫の三躰の木像あり、左の方に短聲堂あり、釋迦文殊普賢の三佛を安置す、此堂に涅槃會を繡したる掛物有り、西大門の左右に八重櫻ちりしほれたり、かの薪つきにしにしへ、無憂樹の萎し事など思ひいて、一房二ふさ摘取て、故郷のつでの家づとす、西大門（西大門の左右の柱に印あり諸人これを轉す）には西の方に阿彌陀善導大師の畫像、東の方に釋尊并十六弟子の畫影あり、維陽勅繪所土佐式部卿昌信拜畫とあり、門の前に銅の香爐あり、門を入て右に五智院萬燈院あり、左に輪藏あり、西重門此門の左右にも佛繪ありしを入て五重の寶塔、二王門の内に建てり、雲水の形を彫なしたるか、丹青落盡して古色いはん方なし、釋迦畫像四天王木像八祖畫像あり、これは慶長年中御再興の時、和州よりうつせるなりと云ふ、金堂講堂を拜し、廻廊の下より入れば、講堂の後の左右に樂屋あり、右に鼓樓あり、左に鐘樓あり、かの黄鐘調の鐘なるへしと仰き

見るに鐘はみえず、わづかに撞木の末半ばかり出たり、撞木に梵字あまた書付たり、大寺の池に蓮あり池の上に石の舞臺あり、池の中に龜鯉多し、鯉などもまじれり、かたへの茶店にて米花といふものをひさぐ、かわらけに盛たるを、池の中に投れば、龜と鯉とうかみいで、はむ、其むかいは六時堂なり、堂の左右に僧坊あり、東僧坊西僧坊といふ、其うしろは食堂なり、此堂の左右に梅の木あり、後に絲櫻あり、左の方に北門みゆ、右の方にみわたされし堂は、療病院の古跡湯屋方丈なりしを知らずして見す鼓樓の東なる龜井の水を見れば、上に屋つくりして下に石をたゝみ、西の方なる板はめの下より、龜の首の形したる石より、水流れ出るを、諸人長き柄の杓もて汲とれり、龜の首の上に賽錢箱あり、東大門をうかひて、御供所の前を通り四足門より入る、此門は太子堂は南面なり、此堂のうしろに、守屋か祠ありといふを知らずして是も見ず、西にむかへる四足門虎門を出て、二王門の前に出て金剛力士の像を見る、右左共に中央にはあらすして左右にかたより立てり、右左共に見ゆる形古雅に見ゆ、獅子狛犬表裏にあり、南大門を出て左に萬代池あり、こゝに下馬石あり（朝鮮人書之）裏に

寛永十四丁丑年閏三月十三日とあり、名におふ庚申堂は、向ひの町のはつれにありと云ふ、てゆくに、左の方に河堀口と云所有り、爰に杜若ありと云ふ、左に入右に折れて、街道にいづ、むかふに松屋といへる茶店あり、酒餅をもひさぐ、右の方なる片折戸に入れば、池あり、築山あり、池に杜若今を盛りなり、いせ物語の繪にかきたらんやうなる、八橋の形を作りなせり、その前に座敷ありて、客をむかふるなるべし、まばらういこふて立出づ、それよりいぶせき人家土蔵作りのの中を通て 崇峻天皇の宮(崇峻天皇の宮に澤龍山の額あり)たゞせ給ふ、是より庚申堂にいたる、大寶元年正月七日庚申の日にまつる所にして、日本最初の庚申なり、庚申の日參る人多しとて、堂の側に護摩堂あり、又二ツの猿を一つ檻の中に入れて中に仕切の板ある堂あり、猿は牝牡と見ゆ、げに心猿の世に繋るゝさま又かくのことくなるべし、夫より左の方の道を行て左の方に坂松山一心寺あり、圓光大師日想觀の舊跡なり、門を入て扉もてかこへる内に、石の玉垣したる石塔あり、是本多出雲守忠朝、元和元年五月七

日戦死の墓なり、その家士九人の墓あり、忠朝の塔には、三光院殿岸譽良玄居士とあり、是平八郎忠勝の弟なりとぞ、墓の前なる水鉢の水をいたれば、短氣なる者、酒の酔狂ふものに宜しと、かたへの僧の教るもおかし、二階堂あり、此寺にて京都嵯峨小倉山二尊院阿彌陀釋迦の二尊并圓光大師足曳の御影の開帳有り三月廿三日より靈寶には、大師襟掛の三尊、同持蓮花御舍利同眞筆の名號、同御影の勢至菩薩、又四種の御袈裟傳教慈覺の阿彌陀大師宣教護寶童子喰切の五結蓮花の名號、慈覺大師裝束の御舍利、唐縫の十六羅漢、弘法大師入定の額(横額に文字あり高)、聖德太子自畫像、弘法大師眞筆の不動尊、同地藏尊、慈鎮和尚歌書切、弘法傳教兩筆の華嚴經、同兩筆の翻釋名義抄兩面の卷物とみゆ靈元院御懷紙、九條太閤御筆、尊氏卿御教書元延元年同五二通、太閤秀吉公御自畫像東帶の内靈寶には天國太刀、業平朝臣太刀、同鳳凰の平緒二品とも定家卿自畫像、同小倉色紙、同詠歌、同卿所持の松影の硯、王羲之が墨洞石、逍遙院殿御筆の伊勢物語、寂蓮法師筆の夜林鈔裏紙の錦懸されにてめつらし裏計ありて表は切てなし、慈鎮和尚の和歌、古法眼筆渡唐天神、徽宗皇帝の鷹の畫、揚補之

か梅二幅贊あり二番石形を以て同記寂巖流砂川の蘆の卓の常の蘆に似たり七絃琴楊貴妃所持琵琶七絃琴錦樂谷の屏風時信の屏風、古法眼葛の畫の屏風に宮方堂上方の色紙あり、小屏風に太閤時代の武士の名と花押を切てはりしあり、其外、玉御冠、牙御笏、表御袴、濃御袴、紅御打袴、紅御打衣、几帳、青貝突立、御唐衣、御裳、菊の御菌、紅御單、十二單五衣なりわ御小掛等なり、此外にも猶、宸筆の一枚起請(名號)七ヶ條の制誠杯ありしかど、あまりに數多く見るめもあやなれば、くわしくかきもとめす、爰には靈寶の目錄によりて、思ひ出せるを書つくるものなり。

茶臼山は一心寺墓所の上にある、かけまくもかしこき神の御勝山と名付させ給へる所なり、古の荒陵山なり、實に一著戎衣天下治と、羅山子元和元年の試筆の詩に見えたりし事も思ひ出らる、又醒醉笑元和九年の序ありといへる草子を見侍りしに、浪花の御陣の時の落書を載たり。

大將はみなもと氏の茶臼山

ひさまはされぬものゝふぞなき
むかしよりこのかた、二百餘年干戈を動さす、萬民

枕を泰山のやすきに置き、皆此山のみかけなりと思ふに、空恐しくふしおがみて出ぬ。

新清水寺は、有柄山といふ、本尊は十一面觀音なり、寛永十七年京都より遷し、享保の比新清水寺とはなれりとぞ、舞臺より遠く望めば、西南の遠山滄海につらなりて風景いはん方なし、されど廣きは清水寺三井寺の舞臺に及ぶべくもあらず、此坂の下に、油煙齋真柳の墓ありといふををららずして見ざりき、坂の向ふに浮瀬といへる酒樓あり、人々の酒くみかはずさまはるかに見ゆ、彼長鯨の百川を吸ごとき飲中の仙なるべし、ひとせ淺草駒形のとりに、此うかむ瀬のかたをうつして、君かためき瀬などいふ具ありしも、今ははたとせばかりのむかし。

勝曼院は新清水の北にあり、太子勝鬘經を講せさせ給ふ所なりとぞ、二重の多寶塔あり、院中には愛染明王を安置しあり。

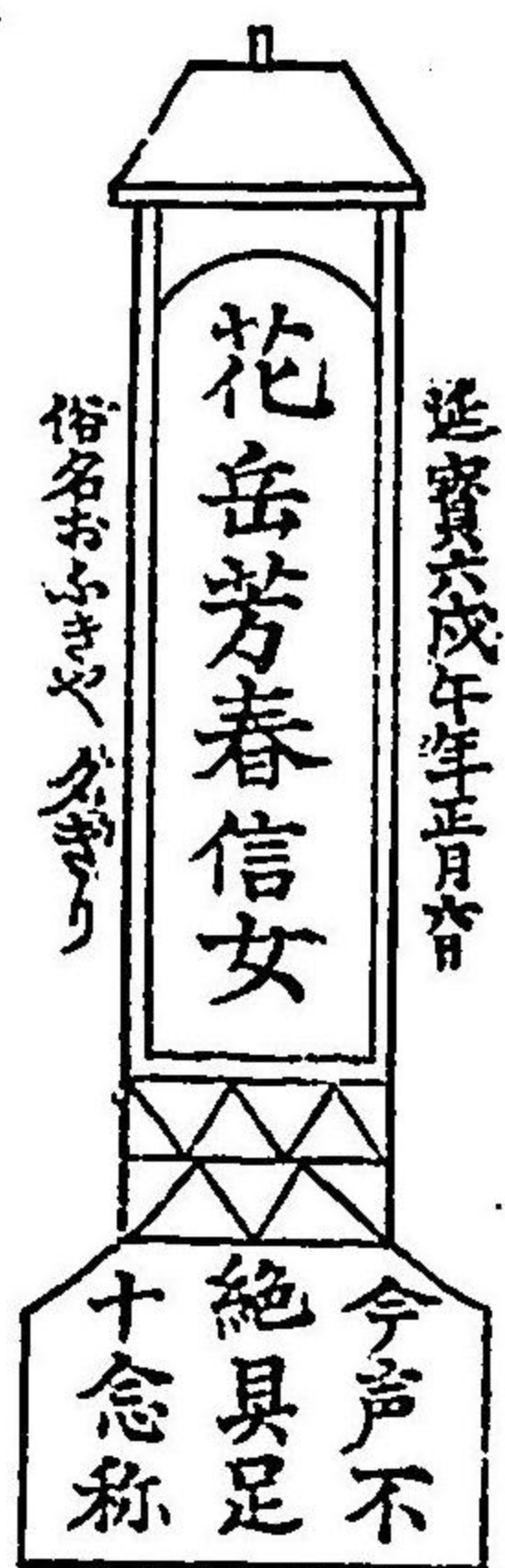
毘沙門堂は勝曼院の西隣なり、如意山神宮寺と號す、石坂あり、木立ふかし、西南の海山を望むによろし、此わたりに従二位家隆卿の塚ありと云ふて尋るにつや／＼みえず、勝曼院の西北の方に畑あり、金

龍山と云ふ札あり、垣をへたて、畑をみれば、桃の木多し、こゝに一堆の塚あり、一もとの松たてり、これ家隆卿塚なり、享保年中安井御門跡大僧正道恕の建られし石碑ありと云ふ、垣のほとりに枝折戸ありて、錠かたくさしこめたれば、垣の外面より拜す、側に庵有り、夕陽庵と云ふし、此所は夕日山といふによれるなるべし、夫木集に家隆卿天王寺にやまひかざりになりける最期の歌七首の中に、
契りあれば難波の里にやとり来て

浪の入日を拜つる哉

例の日想観の心なるべし、家隆は歌よみ、われは歌つくりなりと、定家のことばまで思ひ出せるうちに、うたゝ思ひのやるかたなくて、からうたの様なるものかきさしつ、
夕陽山上一株松。道是當年壬二蹤。獨倚蕭條籬落望。餘霞散綺海烟重。
春の日もやゝくれなんとするに、寺々多き町を過て西寺町にかゝる、淨國寺と云ふ寺に遊女夕霧が墓ありと云ふ事、兼てきつれば、とある家の門にたてる女にとよに、淨國寺はいづこにやといへば、むか

ひなる二軒目の寺こそ、れなれといふに、例の事このむ癖やみがたく立入てみれば、堂の左の方の墓の中にあり、



延寶六戊午年正月
今声不絶具足
十念称
花岳芳春信女
俗名おききやぶきり

これは寛文十二年、都柳町より此地に下りて、左衛門が遊女にて共時めきける遊女なり、此地の太夫なるもの二人、禿はつれたれども、引船女郎をつるゝ事なし、此夕霧より引船女郎を一人つゝつれしとぞ、延寶五年の秋の比より病にふして、翌年の春死せりと云ふ、藤屋伊左衛門扇屋夕霧阿波鳴戸といふ淨瑠璃あり、此伊左衛門と云ふ事跡方もなきつくり事なり、此淨瑠璃に阿波大臣と云ふものあり、其比の大盡に大阪阿波屋何某といもの夕霧にふかくなじみ、病の中にもよそながら世話せしとぞ、九軒町揚屋吉田屋喜左衛門が客也、其比かふき芝居に、阪田藤十郎同年二月

三日より夕霧名残の正月と云名題にて、藤十郎伊左衛門にて、傾城買の狂言大にはやりけり、寶永六年藤十郎死するまで、夕霧の狂言十八度までことごとくはやりしとなん、今にいたりて江戸にても人の口すさみにあり、阿波屋の富るを貧なる伊左衛門といふものに作りしは、作者の翻案なるべし、委しくは、みをつくしといへる俗書にみへたり、かゝるよしなしこと書作るも、うかれたるさまながら、旅の物うきを忘れんがために、そゝろに書つく、人笑ふる事なるべし、さてもけふの日の長きは、午の半すくる比より酉の時迄の間に、世の諺にいほゆる神祇釋教戀無常とも、半日の閑に思ひためたり、ものうき旅のなからましかば、
立夏遊四天王寺

行迎立夏入南郊。塔勢凌雲碧樹交。进水石疑龜出曝。彫梁泥見燕辭巢。上宮太子營香刹。須彌天王刻白膠。草創巍然存此地。不知千歲有誰教。
二十八日晴。難波御藏におほやけの事ありて、まかれるついでに、廣田大明神の社に詣る、今宮の北御藏のうちにある、一むらの木立しけりて物しつか

なる所なり、此神に腰より下の病をいのるもの、多くは赤るびを断物として祈るなり、故に赤るびの形を畫たる繪馬多し、又章魚を畫るもまじれり、これもたちものによ。
今宮蛭子大神宮にまいる、社頭は經營なかばにして假殿にうつらせ給ふ、此神をいのるには堂の後をたゝきて願をかくるなり、故に俗に雙の蛭子といふ、正月十日に十日蛭子とて殊の外賑はしといふ、社頭の石の水鉢に銘あり、淮水泓澗神德所煥之清自得求福不同と八分にてあるせり、こゝは蟲聞によろしと云ふ、此今宮村に朝役神役といふものあり、名所圖會に委し。

二十九日。朝雨。晝晴冷。高津の社にまいらんと、裏門の方なる石阪をのほる、左に神輿殿あり、次に御本社あり、仁徳天皇を祭るといふ、末社に比賣古曾神あり、稻荷の社ありて鳥居多くたてたり、太神宮繪馬舎もあり、本社の前なる右の方の茶店より西をのぞめば、萬戸の人煙みち／＼と、むかふに海山のなかめあり、高臺の頌碑は芥川彦章の文なり、表門の方なる坂を下りて、右に松の古木の枯たる株あり、瑜伽神の社あり、又八十八箇所の観音大師堂などあり、左右

に料理茶屋あり、前なる石橋を梅の橋といふ、左の方に梅一ともとあり、若木なり、石の鳥居をいつれば西高津町なり、西高津町を東に行は寺町あり、右に妙香山常國寺あり、妙見の社あり、左に本覺寺あり、鬼子母神の社あり、これ法花宗なり、此鬼子母神堂に狩野山樂が畫し二の馬を繪馬とせり、其子孫狩野縫殿助其事を記せり、猶東にゆきて北へまがる、寺町あり、餌差町といふ所に、圓珠庵あり、爰に契冲法師の墓ありと聞て立入たるに、庭に井あり、井の邊りに塔婆あり、水戸義公契冲阿闍梨百回忌と記せり、庭の戸口はとざして側に五井何某のたてる碑あり、契冲法師の行狀を記せり、庵主に問ふに、契冲法師の墓はいつこといへば、一の老尼出來りて案内して扉をひらく、つばの内に草木もたゝならぬ心地するに、蒲公英の花さき出たり、左に四阿あり、奥の方に墓あり、契冲阿闍梨と記せり、抑阿闍梨の事は、初て勢語臆斷をよみしより、其説のひろき其論の卓なる事をしれり、其内萬葉代匠記、古今餘材抄のはしつかたをうかひ、河社雜記雜々記のくさくさまで其下風をまたひ、猶も安藤爲章の年山記聞をよみて其傳をしる

事を得たり、けふいかなる因縁ありて、此みはかにまうつる事を得たると思ふに、涙まつ落ぬへし、例の尼案内して堂を開てみするに、膝を入る、計の庵なり、床に高野大師の像あり、像の上に色紙二枚を出して、疑時自入青龍屈、道是昆盧八代孫、瞻彼南山伽如在、瞬知三昧待慈尊、紫雲比丘寶磐問光物拜讚其側なる壁に、契冲阿闍梨の像を掛物にして前に机をすえたり、像の贊にいほく、晝興理冥、而日若活、胸澆古今、學海甚潤、解釋萬葉、數島道通、通達六藝、倭歌辭工、山川草木、雪月雲霞、心海空寂、氣契冲和、手搦木樓、身著袈裟、獨座一榻、形相些々、花園未枝桂林古溪題、又側に一軸あり、契冲の筆にして藤原敦光の詩を楷書し、片假名にてすてがなをつけ給へり、横幅なり、

晚秋高野山言志

藤原敦光

雲岫容身宿善權。此時投步拂塵埃。群生世父多慈愛。五代國師富辨才。後素寫顏今駐像。眞丹求法昔浮杯。九流智水尋源決。三密教門占處開。風藻遺文垂露妙。龍華嘉會幾霜廻。幽林路窄攀紅葉。絕澗梯危踏綠苔。妖艶妹山織黛遠。老衰祖木原皮摧。妹山之傍有一山號妹山又山中有一樹枝葉摧折其大十圍相傳曰此樹者大師所息後人無敢取祖師文義歎故有此句 千

峰月色秋看雪。百谷泉聲夜聽雷。俗骨縱無交紫府。佛恩必有導蓮臺。非榮非寵非名利。偏爲當生得道來。

寛政十一年十月念三日、義公ならひに契冲法師の百回忌の供養せし法式を壁におして置く、雪光山圓珠庵とあり、法師の影像の前にぬかつき机上に香資をさへけて歸りぬ。

歸るさに、又高津のもとなる植木屋に牡丹見に行しが、花ちりはて、興なし、ニツ井を見てかへり。

三十日。晴 けふは三月盡なり、忽開春盡強登山といへるからうたも思ひ出られ、安治川の末波除山瑞賢山見んとて出る、道すがら所謂四ツ橋をすぐ、(四ツ橋は上つ橋よし屋橋炭屋橋なり)上つなき橋より、下つなき橋をわたれり、平右衛門町、うは島町、富田屋町より 御池通四丁目へまかれは芝居あり、むかふの方に阿彌陀か池の寺見ゆ、蓮池山和光寺と云ふ、本堂如来寺の額は、寶鏡寺宮(皇女)の御筆なりと云ふ、ことし開帳ありて賑はし、本堂の北に阿彌陀池ありて池の中に寶塔あり、彌陀三尊を安置す、放光閣といふ額あり、池に蓮あ

り、むかひのきしに薔薇の花盛なり、階底薔薇の句も思ひあはすへし、觀音愛染藥師地藏閻魔堂とあり、金毘羅權現の堂に、本家正勢散といへる藥の札かけしもおかし、かたへの藥師ふつはいか、見給はんかし、ある女の紫のきぬにゑみしの國の、錦のまねひものしたる帯とけなくむすびて、(此帯絲錦といふものなり)雲の鬢うちかたふけ、霞の眉ひそめつゝたなうらをあはせて、ふしおかむ袖口に、いかなる願をやこめぬらん、抑此地は、古への難波江にして、かの物部大連の佛をすてたる所なり、元祿十一年、智善上人此地を開き、善光寺同體の佛を安置せるより、今の寺とはなれるとぞ、それより御池通り五丁目六丁目をゆき、(こにもあや長堀の高橋をわたり、立賣堀の高橋をへて、大波に至りて船に乗り、江の子島を右にして戎嶋につく、大きな船をつくり居れり、大渡しとはいへど、川幅の大きなにはあらず、たゞ渡し場より渡し場迄、江之子嶋と寺嶋との間曲折して、長く舟さし下せはなるべし、戎嶋より九條嶋在家をすぎて、竹林寺にいたる、九條嶋の本名を瀬嶋といふ、寛永の比哲雲といふもの、

四貫嶋橋環嶋をきづき竹林寺を創す、庭に香の梅ありとき、て人にとふにまらず、
 茨住吉社に参る、竹林寺の西南にあり、鳥居に茨住吉大明神とあり、本社にも同し額あり、六歌仙の額ありしが、歌は冷泉家の御筆のやうにみゆ、末社に貴船龍田舟玉大明神あり、池にいたる所あり、中に辨天有り、木末に藤の咲のこりたるも興あり、天満宮金毘羅もあり、宮の右のかたに稻荷あり、其かたへに四角に土をぬりこめて屋根をおほへる宮あり、神樂殿に萬舞と云額あり、いかにも神さひたり、立いて、猶西の方に野道をたどりつゝ、細き流れの棚橋を渡りて、沓町といへるあり、こゝは九條の申道といふ、安治川の一丁目より四丁目にいたりて、少し左の方に入れば、御代官篠山十兵衛の支配とみえて、制札たてし御林あり、松の林なり林中に、住吉社地藏堂あり、是は茨住吉の旅所なり、大きなると小さきと山二ツあり、これ波除山にして世に所謂瑞賢山なり、貞享年中河村瑞賢なるもの、新川を堀て安治川と名付け、土砂をあつめて山となし川口をたすく、委しくは畿内治河記にみへたり、其比は此山

より西南は海なりしを、年々に新田出来て今は海へへたれり、此山にのほりて見れば、西に九條嶋の人家あり、南に帆柱はるかにみえて田面へたゝりたるに、高き燈の臺たてり、東の方に天王寺の塔かすかに聳え、天地より湧しかと疑ふ、かの霞の西にかたふきてといへる夕附日もけふの空のなこりなるへし、山のもとより野道へ傳ひゆけば三社宮あり、宮の内に神祇崇といへる額あり、これより安治川の町家のうしろの道をゆき、もとの申道にかゝり九條村より川口にいたる、妙見社あり、淨清山 青明院夫より天満天神の御旅所にいたる、門の内に大きな梅の木有り岸にのそめる石の鳥井に、天満天神御旅所石鳥居は井垣等口、寛文壬寅年九月十九日、小濱民部丞藤原嘉隆と彫れり、その北にあたりて御舟藏あり、龜井橋を渡り江之子嶋を經、上の橋をわたり難喉場をすぎ、小右衛門町兩國町より、千秋橋をわたり、海邊堀町より上堀り橋永代橋を越ゆ、兩國永代など云所の名をきけば、故郷の事思はずにしもあらず、新町を經相生橋をわたり、津村の御堂の後より旅の宿りにかへり、此夜畿内治河記をよむ事一過。

あしの若葉 卷一の下

四月五日、晴 小暑 天満天神の社再建なりて、今夜正遷宮あり、明日より参詣のものおひたしとて、午刻なかは過る比より、難波橋を渡りて、東の方大平橋をすぎ菅原町十一丁目より北に曲りて、天神前町に至る、此あたり提灯かゝけて道のほと賑はし、鳥居にむかひて右の方に種樹の家あり、九輪草けまん草などもあり、若楓の葉の品々なるは、江戸におよぶへくもあらず、庭に大きな蘇鐵あり、天満天神は、村上天皇天曆年中 勅願によりて、此地に建立し給ふより、今に至る迄所を移さずとぞ、此度再建新になりて、檜皮葺の簷牙高く啄み、獅子鶴の彫物鮮にありなせり、門に 勅命正遷宮といへる札建たり、神體はかりに蛭兒尊の末社に移らせ給ふ、宮居の西の方に、高き土手をきつきて、草木をうへたり和歌三神の社あり、大將軍の祠あり、土手其外攝社末社多し。
 光明寺といへる寺は、興正寺御門跡の側にあり、江

戸市ヶ谷の淨榮寺にて、相見し人なればたつぬるに、この朝より二十日迄、興正寺御門跡寶物の弘通ありてにきはし、則光明寺の案内にて御門跡にいたり、寶物拜見、
 親鸞上人像木蓮如上人御影自親鸞上人手皮名號はあれる女人、佛法をうたがひしゆへ小刀をもて手を皮をへき、血をもつて名號をかき給ふに、其斑たちまち、へしといふ、同上人肉付の齒、同茶毘の灰井舍利、寶塔の中法然上人より傳はれる珠數、慈鎮和尚より傳へし袈裟、古きんちんの二重なる聖徳太子十六歳自畫の像、あんなくんのきぬ後柏原院御影、後水尾院御影、等其外宸翰多し、太閤より拜領の文箱、桃園院より御奉納ありし、桃の御香爐二
 七寶の香箱、あはび貝の表に小き貝を付具の中に銀の水金銀珊瑚珠等の玉をつけたるもの也つぎ女院より
 其外、猶あまたなりしが、よくも覺へず、光明寺のあるじ追て書つけこすべきよしへり、中山文平は淨榮寺に住る自由軒の妹婿なり、寺のかたへの收納場にむかへて酒す、む、終に數杯を傾けぬ、それより猶東にゆきて九昌院にいたる、これは寛永の比松平下總守の營たてりし御宮なり、宮居のさまいつくしく

見ゆ、宮居の前にかこひして能舞臺ありとみゆ、是より淀川の西の岸にそひて行御破損奉行のあつかれる御材木藏あり、川のほとりに土手の草繁りたる中に茶店をかまへ、薙を敷て男女ともうちむれ、草をつみ花をひらふ、あるひは割子さへなど取出してくみかはしたのしむも見ゆ、川崎のわたしは近く、源八渡しは遠し、源八わたしを舟にてこえ、むかひの岸につきて、母恩寺はいつくと問ふに、猶北の方なる津上江村なり、土手をつたひて母恩寺に在る、此寺は後白川院の御本願にして、御母待賢門院御菩提のためにて給ひし御寺なれば、法皇山母恩寺といふとぞ、さしにも似ぬ小寺なり、されど口の坊、西の坊、奥の坊などいへる坊ありて、尼のすめる寺なり、此寺より綿帽子を出す、其さま清くして名ありときくも、尼のしはざにして、母恩寺の名にならざるべし、夫より東北にあたりて、十五社の小祠あり、十五社の名をしれるものなし、額を見れば、糸といふ女のよめる歌あり、これにてあきらかなり、太神宮ばかりのぞきてよみいれ奉ぬもさすかにかたじけなし、住吉や廣田御くまのみそし川

しらす山小守いせの御社
天照皇太神宮
布留の宮大原春日いなり山
松の尾かけて加茂八幡かな
宮の前に四層の石浮圖あり、古くみゆ、猶東北の方に細きなかれあり、棚橋をわたりてむかひの畑中にはるかにいさゝかの木立あり、これ鶴塚なり、むかし源頼政が射留めし化鳥を、淀川に流せしを此所に埋しといふ、見るほどにもたぬしるしなれば、遠く見やりしまゝにてやみぬ、夫よりもとの道のかた田の畔をつたひつゝ、土手に上りて南に行、櫻の宮(末社に人丸殿島天神あり)の裏門より在る、裏門の内茶店あり、男女むれわて酒くみかはせり、宮居のさま木立ふかく、櫻木多し、花さかりの比思ひやるべし、東の方に流ありて蓮多く、農夫の蓮の根ほるもみゆ、ながれにのぞみて葦簀ばりの茶屋たてつゝ、けて一間くまきり、色さめたる木綿の暖簾に、またれ櫻そめたるをかけたせり、かたへの茶屋より女共の出来て、酒くみ給へなとすゝむ、爰は豆腐の田樂をやきて、人にすゝむといふ、鳥居をいて、

南に行けば野田村なり、小き流をわたりて右の方に、大長寺あり、こゝは網島といふ所なりけり、門の内には地藏堂あり、其側に鯉塚といふあり、寛文八年此里の漁父、淀川にて大きな鯉を得たり、其鯉の左右に、左右の巴の紋あり、また鱗ごとに同じ紋ありてあさやかなりしかば、官に訴へ人にも見せしが、日を経て死せしかば此寺に葬る、其夜寺僧の夢によろひきたる武者來りて、われは慶長元和の戦に武功をあらはしつるに討死せしものなり、我世にありし時多く物の命をとりしむくむにや、鯉に生れ苦みしに、和尚の引導によりて佛果を得たりと云、其腹巻に巴の紋つけたりとみて夢さめぬ、よりて瀧登鯉山居士と戒名して碑をたてたり。

南無阿彌陀佛 寛文八年 正月十七日

とかすかにみゆ其右のかたにまた一の石のしるしあり

釋 了智 俗名 かみや治兵衛
妙春信女 俗名 きの國や小はる
寛政七年丙辰に七十五回忌の卒塔婆をたつ、これは

世の人淨瑠璃につくりてかたり傳へし紙治と小春の心中せし處なり、享保七年寅十月十四日、此寺十夜の折から、二人のもの參詣の群集にまきれて、一夜をあかし、晨鐘の時にいたりて、左の二紙をふとこるにして二人ともに死せり、紙はのべ紙二枚かさねて

今宵ありがたき御おしへにあつかり奉奉存候私共淺間敷身の果みらいのほどもおぼつかなく存候何卒なきあとの御吊被成下候は、奉奉

存候これのみ御頼申上度書殘し申候已上
十月十四日 治兵衛 小春
大長寺様

この塚の縁によりて、此所にやさまよひ來にけん、予寶永の板にて心中大鑑といへるもの六冊あるをもちり、皆此地のもの、心中を記せり、むかしよりこのかた今たゆる事なし、此比も堺の方天下茶屋といへる所にて、男一人に女二人ともに死せしと云ふ、男は二十二歳女は二十歳と十九歳とにて、天神にいへる倡妓に藝子といへるものとなん三月四月の間の事いかなる夷俗にや、それより備前島橋をこへ京橋をわたる、京

橋の擬法珠に、元和九年四月日とありて、又延寶の年號あり、銚直せし時の年號にふるきを殘せしなるべし、御城を左にし東町奉行の前を右にして内平野町の神明宮にまゐる、この神明は一六の日に賑はへる宮なり、平野橋をわたりて旅のやとりに歸る、日暮の比なるべし。

八日。晴 けふは灌佛會なり、重て四天王寺にまうで、さきに見のこせるところへみんとて出たつ、内兩替町なる銀座にたちより、右へまがり松屋町瓦屋町の通を南さまにゆく、右のかたに植木うる家多し。

孔雀茶屋といへる、暖簾かけたる大きな茶屋あり、立入て見るに錦鶏、白鷺、灰鶴、孔雀(二雄三雌)などあり、大きにひろき籠にいれたり、高麗雉かへる籠の内に黄楊の木などうへてかくれ所とす、籠の前なる欄の中に羊をかひ置けり、奥の方に池あり、杜若、菖蒲、萍蓬所えがほなり、葦簾張の茶屋、たてついでて人々いこふ、江戸の花鳥茶屋に似たり、それより西寺町を過て、寺の裏門にいたる、これ遊行寺の藥師堂なり、寺内に芭蕉翁の墓あり、曼倩談談

相如俳文妙辭歌句思入風雲、黃檗鐵山筆とゑれり、かの終焉の句といふ、「旅に寢て夢は枯野をかけ廻る」といふを、ゑり付たる碑もあり、實に翁は、此地久太郎町六丁目花屋の裏にて終れりといへば、此地にある塚はこと所の塚と、くらぶへくもあらず、ことに遊行の靈場は、翁の身の上にもかなひぬべくや、近比こかしこにいとみたつる、はせをづかあまりにこちたく、魏王の疑塚にも似かよひてうるさし、表門より出て、南のかた合法が辻をたづぬ、麥の畑の中道をゆけば、左の方に毘沙門の山、安井の天神、うかむ瀬の酒樓、清水の舞臺など高く見わたさる、ゆきくして左にまかれば閻魔の石像あり、わづかなる屋をおほひて、道のはたにたてり、古き像と見ゆ、それより相阪にかゝれば、左のかたに百病藥といへる札を出せる家あり、まやく痞を専ら治するなるべし。安井の天神の裏門を左に見て、右に一心寺の裏門の石段をのぼる、例の開帳の參詣にぎはし。

天王寺門の西門の鳥居を入りて、引聲堂の東に、佛足石あり、西重門をいり五層の塔金堂を禮す、金堂の本尊如意輪觀音彌勒四天王の像、十二天十六善神の

畫像、波羅門の像などありとき、しが、金堂の中に御厨子ありて鎖したれば見へず、此堂の前にて天王寺名所記をひさぐ、是本堂なりといへり、講堂は金堂のうしろにあり、堂の前に花見堂を出し置て、誕生佛たてり、もろ人物をもて、香水を灌ぎ奉る、四天王寺法廷略記には、四月八日午刻には、講堂佛生會音樂ありと記るせり、けふは物靜なるさまなり、又法事満座の後に、預役人桃色の絹の下帯にて、相撲の手合をするなり、これを豊後相撲といふと、名所圖繪などに記せしが、其跡もなしと見ゆ、講堂の本は、阿彌陀佛觀音、勢至虚空藏、四天王尊と聞く、此堂の中は金堂とちがひて、厨子もなく、あらはに拜まれさせ給ふをみるに、中央にまします大きな佛像は座像にて、まさしく釋迦の印を御手に結び給へり、左右のかたへに、四菩薩あり、是阿彌陀觀音、勢至虚空藏なり、四天王の像も、左右にたせ給へり、もし、聞ところのことくならんには、佛體一ツ不足なり、堂の前なるものにとへば、たゞ阿彌陀佛なりとこたふ、猶たつぬべき事にこそ。

をひらきて、もろ人の願ふにまかせて、此鐘をつかしむ、鐘を仰き見るに、ふちにも胴にも皆梵字あり、なべての鐘樓には、撞木の綱をうしろの方にひきて鐘をはつくなり、このは鐘にむかひて、うしろの方の撞木につけたる綱を、前の方に引て、さて手を放して、鐘の聲をまつ也、げに、黃鐘調とかやにかなへる音にして、よのつねの鐘の聲のつよきたみたる聲にはあらず、いかにも、清く平かにひびきて、心もすめる計也、つれ／＼草に、寒暑に隨ひて、あがりさがり有へき故に、二月涅槃會より、聖靈會迄の中間を指南とす、秘藏の事なりとみへし、けふは天氣よく清和の時にさへあひぬれば、一品聲もとのへるなるべし、鐘樓の柱に

推鐘偈

願諸賢聖、同入道場、願諸惡趣、俱時離苦

鐘樓の内に、僧ありて、此鐘は應四季調と申て、四季に應じて聲かはりぬるといひしは、黃鐘の文字を聞たがへしにやとおかし、此樓のうちに、童部の翫ひものあまたあるは、天亡せしもの、翫ひ物を納めしにやとあはれなり、それより六時堂の欄によ

りて、芝はらくたづみしに、又鐘をつくものありて、其聲まつかにきこへぬるにそ、心ゆくばかりなる、東僧坊の東に寶藏あり、かの又倉といふものなるべし



俗に釘なし堂といふ、桁行十二間、竪尺二間、左右に寶藏ありて、戸を鎖せり、舟縫舟縫なり、中間は桁梁ばかりにてむなしくあけたり、椽の下は人のゆきかふほとなるべし、前に拜殿あり、これ又鎖せり。

東大門の内左の方の番所に、札をかけたなり

放生箇所分

蓮地蓮地へこいふな 丸池丸池へなまつな 元三大師堂の池へすつぽん

右の通夫々の池へ放生すへし場所かたく混雜いたすへからず

月 日

とあり

御供所は、龜井の東にあり、節木の額あり大雄とい

ふ文字のごとし、昔人の名(重口◎未詳)重の字見えて、下の字詳ならず、大黒天多門天の像、左右にあり、中にみすかけて衣冠せし像の見ゆるは、安麿臣といふ、御供所と三昧堂の間に、小き堂うしろ向にたてり、これ石神祠なり、俗に牛の堂といふ、牛の繪馬多くあり、是は、當寺草創の時材石を牛車にて運送せしが、後其牛化して石となるをまつるといふ、三昧堂は、牛の堂の南に有り、太子二歳の像と、文珠普賢を安置す、中にも二歳の尊像、顔色うるはしく見え給へり、その南に 天照太神宮、また天皇宮あり、欽明、敏達、用明、崇峻、推古の五帝と、此宮の前に、みかけ石の燈籠ならびたてり、屋根に、葵の御紋ありて、火袋の臺に 四菱あり、柳澤家などにておさめしにや、未詳、其南に扉あり、扉の内は聖靈院にして、太子十六歳の尊像まします、猫の御門御門四足四足よりいる、欄間に、牡丹に猫(真向)の彫物あり、院の北に御衣棚あり、其東に、能野三所權現と札かけたる小き祠あり、是れ、守屋大連、弓削小連、中臣勝海をまつるといふ、守屋の名を忌て加へしといふ、院の東に鐘樓あり、此鐘も、又梵字あり、六時堂の

前の鐘のごとく、僧ありて、前の扉をひらきて、前より人々に撞木をひかせて撞しむ、されど、其聲六時堂の前の鐘におよぶへくもあらず、聲つよくしてきよからず、院の西に鎖せる堂あり、これ繪馬堂なり、此所にて楠正成が未來記をよみ給ひしとぞ、四足門より出れば十五社あり左に、四足門は虎の御門といふ、表の欄間に、竹をゑり虎のかけ出ける形を彫れり、猫の御門、虎の御門ともに、内のかたの欄間は皆龍の彫物なり、十五社の拜殿に、三十六歌仙の繪馬あり、狩野山樂か書也、上に色紙を二枚おして、歌をかけり、青蓮院法親王の筆也とぞ、東大門の左右の方に、齒神祠あり、此外の道筋を東にいで、左に見友寺あり、宗此所の麥畑より向ふに岡山見渡さる、御勝山とか、れし所なり、ゆきてみまほしけれど、道少しへた、りたれば、重てゆくへし、もとのかたにかへりて南の方に關帝堂あり、白駒山清壽院廣聖といふ、感應といへる額乾隆辛卯とありて傳文喬といへる名を消し置り、いかなる事にあ、堂の聯に名著節全歌々丹心懸白日詞雄威壯堂々遺像比凌雲とあり。

南大門を出て右の方に牛頭天王あり、これ土塔宮なり、左のかたに石垣してわづかなる池あり、其側なる畑にも池めいたるものあり、これ萬代の池なるべし、名にも似ぬ所にして、三番叟にうたひものせる、三玉をいた、く龜もみえず、庚申堂の前より猶南に行て畑を見るに、かの大名塚北島頭、小町塚は、いつこととふに、道はるかにへた、りて住吉にゆく道なりといへば、力なくして立かへり、こゝは安樂野といふ所也とぞ、それより西方庚申堂のうしろの道にいたれば、堀越社といふに至る、いかなる神ならん、鳥居に二十四社廻り十六番とあり、これより茶臼山の入口にいたる、木戸を鎖して人をいれず、傍に制札あり、雨にうたれて文字見へず、木戸の外よりうかひ見れば、茶臼山にのぼる坂口見ゆ、其下に池あり、松の木立物ふりたり、それより一心寺の前にいで安井天神の表門よりいる、山々櫻多し、春の比よろしかるべし、山をへだて、むかふに酒樓あり、これ一心寺の内なる福屋といへる茶屋なりとぞ、座敷床棚のさきさきらくしく見ゆ、清水の舞臺より遠目鏡を見

れば、絹川の高燈籠近く見ゆ、左の住吉の岸のひとつ松も見えたり、音羽屋といへる酒家あり、豆腐の田樂して酒をすゝむ、坂を下りて油煙齋貞柳が墓あり、林孝徳といふもの銘を書て永田貞柳と記せり、一本亭芙蓉花かたてし碑にして、芙蓉花が碑もかたはらにあり、此日もくれにおよびて歸りぬ。

九日。晴 今朝卯の時比、西横堀榎木町と長濱町の間、材木屋に火災あり、材木多く焼しかば、何屋とやらありといふ、又長さ三間ばかり、入にては、二十貫目計の損亡なる黒柿の木焼たりとぞ、辰の時に鎖れり、天満にすめる町興力工藤太郎左衛門見舞に來られしかば、その禮にとてゆく道すがら、難波橋を渡り藤原町にかゝる、夏の祭の木偶人を町家にかざり暮うちて人々にみす、此六日より廿日迄、天満宮の遷宮の祝ひのためなり、木偶人のうち、西王母と金閣寺と神功皇后とは、細工人元祖大江半三愛信といへる札ありき、其外關羽、白樂天、惠比須、金太郎、與勘平、狐忠信、武内宿禰、三番叟などありき、難波場より出せる鯛の作り物大きなり、波は青白のませの幕もて作れり。

十一日。晴寒 今日、御城代の守のとの、津村御堂と座摩社に御巡見あり、御巡見すみし跡にて、神寶

をうかひみる事を得んと、平野屋なるものすゝむるに、過書町よりのかへるさ座摩の社にいたり、書院をうかひふに、床の間の中に、神君の御諱に花押あり、そばされ、當社務渡邊右京太夫につかはされし御書あり、神祇の御禮に交魚を奉りし御禮の御書也、又御寄附の錢一穂まら鞘かけてあり、加州藤原正次長三尺一寸五分と書付てあり、もとは二穂なりしが一穂は火災に失ひしとか、又御陣扇あり、金地に表は日の丸に鷲の羽をのしたるかたち、裏は白き月輪の中に、鷲の雌雄の嘴とちたるとあきたるとむかへるかたかきたり、鷲は當社の御紋也といへり、床の左右に天満宮の御筆とて、二幅かけたり。

日本守護大宮地之靈
難波大社座摩大明神

この二ふくは、御城代の御覽にはいらすといふ、又關白秀次の令條あり、楠正成筆新田義貞願書、尊氏公御願書、秀吉公御書、源頼朝願書などかけものにして掛置り、ことにめづらしきは、梶原景時の和歌一幅あり、(按東鑑建久六年四月廿七日壬午將軍家以梶原平三景時爲御使令奉幣住吉社給被奉神馬今夕

景時參着社頭註於和歌一首於釣殿之柱云々)

難波大社にて 景時

我君の手向の駒をひきつれて

行末遠き印あらはせ

墨つきかなのさまうつくしく見ゆ、又箱におさめて軸物とせるに、源頼朝願書其外保延延文建武元弘永仁等の古文書數十通あり、中にもあはれなるは、尊氏凶徒誅伐のむねをのへし書もあれば、又新田義貞井正成等征伐すべきむねを仰せしもありて、世の中のみたりかはしきさま押計ぬへし、寛永年中御上洛の時書せしといふ社務の系圖もあり、社務のはしめは都下氏にてありしが、頼朝卿の比より渡邊氏になり、都下庄渡邊庄ともに攝津の國なり、はじめには都下國造とあり、延文の古文書にやありけん、一之神事座摩大明神、二之神事住吉大明神とありて、住吉の神官意あるによりて、座摩よりつかさどるべきむねの古文書あり、座摩末社朝日社へ下されし文書にありき、朝日社とは、今松屋町の朝日の神明なり、それより津村御堂の御座敷みんとて、庫裏の方より入る、案内するもの先たちてゆく、鶴の間は御門主獨禮を

うけ給ふ所なり、町興力其外右床に、鯉の掛幅あり、鶴の書あり、天井は扇の地紙にて古書のかたを寫せしなり、ませ張にせしやうに見ゆ、御休息の間のふすまには西王母をえかき、新御門主の御休息は壽老人なり、庭に池あり石をたつ、御内佛の間を過ぎ、廊をめぐりて茶室にいる、床に、澤庵の筆して教外別傳とかけり、待合などもみわたさる、水屋をうかひて階子を登れば、唐の間といふ、兜羅綿の様なるものにて、石燈のかたちを學び、琉璃の障子をたつ、玲瓏としてほがらかなり、床に、富士三穂の書をかく、猶一層の高樓に上れば襲明閣といふ、越後片獻片山の記ありて額とせり、襲明閣の額はたれ人の書なる事をまらず、此閣に上り翠簾をか、け欄干によれば、雲をまのく勢あり、前には兵庫甲山一谷のわたりの山々横たはり、海邊の帆柱林のごとく、後には天王寺の塔かすかに見えて河内の山々遠く見ゆ、下は近市の煙ところせきなくたちこみたり、吹きくる風のためとにいたりて、そゝろ寒き心地す、けに三伏の比の涼しさ思ひやるべし、階子を下りて、小廣間大廣間をへて出つ、廊の内の額に、美哉煥焉、七十八翁鳥石

辰とかけるもあり、又休息の間のかたの軒に、惠風和照といへる額も見へたりき、昨日は、京には雷なりて雨甚だしかりしとぞ、此方は天氣殊によく晴てぞみへし、四月廿八日晴使來十日、四月廿九日晴使來十日、四月三十日晴使來十日、五月一日晴使來十日、五月二日晴使來十日、五月三日晴使來十日、五月四日晴使來十日、五月五日晴使來十日、五月六日晴使來十日、五月七日晴使來十日、五月八日晴使來十日、五月九日晴使來十日、五月十日晴使來十日、五月十一日晴使來十日、五月十二日晴使來十日、五月十三日晴使來十日、五月十四日晴使來十日、五月十五日晴使來十日、五月十六日晴使來十日、五月十七日晴使來十日、五月十八日晴使來十日、五月十九日晴使來十日、五月二十日晴使來十日、五月二十一日晴使來十日、五月二十二日晴使來十日、五月二十三日晴使來十日、五月二十四日晴使來十日、五月二十五日晴使來十日、五月二十六日晴使來十日、五月二十七日晴使來十日、五月二十八日晴使來十日、五月二十九日晴使來十日、五月三十日晴使來十日、五月三十一日晴使來十日、六月一日晴使來十日、六月二日晴使來十日、六月三日晴使來十日、六月四日晴使來十日、六月五日晴使來十日、六月六日晴使來十日、六月七日晴使來十日、六月八日晴使來十日、六月九日晴使來十日、六月十日晴使來十日、六月十一日晴使來十日、六月十二日晴使來十日、六月十三日晴使來十日、六月十四日晴使來十日、六月十五日晴使來十日、六月十六日晴使來十日、六月十七日晴使來十日、六月十八日晴使來十日、六月十九日晴使來十日、六月二十日晴使來十日、六月二十一日晴使來十日、六月二十二日晴使來十日、六月二十三日晴使來十日、六月二十四日晴使來十日、六月二十五日晴使來十日、六月二十六日晴使來十日、六月二十七日晴使來十日、六月二十八日晴使來十日、六月二十九日晴使來十日、六月三十日晴使來十日、六月三十一日晴使來十日、七月一日晴使來十日、七月二日晴使來十日、七月三日晴使來十日、七月四日晴使來十日、七月五日晴使來十日、七月六日晴使來十日、七月七日晴使來十日、七月八日晴使來十日、七月九日晴使來十日、七月十日晴使來十日、七月十一日晴使來十日、七月十二日晴使來十日、七月十三日晴使來十日、七月十四日晴使來十日、七月十五日晴使來十日、七月十六日晴使來十日、七月十七日晴使來十日、七月十八日晴使來十日、七月十九日晴使來十日、七月二十日晴使來十日、七月二十一日晴使來十日、七月二十二日晴使來十日、七月二十三日晴使來十日、七月二十四日晴使來十日、七月二十五日晴使來十日、七月二十六日晴使來十日、七月二十七日晴使來十日、七月二十八日晴使來十日、七月二十九日晴使來十日、七月三十日晴使來十日、七月三十一日晴使來十日、八月一日晴使來十日、八月二日晴使來十日、八月三日晴使來十日、八月四日晴使來十日、八月五日晴使來十日、八月六日晴使來十日、八月七日晴使來十日、八月八日晴使來十日、八月九日晴使來十日、八月十日晴使來十日、八月十一日晴使來十日、八月十二日晴使來十日、八月十三日晴使來十日、八月十四日晴使來十日、八月十五日晴使來十日、八月十六日晴使來十日、八月十七日晴使來十日、八月十八日晴使來十日、八月十九日晴使來十日、八月二十日晴使來十日、八月二十一日晴使來十日、八月二十二日晴使來十日、八月二十三日晴使來十日、八月二十四日晴使來十日、八月二十五日晴使來十日、八月二十六日晴使來十日、八月二十七日晴使來十日、八月二十八日晴使來十日、八月二十九日晴使來十日、八月三十日晴使來十日、八月三十一日晴使來十日、九月一日晴使來十日、九月二日晴使來十日、九月三日晴使來十日、九月四日晴使來十日、九月五日晴使來十日、九月六日晴使來十日、九月七日晴使來十日、九月八日晴使來十日、九月九日晴使來十日、九月十日晴使來十日、九月十一日晴使來十日、九月十二日晴使來十日、九月十三日晴使來十日、九月十四日晴使來十日、九月十五日晴使來十日、九月十六日晴使來十日、九月十七日晴使來十日、九月十八日晴使來十日、九月十九日晴使來十日、九月二十日晴使來十日、九月二十一日晴使來十日、九月二十二日晴使來十日、九月二十三日晴使來十日、九月二十四日晴使來十日、九月二十五日晴使來十日、九月二十六日晴使來十日、九月二十七日晴使來十日、九月二十八日晴使來十日、九月二十九日晴使來十日、九月三十日晴使來十日、九月三十一日晴使來十日、十月一日晴使來十日、十月二日晴使來十日、十月三日晴使來十日、十月四日晴使來十日、十月五日晴使來十日、十月六日晴使來十日、十月七日晴使來十日、十月八日晴使來十日、十月九日晴使來十日、十月十日晴使來十日、十月十一日晴使來十日、十月十二日晴使來十日、十月十三日晴使來十日、十月十四日晴使來十日、十月十五日晴使來十日、十月十六日晴使來十日、十月十七日晴使來十日、十月十八日晴使來十日、十月十九日晴使來十日、十月二十日晴使來十日、十月二十一日晴使來十日、十月二十二日晴使來十日、十月二十三日晴使來十日、十月二十四日晴使來十日、十月二十五日晴使來十日、十月二十六日晴使來十日、十月二十七日晴使來十日、十月二十八日晴使來十日、十月二十九日晴使來十日、十月三十日晴使來十日、十月三十一日晴使來十日、十一月一日晴使來十日、十一月二日晴使來十日、十一月三日晴使來十日、十一月四日晴使來十日、十一月五日晴使來十日、十一月六日晴使來十日、十一月七日晴使來十日、十一月八日晴使來十日、十一月九日晴使來十日、十一月十日晴使來十日、十一月十一日晴使來十日、十一月十二日晴使來十日、十一月十三日晴使來十日、十一月十四日晴使來十日、十一月十五日晴使來十日、十一月十六日晴使來十日、十一月十七日晴使來十日、十一月十八日晴使來十日、十一月十九日晴使來十日、十一月二十日晴使來十日、十一月二十一日晴使來十日、十一月二十二日晴使來十日、十一月二十三日晴使來十日、十一月二十四日晴使來十日、十一月二十五日晴使來十日、十一月二十六日晴使來十日、十一月二十七日晴使來十日、十一月二十八日晴使來十日、十一月二十九日晴使來十日、十一月三十日晴使來十日、十一月三十一日晴使來十日、十二月一日晴使來十日、十二月二日晴使來十日、十二月三日晴使來十日、十二月四日晴使來十日、十二月五日晴使來十日、十二月六日晴使來十日、十二月七日晴使來十日、十二月八日晴使來十日、十二月九日晴使來十日、十二月十日晴使來十日、十二月十一日晴使來十日、十二月十二日晴使來十日、十二月十三日晴使來十日、十二月十四日晴使來十日、十二月十五日晴使來十日、十二月十六日晴使來十日、十二月十七日晴使來十日、十二月十八日晴使來十日、十二月十九日晴使來十日、十二月二十日晴使來十日、十二月二十一日晴使來十日、十二月二十二日晴使來十日、十二月二十三日晴使來十日、十二月二十四日晴使來十日、十二月二十五日晴使來十日、十二月二十六日晴使來十日、十二月二十七日晴使來十日、十二月二十八日晴使來十日、十二月二十九日晴使來十日、十二月三十日晴使來十日、十二月三十一日晴使來十日、

襲明層閣出浮烟。近市薰風小滿天。蕙整千山珠箔外。幽奇爭獻法王前。

十四日。陰 夕小雨 此月六日より十五日迄、難波村てつげんの鐵眼和尚開基の瑞龍寺の奉へる提灯、所々の市中にさへけたるを見て、もうでんと出たつ、御堂通りを南に行く、折から五月の甲人形をひさく家々多し、長堀の佐野屋橋をわたりて、三津の八幡宮あり、御津と鳥居のわきに影向石有り、楠の木の大なるが枯れて、根より出たる枝や、はびこれり、道頓堀の大黒橋をわたりて難波村にいり、牛頭天王の社にいる、末社多し、中に三社頗梨采女社、疱瘡守護神あり、名所圖會に采女社とあるは誤也、む

かしは七堂伽藍の地なりとぞ、毎年正月十四日、綱引として左右にわかれて大綱を引あひ引かちたるかたに幸ありといふ、裏門を出てかへる道の左方に寺あり、長昌山といふ額あり、頑極の書なり、客殿に月江院といへる額あり、月舟が筆なり、舍利殿の額も同筆なり、門内に三寶大荒神赤薬師の祠あり、瑞龍寺は、三月廿二日に遊しかは、佛殿僧坊のさま目に熟せり、堂の聯はことごとく名所圖會に印せり、但惣門の聯を闕くよりて記す。

法席般昌振起別傳之旨

宗門顯煥宏開逸格之途

寶洲禪師は、鐵眼和尚の弟子としてもと祥雲といへる佛師なり、江戸本所の五百羅漢は、此僧の手つから作れるなり、天王殿の中に、もろくの器物衣服の形をおしたる板の紙にて張りたるものを置き、回廊の内、水茶屋有り、禪悅堂に多くの掛幅をかく、其外五百羅漢などみゆ、其前に、机を二重にたて、あまたの僧座起して經よむ、鈴をならす者あり、鈴をふるものあり、側に大鞆を打ちて節をなす、主識は南嶺和尚

といへる名あり、佛殿の土間にも座を設たり、十四日十五日法問といへる札あれば、さかまほしけれど、法事終らん迄に日も傾くへければ、ささしてたち出づ、入堀川の橋をわたりて茶屋にいこひ酒くむ、味薄くして飲べからず。

千日の法善寺にかさねて遊ぶ、こゝに淨瑠璃にうたひ物せる三勝か墓ありとききてたづぬるに、一ツの石に南無阿彌陀佛とまゐりて法名なし、うしろの方に掛かくのこくとく紋あり、前に卒塔婆たつ、寛政十三辛酉一月日 美濃屋三勝 爲百回忌追善建之とあり、又惣卵塔のうちに、竹本播磨少椽司馬喜教文正翁の墓あり、はま千鳥跡を殘すやふし墨譜 笛 千 前

と記せり、墓に片假名もて其行状を記せり、寛延三年順四軒文士弓誌とあり、其文を見るに 取意 竹本義太夫諱は博教字は五郎兵衛天王寺傍村の産なり、井上播磨椽の秘曲を受繼、清水の徳屋利兵衛よりかのふしはかせを傳へ受け、尙も京都にありて宇治加賀椽に親み、つねに播加の兩流を斟酌して自ら一流を立て、筑後椽と稱す、是義太夫節といふはじめなり、文正翁は、其高弟にして初政太夫といひ後に義太夫と改む、長崎に來れ

る清人沈草亭、其音曲を稱して文を贈れり、延享元年甲子七月廿五日病て死す年五十四、安住寺 今國恩寺に葬り不開院乾外孤雲居士と號す、こゝには其門人其墓をたてしものなるへし。

十五日、けふは庚申の日なれば、例の庚申の宮にもふてんとて長町を過ぎ、茶臼山のうしろの方なる池にそひて庚申の宮にいたるに、雨ふりきぬ、昆布うるもの多し、天王寺の南門をいり、上の池のほとりに大きな楠木あり、これ太子の植給ふ所なりといふ、西僧坊のかたはらより北門を出て推寺に在り、池あり元三大師普門院といふ、堂は西向、薬師堂は南向也、門をいづれば左右に石の欄あり、それより生玉の神社の前をすぎ、眞言坂を下りて左の方に薬店あり、雨鐘命蘇丹といへる藥の看板ありて多門院と印せり、まやくつかへの藥となん、西高津町より清津橋をわたり立慶町道頓堀の芝居の前をすぎ、太左衛門橋三休橋をへて旅のやとりにかへる、日くれ

十六日。陰夕雨 長柄の鶴満寺に古鐘ありときき、行て見んと天神橋をわたり天満天神の社内にい

りて、池の石橋を渡り宇賀神にまいり、北の方植木屋の前より行に、左右の町のよへに松をうへて此節の祭にそなふ、寺町より攝津國町夫婦町などいふ所を通じて、町はづれより麥畑に出、右のかたに白壁のこときものみゆる、何ぞと問へば國分寺なり、門前に二の碑あり、一ツには大界外相とあるし、一ツには不許酒肉五辛入境内とあるせり、眞言律宗の寺なり、本堂の額に國分寺とあり、筆者右に地藏堂有り、額は如空書とあり、圓良といへる字の印もおしたり、堂の前に大きな松あり、又東成郡にも國分寺ありといふ、むかし聖武帝の時、國ごとに二の寺をたて、一を金光明四天王護國之寺といふ、一を法華滅罪の寺と名つけて尼寺なり、いづれか其一ツなるへし、快圓比丘の中興によりて今の寺とはなれるとぞ、寂寞無人聲にして如法の寺なり、天満宮は國分寺のうしろにあり木立ふかし、

正徳寺は天満宮の東にあり、門に雲襖不接待といふ札あり、山號は清源山とぞ、行基僧正の開基なりしを、今は黄檗派の禪宗となれり、大眉善姓和尚を中興とす、正徳寺の額は、延寶己未春吉旦黄檗木庵書

と有り、本堂の額は、吉祥殿廣壽即非書とあり、堂聯に寶殿壯嚴宗燈萬代傳無盡金容示現覺苑千秋慶有餘天徳嗣法沙門南源書とあり、堂前に大きな双桂樹あり、鐘樓なども見えて殊勝なる寺なり、又白衣觀音堂あり、架上に語録のやうのものを積置り、標月指の額をかゝく、修多羅の教をさせるなるべし、鶴満寺(雲松山鶴満寺觀音堂聯。雲松月浮流色々盡至直般若長堤風擺柳登々都入大圓通。此堂に秩父三十四所西國三十三所坂東三十三所の土石を三の壺にいれて拜石のもとに埋む、西國札所は人あまた知れり、秩父靈驗記坂東札所開書にも此堂内に納むといふ)

は正徳寺のうしろにあり、天満宮と正徳寺の間の細道をわけつゝゆく、表門は竹欄にてさへたれば、かたはらの戸口よりいる、先鐘樓の方ゆかしくて立より侍るに、鐘は尾上の形をうつけしものに似て天人の形を鑄付け、龍頭の傍に筒ありて穴あり、鐘のふちも唐草のこまきものを鑄てくほみたる所をあらはす鑄つたり、其外まろき花の形したるものもみゆ、縦六寸計横一尺三寸ばかりにかこみて文字を高く鑄たり、磨滅してさだかにみえわかず、名所圖會に寫

せるをみれば、

太平十年二月……………

青金銚入三百斤長二尺四寸二分、西晋二世惠帝、と見ゆ、

太平十年庚申は、永康元年にして本朝の 應神帝三十二年にあたり、一千四百餘年のものなり(未詳)、長門國主毛利侯より寄附なり、民家の土中に埋れありしをほり出せりとぞ、又長門國厚東郡宇部郷松江山普濟禪寺銘文名所圖會に記さす、永和五己未歲仲呂日といふ銘をほり付たり、打碑墨もて打しがさたかならず、門に遊へる沙彌に問ふに、縁起も出來たれど板いまだならず、銘も折々うつ人ありといふ、重て墨汁を磨してうつへし寺のうしろに八幡宮あり、寺の持とみゆ宮の側に堤ありて水いれり、長柄川のわかれなるべし、是よりむかふの堤を見やるに、所謂長柄の川にして、船のむしろ帆のすぐるを見る、古の橋の跡いつくならんとなつかし、こゝに制札あり、例の文言ありて、かたはらに木の札して佐野豊前守、山本伊豫守と記せり、爰に田安の御屋敷ありて家司のたてし制札なり、三昧あり、よし原の火屋といふ、これより西の方に當

りて高き屋の寺見ゆるは、源光寺なり、麥畑の中をたてよこに渡りて漸にいたる、右にみゆる森は、本庄の權現なり、爰にも三昧あり、濱村と云ふ、淨瑠璃山源光寺は南濱村にあり、三昧院といふ額あり、淨土宗無本寺にして行基僧正の開基なり、本尊天筆の彌陀は、貞觀年中播州加古の教信和州吉野子守勝手明神より感得せり、故に池の隅に于安大明神、愛宕將社のあり鐘の銘は、(華鏡新鑄双調茲成通卒院界徹阿毘城死生息苦唐突脱冥開覺迷夢共入圓明)日城攝州四成郡聖山本山源光寺寶永元年甲申天八月朔日觀空快運謹誌と記せり、行基僧正三昧火坑を始るの古跡なり、故に濱本山とも云ふ、岐路に出て願はは右本庄池田道左と石あり、こゝに種樹家に芍薬あまた植おけるあり、花盛りなり、菰屋と、北野天神の茶店にいこふ、雨はしたなくふり來ぬ、大融寺の門に雨やとり、木幡の里の馬にはあらで、木幡町より傘かりて旅のやとりにかへりぬ。

享和辛酉三月念一起筆。四月十七日の朝に終る。

あしの若葉卷之下終

あしの若葉卷二之上

目録

- 四月十七日 御宮、九玉造大應寺、森宮心願寺、幸昌院庭、廿一日 松山天然寺、真田山野願寺、
- 興徳寺、四輪墓、 廿六日 住吉大明神、 五月五日 長柄渡、
中井先生墓、
- 江口若堂、 廿日 難波御堂、 廿二日 安治川、 廿八日 住吉
崇禪寺、
- 六月四日 川口御舟屋、安治川 十三日 難波村牛頭天
王夜宮、
- 十五日 三津八幡宮、 十六日 難波橋下、 十七日 御堂
祭、三峰寺、
- 廿日 津村御堂、 廿一日 仁徳天皇、 廿二日 座摩、 廿四
日 慶明閣、
- 廿五日 天満天 廿九日 住吉、
日天宮、

あしの若葉卷二之上

四月十七日。けふは、天満なる権現の御宮に参るもの多し、男女貴賤を不撰玉垣のうちにいる事をゆるさると聞て、中の刻計に旅の宿りを出て、鳥屋町をすぎ八軒屋の前より天神橋をわたれば、御宮にちかき筑地のわたり葵の御紋と九曜の星の紋付たる提灯立並へたり、麻の上下きたるもの警衛す、御宮の垣の内にもとりの松つらなりて奥深し、洞門をいれは別當久昌院なり、書院の庭は御宮のうしろにあたり、けふは諸人のいりてみる事をゆるさる、書院の礎に奇石あり、筑山のたすまひ石のかけはしまたるからほりのほとりに、楠の石になりたるたてり、宮も社も敷あれどいかなる神といふ事をまらさず、これは□□のむかし松平下總守のたてさせ給へる御宮なれば、九曜の星の紋付たる提灯はたてしなるへし、實に、なにはの蘆の葉の戦ぎもなく治れる世の風になひく民草なれば、その塔を伺ひ其徳をあふきらめやとぬかつきかへりぬ。

二十一日。晴 御城の大手の前なる原を西へゆき南にむかへば、玉造口なり、此あたりの水茶屋に行かふ人の賑はしきは大師詣なるべし、左の方に算用曲輪といへる岡あり、御定番與方同心の屋敷くみな土塚にして、薦のかかりたるあり、木立ふかし、森宮は用明天皇をまつるといふ、鳥居に浪花森之宮と有り、宮の前に大きな松あり、(本社東にも松あり龜井松といふ、名所圖會にいづ) 蓮如上人古跡松といへる碑をたて、本多氏としるす、宮に額あり、鶴を畫きて其上に、日本紀曰推古天皇夏四月難波吉士盤金至自新羅而獻鶴二俣乃俾養難波社因以巢枝産之後鳥鶴多産故稱鶴森則當社地也寛政七乙卯祀季秋應近藤氏雷謹畫之奉懸于森皇宮神廟小松維要とあり、宮の左のかたに八幡(眞目)太神宮庚申社あり、眞目の社には、痘瘡をやむもの祈るに、御符料十二銅、大豆一歳に一合、錢は其子の數ほとあけて祈り願みつる時、狸々の張ぬきの人形を捧るなり、宮の後に、稻荷五幸の碑社あり、森宮の攝社にして日本一社なり、所謂五幸とは此神を祈るもの、火難、水難、盜難、飢難、産難の五難を免る、正五九月霜月八日に祭ありと云

ふ、又初祝大明神朝政大明神天満神あり、宮より右の方に淡島大明神、大工祖神、手置帆尊彦狹知神あり、太子の勸請なりとぞ、又兩太神宮遙拜所あり、前に猫間沼をへたて、水草しげき中に、龜井神水あり、神主の家は湯あり、一六の日に人を浴せしむ、龜井湯といひて病を愈すといふ、一三三四五六七八九十布留部山良由良山良布留部といふ事を札にかきて門口に出したり、いかなる祝詞にや、森町(猫間川より森町に至る川岸に夏菊を作るもの多し、名竹などもあり)大和橋町、下新清水町、新しい町、福宜町などいふ所をへて上木綿町より 仁徳天皇の宮にいら、末社に稻荷大明神八幡宮辨天太神宮などあり、出世天神宮、高良大明神、住吉大明神、猿田彦神、多賀大明神、春日大明神もあり、此所は宰相山なり、(俗に山といふ眞田山は眞田町の北の方なる桃林をいふとみえて眞田にあり、又山の上に、奥州宮城郡岩切青麻三光宮あり、石碑あり、美知玖農阿遠曾能可寝乃禹徒梨磨須南彌婆乃三喜爾飛珂喇荷波志豆記永とるれり、又一ツの石には、きじなくや宰相山の朝ほらけ、六々閑人とあり、爰もあやしきうかれめのふしど、見へて、この岨かしこの岸につくりた

る家の戸口よりさしのぞきたる女共の顔つきみるも
うとまし、こゝは慶長元和の古戦場にして、攝陽群談
にも真田古城東生郡小橋村の地にあり、慶長元和年
中真田左衛門在陣の所なり、越前出張古城同郡同所
玉造の南にあり、慶長元和中伊達羽柴越前守大崎少
將正宗在陣の所也、加賀出張古城同郡同所の地にあ
り、慶長元和年中加賀大納言菅原利家卿在陣の所な
り云々、なとかけるは此わたりなるへし、かゝる事あ
りと知なから、かゝる事すきわひせんと思ひよりけ
ん、人の心のあさましきは、げに、亡國の餘風なるへ
し、興徳寺は小橋の寺町にあり、けふは、二十一日に
て大師参りの人多し、攝州八十八ヶ所の一にして興
徳密寺といふ額有り、往古樂師井の跡とてくほめる
所あり鴻池又吉郎なるもの大師堂たてし事文に書て
額にかけをけり、元禄此の僧の文な
り、書も拙からず、

額有り、餌差町の間の院々は、ことごとく弘法大師の
御影供あり、散米散錢など多し、先にたつねし圓珠庵
契冲法師の墓ある門を過ぎ、堀村といふ所をへて、天
然寺に在る禪宗、鎮西禪師御作入惣百萬遍御珠數とい
へる書付ある堂あり、いかなるゆへといふ事を知ら
ず、裏門より出て寺町をすぎ誓願寺に入る、齋庵中井
先生の墓あり、諱誠之字叔貴忠藏と稱す、郷校教授た
り寶曆八年六月十七日に失給ひぬと、五井純禎の碑
文にみゆ、此寺に西鶴が墓ありと書肆山口屋かいへ
るによりて墓はらふ下部にとふにあらす、つらく
墟墓の間を見るに一ツの石あり、仙皓西鶴とるれり、
右のかたに元禄六癸酉年八月十日とあるし左の方に
下山鶴平、
北條國水、建と有り、也有翁の鶉衣にも、作文に名を得
し難波の西鶴は、五十二にして世を去給ひ、秋風を見
過しにけり末二年といふ句を殘せりとかけり、げに
八月に終りぬるには折からの句成へし、亡友東作翁
姓立松名國之字千
玉號東蒙稱東作西鶴の文をこのみて著はす所の水の
行衛の内蓬菜屋萬右衛門か傳は西鶴の文勢を學ひて
書けり、實にも好色一代男、さよあらし、世間胸算用
など後の作者の及へくもあらず、小説九百の祖成へ
し。

二十六日。晴 けふは芒種節なり、住吉の松いかな
らんと思ふ心を根さしにて心齋橋の方を南さまに行
き難波御藏の前なる石橋を渡り、廣田明神の社の前
なる星の池を見つゝ、今宮の戎の社を過ぎて境筋と
いふ道を行くに、麥の秋風立渡りて浪のよするかこ
とし、左の方には松の林遠くつゝきて天王寺の塔も
あとの方にみゆ、人家あり今宮新田といふ、猶も畑の
中を行きて、名におふ天下茶屋に至る、家々の行灯に
天下茶屋と記せり、中にもせさいといふ家には和中
散をひさぐ、かの梅木村の方は爰より出たりとて元
祖津村宗本といへるもの此所にすめりなどことごと
しく額に書たり、立入て見るに、園の茶室も見ゆ、壺
天といへる額掛たる所は、六段の階ありと戸を鎖せ
り、如何なる故にや、左の方に安養寺といふ寺あり、
油煙齋貞柳の植たる柳あり、又天神の宮ある所には
子安石ありといふ、不知し
て見す左の方の林の中に、高く見
ゆるは聖天山なり、石坂なとも見ゆてはつ
てはつ右の方の
畑をへたて、一村あり、勝間村といふ猶行きくゝて
むかひに一村の森あり、人家遙かに見渡さるゝ左の
方の小高き所に、白き壁など遠く見ゆるを何そと問

へは、是なん住吉の宮居也といふ、あまりに近く見え
てうれしなどはよのつねなり、左の方に高き所あり
て柴人のいこへるあり、いかなる所と問へは、帝塚山
といふ所なりと云ふ、文字に寄て見れば何れの帝の
みさゝきならんも難計、住吉の里にいはは酒家茶店
など立つ、けたり、童のもとあそぶ風車をひさくも
の多し、故里の曹司ヶ谷のわたり思ひ出らる、酒家の
女とも木綿の振袖着て前垂をしつゝ、人をむかふ、井筒
三文字屋、伊丹屋
など大なる家也左の方の松原に入れば、石燈籠多し、回
廊の内に入て見るに、丹青剥落して草木荒蕪せり、坂
を上りて門に入りて大海神の社あり、傍に志賀大明
神の社あり、左の方に遠く鳥居の見ゆるは奥の天神
にして彼道より遠く白き壁の見へし所なり、坂の上
にも神社二ツあり、戸をとさせり
重て尋べし石坂を下りて松原の
中に誕生石と云ふあり、薩州誕生石といふ、これは薩
摩國主島津三郎忠久の生れし所なりと云ふ、名所圖會
に委し
神宮寺に入て見るに多寶塔左右にたてり、本堂に藥
師佛あり、左右の堂を常行三昧堂又三昧堂と云ふよ
し、(後の三昧堂は法華堂なるべし、)虚空藏菩薩五大
力菩薩等の堂有り、又國助社あり、前に石灯あり、國

助燈とるれり、一燈口萬界一志口千口口の文字定かならず、社の前に小き石の舞臺有り、寺を出でて向ひの門に入る若宮八幡の宮あり、神前の扉に松と鶴を畫かきて錠を下せり、延享四年七月吉且泉州界の住畫工杉森由泉筆とあり、後にさのぬしの社あり、大きな杉の木枯たるは近比寛政三年八月二十日の暴風に折れし神木也とぞ、爰を高天原と云よし名所圖會にはしるせり、市戎の社もあり、文庫もあり、一の神殿、二の神殿、三四の殿坏たてつゝきたり、一の神殿の左右に四角なる傘のやうなるものに、錦のきを四方につけて長き柄あるものニツ宛あり、これ住吉踊の傘の形はこの物よりうつせるにやあらん、舟玉の社海入子の社御井の社貴布禰の社、など悉く覺へず、本社の前左右に鐘の社楯の社ありおもととの社の前に御供水あり、おもとの社はかの又庫の形したるものにて、天王寺にありしとは少々異なり、名におふそり橋は此度新たにつくりかへられて欄下いまた全からぬを、木のみちの工とも小屋かけ渡して作りはてんとするさま見わたさる、此あたり、橋の花盛にして、紫の雲かと疑ふ、かたへの茶店に入り、持

來りし小竹筒とうで、汲む、鹽肴たかうなはた豆腐を串にさしてこがせるなともて來れり、夫より西方濱邊をさして行けば、左右に松の林あり、所謂岸の姫松なるべし、右のかたに常燈明の臺あり、出見の濱といふ、油のあたへをわづかばかりよすれば、登る事をゆるす、醉心地に階子を上りて臺の上より見下せば、難波のうな原青々として蘆の若葉に風打そよきしら波のこゆるさま心もことはも及ばれず、右の方よりさし出たる山々は甲山、一谷、兵庫のあたり山又山をかさねたるむかひに、横をりふせる島は淡路島なり、源三位頼政の歌に、

すみよしの松の木の間になかむれば

月おちかゝる淡路島山

といへるは、正しく見たるすかたなるべし、楷子を下りて橋あり、長峽橋といふ、これも又修理あり、橋をわたりて濱邊に出れば、細き川の流に屋根覆ひたる舟ひきつゝけて酒くみかわし、絲まらふるなども見ゆ、川のほとりを北さまに歩みつゝ、忘草や有と尋ぬるに、ふつに見へず、爰に攝州西成郡津守新田虛無僧本山京都明暗寺留場といふ札あり、來る

時に遠く見し勝間村にいら、天下茶屋に出ておとの道にかへる、乗燭の比なるべし、けふは初て行て見しに、案内もなく繪圖をたにたつさへされれば見のこしつる所多かるべし、

墨江

四社神祠倚一丘。兼葭出水水悠悠。青葱玉樹通幽處。宛轉虹橋度淺流。疊嶂斜連兵庫走。千帆真向墨江浮。吟眸更入烟波裏。黛色遙分淡路洲。瑞かきのひさしくきゝし住吉の

浦の見るめもわすらればこそ
けふをみるすみ吉の郡住吉の

里の名におふ住吉の濱

五月五日。晴 けふは、巳の時過る比より公事のいとまあれは、長柄の渡りより江口の里に行てみると、天神橋を渡りて十丁目筋を北へ池田町を過ぎてさみしき所也、行きくゝて右の方の畑の中に板の木たてり、是為塚なるべしと長柄村の人にとふに、それなり、板のもとに梅もありつらめと行過したれば重て尋ぬべし、南長柄より北長柄の堤にのほりて舟渡

しあり、是れ長柄のわたりなり、岸の向ひ橋の木二もとばかり花咲り、藥師堂村に入て源立寺といふ寺に、自樂といへる法師のすめるよしを聞つれば、尋ぬるにあるじよろこび出迎へり、富士大石寺派の法華宗也、自樂法師は江戸堀のほとり、藍玉問屋 阿波屋菜の市人なるが、爰にのかれ住て俳諧をもて樂とせり、父の年老て此寺に來り住て身まかりし墓あれば、その墓守と成て爰に住るなりとかたる、庭に藤の棚あり、白藤なりといふ、池のほとりに杜鵑花の紅なる紫なる花をましへて盛なり、床に板本尊あり、日興上人は像をも懸たり、善行堂と云額あり、白日閑寂のさま人をして官情をわすれしむ、あるし逆社の禁をゆるして蒲酒の盃をすゝめ、尊のあつもの調してすゝむ、桂舎は阿波の國の人なり、耳をて頭をそりたるが、いて來りてともに誹諧の連歌一折あり、發句は今朝馬田國瑞よりおこせたり。

長柄川わたらしなとて夏籠 國瑞

草ふし高く初蟬の聲 自樂

とちからもつてよき道をつくらせて 桂舎

眞晝の窓のうちしつかなり 杏園

ことごとくもならねば書さしつ、屏風に、
剃髮非通世、爲僧猶在家、堪看汚泥裡、湧出白蓮華、贈
自樂老人除頭髮極亭角とあり阿波の眉山といふ所の
土をもて釜に作り伊勢の荒木田氏の歌を金泥にてか
きつく

千五百代爾殿瓮黒滿之燒葦里安滿能須斯多理阿摩
多良日南方

つゐにあるしと、もに寺を出て、猶北さまに畑の中
をゆきて崇禎寺の松原といふにいたる、額あり、社に
祭る所は稻荷の神にして、左の方に神主の家もみゆ
山本家の前に大きな椿の木あり、すへて此あたりの
松は、根入深からずして四方へ一丈計つゝも根わた
かまれり、松根に寄て腰を摩るといへるもかゝる所
なるべしと、小竹筒とり出てかたみにくむ、馬場あ
り、人々馬乗さま見ゆ、爰を中島といへば此わたり
の畑はみな古の入江なるへし、
崇禎寺は松原の右にあり、竹の林深し、鐘の銘をみ
るに、

攝州西成郡北中島凌雲山崇禎々寺者細川氏持堅追
薦其主義教所建立也義教者尊氏五代孫也尊氏取天

下之政柄襲封暨義教則五世積成積德之所薰漸天下
靡然仰其餘光所以崇禎創立之日檀信可喜云云下略
貞享三丁卯臘月吉日 獨庵光書

こゝに崇禎寺馬場の敵討といふ事あり、正徳五年の
比、和州郡山の城主本多家の臣遠城治左衛門重廣、
安藤喜八郎光乗と云もの、末の弟遠城宗左衛門
を同じ家中の生島源八郎といふものに討れしが、重
次を生る母は、重廣光乗が爲には異腹の母なりしか
ば、その敵を討ざる事を深く恨みしに、重廣光乗は
けまされて、敵生島と此地に約せしを、生島は劍術
を以て業とし、此地の町與力杯皆彼の門人なりけれ
ば、多く力を助て松陰より飛道具を以てせめ、或は
砂などかけ散しければ、つゐにかへり打にあひぬる
ぞあはれなる、墓は寺の後にあり。

兄實名 遠城治左衛門年廿六 劍樹心英居士
弟 安藤喜八郎年廿四 刀山天雄居士

としるせり、其時の武器寺の什物として人に見せし
む、こゝろよく敵をも打おふせさるもの見んもほひ
なしと見すごして出ぬ。一年開帳せしかともみ物少かりし
みてもあまりにあはれなれば、人皆心よしとせずと人の言ひあはれ
なる物かたりなるべし、たゞ、かの松原のけしきいはん方なきに付

てし、敵打なからま 爰にて自樂翁は辭し歸れり、猶北の
方しかたとおほへしの堤を行に小流あり、二人三人綱引してせいごと
いへる魚ニツ三ツを得たり、樋のある所より北東の
かた新庄大道なといふ村々をすぐ、麥うつ音遠近に
聞へて道いと遠し、左の方に天神の社の森あり、右の
方に小松の瑞光寺見ゆ、行てもみまほしけれど、日も
はや未の下りなれば、先をいそぎつゝ、江口の里は
いつこと問ふに、あるは廿町、あるは十町ありなど
すゝろに定がたし、やゝありて一村に至れり、麥つ
く女に江口寺をとへは君様の寺はかしこなりと教る
も流石に都近きふりにして、あつまの田舎のよこな
まれることばに異なり。

江口の君堂の裏門より入、堂の前に古き石塔並ひ立
てり、一ツは四君の塚と札を立て、一ツは二重西行塚
としるせり、昔むしてふるびたり、かたはらに衣冠し
たる石のかけたるが、蛙子のさまに似たる物あり、い
かなる物といふ事をまらさず。墓の側に石榴花の盛り
なるも、唐人の紅裙を妬むと云し、五日觀妓の詩も
思ひ出らる、かの酒を翻して汚すといひけん、血色
の羅裙もかゝる江の邊なるへし。寺の内にてわかき

尼せの經よむ聲きこゆ、堂より立つ、けたる朽坊に
老たる尼の物あらふさま、さながら月はもれ、雨は
とまれといひけん、賤がふせやの面影して、西行法師
のむかしなつかしく、すのこに腰打掛ていこふ、普賢
院といふ額あり、かの尼せ經よみながら江口の君の
木像と西行法師の像の扉をひらきてみす、實に古き
物と見ゆ、普賢菩薩の像も見せしかと、金にて濃て新
らしく見へたり。かゝるわひしき所にたへてもすめ
る物かと思はる、庭に櫻一本あり、西行櫻と云ふ、小
き池あり、小祠もあり、一ツの卒塔婆あり、寛政九丁巳
年奉資遊女妙前君靈光相尼六百年忌と印せり、かた
へに鐘樓あり、銘を探れば、黄檗の悦山和尚の文也、
五畿内攝州西成郡北中島寶林山寂光寺普賢院者其
開基光相比丘尼也本稱江口君又名曰妙前乃普賢菩
薩示現女身欲令衆生脫愛別離苦之緣傑構普賢堂法
華三昧堂又自造其俗體之像接引世人雖貴賤女身歸
依佛法發菩提心入無上道巽者西行上人詣天王寺路
徑此處時將日暮求宿于君々不許上人作歌以與君亦
作歌以答俱是醒世之言至今膾炙人口而元久二年三
月十四日乃現普賢菩薩相乘白象而終弟子等收其舍

利立塔而供養焉云々下略
元祿十丁丑年三月十一日

南岳悦山道宗敬書
沙門普開鑄之畢

かたへの坂を上りて堤にのほれば歌塚あり、四方の石をたつ北の方に西行法師の歌をゑれり、

世の中をいとふまてこそかたからめ
かりのやどりを惜む君かな

南の方に遊女妙の歌、
世をいとふ人とし聞は假の宿に

心とむなとをもふばかりぞ

東の方に法華の題目ありて、賜紫日顯書判、西の方に當山法華靈場寶林山寂光寺君堂造立志者爲智月院妙耀日近信士菩提とあり、名所副會に日顯を日顯と誤り書けり、此日顯上人は延山の貫首にして法華看經抄をも著せり、江戸池上本門寺にも松化石の石表をもたて、鈴が森の刑罪場にも題目の碑をたてたる人なりとは、わが父のつねにの給ひしなり、さても江口の贈答の歌は、新古今集に、西行法師天王寺へ参り侍りけるに、俄に雨ふりければ、江口に宿をかりけるにかし侍らざりければ、よみ侍りけるとありて、遊女

妙のかへしあり、又撰集抄に、治承二年長月の比あるひじりとともなひ、西の國へおもむきしに、江口はし本なんといふ遊女の住居見へければ、家は南北のきしにさしはさみて、心は旅人のまはしの情を思ふとありて、其里を過なんとするに、冬をまち得ぬ村雨の烈敷く、人の外面に立やすらひて、内を見入侍るに、あるじの尼の時雨もりけるをわびていたを一ひらさげてあちこちはしりありきしかば、何となくかく、賤かふせ屋をふきぞわつらふ

とうちすさみけるに、此尼さばかり物さわがしく走りありつるが、何とてか聞けん、板をなげすて、月はもれ雨はとまれと思ふには
とつけて侍りき、さもゆうにおぼへて見盡しかたく侍りしかば、かの庵に一夜とまりて、連歌などとして侍りて、曉かたに此つれたる僧かく
心すまれぬしはの庵かな
と侍りたるにあるし又
都のみおもふ方にはいそがれて
とあり、又かの普賢菩薩の相を現はして白象に乗りて去れりといふ事を江口の謠曲に見ゆ、此江口の謠

曲も古き物と見へて、一休和尚の狂雲抄に、江口の勾欄を見るといふ詩有りき、さるゆへにや、江口と山姥の謠は一体の作れるなりなど、世にはいふめれど、狂雲抄の詩を見れば、一休より先にありし謠ものなるべし、かれこれ、あはせ思ふに、いづれ古き跡なるべし、日も山のはにかたむきぬれば、堤つたひの道を急ぐに、道の側に石表あり、是より天神橋まで七十五町、天満橋へ七十二町、京橋へ六十八町、但今市のわたしありとあり、聊にても近き道よからんと、

今市の渡しをとよに舟はるか向ひの岸にありて、こなたよりは出さずといふもほむなく、もとの長柄の渡しに立かへるべく、日も暮はいかゝならんと心せきつ、南大路逆巻橋本平田野村一番新家杯いふ村々ともまらず足を空に急ぐ、入日の影は雲にうつろひて、所々の野飼の牛の吼ゆる聲も恐ろしく、柴村といふわたりには晒の布の白く引はへたるも興あれど、長柄のわたしこさぬまは心も心ならず、行く程に、はや三またの河のながれみつかしら毛馬のわたりのほどをもこへて漸々渡しにつきぬ、日も暮ぬ、はや舟に乗れといひし渡守の事迄おもひつゝ、池田

町のわたりにて日くれたり、けふは道の程もての外に遠くして、三燈してたるといひし葺葺の類にあらず、従者も困したれば、天満のほとりの市に物などめして、旅の宿りにかへり、猶夕餉の箸とりて枕によれば、街にめぐる戌の時の鼓打つ聲まきりなり。
長柄のわたしにて
つくるとはきしながらの橋柱
ふりぬる跡の名こそ朽せぬ

五日過源立寺
新蒲佳節步晴沙。長柄長流水一涯。古渡得船何處至。僧房逢着杜鵑花。法華經云 如渡得舟
紫の雲とみてしをたつねきぬ
妙なる法にあふちさく比
中島松林
桑田野外隔滄溟。兄弟原頭急鵲鳴。落落長松蟠地上。千秋萬古數株青。
江口妙妓墓
行尋江口訪孤墳。麥浪松濤處處聞。猶有石榴花自發。似君當日絳羅裙。
古への江口の宿を尋ぬれば

雨降らねともぬる、袖かな
 廿日。陰小雨。難波の御堂の御座敷見んとて行く、御堂の役人原田瀬兵衛なるもの案内して、一間なる所に入れば、襖に山水の畫あり、雪舟なりと云ふ、雪舟にはあるまじ雪舟流の畫なるべし、虎溪の三笑など三人の笑めるさま各見所あり、次の間の襖は草花を畫けり、極彩色にして金箔の色うるはし、牡丹、杜若、萩、薄、桔梗、芙蓉、菊などをかく、柴垣は金箔にて高く置上たり、狩野三樂筆なりとぞ、此外の間も堂はみなあびをきて、戸障子立込たれば、さたかにみわかす、浴室などもあり、庭におりたちて見る、沓ぬきの石大にして數人を座せしむべし、石の手水鉢また大なり、石の井もあり、垣をへたてたる門は、御門主の御逗留の間は唐門をとりたつれど、つねにはたゞみ置といふ、垣の内は庭に石また多し、泉水に石橋かゝり石灯燈三ツ計たてり、火ふくろに獅子二ツを彫れるもありき、石のくぼく成たるもありて水を堪たるも興あり、松樅横など多し、蘇鐵二本殊にうるはし、梅又並ひ立てり、冬青樹と梅に連理の枝ありといふ、めぐりの高さ石垣の土居に上りてみれば、

座摩の宮みわたさる、蚊子樹を植て垣とせり、此土居を築きしとき山土を多くはこひしを、ある老翁の見て、五十年もへたらんには、蛇多く出て御堂に參るものなからん、山土の古く成りしは蛇多く出るものなりといひしかば、山土を捨て眞土をもて築けり、去故にや今に草ふかけれど蛇出る事なし、其外の蟲も又少しとかなる、齋の巢を掛し木などもあり、此書院の前なる石の手水鉢に銘あり、

正保三年

梶屋久右衛門

寄進

十二月九日

とあり、此梶屋久右衛門は、松山といへる遊女になじみて身を果せり、世にいはゆる梶久なり、長さ七尺四五寸巾三尺餘とも見ゆる四角なる手水鉢なり、夫よりもとの書院にかへり、對面所の方に行てみれば、廊下の庭に菩提樹あり、實をむすべり、高野山にあるのみにて、外に少なき木也といふ、本堂は、此度修覆くはへて足代と云ふ物をかけたれば、本尊はみな對面所に移せり、越後の國より納しとて、髪

の毛もて綱にせしが二巻計あり、白髪などもまじれり、かの大象もよくつなかるといひけん、女の髪もありぬべし、此堂の建ちしは、今年より九十七年前にして、ことし始て修理すといふ、火災をまぬかれれば、古き家作りなり、玄關の前の石の手水鉢に彌漫といへる文字をえり、まことや、今朝寅の刻より卯の刻まで道頓堀のあたりに火災ありて銅ふく家に近しとなん。

廿三日。晴。からくに、渡さるへき銅の數々、舟に積て安治川の邊りにあるを行てかうがみんとて、銅を推する所の者を具して、南本町五丁目を出て西横堀の川なる信濃橋のもとより舟に乗り、御用船といへる幟をたつ、西横堀を北へ行き京堀町を西へ折れば、數々の橋のもとを行過るに、岸にのぞめる家々の欄に、草木をうえて蕙などのかゝりたるもみゆ、石榴花の盛なるが岸に望めるも多し、茂右衛門橋の元より江の子橋を過ぎ新築地をへて、崎吉橋を出れば向ひの岸に舟番所あり、舟の簾をかゝけて過つ、所謂安治川に至れり、是は貞享の比河村瑞賢といへる人、命を請玉はりて新に掘て水害を除し新川なり、畿

内治川記に、貞享二月十一日先於九條嶋起役直鑿島中以開一道新河自九條及福嶋袤約二千丈廣三十餘丈使河流直達于海此昔治水始於冀竟之遺意也といへるは、此所なり、安治といへるは瑞賢の異名なりとぞ、川廣く水流れて中々人力をもて掘しとも思はれず、橋あり安治川橋と云ふ、爰に數十艘の舟ともかゝり、四五百石より千石にちかき舟とも、眞帆片帆に引あけし帆柱は、林のごとく、檜垣舟といふも見ゆ、爰にて彼の銅積入たる舟をかうかみ侍りしに、備前の兒嶋の舟を久吉丸といふて四百石積也、又威徳丸、寶光丸、榮榮丸、といへるは何れも五百石積の船にして肥後國川尻の舟なりけり。是より長崎迄行海のみちやすらかにして、波をあけすといひけん、古ごとくも思ひ出らる、土佐日記に、海賊を恐れしなど同日の論にあらず、右に舟番所あり、傳法川に分る、川に洲有て橋二ツ掛れり、勢田の橋みる心地す、蘆分橋とかいひて長き橋なりしが、近き比はしのそこなはるゝを厭ひて、川の中に洲を築て橋を二ツ掛るといふ、左は瑞賢山にして松の林高く見ゆ、是より海の方に出たらんには、一の杭のあたり近かゝるへ

く、かの難波江の名におふ落標なるへけれど、公事の限りあれば、もと來りし川の方へ歸る、左の方に芝居の櫓めくもの見ゆるが、今は休て静なり、西の方なるは古くよりありて、東の方なるは新しといふ、西の方なる芝居のかへりに安治川の橋のうへにて、いさかひものして人を川におとせしといふ、雁金文七か事などくづしいで、語る、船番所を過て、江の子島にそひ阿波堀にいる、右の方に高くみゆる瓦ぶきは廣教寺なるべし。

あしの若葉卷二之下

廿八日。晴 住吉御田の祭見んとてゆく、今宮村のあたりに赤き逆の咲けるを鉢に植てひさく家あり、唐蓮といへる札を立つ、天下茶屋を過て石橋を渡りて左の方畦道を傳ひ行けば、辻に石の閻魔の形したるもの建てり、賽銭箱に地藏尊と印せり、十五經とやらにいふ物に、閻魔と地藏は一體也といへるにやもとつきぬらん、聊なる坂を上れば、左の方に天満宮た、せ給ふ是住吉の奥天神なり、かたはらに觀世音の堂あり、これ天神の御本地佛なるべし、爰は小高き所にて四方の山々見渡され田畑の詠め遠し、夫より南の方道を行て左の方には堂有り、三千佛堂といふ、此あたり萩、薄多し、秋の比思ひやらる、ちいさき溝の橋を過ぎて門に入れば、大海神の社あり、此社に古き手水鉢あり、慶安年中の物ならんと、浪花の梅といへる文に記せしゆへに、何處ならんと見るに、社の右の方にある年號定かならず、爰に住吉おどりといへるもの、けふをはれとつどひて赤き長柄の傘をひら

き、其回りに十人餘り赤き絹を笠のふちにはり置て、赤前垂して團扇をもち拍子取てかの傘の回りをめぐる様、常に市中に見しにもまされり、神宮寺の方に人あまたつどひければ、後の門より入て見るに、東の三味堂の前に田樂法師、田樂法師は泉州大津より來ると名所圖會に見えたり、のさゝら竹をならし、刀玉の刀をさゝげ、田樂の竿をさゝくるに社家のもの笛吹き鼓をうつなど、古き事と見ゆ、住吉の本社修理するとして、一の社、二の社、三の社、四の社ともに、本社の前なる北の方に長き屋たてついで、假に移らせ給へり、神主津守の何某は、御田の前より御所車を下りて、薬くつはきて來れり、鐵漿付たるさ、ま優美なりき、左右の從者先を行おふ、粧いつくしく見ゆ、良ありて五人の植女、萌黃の生絹を千早のごとき物をきて、赤き袴に花笠を頂き面を覆て出來り、本社の假屋の前に蹲る、一の社よりはじめて四の社にいたる迄、假屋の翠簾次第次第にかゝくるほど笛つゝみの音聞ゆ、人々むれ重りて足をくはたて立こみたればさたかに見へわかず、是より植女は、松原の南の方なる御田の邊をめぐるといへり、其わたりにも人みち／＼たる中にかつき

着たる女三人計たてり、從者あまた見えしは良家の人々なるべし、かつきは満栴色の羅衣に櫻を染く、松の間に懸敷て小竹筒わりこ取出たるも有り、さながら一幅の金屏風にかける土佐繪を見るがごとし、又神宮寺の僧(此の法師も鐵漿つけてゆゝしき法師也)いかめしげに先をおはせ、列を正して神前にむかふもあり、又は甲冑して巾を頂き薙刀をつき高足駄はきて出來る、陣笠きたる足輕長き棒を持って走り回る、御田植の後に足輕左右に分れ棒うち振りて戰ふ事あり、是神功皇后三韓を打給ひし事を表せりとぞ、其わたりに人々立込たるに、一所の座をもふけて人を拂ふは、町奉行よりして與方のものを遣して非常をいましめらるゝ所なるべし、まことの植女は、堺の乳守といふ所の遊女、うられ來る年みちて從良すべきもの此神事をつとむる習ひなりとぞ、すべてけふは萬の事委數見聞なば、古事ともなるべきをとまふ人の心をはかり從者のあやまちもやあらんと、そここゝと見すくしつゝ、かれいゝあさる事のみ急き立歸りぬる、なみ／＼の中に打交りぬること、見るめなきすみよしの恨となれ。

六月四日。晴。唐土にわたさるべき赤金、長崎に行舟に積たるが、難波の海の沖の方より七ツ目にあたる、みをつくしの側につなげるを改るとして、西横堀といふ所信濃橋のもとより、御用船に乗り行く道すがら、川口のみふね屋の前をすぎ、きのふ御船手に属する吏二人浅野順太郎 杉内右衛門に案内して、みくらにおさめらるゝ御船見ん事を乞ひしに、今日巳の時計りに来るべきよしひおこせしかば、船を御船屋の門に止めて、名刺を通すれば、人來りて爰よりあがり給ひぬといふ、浅野氏先に立て御船屋の内に入る、御船のへりに階たてゝのぼる、みふねの数々

浪花丸は、正徳の比、朝鮮の信使來聘の時爰より京まで、信使の國書をのせゆくために、新に作らせられし御舟なりとぞ、上の間は金張付にて圖書奉案の御間といへる札をたつ、次の間も同じ襖なり、格天井あり。土佐丸はみつきの將軍家の御時、土佐の國守より獻上せられし御船なり、上の間は床に相生の松を畫けり、上げ疊あり、細細次の間は菊、次の間は櫻なり、二階あり牡丹の繪の襖あり、上下共に格天井なり。紀伊國丸は、南龍院殿より獻上ありし御船なり、

上の間の床の繪は、帝鑑の圖とみゆ、襖は松櫻に唐子あるもめづらし、格天井は山水の墨繪なり、次の間は雪の梅に鸚鵡嬰哥杯のから鳥の畫なり、二階の間は桐に鳳凰の畫、欄間の彫物に山鳥有り、三の難をひきゆ、其たぐみなる事生るがごとし、梔子の花のごときものを彫れり、次の間の欄間は松と白梅と山鳥を彫たり、格天井は竹のすいがきに菊の繪なり、二階ののぼり階子は、墨塗にして唐草の蔭繪あり、階子の下に彫あり、疊しきて襖に山水の繪なり、すべて柱に葵の御紋の蔭繪あり、下の方の御紋は櫻の御紋なり、いかなる事にやとはまほし、船の軸の裏の方に大なる孔雀の彫物金箔にて濃たり、川にうかぶ時は水に映して麗しいといふ、見る所のみふねの内此御船にまされる美麗なるはなし、鳳凰丸はみつきの將軍家御上落ましましたる時、川口より海邊迄めされし御船なり、今は修理くはふる事なければ古びたり、船の作りも海舟に似て、外面は前のうるはしき類にあらず、船ばたいと高ければ、長き階子さしてのぼる、上の間に上げ疊あり、細細桐に鳳凰の繪、水仙、松に鶴等なり、次は草花、次は松の繪籠の中にか

へる鶉の畫あり、寛永の比鶉をもて遊し事、諸書に見へたり、その側に古土佐丸といふ御船破れて、舟屋形のみあり犀と龍とをえがりけり、難波小早、伊豫小早などいへるあり、みくら町の池の中にある御舟は、やぶれたれば、修理くわへて出し置る也、外面に團扇の形扇の地のかた蔭繪したる見ゆ、中土佐丸といふ舟なりとぞ、此御舟屋にある舟はこれのみなりといふに、暇乞して出ぬ。見ぬ唐土の飛雲蓋海はまらず、古への龍頭鶴首といへるも是には過じとぞ思はる、門邊より又舟に乗て安治川を西へ、蘆分橋を右に、波除山瑞賢山を左にして漕行きしに、岸のあしの葉風にそよきて夏なき宿の心地せらる、願はくは浮家泛宅をつくらんといひしも難波わたりの夏なるべし、岸の邊りにみをつくしあり。大阪安治川口水尾木幾番式杭とかけり、沖の方よりかそへて一番二番とはいへるとぞ、七番の水尾木よりは海面なり、向ひに見ゆる山々にはむこ山、甲山ゆつりはがたけ一の谷二の谷あかしがたまでたゞ一目なり、こゝに觀世丸といふ舟あり、けふ銅をのせしは是なり、七百五十石積の舟にして五年つくりなりといふ。

入江より難波の沖に漕出る

蘆分小舟風を涼しき

とひとりこたる、かへりはさかさ川に入り、傳法の川より蘆分橋をいで、安治川橋のもとより横堀に入てかへり。(六月九日記)

舟下安治川

一鑿新河九島間。松風吹落大江灣。兼葭日長三津水。彩翠晴開六甲山。侵岸人家隨曲折。浴流重壑下潺湲。匹夫功業伴神禹。萬里帆樯往又還。

これはさつき廿三日安治川にて作れるなり、こゝに書つく十七日

十三日。陰。十四日は難波村牛頭天王の祭なり、難波鑑に云い六月十四日難波の宮にまうて、御湯まいらする計にて、神輿をまつらす、昔は平野明神を上宮といひ、當社をば下の宮といひて、さかへ給ひし時は神輿を出し祭りけるよし、今は神さびてそのさたもなしと云々、けふは夜宮也と思ひて、心齋橋筋を南に行き道頓堀を過て大黒橋より右の方住吉橋を見やるに、挑灯立ならべたるさまめづらし、夫より畑道を傳ひ行に藍といふ物所せきまで植置ぬ、瑞龍寺

のうしろの方難波村にさし入に挑灯を出し置き、家の軒に挑灯てらし小間物瀬戸ものなどひさくもの両側にみりて皆地にむしる敷き、又は見世棚を出せる也、冷水うるもの蜜か砂糖をいれてのましめ、南蠻くよぶは江戸にて蜀黍の事なり、神前に神主別當などみゆ、神輿新に修理加へられしと見えて、金物の光り目もあやなり、常の神輿は、隋書の玉輅の制に綴以鏡子といへる事に本づけるにや、多くは鐘をつらねて飾る物なるを、此みこしは瓔珞のごときものを垂たり、(按心齋橋筋本町邊にて作る所神輿みな此のごとし)右の方に神樂堂あり、巫女は白き淨衣を着て、きねがつらみの音に随ひて舞ふ、其舞ふ形江戸に異り、鈴と御幣とを手に持て、左のかたより右のかたに一逼、又右の方より左の方へ一回りしてあわせて三めぐり也。左右左と云ふ事にや、歸り道は西の方の畑道をたどり、小き流れに添ひ行く、夕顔の花心地よけに咲たるは、所謂木津干瓢をつくれるるべし、かの先に見し住吉橋にかゝれば、兩側の欄干に提灯高くかゝげて、御神燈と書き下の方に若中とあり、江戸にて若者中とかけるに同じかるべし、

すべて祭あるごとに、童べ等は緋縮緬の褌して腹がけ襦袢、又は袖なし羽織袴を着て、細く長き挑灯に御神燈と書き、上に神葉までなど切かけ、下に鈴を付長き竿木にてに作るかゝげて持行なり提灯の上のかはに、横に其社より出る御札をはれり。

十五日。陰 けふは三津八幡の祭なり、よべより人つとふべきを、十四日の夕つかた雨降りければ参るものまれなりしとぞ、爰は島の内といふ所にて、うかれ女のふしとなれば、例の花をかざし、色をあらそひてねり物とかやいひて、大路をねりありきしとぞ、今年にかゝる事もなし、京の祇園會なども山鉾のみにしてねり物なしと聞く、下村の見世丸のあたり幕打廻してきらきらし、されど家々に挑灯を出せるのみ也、細く長き挑灯を童べ等のかゝけるは、牛頭天王に同じ、八幡宮は修理半にして、假屋にいます御神寶の鞍の上に、鐘のごとき物を袋に入れてたて、御酒を備へ傍に刀二三柄あり、鞍の御紋橋なり、家々にたつる挑灯にも橘の紋多し。

三津寺筋に三津寺あり、古義真言宗にて大福院といふ、庭に大なる楠あり、五箇近比の火災に焼て木計り

あり、木を其儘に彫て、如意輪觀音と地藏菩薩を安置せり、側に例の百度石といへる表あり、境内に瑜伽權現といへるもありき。

十六日。陰夜晴 阿波座堀なる常元精舎にまかりて歌よみなとしけるが、あるじの法師、けふはあつさもたへがたく侍る、難波橋のわたり涼しからまし、折から遊山舟の漕つれてうかれ出るさま、花火の光り輝きわたるさまなど、あづまのつとに見をき給ひねかしといふに、いざなはれてともなひ出つ、西横堀の岸をつたひ行けば、くすし馬田氏舟にありてよひ入れり、小竹筒割子なとまうけて、みさかなには何よけんともてなせるもうれし、やゝあつて雲晴、月あざやかに立こむ軒の間に見ゆるを、そゝやと悦び指さしつゝ、大川に漕出て難波橋のもとにつなぎかゝりあるに、屋かた漕つれてあるはうたひ絲ひき、或はつゝみうつ聲なとかしましままで開ゆ、橋の上には挑灯多く立並て澤潟と巴の紋付しは、今宵御靈の祭の夜宮なればなり。箒と云字の挑灯をたて、おどりさばく舟もあり、箒を焼く乗舟もあり、竹立たる舟もあり、皆此祭によれるなるべし、花火こそお

かしき物なれ、深山の照射かあまのたく火かとあやしむうちに、小車の輪のくるくと廻るもあり、又は春日野の飛火かと思ふ計空さまにあがり持行が、暫くありてぬきみだる珠とちりくるは、かの鯨人の涙の滴るにもたぐへつべし、故郷なる兩國橋のものとけしき、三ツ股の洲に賑はひし昔迄、そゝろに思ひつゝ、くればかきりなく遠き所にかゝるながめする事よと、さすがに心細きを夜もやうくふけ行にや、岸に連る灯火のかけすくなく、汀にたゞよふ舟屋形もちりちりにこきわかれて、彼の堀川の翁仁齋、が思在先生九衢人定後長風吹送一川秋といへる句も思ひ出らる、あかすかへりみかちに縋をとき舟さし下せば、難波橋の上の行來もまれにして、ひやゝかなる風は水面に來り、澄渡る月は天心に至るべし。

舟留ていつか又みん難波江の
 蘆のかりねの短夜の月
 浪花江泛舟
 薰風解纜浪花江。肴滿圓方酒滿缸。雲影欲隨仙侶集。月光偏與玉人雙。千竿百戲呈烟火。一曲繁絃起畫艘。二十四橋應此地。吹簫誰倚碧紗窓。

十七日。晴 御靈の祭みんとて高麗橋の西の方なる市店に入れば、行きかふ人賑はし、折々何やらんとよみあへるを見るに、頭に色々のかつらきて、手に何やらん持来りて、さかがふ事いひもてありくは、俄といふ物なりけり、あつまのかたにも玩ふ事なれど、爰は都の手ふりもかはり、今様のすかたをだにわひためねは、耳をいたるもの、絲竹の聞にならぬが如し、やゝあつて鼻高き面着たる猿田彦の神馬に乗て渡る、龜井隱岐守の御内より鎗弓もてる士を出して祭りをたすべく、挑灯萬の調度に澤瀉の紋あるは、此神の紋にや、御靈の社の地はもと龜井家の屋敷の跡なりしとぞ、別當神主神輿二座に渡らせ給ふ、いかきに長く柄を付て賽銭を乞ふ物あり、江戸の祭に神輿に錢を投打さまとは異なり、日も暮ぬれば大川の橋を渡り、鍋嶋の大守の藏屋敷の前なる河岸に茶店あまた床をならべたるに休みて涼をとる遊山船花火などれの事なり。

廿日。晴 未の刻すく比、平野屋にいなはれ、馬田氏と共に津村の御堂に入り、襲明閣にのほりて涼をとれり、南は紀の路山高く聳へ、西は淡路

島一の谷むこ山甲山などつらなり見ゆ、北の方は霧のこめたれと山々のみとり遠く見渡さる、東の方には窓ありて、天王寺の塔高く林の中より出たるに、向ひに重り秀たるは金剛山なるべし、御城は西北の壁にさへられて見えす、爰を掛幅かけさせ給ふ床とす、かたはらの壁に額あり、越後片歌筆といへる襲明閣の記あり、文長げれば記さす、追而寫すべし、平野屋ひそかに茶菓を携へ来りてすむ。

襲明閣避暑

標渺樓中甲浪華。連山環海夏雲斜。炎蒸乍盡三千界。法澤旁流十萬家。

三層香閣湧蒼穹。九品蓮臺觀色空。誰道聖人無棄物。乾坤盡在襲明中。

涼しさはたくひも夏の雲の上に

雲をかさぬる風の高との

同前

馬田光昇

飛閣宜消暑。披襟嘯紫空。毫釐詞客雪。座動大王風。日月環欄外。江山縮鏡中。晚來風氣冷。疑迫水晶宮。

雲の峯見をろすほとこの端居哉

同

信あれば先獲得の風涼し 蜀山

たはれ歌

屏風裏形平野

戀ならでそつとするほと吹風の

ほにあらはるゝ西のをきせん

誹諧連歌

たかとのに扇わするゝ暑哉

襟にひやつく汗の帷

松陰の小くらき池にみへさかて

ねふりさむれば工夫出けり

有明のあたりは鹿の鳴く所

露をもけなる旅人の笠

廿一日。晴 晩雨又晴 仁徳天皇稻荷明神の祭なり

とて、人家の軒に菊桐の紋付たる挑灯をかゝぐ、祭渡るへき大路は埒をゆひみだりに人を通さず、家々の前にも手すりをまうく、博勢町の邊り見に参りしに、所謂たんじりのごとき物に似て、槍皮ふきなる上に、錦の茵五ツ計重ねまきて、下には童部とも筒長き頭巾着て、中に大きな太鼓をすへ、めぐりより是を打つ音かしまし、さをひ勇める若き者ども二三十人計此車をひかんとて、先に立ててうさやよう

さやと口々によぶ、其跡より例の俄といふものあまた来りしかど、この心を分たねばかひなし、良ありて太鼓の音聞ゆるに、彼猿田彦の神馬に乗りてわたる長轡一輛渡れるは神主の乗る爲なるべし、蒔繪の乗物をかきゆけるに、巫女の乗れるにや、侍鳥帽子素袍着たる物二人鐵棒をひく、弓鎗持る者引續て神を根ごしてかき行く、次に菖蒲の花をつくりてかき行く、鉾二柄旗もてる童等など装束したり、又梅の赤枝と、白幣とを持てるもの二人先に立て獅子頭二ツ来れり、江戸の祭の獅子に異なり、天王寺より来る樂人束帯して朱傘さしおほはせ、横笛、簫、筆、太鼓有り、三管共にかはりを持たしむ、太鼓の撥は文箱のごときものに納て持しむ、淺葱退紅の従者あり、爰は博勢町の角より心齋橋の方に右に曲れる所なれば立樂あり、跡の方に馬四ツ計引つれしは、樂人の乗れるなるべし、紅にて顔をぬりたる隨身と、白粉したる隨身と左右に立ち、童子二人鬘をかざし、劔と幣とをならびもてる跡より、御羽車をかく、御羽車は六角にして蓋あり、紺地の金入のとばり六つをかけて鏡をかけたたり、又隨身二人立てり、次に神馬わたる、

次にきぬかさ二柄、次に神主狩衣きて冠に菖蒲の作り花の黒き巾子の前に立つ、次に鎗二柄臺傘立傘長刀一柄持てるもの聲かけあわせて手足ふりゆく、あつまの祭に出る奴といへるものに聊をとれり、次に神主あやめの作り花を巾子のうしろにたてたり、赤く染たるてうちんに菊の紋あるを六本高くかゝげ、紅麻の褌袴一ツに紙もて作る、烏甲といふ物いたゞけるものきほひ来る、次に神輿二座渡り給ふ、輿かかき行は、家々の軒に觸て尾をくたき、大路の左右によろめき渡る、俗に是をあばれみこしとかいひて、怪我あやまちせん事を恐るゝとぞ、祭の警固して町與力同心ほこりがに、列を正せり、祭果ぬれば家々の前と大路の横町に立置所の埒ことごとくはなつ、音らうかはし、稻荷の社のわたり人賑はしかりき、座塵の宮は夜宮にて段尻二ツ社内にあり。

廿二日。晴 けふは座塵の宮の祭なり。きのふ見し段尻二ツは朝の内より本町のわたりを引しとぞ、道修町より出せる段尻は前の柱に銅の龍まきつきたり、又一ツなるは十二濱のわたりより出るなりとて

未の刻過る比より、祭わたるべしといへば、本町五丁目何某の旅宿に下斐氏 町田氏まかりしにれの俄といふもて思ひ付てあからさまにうかれありくを、諺に流しといふとぞ、やうく申の時前に太鼓の音聞ゆ、大きな太鼓を中にすへて、左右に毛氈をもつゝ、みたるものを、よりかゝり所とし、赤き色の長き頭巾をかふりたる童ども太鼓を打つ、是を荷ふ物は皆いさみきほへる若者とも襦袢などかけし多し、高張の提灯二ツかけたるに東濱と印せり、神官のごときものちいさき神を手に持つ、次に猿田彦の面きて装束し、馬上にて渡る、是は六十以上の老人の役なりとぞ、朝よりくれば東に坐して學といふ、次に御供櫃をかく、次に神一本をかく、次に平かなる箱のごとき物に白き覆してかくは何なるや、次に侍烏帽子素袍着たるもの、鐵棒のごとく朱塗の木もて作れる棒を引もの二人、次に神官冠に淺黄の狩衣きて太刀と床几とを持せてあゆむ、次に夏越講といふ挑灯二ツ高くかゝげて、黄衣着たる仕丁ら禁裏御撫物の輿をかく、金箱にて飾り四、方に幕をたる次に町同心數人町與力二人列行す、次に長き提灯の上にまやくまのこときものを

付てかゝり行く、鳥居より出す故に鳥居てうちんと云ふ、もとは百計ありしが今は五十にたらずといふ、又毛鎗あり、弓五張あり、左右に太刀と弓とを持せて、神官五人冠狩衣にて五騎わたる、おのゝ柄の長き大なる團扇をもたしむ、次に長刀を先たて、巫女乗物に乗りて渡る、是も亦團扇を持しむ、次に白衣にて馬に乗れる物あり、狭箱二ツ、鎗三筋、臺傘たて傘にて乗物に乘行も神官なるべし、注連ひきし箱二ツ持ち行は何なるや、次に兒二人隨身四人歩行す、御石講と書し挑灯高く左右にかゝげて、御所車一兩牛かけて來れり、車は 後醍醐天皇より賜はれるなりと云傳ふるは、然りやあらすや、次に社務轡に乗て引馬あり、次に御神酒を櫃に入れて注連引てかく、次に左青龍右白龍前朱雀後玄武の幟あり、次に衣笠二ツあり、悉黒くぬりたる屋根の下に鳳凰の形を作りて、屋の上にすましめ四方より金入の幕をたる、次に神馬の背に櫛と松とを立て引く、又衣笠二ツ前に同じ、次に神輿二座わたらせ給ふ、是をかくもの狂せるが如し、千歳樂じや萬歳樂じやとはやす、外の神輿かく者に異にして、住吉の神輿をかくものは

やす聲に同じといへり、すへて祭り果ぬ前に、小さき神輿を童べの昇歩行多し、何れも清らかに作りをきて細工人より童べの方にかしつかはすとぞ、段尻も大かたはかり來りて祭りを渡し町の内に作り置るは、少しといへり、此神の御紋は、鷲の鳥のはね打ひろけたるさまを、丸の内にかけり、神職の紋は渡邊の紋にして、三ツ星一なり、祭りの調度をはしめ大路に立並へたる提灯まで、みな此紋付たる多し。

(六月二十三日記)

二十四日。晴 けふは天滿の夜宮なり、難波橋を渡りて右方を見れば、彼の段尻といへる舞車われもわれもと引連て、天滿宮の方に向ふ、段尻はもと河内の津島祭熱田祭にあり、段尻はもと河内の津島祭熱田祭にあり、名所圖會にも印せり、車の上は檜皮もてふき、前一段高く後一段ひくし、四方に欄干あり、其上に舞子あり、太鼓つゝみの音かしましき迄聞ゆ、後の方に男ともあまた乗て扇をひらきて是を進む、車の前には長く綱を付けて、若き男多く是を引く、宮居に引入宮の後の方に並へてかへるなり、翌日つとに是を引出して、難波橋の際なる神輿の舟に乗給ふ所迄引來りて、各々出せし所の町にかへる

となん、番敷年々に定らす、今年は二十七番ありといふ、番船は闇を取て定むるといふ、又市中にて其所のおさなどのゆるしなくして、ひそかに段尻を出して若き者ともさわざあへるを、俗に宿なし段尻といふ、今年には四五番もありしといふ、例は花やかに飾りし事なりしが、近比質素になりしとぞ、又北の新地蜷川の倡家より風流の衣裳をよそひて、思ひくゝのたわれたる姿にやつし、名にあるうかれ女の出しをねり物といひしが、今年はなし、よろつ事そぎて行はるゝも近比の風俗也、橋の上の挑灯、舟の中のさはぎ、つゝみふきもの、音は耳にみち、花火の光りは空に飛ありさま、實に、錦城の歌吹海といふへし、興正寺門跡の内にゑる人ありてとひしに、光明寺のあるしも來りて酒汲かはし初夜過る比、やとりをかへれり、

二十五日。晴 天満祭みんと人にいさなはれて、淀屋橋を渡り大江橋のこなたなる岸にのぞみし高とのにすれば、東表の窓北表の障子明わたしたれば、川風まつ涼し、福島の方よりおもち船敷多漕つれて來れり、其舟の粧ひ赤くぬれる舟に、檜皮ふきの屋

根して、幕打廻し吹流し臺傘たて傘ならへしは、大名の舟になぞらへる成とぞ、もとはあまたの人形を舟の舳先に飾りて來りしが、近比よろづことそきて、今年には唯二ツ計あり、ゑのこ島のぬれかみ長五郎の人形儀をかへて立ると、福嶋二丁目の三番叟のみなり、糸もてあやつりて、舟の中にてくるくまはるなり、此外に人形あまたあり、ことし四月、天満宮再興なりとて、同六日より二十日迄、難波橋一の側より、ふいこや町のあたりの市に飾り置しを見しに、此外にもあまたありき、

こんくわい(中福島)木下藤吉(木津川町)木津勘介(天満屋敷)關羽(江子嶋東町)狸々(上博勢)金時(江子嶋東町)胡蝶の舞(江子嶋東町)玉蟲(難喉場町)海士(江子嶋東町)鍾馗大臣(江子嶋東町)與勘平(安治川上二丁目)保名(安治川上二丁目)雀おとり(江子嶋西町)つま平(さきよし町)大森彦七(戎嶋町)源九郎狐(夷島町)夷三郎(戎島町)武内大臣(夷嶋町)石橋(木津川町)西王母(木津川町)神功皇后(木津川町)布袋(木津川町)菊慈童(九條村町)張良(寺嶋町)鎌足(寺島町)猿田彦(木津川町)

鯛(難喉場町)天金花(江子嶋西町)菊にまさかり(寺しま)まめそう(木津川町)

などありき、中にもこんくわいの狐はふるき物なりとぞ、年々にみな出る事はなけれど、近比ことにすくなくなりたりと云ふ、岸のむかひの屋敷くゝには、提灯を高く張たて、家々の紋あり、祭の事によりて市中に出せる挑灯には、多く菊にまさかり有り、是はまさかりをよきといへば、よき事をきくといへる事なりとぞ、川の中には棚かきて簀々所二所計見ゆ、(馬田氏云、ひとせ二十五日の夜大風雨にててうちんの光ひを失ひし時、筑後の簀を焼て屋敷の前に神輿をとめ明せし例により今も此の簀あり)又難波橋の西の方には、神輿の舟に移らせ給ふ所とおぼしく、吹貫の旗のこときもの見渡さる、舟の中に篝火をたくへき鐵籠敷多かけたるも見ゆ、すべて川の南の岸は淺くして、裳をかへてわたるべく、北の岸の方にみよありてみふねの過べき一筋道有り、けふの汐は晝の八ツ時に満ちて、夜の五ツ時にひるなり、まかれども、年ごとに、此神事の日は夜九ツ時までも汐ひる事なく、神輿の還御滞る事なし、是を諺にもら

ひ汐といへるも難有し、み舟の通る所を限りて、二階舟かうばい舟又は小かうばいなどいへる、遊山舟舳舳相つらなりて、さながら垣のことし、劔先舟といくる、細長き舟にも屋形作りかけてけふは出るとぞ、良ありて四角なる行燈のこときもの二ツ並へたる舟來る、是は神輿のかへらせ給ふ時の燈の爲なり、昔より白き紙にてはれるのみにて、文字をたにかへす、神輿に先達て太鼓打つ舟みゆ例の筒長く赤き頭巾着たるもの太鼓を打出すと、常にかはりてまとをに聞ゆるは一人ツ、搔ぬきてうたず、かはるくゝうつゆへにかく聞ゆるといふ、神輿二座の舟は難波はしの西なる北の岸より乗移らせ給ふ、鳳凰の輿は天神にて、葱花の輿俗に寶珠は法性房なりと云ふ、御舟の跡に樂の船あり、幕打廻して音樂の聲きこゆ、天王寺より來れるとぞ、跡に續てをむかひ舟多く、送るさま賑はし、簀船とくゝに焼出て、遊山舟のかざり水面にみちぬれば、橋の上、川のほとり、てうちんの光ならさるはなし、花火さへ空に満て、絲竹つゝみの音かしましままできこゆ、神輿のかへらせ給ふは亥の刻はかりなるへし、銚流しの神事といふは是

なり。

二十九日晴此月小の月なり、けふは住吉の御夏越の大祓とて、堺の宿院開口に神幸まします日なり、神輿は一體なりと云ふ、大和はしめて堺の人昇來、リコより住吉の神人受取て社頭へ歸らせ給ふ、年ことの名越しのはらへには、目しろなる瀧のもとに行て、詩作り歌詠などせしを、今年はかゝる國にありて、かゝる事見ぬも本意なければ、晝過るより行へきが、公の事もさりかたく暑もつよければそのけしきだにみんとて、申の時過る比より馬田氏をとまひて、御堂前の町より木津難波のかたにかゝり行に、夕日はむこ山のかたにかたふきて、垣根に咲ける夕顔は所得かほ也、難波村のうちなる若きもの、挑灯の數三十あまり長き竿の上に三階計にかゝけて、竿のもとにわくのことき物を作り四五十人にて昇來れり、汗もしとゝによるめきつゝ、前の方に四五歩出るとすれば、又後の方にむきてかき行なといかなる事といふ事を知らず、わらべも襦袢一ツきて紅の袴をかき、萬歳樂しやぐとはやす、今宮村より中道といふにかゝりて住吉に至る道すがら、日すてに暮たれば風涼し、去年の稻束に夕顔のかゝりて心地よけに花咲

たる、著色の繪にもかゝまほし、むかふより人のむれ來るに問へば、神輿はとく出させ給ふといふ、新家の町の人家賑はしく、みせ先に名物のころゝ煎餅、番椒昆布、風車竹馬麥わら細工とならべ、伊丹屋三文字屋などの料理茶屋格子作りにて、女どもの打むれて客をむかふるもきら／＼しき物から、何となくひなひたるさま、江戸の曹司ヶ谷社頭のけしき思ひ出らる、松原の左右には、いろ／＼の紋所なるてうちん高くかゝけたるに、石の鳥居より内の左右の挑灯に江戸油問屋と書付たる、さすがに故郷のなつかしくみゆ、大阪油問屋とかけるもまじれり、社頭の反橋は、朽て四十年計もなかりしを、今年再興新になり、六月十九日に渡り初あり、げにまろき物を、二ツきりたらん様にてたやすくはのほりがたし、登り下りの橋の中通りに三角なる木をつなきつけて、足どめとす、欄干の際につけさるは欄干を攀ればなるべし、今日神輿も此反橋をわたり給ふといふ、松原の内所々の石燈籠の燈火つらなりたるに、社頭は修理くわへんとて二三四の御社假殿にたてつけたるに、神燈の光り幽なり、あまたびぬかづきて、松

原を出て長峽橋をわたり、出見の濱の茶店にいこふ、夜べよりの群集につかれて、茶をだにすゝめず、すのこのうへにありて見れば、沙滿て床のもとによせくる、海の表くらうして空か水かと思やらるゝまゝに、星の光の見へわかすして、雲の如く横たわれるは淡路嶋なるべし、汀の蘆のそよぎあひて、風渡る音のみきこゆ

命あればいづこの里も住吉の

濱邊にけふは夏祓せり

檜扇の紋付たる挑灯かゝげし宿りに、酒汲看求めて、(以下缺)

あしの若葉卷二之下終

あしの若葉卷三之上

目録

- 七月七日 御茶湯地蔵、鶴のはし、國造豐津稻生社、御勝山、徳龍山、舍利寺、相殿清水、初湯清水山、國分寺、小橋村
- 八月十三日 三番村、東光院、十五日 興正寺堂前庭望月鍋鳴候納中府
- 九月三日 長門毘沙門堂、松蟲塚、經塚、大名塚、大和はし、墳妙國寺并蘇鐵、改所、播磨塚、常樂寺、乳守、
- 難波屋 十三日 住吉寶市屋、十五日 天王寺、六時堂、廿五日 松明月 看月、大念佛會
- 天滿流 廿九日 春日出新田、廿二日 巫女町、法住寺、毘沙門池、善法寺、相生
- 松、廿三日 天滿商家、廿五日 四賀島南傳法、十二月五日 齋見、北傳法村
- 日天王寺 廿三日 薩摩堀、廣教寺

あしの若葉卷三之上

七月七日。晴農人橋を渡りて、二丁餘東へ行き、御城代の屋敷の側をすぎ、此中に、明遠閣といふ高どのありて、東崖の記有りとぞ、實に浸潤之讚と膚にくるうたへごとの行はれざる、ありがたきためし成べし、こゝに地藏尊あり、皆人願をかくるに茶湯を備ふ、故に御茶湯地蔵とよふ、京橋口御城番與力の屋敷々々、皆土塀なり、庭の木末に、蟬の鳴く聲など市中には聞なれず、夾竹桃の花咲けると、石榴、棗など實をむすべるもみゆ、上本町を横切て、越中町、左官町杯云所を行くに、道のゆくての右の方に、石をたて、奈良、伊勢道とゑれる多し、柏木町を過ぎて、左の方に石の鳥居たてり、これ玉造豐津稻荷社也、豐津稻生社にいれば、右に御供所神官の家有り、左に天滿宮、金毘羅、三辨財天の祠あり、前の池を白龍池といふ、側に不斷櫻あり、觀音堂の本尊は、十一面觀音にして聖德太子の作也とぞ、後の方には八幡住吉山王の祠あり、稻生社の前に櫻と松とを、一もとづ、

植ゆ、社の後より左の方の玉垣のうち、霸王樹あり、俗にさびて元の方は木の形をなして、上のかたにつらなり、生ひたるかたちいくばくの年をふるといふ事を知らず、高さは一間にもあまりぬべし、誠に珍らしき見ものなり、名にをふ舞臺は社の後にありて、東にむかふ、前に松の木二本計たてり、下の方を見下せば田畑みち／＼と、一むらしげる木草の中に、人家よきほどにへだりて見所多し、向ふは、伊駒山横をりふして、二子山とつゞき、金剛山葛城の方迄見やらるゝに、風は冷なる水をそゞごとくに、けふのあつさもわすれぬ、猶行／＼て宰相山に入り、仁徳天皇の宮にぬかづく、拜殿も竹二本立て糸をはり、上に梶の葉の形を五ツ作りて挿み、萌黄と紅と白と青とに染たる麻絲をたれたり、是五色の絲なるべし、眞田山の桃の林を過ぎ小橋の寺町に出て、池ある所に至る、これ味原の池なりと云は、誠にや、春のくれ、桃の花盛りなる比に、池水に錦をあらふが如く武陵桃源のけしき有と云へり、爰に鯉、鰻を生ずにしておける茶店あり、爰は法花山といへる所にて産湯清水といへる泉あり、大小橋命の産湯にひきし泉

なりといふ、側に狐穴あり、稻荷社あり、姫古曾の神社もあり、但姫古曾の神社といふものは、是より東の方にありともいふ、神主の家は、高き岡に作りなして、東西の見はらしよければ、案内してゐるに、あるし立出て、是にいこはせ給へといふ、のこれる暑も、たへがたければ、立入ていこふ、此近きわたりに寂閑庵といへるあり、此庵の主都がたの者にて、此地のふるきあとをたしうつしるにし、其上に其事のよしかけるを、屏風におしたりとて見するに、實にくわしくも書記せり、神主は味原氏にて、此所の農夫なり、此あたり五丁四方程の地をもてり、春の比は桃の花見る人々多くつとひ來りて、賑はしといふ、あるじ指さして、むかひに見ゆる村は、山小橋村なりすべて此あたり左は味生野にして、右は猪甘野也、仁徳天皇皇居の跡も此あたりなりとぞ、岩船の舊跡も此わたりにて、昔井をほりしもの、石にほりあてし事ありき、折々に、古るき瓦、又は瓶の類をもほり出せり、又牡蠣の壳などほり出せりとて、取出てみす、白くされたるかたち地中に年を経たるとみゆ、あるじわが古へを慕へるを見て、瓦と瓶とのかけた

るを贈れり、下にながる、河は、三津の小川なり、庭に高き岡有るを、頼光の矢文塚といふ、近き比、矢鏃をほり出せしに、源頼光といへる銘ありしゆへにかくいふとぞ、則此社に藏あり、あるじ庭に立出て、矢文塚にのぼり、猶小高き所に案内して行く、爰に四阿をたてり、春光亭といふ、四本の柱は猿すべりといへる木の皮付たるに、蘆のかりふきしたるなり、竹欄によりて、むかふの方を見れば、生駒山近く見へて、山の端に一筋の道有とし、是くらがり峠なりとぞ、南の方にさし出たる所、一むら木たちよしあるは、名におふ三室の山なりとぞ、龍田の川の錦なりけりといひけん、紅葉も見まほし、夫より南は、二子山、金剛山、葛城の方につきて、白雲かゝれるさま、繪にもうつすべからず、又茶室あり四宜庵といふ後の方に賢木殿あり、八神殿のかたわらの櫛をうつし植たりとぞ、爰は霜早くして、萩の下葉とく色付き、紅葉のかた枝染たるもあり、門のさし入に、杜若の咲残りたる、山吹のかへり咲とを見しに、四時のけしき目の前にうかみて、さながら仙境にいらかと思ふ、鳥の囀りのどやかにして、草むらに蟲

鳴などいふも、なか／＼なり、携へ来る小竹筒取出て、共にくむ、日もや、西にかたぶきて、あつさもわすれぬれば、暇乞て立出つ、まことに、屏風におしたる、此地の古き跡かきたる、うつさまほしく、矢立の筆してうつしたれど、暑さも堪かたければ、所々書うつせり、重て寫し補ふべし、左にゑるす、比賣古曾神社 味原氏傳記曰當社曰押照宮難波太神宮亦曰百濟神廟延喜式神名帳所載東成郡比賣古曾神社
 萬三 櫻花今盛なりなこの海
 をして宮にきこしめすなへ
 夫木 おしてるや海にた口けてみせんにも 家 持
 味原の宮に玉拾ふ哉
 權僧正公朝
 梅大辻 山小橋門中にあり、
 なには津に咲や此花冬こもり
 今を春へと咲や此花
 王 仁
 梅古樹の側に師會神社あり、祭神菟道稚郎子と王仁

を祭る、

神安國

人王四十五代聖武天皇於味原郷再造國許寺賜行基僧正慈鎮和尚國許寺に住持のとき、
 おさむへきのりの山路末かけて
 あのかたらのに鶯そなく

三韓館 日本書紀卷第廿三日舒明天皇二年十月壬申
 嶋是年致修理難波大郡の三韓館
 六帖 つの國のむろの早稻ひてすとも

注連をはそへよもるとしるかね
 ひとつ橋 味原氏傳記曰當社御前橋曰一殿橋和歌には難波ひとつはしと詠す

六帖おしてるや難波の浦の一つ橋

君を思へばあからめせず

味生宮 日本書紀曰孝德天皇白雉元年春正月辛丑朝
 車駕幸味經宮

田鶴のなくあしへの浪に袖ぬれて

味生の宮に月を見る哉

大小橋山 攝津國風土記曰阿知須企山松杉完料佳也
 亦出茯苓細辛云々
 源 顯 仲

夫木 つねよりも小橋の山の呼子鳥

聲なつかしくきこゆなりけり

三津小川 山小橋村郷中にあり

夫木 春雨にぬれつゝおらん蛙なく

みつの小川の山吹の花

後鳥羽院

同 蛙なくみつの小川の水清み

底にぞ見ゆる山吹の花

大納言師頼

御影の神社

比賣行會神社の末社にして味生原に鎮座し給ふ、今御陰の神と云なり、祭神天探女命なり。

夫木 味生の、玉江の水にみかくれて

みかけの原の月のさやけさ

味原池

清峰記曰人王四十五代聖武天皇御宇味原神影池作鏡

夫木 字形仍名梵字池

いひたえはさこそは絶めなにかその

味原の池のつゝみかもせん

紫式部

夫木 今朝よりは味原の池に氷のて

あちのむら鳥ひまもとむなり

俊 頼

初湯清泉

難波拾遺曰味原郷有清泉曰大小橋命産湯清水大歌處
書曰玉井

夫木 玉の井にさけるをみれば山吹の

花こそ春の光なりけれ

胞衣墳 社家注進記曰胞衣墳にまうて、いわけなき
もの、ためにいは遊いとふるしあらたなり、今は柳
の内にかひのといふべし、

餅賣辻 下茶屋といひて、旅人の体足所なり、古神
社繁榮の時此茶屋と上茶屋と隔年に社司をつとむ。

揚笹葉野 清峯記曰揚笹葉野者小橋村
高葉

いもか髪揚笹葉野の離駒

あれ行なれしあかぬ思ひは

人 丸

ひとつふたつと書つくるに、汗もまといなれば、こ
れより下の十八所は、その名計うつしといめつ、

難波の皇居、日本書紀 八幡山、高津 車阪、味原傳記

山下清水井山守墳日本書紀 石花關事文 小橋村日本書紀

玉江川橋人皇四十五 堀江漁ノ淵日本書紀 下小橋日本書紀

下小橋村郷、高彦崎、山小橋郷、百濟野、夫木大僧天

磐舟、百濟寺、高津皇居、猪飼の岡、猪飼の

橋、牛頭天王神祠、三津浦等也

涼しくならん時を待て、かさねて寫し加ふべきなり、

山小橋村の方を行く、左のかたに、かの姫古曾社と

いへるものと、寂閑庵といへるわたりもみへぬれど、

道へだたりぬれば立よらず、一筋の道を右の方に行

て、一の村にいたれり、木村といふ所なり、平野川

の流れにそひて。古の百 行々岡村に入るに、左の方

に橋あり、これ仁徳記に見へたる猪甘津の橋にし

て、一に鶴の橋と名付く、日本に橋をかけ初し始な

りともいふ、橋の北に淵あり、これ漁父淵成べし、

橋の向ひに屋高く作れる家見ゆ、何かしのかみのみ

そのにやと問ふに權左衛門といへる農夫の家なるよ

し、素封のたぐひなるへし、左のかたに大きな古

木あり、木のもとに小祠あり、此所の鎮守なり、茨

葎大明神といふ、御勝山は岡村にあり、御代官木村

周藏の支配する所にして、御林の内に、みだりに入

べからずといへる制札あり、松の並木つらなりて、
木末を渡る風の音は、凱歌の聲を奏するに似たり、
岡村にあれば岡山といひしを、かたじけなくも元和
の時より、御勝山とはめされけるとぞ、一心寺のか
たはらなる茶臼山と、此所の事は人皆知る所にして、
書つゞけんも恐あれば、書さしつ、もとは大小橋命
の墳なりともいへり、

舍利寺は御勝山の南にあり、表門は東に向ひ、裏門
は西にむかへり、裏門の脇なる道のかどに、葦酒を
許さる石建てり、其道を東に行き南に折れて表門
の前に、大なる古松あり、高さ五丈計、これ太子御影
の松なるべし、表門の額は南岳山の三字に、延寶戊秋
日黄葉山木庵書とあり、門の聯に聖地中興臨紫氣宗
門大啓起雄風は悦山の書なり、表門は閉たれば、も
との道に歸りて、裏門の方にむかふ、裏門も又鎖さ
んとす、返照關といふ額あり、禪扉を押して入り見れ
ば、佛殿に額あり、舍利尊勝寺といふ、木庵の筆なり、
禪堂齋堂の額は悦山の筆なり、太子堂の額は木庵と
みゆ、此寺は聖德太子の草創なりしが廢れてわづか
に太子堂のみありしを、寛文の比、木庵和尚に此地

を玉はり、延寶三年、悦山和尚今のごとく新に建立
して舍利寺と號し、木庵を中祖とす、國分寺は舍利寺
の西の方に、天王寺東門に出る道也、寺の北のかたは
らに、一むらしける森ありて、鳥居たてり、これ元祿
三年光嚴和尚のいとみ建る 聖武帝の御塔なり、
表門は閉されたれば、裏門より入る、佛殿の額玉蕊光
の三字は、隱元の筆也、日も暮ぬれば、そこくに見
過して、天王寺の東門より、南の方河堀口といふ所の
茶店にいこひて飯くふ、こゝは古へ大阪の城の入口
なりしとぞ、天王寺の南門の前を過て、一心寺の前に
出で、くすし佐伯重甫をとふ、あるじは思ひかけず、
ともに立出て、相阪の清水のもとに至り、手洗ひ口
そ、ぐに、清冷たくひなし、清水の上に、石もてき
ざむ薬師佛と、地藏尊た、せ給へり、古き貌、近き
世のものとはみへず、薬師は一心寺の内より堀出せ
るなり、湯本の薬師といひ、地藏は頼政誓言の地藏
といふとぞ、かの頼政の名をも雲井にあくるといひ
し、弓張月も木末にみへて、合法が辻より、今宮難
波の村つゞきに、田畑はるかに見渡され、木蔭に人
家有りと見へて、燈火の影かすかに、あるは折から

の高燈籠の高くか、げたる、今宵の星のかげかとも見る計なるに、天河左にさかひ、武庫山右に横おりふして、秋の風冷なる檻に倚て盃とりくみ替しつゝ、けふ伴ひこし馬田氏とも立かへるを、佐伯氏は猶あかずして遊行寺のあたり迄送り來れり、虎溪の橋をや過げん、紅葉のはしをやわたりけん、足もまごころに、

七夕郊行十首

青知駒嶺樹。白見葛城雲。共上高臺望。清風拂暑氣。

右豐津臺 玉造稻生祠

行入桃林下。桃林結子多。池邊飲牛去。牧笛和樵歌。

右味原池

先皇曾卜地。千載仰仁風。遺跡今安在。茫茫猪野中。

右猪甘野

古祠安國女。自有洗兒盆。一遇栖真客。相携入洞門。

右洗兒泉

今夕會天孫。霞爲錦綺繡。春光如可見。髣髴古桃源。

右春光亭

人煙通古道。星漢屬涼宵。莫以縵山鶴。不如鳥鵲橋。

右鶴橋

樽樽將軍樹。長傳戰勝名。松風吹不盡。自作凱歌聲。
右御勝山
當年長者苑。千古委荒蕪。豈謂黃山賊。來偷一顆珠。
右舍利寺
片月懸孤塔。荒陵奉四天。曾遊續勝迹。步過寺門前。
右天王寺
誰言龜井水。伏自地中至。相逢阪曲亭。洗盞漱餘醉。
右逢阪

八月十三日。晴陰不定

三番といへる所は、古き繪圖に讀場と書る所にや、其渡りの御寺の萩のさかりなるべしと、きのふ出たんとせしが、はしたなき雨にさへられてゆかず、けふ申の下りより、馬田氏とも宿りを出て、淀屋橋を渡り露の天神の宮居前をすく、宮居の左の垣のそとにも小流あり、ながれにのぞみて、いくばくとなく萩の枝たれたり、此程の雨にうつろひたれど、見所なきにしもあらず、猶北さまに、稻荷山を右にして、稻葉の露にそほちつゝ、細き道をたどり行く、所々に木槿のかきしこめたる別荘あり、陶朱翁頓が輩の、かくれてすめる所なるべし、白き花のさきたるに、

紫のまじはれるは萩とみゆ、老ひたるも若きも打交りて、手々に萩折たづさへ來れるが、道もさりあへず、濱野の源光寺の堂の、西の方なる畑をつたひ行くに、七墓道などいふ石碑たてり、西の方に寺あり、東光院といふ曹洞宗の寺也、道了權現をまつれりと見えて、額かけし鳥居あり、伊藤長堅氏のかける、何かし氏の碑もありしが、黄昏になりて見もわかず、池あり、池のめぐりみな萩なり、されど、江戸龜井戸に名たる萩寺龍眼の、萩の錦にはたちをくれて、其下露にだもおよばず、山谷の正燈寺の三が一ツにもあたりぬべし、唯俳諧者流の句のいしぶみなきのみぞ、目さむる心地せらる、下露をわけつゝ、行けば、秋萩の花すり衣きぬ人ぞなきともいはまほし、寺の門をいで、細き流をわたりて、右に聖天の祠あり、これより北の方三番新家と云ふ所に、天真庵といへる黄檗宗の庵あり、馬田氏のゆかりあるものにて、尋るに、道のほどよべの雨に滑かにしてあゆみくるし、右に折れ、左に曲りて、からうじて裏門より入る、こゝにも萩二も三もとあり、稻荷秋葉の祠もあり、あるじ出むかへて、庵に入り、南の窓より望み

見るに、過こしかたの人家の燈、かすかに門田の稻葉そよぎあひつゝ、雲の行事早ければ、月のはれくもりもさだめがたし、かゝる所にたへてもよくする事よと思ふに、心は身にも添はぬなりけりといへる、西上人の歌も思ひ出らる、かのつるうらみましから驚くといひけんもろこし人のためしなきにしもあらざるべし、日は暮れぬ、雨もや降らんとそこく立出て、もと來し道をたどりつゝ、例の萩ある寺の前なる酒家にいこふ、此家の軒西南に向ひて、床にかけし繪を見るに、女のたちて玉簾をか、けしかたあり、折々雲のかゝれるも、いつしか光花やかにもり來りて、床の方にさし入るにぞ、香爐峰月捲簾看などよみあひぬ。かわらけ取あへす馬田氏ともに聯句

良宵期近雨初收 天洋 切切陰蟲北野秋 蜀山
更有殘雲猶易蔽 天洋 明年誰繼此風流 蜀山
折からの蟲の聲ひききをそふ、かへりは會根崎新地といふ所より、蜷川をわたり、筑前橋を過て、四軒町にかゝる、爰は高麗橋筋なり、左の方なる市中にかゝげたる行燈を見るに、荒川敷馬宿と云るせり、

これ我が弟嶋崎氏の、養親の母のはらからなり、春の比病にふしてあやうしときしを、此ほどのたよりに、文月廿八日に病愈て難波の城の大番の守りに下りぬと聞しに、今宵はからずも此所を過て、此宿をみしうれしさとて、とひよりて酒傾け夜深かしてかへり、

八月十五日晴。黄昏の比、馬田氏をとまひて、天神橋を渡る、月は金城のほとりをてらして、波の光さら／＼し、天満の市を過れば、市人ども一まとゐにまとゐて、何やらん指差出し、かしましまでいとみあふは、松茸の價定むる成べし、天満宮の東なる光明寺の門打たきて、あるじをとへば、京のかたに所用ありていにしと聞もほひなし、やがて、興正寺のかたに住める、平野氏(文平)に案内して、寺の前庭に床を並べ、門さし堅めて月見んとするに、今宵は此庵にて法とく事あれば、こなたにわたり給ひねかしといふ、前庭に蘇鐵樹有り、むくつけき葉を分けて、月のさしのばれるに、鐵蕉の葉の前庭に影をうつせる墨繪にもかまほし、

一片金輪上鐵蕉。寺門深鎖夜蕭蕭。

蜀山

人烟咫尺天三五。幾處樓臺吹玉簫。

平野氏の宿りは、東にむかひて、庭の木立よしばみたり、先みさかな調し出て、酒すむ女のわらはにさくとらせて、月見つゝ酒のむ、今宵と、ふる里のすき人らも、月のまどゐして、西の方をや詠むらんと思ふにも限りなく、遠き所に今宵の月を見る事よ、庭の方に法の師の聲作りして、とうときかざりときつくす聲もほのきこゆ、名もとうらいの導師と言けん、みたけさうしんのたくひ成べし、其事果ぬと見え、おうちうばのかたみに、ことかわして別れ行く、夜も更ぬらんまからんといふに、あるじのといめて、今は法の事果ぬれば、もとの前庭に、床を下して月を見給へといふに、月は中空にありて鐵蕉のかげまどかなり、あかすかへりみがちに門を出て、難波橋の方に行くに、人あまた集ひて西さまに行くは、佐賀の大守鍋嶋のみくら屋敷におもむくなめり、年毎の水無月十四日、十五日の夜は、みくら屋敷の稻荷祭にて、人皆立入りて見る事を許す、ことしは、夏の比、さほる事ありて、よべよりこよひまで賑はしいといふに、いかなるさまにやとひそかに門より入り

て見れば、長屋と思しき所に幕引わたして、花瓶に花いけたる數多く見ゆ、あるは淀の城の方水車のめくる所を作り、あるは木を植る水はしらせなどし、鳥居の形をつくりて、石燈籠のまねひをなせるもあり、猶みくら／＼の間に、提灯かゞげ渡して、稻荷の社につゞけり、水門の堀をへたて、むかひに、芝居の舞臺を作り、豊歳稻荷祭とかける行燈をかゞげ、堀の内に二階の舟をつなぐ、やゝありて、上下着たる男出て、今宵の祭に付きて、戯れに舞曲をなすものは、みなあらたにまねひたるものなれば、あやまりもやあらん、みゆるし給ひてよといふに、つゞみしきりになり、撃橋の聲ニツニツ聞ゆ、とひとしく、横雲の空東雲のあくるがごとく、幕を引きあく籬の内、三味線のなる音して、淨瑠璃の歌に和し、鎗をふる奴あり、又は三番叟のかたを今様にうつせる、又は傀儡師に、二人の唐子鉦打あはせて舞ふ、又は難波のあしかる女のさまなど、ひとつ／＼の曲終るごとに、幕を引とつる事前のごとし、さるかふ事限なし、男も女もめてくつかへりてやゝと聲かくる事かしまし此わざをさするものは、皆みくらやしきに米を負ひ

運ふ中衆といへるもの也とぞ、つら／＼元龜天正のむかしを思ふに、東海東山の塵靜かならず、四國九州の波をあげし比、大友毛利の古へ、龍造寺嶋津のむかし、かゝる世にあひ、かゝる都にすみ、かゝるたのしみありとは、夢にたも思はさるべし、是れまかしながら、ふたら山にまつもります御神の、いさおしなるべしと思ふにも、まづあづまの方のみながめやらる、夜も更ぬれば立出て、難波橋をわたり、米屋町のやとりにかへりぬ、

九月三日朝陰。夜晴。けふは西の市のかみ、権銅の座を見めぐらせ給ふ日にて、卯の時過る比より出て、巳の時にやどりにかへる事を得たり、いでや住吉の濱より境の浦まで見んとて出たつ、名吳町今のわたりより、毘沙門堂に立入て見る、大きな木像なり、大金神の社あり、縁日十八日、二十九日としるせり。崑崙大乘坊と石盃にゑれり、合法が辻より逢阪にかゝりて、佐伯重甫が宿りをとふ、松井愛石唐書をよくす江州彦根の産なり來り居て伴ひ出づ、天王寺西門の前を南に行て、阿部野の道にかゝる、右の方の田圃の中に、一もとの松あり、松蟲塚といへる碑をたつ、道の入口に清圓といへ

る字を刻める碑あるは、此碑たてし人の名なるべし、此塚の事さだかならず、難波丸には、古今の序に、松蟲の音に友を忍びてといへることを、故事に取なし此野邊の事に作れる謠有るにより、近き世のいひならはせる成べしとなり、攝陽群談には、所傳に云、古ある人二人伴ひて此野を過ぐ、折ふし秋も半にて、月のさやかなるに、松蟲の聲面白き方を慕ふ、一人は跡に残りて草の莖にふしぬ、暫の間も歸り來らざりければ、又一人も跡をたつねて爰に來り見れば、草にふして死しぬ、なくく土中にうつみて、松蟲塚と名付て世に傳ふとはいへり、松蟲の音による事古今集の序にたよりて、謠に作りたるによるかとあり、近比の名所圖會には、むかしの官女の塚なるべしといへり、何れにもよしある事なるべし、ふところにもせし、蠟壘もてうつに、松蟲の二字はさやかなれど、塚といふ字は草にかくれて、なかばいかりなりき、夫より阿倍野村に入る、左の方に王子の社あり、北畠中納言顯家卿の墓ありと聞くも、ゆかし、土人にとふに、是より先なる畑の中に石碑ありといふにまかせて、田圃の道をふみ分け行けば、

大なる松二本にわかれたるが、枯たるにや、切株のみたてるあり、げに松柏は摧て薪と成るといへる、から歌の心なりとみるに、經塚といへる碑ありて、碑陰に了證と印せり、聖徳太子諸經を一字一石に書寫し給ふを、爰に築き、經塚となすと諸書に印せり、此塚の南に松あり、松のもとに龜趺の碑あり、額に龍をるれり、別當鎮守府大將軍從二位行權中納言兼右衛門督陸奥權守源朝臣顯家卿之墓と記す、むかし、田野の中にわづかに残りて、大名塚と呼しに、享保十五年去る人新に御影石を以て、石碑をたてし、皆人は是をえると、難波丸に見えたり、顯家卿の事は、太平記吉野拾遺等に詳にして、みちのくの軍をあたしたしがへ給ひ、國々もたいらげて、みの、國までおはしけるよし、さきだちて南朝にきこえしかば、たのもしき事におぼし給ひけるに、此野の露ときえさせ給ひ、むなく戦死の名を止め給ふ、げに濃州黒血川の戦、利あらずして、勢州をへて南都に屯し、般若阪の戦ひ、又利あらず、敗卒を集て、境の浦より軍をすゝめて、爰に到れり、元弘四年五月二十三日の事となん、御墓のあたり、皆綿畑にして、やゝも

せば、犁れぬべきを、何人の心有りて、かゝる碑をやたて置けんと思ふに、あまた、びぬかつきて、元の道に出れば、西の方に墓あまたあり、此わたり農家の葬地なるべし、夫より南の方の細き路に又碑あり、播磨塚と印す、攝陽群談には、昔播磨守に侍りける人の古墳也といふの所傳たりと記し、難波丸には、播州の武士此所に討死せし跡なりとみえたり、名所圖會には、案するに、むかし此地みな墓所にて、荒墳となり、田圃をひらきしなり、是等皆以前の殘墓なるべし、故に姓名さだかならずとあり、此外にも、猶小町塚、萱草塚などありと聞しが、見すごしぬ、是より畑の中なる、道もなき所をたどりつゝ、やうやう野道を得たり、池有り、是れ萬代の池にや、天王寺門外にも萬代の池といふあり帝塚山の東の方より、住吉の社の東の門に入りて、市戎の後より、御田の側をすぐ、農夫の稻を刈るを見るにも、さつき廿八日乳守のうかれめの、御田植にし事を思ふに、さのふこそ、早苗とりしといひしふる事もおもひ出らる、飛松原を過て安立町なり、二丁目の左の方に難波屋といへるあり、名におふ松みんと立入りてみるに、聞しにもまされる名木なり、元文三

年、此松のかたをうつして、梓にちりはめしに、松の高さ一丈、東西十五間半、南北十八間計としるせり、今は年波たちかへりて、一しほの色も勝り、千枝百枝にさしかわせるさま、げに大きな衣笠を張たてたるがごとし、江戸龍巖寺の圓座松の姿に似かよひたれど、彼は藩籬のかや草にして、是は垂天の雲といふべし、立出て猶南に行く、左に悪錢屋といへる家あり、爰にて、住吉の圖と縁起とをひさぐ、左に毘沙門堂あり、又關帝堂あり、龜林寺といふ、開基は心越禪師にして、門に第一義の額、東阜越杜多と印す、黄檗山にも此額ありといふ、江戸牛込宗參寺の額は、是を寫せるなるべし、安立町を過て大和川あり、大和橋長さ百二十間ありとぞ、左の方に住吉神輿のやとらせ給ふ所あり、御休所といふ、これより六町の並松あり、石に法華の題目をかきてありたるをたてり、境の津の入口に木戸あり、是北の庄なり、北半町、旅籠町、稜の町、錦の町、柳の町など聞くもゆかし、このあたりの町なみ多く、及物をひさぐ、文珠四郎何某といへる看板多し、菊の紋付けたる、菊桐の紋付けたるもあり、包の字を頭にせる名多かりき、まづ

妙國寺の蘇鐵いかならんと問ひつゝ、南さまに行く、九間町、神明町を過れば、左に神明の宮みゆ、西本願寺の別院もありとぞ、宿屋の町、材木町を左にいれは妙國寺なり、開山は日珖上人とかや、寺地は三好實休の寄進にして、墓には妙國院殿光徳實休墓と有りとなん、又龍音寺殿以徹實休とも法名せしと、難波丸にしるせり、門のうちに三層の塔あり、塔の欄間の彫物は、左甚五郎とかや、西の方の第一級は、右天人、中白澤、左狸々二ツ也、第二級の左右は、孔雀、中は水の月とる猿なり、第三級の左右は、鳳凰、中は天邪鬼なり、南の方の第一級、右は仙人の碁を圍む、中は龍、左は高砂の尉と姥なり、第二級の左右は、天人、中は虎なり、第三級は西の方に同じ、東の方第一級、右は布袋、中白澤、左は天人、第二級の左右は、孔雀、中は獅子なり、第三級は西に同じ、北の方第一級は、右に張齋か様にのれるかた、中は虎、左は費長房が鶴にのりて巻物をみる所、第二級は右に獅子、中に飛龍、左に犀也、第三級は是又西に同じ、すべて彫刻の工なる事言葉にものべかたし。其形古雅にして、其氣生動なり、堺第一の奇觀なる

べし、かゝる見ものなるを、泉州志、堺鑑、難波丸、名所圖會などいへるものに、書殘せるぞ恨なる、本堂に妙國寺といへる額あり、祖師堂も並ひたり、かの蘇鐵は妙國寺の構のうちにあり、一根にして地上に出る事廿三本、大なる枝三十九本、小なるは十八本、わたり東西二丈九尺となん、此外に三四本ありしが、みな兒孫なるべし、すべて此地は、鍛砲師又は庖丁の鍛冶なと業とするもの多ければ、鐵屑多かるべし、鐵蕉の斯く造生ひまげれるも、其所を得たりといふへし、板扉に面白き筆して歌書たるを、彫たる額あり、

妙なるや國に榮ゆる名木の

開しにまさる一もとのかぶ

いかなる人の歌にやとかたへの童に問ふにまらず、寺を出てもときし道にいづるに、左の方にたてつきし土塀は、所謂政所にして、堺奉行河守の居れる所なるべし、天神の裏門より入るに、常樂寺といふ大梵天王の宮あり、當山の地主といふ、境内や、廣くして講釋師などもあり、是より西の方、戎嶋のほとりの海邊をみると急ぐに、日は淡路嶋の方

に傾きて、申の下りなるべし、濱邊の橋の修葺ありて、たゞちに川を渡る事を得ず、南さまに川邊を傳ひ行き、一ツの橋を渡りて濱に至れり、かの享保十五年に築しといへる波戸の石堤は、長さ百廿間とかや、沖中に差出て西海の波をふせぐ、近き比も修理加へて入船の便とす、これより海邊を見渡せば、六甲山右にそびへ、一谷須磨明石につらなり、淡路嶋はむかひに見ゆ、左の方に霧こめて、それかあらぬかと、たとらるゝ山々は、四國の方なるべし、舟は眞帆片帆にぞ入り来る、元の道に立歸りて、大小路に出つゝ、猶南の方に、市の町、甲斐の町、大町、宿院町、中の町、寺院町、少林寺町、新在家町、旅籠町、南半町までを南の庄といふ、すべて北の庄よりは南の庄の方は、家作大にして、良賈の深くかくるゝ所なるべし、右の方なる大きな藏つくりありて、松の梢のはのみえしは、納屋何かしにや、高須町といへるは遊女町にして南の果なり、南町北町の二つあり、此南町こそ、名におふ乳守なれ、暖簾に紫草後聞堺人近比まで黒地の暖簾に紫草付たるありしとぞつけたる有りやと伺ひ見しが、つや／＼見侍らず、薄はなだの衣つ

まとりてたてる、うかれ女も見しが、げにも大とかなるさまなり、家居のさまも、浪花の新町に似かよひたり、茶室などもみえ侍り、さびしき事はん方なし、川のはとりに、假屋のごときものありしは何ならん、神を祭れる時のものにや、日も暮かゝればかへらんと、北さまに行く、市中何となくものさびし、一休和尚の鳥扇うる家みまほしかりしかど見ず、蓮如上人の書給へる酒家の招牌ありと聞きて、大小路のわたりをたつねまといひて、やう／＼にそれと人の教るあり、家の軒に古き板の招牌を出して、横に大和屋の三字ありし様にみゆ、たそがれ過る比にてさだかに見もわかす、けふ午の時過る比佐伯氏のもとを出てより日暮るまで、いふ事なくはせめぐりぬれば、從者も困したるにや、足もすゝまず、されど半日のほどに、堺の津の南北をさわめしも、けふの思ひ出なるべし、見のこしつる所々は、重て尋ぬべし、歸路に佐伯氏に立寄れば、馬田天洋、盧橋庵など來り酒くみかわし居れり、歸るさの友を得たるもうれしく、時をうつして亥の刻ばかりになりぬ、

沙界晚眺

行行欲盡墨江涯。沙界風帆破浪時。

淡路洲頭烟若黛。遙看落日逼岫巖。

九月十三日。拾芥抄に、九月十三日相撲會とあり、又寶市とて、社頭に多く升をひさくと聞て、住吉の宮居に詣ぬ、神輿を玉出嶋の頓宮に渡し、御供をそなふと聞く、大海神社の前なる廻廊に、幕打廻し、廻廊の内に、假の舞臺を設く、門内の左右に大なる太鼓をたつ、古くいかめしき見物なり、北方なるは巴二ツ南の方なるは三ツ巴なりき、阪の下の左右に幄の屋あり、四隅に播をたてしは、神宮寺の僧の座せるにや、今は樂果て、四社の神輿は、頓宮より阪の上のにのぼりて、本社にかへらせ給ふほどなり、坂の下にて、樂人列を正して立樂あり、吹もの、ね松風にひききあひて、沖津白波も聲うちそふるばかりなり、升うるものは本社傍にあり、檜と杉とをもて作れり、寶といふ字の焼印あり、人あまた立ちみたる中に、升のあたへのまろかねを秤もてかくなど、吾妻の方には見も及はず、けふは十三夜なりと思ふに、夕日に雲のたちおほひてあかすかへりみらるゝに、丸屋といへる酒樓にて、物くひ酒のみ、庭に松高くてたり、やゝあり

てたな引雲のたえまより、今宵の月のさやかにもれ出たる、心もことはも及ぶ物かは、今宵の月くもる時は、住吉の祠官左遷せらるゝ事ありとて、晴を祈る歌よみし事、横川禪師の京華集に見えたり、近縣浮遊入酒墟。松風不盡墨江隅。雲光隱見將圓月。露氣淒涼未折蘆。大海古祠遺此地。繼華良會憶吾徒。醉來聊欲裁詩思。天末秋高鴈有無。すみよしの松の木の間玉筍。ふたゝひやみん長月の影。すみよしの春の海邊も白菊の花咲比の月にしかめや。まことや、けふの舞樂は、年久しく絶たるを、今年再びおこして、ふるきにかへりしとなん、かゝる事ともまらで、おそくもふでし事ぞうらみなる。

あしの若葉卷三之上終

あしの若葉卷之三下

九月十五日。雨 今日、天王寺六時堂念佛會なり、此夜は、太子六時堂に臨幸なりと云ふ、すべて二月十五日の涅槃會、同廿二日の聖靈會、九月の今日の念佛會を合せて、三大會といふとぞ、もとは酉の刻に行れしを、近き比より未の刻に始りて、申下刻に終るといふ、雨もふれど、道も近ければとて、人々伴ひ出て今宮にかゝり、神主津の江越後か宿りに入て、古鏡を見る、八花形の貌にして、背に四大神の字あり、左右に孔雀、上下に唐花のごとき物あり、古代の物と見ゆ、唐國の物にはあらじ又後小松院震翰百首和歌題一帖、弘法大師の手書といひつたへし、小楷の心經一卷あり、油切れ紙といふ夫より相阪を上りて、佐伯氏をとふ、佐伯氏案内して、天王寺の六時堂の前に至れば、樂既に始れり、例は羅太鼓をも設れど、略儀にて出されず、左方右方の樂屋をも設ずして、右方にのみこぞり居れり、佐伯氏の縁によりこの樂屋に入て見る事を得たり、池の邊は矢來をゆ

ひて、人皆其外に立居つゝ見る、延喜樂の半なり、鳥甲きたる舞人二人、石の舞臺の上に舞踏す、鼓吹の響き耳にみたり、樂終りて、舞人樂屋に入る、僧徒石の舞臺をめくりて、舞臺の上に立て誦經す、赤き衣者たるは一舍利樂屋の幕を垂て、各醴酒をくむ、これ太子に備へし物なりと云ふ、又饅頭と柿とを盛て、樂人の前に置く、醴酒をのみ物くひ果て、舞人二人、小童二人並立て舞ふ、是甘州なりといふ、正徳の比こまうどの來りし時、此樂を見て、何なると問し時、白石先生の唐詩の中に、甘州の調あるは是なりと答へ給ひし事迄思ひ出らる、此樂終れば、僧徒の誦經初のごとし、又二人の舞人たちて舞ふ林歌なりとぞ、日も暮かゝれば、堂の内にみあかしまいる、雨ふり來れば二人の下部、長柄の朱傘をさして舞臺に上り、舞人をおほふ、次は陵王納蘇利などといふ樂ありと聞ば、残りなく見はてんと思へども、伴せし人の倦たる色あるに、詮方なく立歸ぬ、明年の春の涅槃會、聖靈會には一人まかりて、ことごとく見盡さんものす、心に誓ひ置ぬ、名所圖會に四天王寺法筵略記を

九月十五日、酉の刻

六時堂念佛會 阿彌陀經 舞樂 平調 萬歳 延喜
樂 廿州 林歌 陵王 納蘇利 還城樂

九月二十五日、晴 天満天神の秋祭にて、流鏑馬の神事ありと聞て、御社にまうづる道々に矢來結ひわたせり、神主社家に知る人ある物を伴ひたれば、神社の拜殿に登る事を得たり、神前に神主座し、社家巫女等も見ゆ、側に御幣のごとき物二本、的板九本ありて、献上御的板檜物屋喜右衛門とあり、例の事なるべし、拜殿の前に高き棚をおきて、葉竹二本をたて、茅の莖をもて東南西をおほひ、北を開く、中に瓶子二ツ餅柿様の物をさゝぐ、今日の馬は、御城代よりかし玉へるとぞ、青山家の紋付たる羽織きたるもの鞆固す、やゝありて肩衣袴きたる男、馬に乗て門前の西の方より出て大路を南へ濱の方迄かけおふ事、一度してかへり、是を馬場見せといふ、やがて的板三本を大路の東の方三所へたつ、乗るへき馬を拜殿の階下に引立つ、社家の白衣きたるが垂多く持出て、厩人に渡す、口取馬の頭につく、社家拍子うちて、細に切たる紙をちらして入る、緋縮緬

の小手袖きて、金糸にて縫た黄なる皮の行騰に似て、短き物はきたる若き男、弦なき弓と矢を持、初馬場みらす、拜殿の幕の内より出て、神前にぬかつく、社家盃を傳ふ、神酒ついたり、騎射笠のごときものを着て馬に乗り、拜殿の前なる棚のもとを、東より西にめぐる事、三度にして門を出づ、此時門の内人あまた立込れば、棒持たる男先に立て、打拂く行く、門を出て西の方に入て、大路を南へ濱の方まで馬を走しむ事三度なり、一度く、例の的札持たるもの、大路の方三所よりの差出すを、弓のはずもて打ば、的持たるもの、的を破りて引く事都合九度なり、此間神主社家ともに、拜殿の階上に座し事終りて退く、此馬にのる男は、例年山木屋といへる市人なりといふ、

九月 小盡 晴。住吉の祭は、王出嶋の御祓とも、又北祭ともいふと、名所圖會にはしるせり、未刻ばかりに町田氏と伴ひ、例の道頓堀より廣田明神の前にかゝり、今宮村より天下茶屋に至る、和中散といへる樂うるもの、庭に菊あり、中菊、大菊ともにや、盛也、此頃日小野村の種樹家菊清とやらんが、菊

見に行しに、荅をふくみて花いまだ開かず、花壇も又小也、是は夫には良勝りたれど、故郷の染井、巢鴨の菊に及べくもあらず、奥天神の方に行く道の左に、地藏尊と書て、賽錢の箱をは掛置たれど、まかひもなき石の閻魔王にてまします、月の比見し時は、等閑に見過くせしが、目留て見れば、年號月などかすかに彫れり、右に天文七戌、中社春阿、左に八月彼岸仲日とある様なり、上の方にも何やらん文字有りしが、定に見わかす、其貌の古雅なるは、合法が辻の石像にも勝りぬべし、大海神のみまへを過る頃、人々廻廊の方に走行く廻廊にも幕布をはれり、廻廊の外に出てみれば、門の下に高麗縁の疊敷て、神主以下の神官ならび座せり、むかひの本社の方より、神輿わたらせ給ふ、樂人冠に追掛したるが、長き裾を引つ、二行に前行す、横笛二筋二重築一太鼓、四角なる衣笠四本を持來る、白張きたるものあまた神輿を昇て、玉出嶋の頓宮に移し奉る、老たる巫女側に侍す、神馬白は側のとつなきに繋ぐ、良有て奏樂終り、土器に米新穀な、藁を手一束にきりたる、菅也と云ふを入れて、白衣着たる神官神輿に備ふ、暫くして徹しく神主にさゝぐ、次第して神官に渡

す、神官七八人是を捧て、頓宮の後の方に行て座す、前なる池に紙にて白羽の矢四本を作りて立つ、榊葉をもたて置けり、爰にて、各彼の土器に盛たる藁の本末を鼻にあて、嗅ぐ、嗅をはりて米ともにこしきのごとき物に入れて、榊葉たてたる所に向ひ、一人の神官衣笏を取りぬかづきて、おゝゝといふ聲を發す、暫くして土器の米と藁とを以て地に散らす、人々集り拾ふ、又こしきの中に入れてたるをもまじくなり、さて頓宮の前にかへりて、神主をはじめ一人つゝ出て、榊葉を兩の手に持ち、左右を拂ひ、拜する事一遍、各各を脱此間横笛一管、笏拍子をとる事果て、神輿を昇き、本社に歸らせ給ふ事初のごとし、神主以下跡に立て供奉す、道にして反橋の方にむかひて神輿をたつ、神主以下地上に座す、奏樂あり、事果て、本社にうつらせ給ふ、本社は經營未ならされば、假殿也、假殿の戸を開は、翠簾かゝれり、白衣の神官内より出て、階上に座して迎へ奉る、階下に神輿をかきたて、又奏樂あり、神のかへらせ給ふにや、神輿を昇かへせば、神官翠簾の中に入て扉をとち、二の社の假殿の方より出て退く、けふの神事をみしもの難波人にも稀なり、げ

に笛竹の聲松風にひびき合せて、神さひたるさま言葉にもものべがたし、此月は小盡にして廿九日をつこもりとす、折から松の木の間は日の入を見て、

住吉の里をも暮て行秋は

いくよになりぬ岸の姫松

十月四日 陰晴。食氏は泉州の豪家なり、其山莊は安治川の北春日出新田にあり、田阪氏の案内にて人々伴ひ行く、上福嶋、下福島の村を越へ、上中下の天神の宮を過て安治川の北のほとりの岸を行く、岸に望て菊作れる多し、石もてきさめる地藏尊の前より、右にをれて渡し舟あり、河を渡れば山莊なり、門の前に松多く立てり、門に入て、莊のあづかりを呼出で然々といふに、右の側の戸を開て、爰より入給ひねといふ、戸の外に菊あり、花うるはしく見ゆ、戸を入て石を踏み行く、垣根に藁吾の花の黄なると、千兩の寶の赤きと色を争ふ、木立ものふり、立石に苦むせり、蘇鐵の大なるあり、石橋を渡りて林に入る。天神の宮あり、檜皮の軒朽ちていとふるびたり、林をうかち石を傳ひて、池の邊に出れば、水は田の面にながれ出て、冬枯のさまいはん方なし、岸に望みて立てる石とも、

よのつねの物ならず、怪く工みなせるかと疑ふ、爰に亭あり、北の方は、短き垣して田面遙に見渡され、遠く連る山々は繪にもうつままほし、松の枝の數丈にはびこりていと長きあり、北表の隙子は立渡したるが、植たる櫻幾本となく、春の比思ひやらる、もとの道に歸りて、書院の南表より入りて見れば、床にも壁にも住吉の松原を繪けり、袋棚の唐紙に三夕の歌あり、又螺鈿の戸も見ゆ、二間三間ある座敷を見しに、唐紙襖の繪は、探幽、法眼又は安信筆とあり、琴基書畫はた山水杯なるべし、樓に上れば額あり、村雨亭とかけり、天井格子は竹と蒲とをもて編り、欄によりて南をもてを見渡せば、垣を隔て、直帆片帆に入來る舟の、川を過るさま言ふも中々なり、時雨の雲の晴間より夕日花やかに差入りて、岩に生たる松の木末にうつらふいとるん也、田坂氏の携へたるさゝえかたぶけ、かれいゝあさりて歸る道のほどに日くれぬ。十月廿二日。馬田氏田宮氏に誘れて、紅葉見んとて行く、高津生玉を過き、巫女町といふ所にいたる、黒くぬれる格子ある家立連り、暖簾に横井桁を染め、黒格子、又は小女郎、或はよめなど書たる見ゆ、いか

なるものと問ふに、梓巫のすめる所也といふ、東の方の細道をたどりて池のほとりに至る、毘沙門の池といふ、池のほとりを過て宮有り、玉岡山五條宮といふ、朝日大明神などいへる小祠も見ゆ、右の方の森の中に門の見ゆるは、天王寺東門也、寺あり、門に入て鐘樓あり、鐘の銘は古代の様をうつして高く鑄起したり、攝州東成郡大阪天王寺、小儀村造心山曉雲院壽法寺之常什物なりと有りて、元祿十五年歲十月十五日と印せり、寺の庫裏より入て裏の方なる細道を傳ひ、やれたる草の戸さしを入るに、地は紅の色ふかく落積りて、こほくと音するに、花よりも中々心盡也、かしこ爰に紅葉多かる中に、分きて一木の枝たかくさしおほひたる、錦の衣笠をはりたてたらんか如し、夕日斜に差入りて、停車坐愛楓林晚といひけん、唐土人の心も押はからる、露霜のいたりたらぬけちめみえて、色こさもあり、薄きもあるが中に、水草おふる池の小かけに、いさゝむら竹しけりあひて、日影もらぬ故にやあらん、唯一木のみ青々として、己獨りつれなく立るが、階の下の五葉の松と操をあらそへる心地して、かの澤邊にさまよひし獨醒の人にも

たとへつべし、あはれ、酒を携へ來らば、此庭の落葉をたかましと思へど、甲斐なし、天王寺畔天王池。陰映祇林楓樹枝。晚踏落紅尋仄徑。回看却覺夕陽遲。爰は檜垣舟の間屋日野屋といへるもの、寺なれば、俗に日野屋寺といふ、栗柯亭木端の墓あり、安永二巳七月七日とるれり、毘沙門の側より野道を行く左に相生の松ある庵あり、野中觀音の前をも過て八丁目寺町に入り、法住寺といへる寺の庭を伺ふ、爰にも紅葉あれど、先に見し紅のちしほにくらぶれば及へくも非ず、堂に園林山といへる額あり、書院にまらうと多く見ゆるは、よき檀越成べし、げに心なき草木さへ幸不幸ありて、此寺の紅葉は、人皆知所なれど、壽法寺の名をたに知るものなし、されど知るもの多くなりてもゆかは、木かけの落葉はらひつくして、茶をひさくもの所せまく、あらぬ詩歌發句など物のはしにかいつけて結付たらんは、見る目もいふせく、酔したるもの手折などせんいましめに、此枝折べからずなど、こちたく書し札などたゝんよりは、中々に知る人なくて、錦をつゝみ、光を隠さんこそ、不

幸の幸といふべけれ、歸り道は眞言阪のほとりなる
櫻本坊に立寄て、初夜過ぬ、

奉和

馬光昇

僧房圓寂傍荒池。霜氣染成紅錦枝。山鳥迎人迷小
徑。夕暎深處步遲遲。

十月二十三日 晴。天滿の宮居の東なる一商家に植
たる菊見んとて、人々に誘れて行く、東本願寺の掛所
といふ寺の檀越なれば、此寺の僧を案内として言ひ
入れたり、午の時過る此寺の主をとふに、爰は眞言
宗とかやいへる流を、くめる所なれば、先づみさかな
とう出て酒すむ、廬山のいましめなきのみならず、
伊蒲饌の類にもあらねば、舌まつ出る心地をする、と
もなひ出て彼の商家をとふ、菊植たる方は殊更に假
屋作りて、客をひくべき戸口押明たり、大菊なるもの
植たる欄三間ばかり、小菊のかた二間ばかりなるべ
し、長短等しからず、黄白色を交て良盛り過たるにや
あらん、白かりしが紫になれるも見ゆ、雨障子清らに
かけ渡して、欄干のかどく金泥にてぬるもおかし
假屋の上に紅の氈敷きて、つと花に差向ひたる、見る
目もまばゆく、隱逸の名におふへくもあらず、都て此

地の菊作れるさま、皆かくのごとし、此比天下茶屋に
て見しも又然り、巢鴨染井の種樹家杯には、花圃十四
五間より七八間ばかりをめぐらして、中庭廣くはら
ひ清めて、遠く座敷より見るものから、花の姿ものと
くとして、南の山も見るばかりなりと思ふに、例の
ふる里しのお涙も止め難きを、菊の下露に紛はして、
酒汲替しつゝ、醉心地のかへるさ、眞正寺の内なる平
野氏の宿をとふに、爰にも大菊數多植置て、一本つ
ゝ花かめに挿み入たるも有り、はつきもなかの月み
しまゝにてとはざりしおこたりも思ひ出られて、携
へ來れる殘樽を傾けしに、堂島の邊に火事ありとい
ふに驚きとくかへりぬ、まことや此比、菊合といふ
事ありしに、彼商家におたてたる菊の、大なるさし
渡し一尺ばかりありしを、一とさためられたりと
か、

川に添ひ蘆分橋をわたり、中津川の渡しを渡り、漆
の木の紅葉したるが、豹尾毒荏とやらんむくつけき
もの黄はみたるが、木からしにふかれてたてり、道
を行く行く

聯句

晴川烟樹板橋西、天洋 步入蘆間路欲迷 蜀山
笑指前村帘影動 天 俯聽幽逕鳥聲低 蜀
連山北逐波濤走 蜀 積翠中分嶋嶼齊 天
欲訪當年傳法地 蜀 牧童相引下長堤 天
四貫嶋といふ所に至る、爰は四官といへる唐土人の
住る所なれば、かくはいへる、今は四貫と書改しとな
ん、川口の觀音とて立せ給ふ、側の庵は寛政三亥四
月、北安治川にすめる富田屋與左衛門といへるもの
再建して、同五年丑十二月仙臺如來山法徳寺の隱居
仙英といへる僧を住せしむ、馬田氏の知れるものと
て立寄しが、主は出行てあらず、携へ來るさゝえに、
懐に物せし双柑を下物として、小春の空を眺めんと
するに、風いとあらし、此庵の僕、新に菜つみ、あ
つものとしてすゝむるも興あり、庭に住吉の祠有り、
隣の莊は會所となん、庭の紅葉の色こく見ゆ、聯句、

葦の若葉

百二十七

隣莊霜樹隔牆紅、蜀 午寂禪局鳥叫風、天
小憩思詩茶未熟、天 浮生閑在半窓中、蜀

是より川を渡りて南傳法村也、爰にも住吉の社あり、
舟玉、松尾、天滿宮、火除の祠もあり、御神事正月
十日、五月廿八日、六月晦日、九月十八日、十一月
十六日と書えるせし札ありき、此嶋の内ひなびたる
さまいふも更なり、線香作るもの多し、又北傳法村に
渡らんと渡場を問ひ舟に乗り、向ひの方を見るに、木
立ものふりたる社見ゆ、北傳法村の島に渡れば、西光
寺といへる寺あり、指月庵といへる額かけしは、經堂
なるべし、彼の社は、住吉の社なり、又其隣に寶泉寺
あり、鐘の銘を探れば、攝州西成郡御傳法寶泉寺十一
世航譽享保十七壬午四月廿六日とあるせり、此地は
南傳法よりも又ひなびて、重部などの群居たるが、異
國の人の來れかとあやしみ立出てみるさま珍らし、
酒造るものゝ家多し、かゝる所にも住めは住むよと
思ふに、日もはや山の端にかゝれば、委敷もみす、
急ぎもとの道に歸りて行く、東の空を見るに、
山は屏風の如くめぐりて、幾重ともなく重れり、白
き壁の夕日に輝けるは、今城の方なりと思ふに、爰

は城より西北の方と思はるには遠で、正しく西に當れり、風あはたぐ敷吹かく、はだへも寒く。安治川の邊に知る人有りて、暫しいこひ、ともしかくけて歸れり、十一月廿九日過書町の編局に記す此日事なく静なれば也

十二月五日 晴風。曉丑の刻ばかりなるべし、雨こぼすがごとく降りて、とろろく鳴神の音にいもねられず。床の内につくまり居るに、三聲ばかり高どのに響きて、襖のひしくと音するに、正しく南の方

に落ぬらんと思ふ程もなく雨や、おやみぬ、寅の一つの比にもやあらん、焼亡有りとして人々騒ぐに、とく屋の上に登りて見れば、上寺町の邊なるべし。炎の風に吹はなたれて、空さまにあがるは、いかなる寺院ならん、常に見ゆる天王寺の塔の九輪の形は、暗くして見へわかぬなるべし、されど南の方の雨雲にうつろふ火影は、さながら晝の如くなるに、西風烈しく肌冷に、我宿りに程へだ、れば、ふすまかつきて臥しぬ、夜明け、外の方に人々の語るを聞けば、天王寺に雷火ありて、諸堂悉く焼失ぬ、今まのあたり、釘なし堂の焼るを見てこしなどいふに、あさましと思ひて、猶あらしに、さしも名高き寺なれば、

斯は言らめ、諸堂のこりなく、よもやけじと思ひつ、例の監銅の局に趣しに、市令の下つさかに逢ぬ、此曉より、金城の大手の門を守り、たうち天王寺に罷りしに、諸堂残なく焼失ぬ、わづかに西門東門と、代々のみたまや、元三大師の堂のみ残りぬと聞くに、いよく淺間しく、未の下りに局を出て、宿りにも歸らず、高麗橋を渡り、松屋町を南さまに寺町を行き、天王寺に至れば、西門の邊、人數多立込たり、元三大師の堂の側なる西の門より入るに、右の方の僧房悉く焼て、煙猶盛なり、青龍池の邊に、庭おほひたるは、彼の黄鐘調の鐘なるべし、石の舞臺は恙なけれど、六時堂食堂と思きあたり皆灰燼となりて、煙滿々たれば、行なやむかたへに、梅の木又は杉木など切たふせしは、火を防ぐ爲にやとあやなし、東門のみ焼残りて、講堂金堂のわたり、黒煙立のぼりいづこも見え分かつ、行々て扉のかたに残りたるを、何ぞと問へば、是なん太子堂なりと言ふに、彼猫の門虎の門の彫物も失ぬらんと思ひつ、十五社繪堂も跡方なく、雲水塔のありし所いづくならん、定かに知べからず、御霊屋のわたりぬかづきて、

かたへを見れば、銅燈籠のニツ三ツ倒れたるあり、西門を出るに、引聲堂短聲堂鳥居ばかりは恙なし、秋野坊に葵の紋付たる提灯か、げて、門の柱に、鼈太鼓の革寄かけてみゆるに、扱は恙なかりしと思ふも嬉しく、一心寺の前なる佐伯氏重國の宿りをとひて、くわしく尋るに此曉雨つよく、神鳴おと夥敷くまさしく近きあたりに落ぬと見えて、人立騒ぐ聲すれば、門の戸おしあけて、東の方を見れば、天王寺の塔の上に落ぬと見えて、第五重の屋に火付てもへぬるに、雨さへふり止ねば、木履をはきながら西門に走り入りて見るに、人はやうく五六人集て、あれくといへど力なし、此塔の内に納し大師の像を出し、又金堂に入りて見るに、人もなし、此堂には、古き寢釋迦の像と、舍利とを安置し、又舍利講以下の舊記の入り箱有り、弟なる稚寺の比丘と共に、力を盡して取り出しつ、風烈敷て廻廊より諸堂に至る迄、火かゝれるに太子堂の門なる、猫の形の彫物を助けんとて、人々聲掛辛うして取出せるとぞ、銅の間屋泉屋眞兵衛なるもの、鼈太鼓并に倭徳丸の琵琶一面取出し、黄鐘をも救はんと、人々に聲掛しとぞ、誠に俗人はかゝ

る中にも斐束して角鼓の樂を奏し、太子堂の御影を供奉し、南門の裏なる庚申堂に移し奉る、五智光院に納る所の將軍家御代々の御位牌は、市令の旨ら取出さしめて、秋野坊に遷座し奉けるとなん、

災にかゝれるもの、

雲水塔、金堂、講堂、廻廊、六時堂、食堂文殊堂、太子堂、繪堂、繪堂の棟はやぶりとれたれどあやめり、わがす、是楠公未記を讀給ふし所なり

太子堂、繪堂、かす、是楠公未記を讀給ふし所なり

柵所、鐘樓、虎門、猫門、無恙、守屋祠、關伽井、龜井水、經書堂、御供所、石神祠、三昧堂、太子の像を安置す

安神宮、十五社常陸院宮廿六歌仙南門庄屋

安置す、二 王門池に入し形損れたり、南大門、文庫に釘なし堂と

此外小社多しことく記さず

災をまぬかれしもの、

五智光院御代々の御位牌あれば、萬灯院俗に紙子、輪藏經をみるに是をたまたまといふ、西門、引聲堂、短聲堂、輪藏經をみるに是をたまたまといふ

石の鳥居道風の類あり、元三大師堂、東門。

十二月廿三日、晴、薩摩堀廣教寺は、もと願慶寺といふ、六條の御門主の御連枝にて、いまそかりけるが、常空寺なる順宣律師にことづけて、いやつかれに詩を乞給ひ、いとまあらば来るへきよしなど、告お

こせたまへりしかば、いざとて、順宣律師、馬田氏など、もなひてゆきぬ、日くれぬ内に、庭を見んとて、階を下りて仰見れば、軒に祝松といへる文字あり、此額なん、澤庵和尚の筆と聞く、一とせ澤庵此地に来れる時、爰に宿りし時か、いれけるとぞ、よりに思ふに、澤庵は方外の人、ひととせ、江戸牛込なる酒井空印の山莊に、三つきの將軍家御成ありし時、草庵に牡丹の咲けるを見そなはして、此庵を長安寺と呼ぶべし、白氏か一日看盡長安花といへる句によれり、澤庵に山號を命すべきよし仰ありければ、延命山と名付たりき、爰にも松のかけをとめて、祝松といへるは、松を祝ふといふ心をや、延命といひ、祝松といひ、めでたきことばを撰ひし事、禪家にはにげなく覺へ侍る、かたへの堂の軒に扁額あり九衢塵、裏偷閑といふ、文字をか、ぐ池あり、土橋を渡りて、築山に登り、左の方なる片折戸を入るに、待合あり、あるしの尊者、すいと筆とを持來り給ひて、三十三所の巡禮とかやいふものは、いたる所の山々に同行幾人など、壁には書つくと聞く、何にまれ柱に題してよとの給ふに、かの軒にか、いれし扁額の聯語におぼしくて、三逕苔痕没迹と書て、かたへに辛酉臘

月廿三日、同更山天洋遊と印せり、更山順宣師號 天洋馬田氏號 ころし人の題名とやらんも、かくあらんかし、一木の梅のつばみ多くもたるも、春をまち顔也、もとの道にかへりて、山のいたゞきにのぼれるに、東に金城の白壁つらなり、西に帆柱ならびたり、南の方には連山波のごとくにて、下は人家滿々たり、年比天王寺の塔なんむかふに見へしかど、今は一ツの景を欠たりと、かたへの人かたるに、爰は元和の昔、蜂須賀氏の古壘也といふ、冬御陣の圖といふものを見しに、南御堂は蜂須賀氏の營にして、願慶寺堀の營は薄田隼人が伯樂の營と印せり、其物見の跡に本づきて、かくは築きなせるなるべし、日觀と名付給へるこそ、あるしの茶室に酒呑み物喰ひて、七椀をかたぶけて歸れり。祝松精舎薩講西。長者黄金布地齊。九仍山成基古壘。一枝春早入新題。人隨世諦有真俗。座照摩尼無町畦。若飲酒盃皆得意。不同塵事日栖栖。築山のあたり櫻多し、花咲なばと約し歸りぬ、享和元年七辛酉七月十日に筆とり初て二年壬戌むつさ十一日に記し終りぬ。蜀山子

あしの若葉卷三之下終

壬戌紀行上一名木曾の麻衣

享和二のとし三月廿一日、大阪南本町五町のやどりを出て、東路におもむく、よべより雨ふれば、雨つゝみの用意すとして人々立さわぐ、かねては、寅のひとつにたち出んと、いひおきてしが、夫馬の來ること遅くして、卯の刻近くなりぬ、一とせのほど、相まれるもの來りて、名残おしまぬにしもあらず、馬田昌調、平野屋伊兵衛、銅座人野村由藏、永井三郎兵衛、年寄徳島屋利兵衛、町池幸七等也 本町橋のもとより、船にのらんとす、吹屋の輩、河岸にたちて送る、扇の地に、かたはみの紋と、七寶の紋つけて、過書といへる文字書たる幟たてたる屋根船の、幕打たるに乗る、長持、葛籠興やうのものは、別の船にのせて、苦かけたり、馬田氏、平野屋の貳人は河岸に、傘さして、船のかくる、まて見送り、今橋、高麗橋のもとをも過て、大川に出、八軒家の前をふるに、太神宮、九條中道村といふ文字書きたる幟たて、柳葉にまできりかけ、鼓うちたる船の、かへり來るあり、これは、浪華のもの、伊勢太神宮

にまうでたるを、迎ひに出たる船にて、俗に坂むかへといふとぞ、天満橋のもとより、網島をへて櫻の宮のかたを見やるに、此頃見し花のちりまほれて、青葉まじりの梢を見る、南長柄の邊より、舟子ども舟を岸邊によせて、箆笠着たるもの三人、長き綱を舟につけて引さま、繪に書るか如し、長柄の三頭の邊は棹にてさし、毛馬のあたりより、また綱もてひく、右のかたの堤の方、今市と土居の間は攝津河内の界なり、雨や、をやみて、空あかきは時あかりにや、猶も左の堤のうへを綱もて引行く、蘆生たる洲あり、洲の左のかたにいれば、洲たえて川は、ひろし、是より北の方にいれは、左に平田番所あり、船人岸に上りて、切手をとりゆく、左に江口の君堂あり、去年の五月五日に見し所なり、又神崎川あり、土橋か、れり、雨いたく降來れり、猶ひたりのかたにまかれは、一家といふ所なり、松の並木あり、江戸の東なる、逆井のけしき思ひ出らる、松の根に大きな木をよせかけたるあり、これを楊枝松といふ、むかしは三本有りしが、近頃二本枯て一本残りといふ、石の鳥居の見ゆるは、天満宮なるべし、菅家左邊の時、楊枝

をしるしにさし給ひし所といふ、右に石の灯籠かすかに見しは、佐太天神にや、左にも天満宮あり、石の鳥居に、福祿永貞皆因公之といへる文字と、延享といふ字、ほのかに見えしうちに、舟はゆき過ぬるもほいなし、右は松のむら立遠近に見えわたされて、雨雲たちおほひたるながめいはんかたなし、左に鐘樓あり、寺あり、上村といふ碑あり、白藤の棚も見ゆ、此あたりは川は廣くして、貳百間に餘れり、左の方の人家に、家傳金命酒といふ看板あり、また家傳風の神あきれ薬と書たるは、此頃風病の行はるるによりて、戯れて書たるなるべし、柱本、唐崎といふ所を過れば、左の方に芥川あり、城下の人家、遠く見ゆるは、高槻なり、又七瀬川とて瀬のあまたにわかれたる所もあり、右に大きな寺の屋根ふたつばかり見ゆるは牧方にして、出口の御堂などにや、大阪より牧方まで五拾町一里にして、五里ありとぞ是より京までは三拾町一里なり、こゝは川はこととに廣く、貳百八拾間有といふ、右に松山あり、天氣よくば行てもみまほし、天の川、禁野などいへるわたりも此ほとりなるべし、左の方なる前嶋と道西と

の間に金龍寺あり、能因の山寺の歌よめる所ときけば、舟人に寺ありやとふにしらす、鶴殿といふ所を見れば、げにも蘆の葉多し、これなん鶴殿の蘆なめりと手折て懐にす、左の方に長く横たはれる山は山崎わたり成べし、堂の屋根遠く見ゆるは寶寺にや山の色のこきは近く薄きは遠し、ふもとに人里ありと見えて、一人二人行きかふさま見ゆ、一むら竹のしげれるは、細々として香しといひけん、杜詩の面影見る心地す、かねては橋本より岸にあらりて、八幡山にまうで、猶日高くば、宇治のわたりも、見まほしく思ひしも、あらましごとにて、よべより雨ふりまさりて、時々空あかくみゆるも又かきくもり、船やかたのちりもまめり、かいのまづくもわびしきに、未のさかりより、風さへあらしく、雨をも吹ゆるれば、舟の戸さしかためてうつくまりをるに、波の音高く、舟の上も、大なるふる心地しておそろし、舟子ともふねを岸べの木につなぎて、あまり風つよければすゝみがたし、しばらくまち給ひねとて、袖もまよとにぬれたるが、三人四人、舟のともにもるびふして、いびきかきていねぬ、百日

目付とかいひて、京攝のあいだに、行かふ舟も、此風にすゝみがたくて、わが舟のおもてにかゝりおり、此舟もて風をふせぎ、やゝ力を得たる心地はずれど、猶、はたくと戸のなる音やまず、日暮なんとして、くらうなれど燭なし、わづかに、もとをあらはせし蠟燭の残れるをあつめて、火うち袋の火うちつけ、息のかぎり吹たて、かいくかれいもあさりつくし、みさかなは、かたみにみちぬれど、酒は別のふねにあれば力なし、別の船は三拾石舟とて、苦おほひたる舟なれば、風をもいとはずして、すでに伏見につきたるなるべしと思ふに、わづかにからのくだものやうのものゝあるを見いで、くひつゝ、舟子どもが、飯かききたるかまに、のこれる湯をこひて、唇をうるほしぬ、いぬの刻さかりにもやあらん、風や、おやみて、雨のあしもたえぬれば、さあらばみふね出さんと、舟子ども岸にのほりて、くらき道に足なふみあやまちそなど、いましめつゝ、網もてひく、まばらありて舟にのぼり、棹もてさすは淀のわたりにや、水車のきしる音棹さす音に響きかよひてかしがまし、からうじて伏見につきて舟

より下り、旅のやどりにつきぬ、子の刻に近かるべし、去年宿りし家にて、富田屋與左衛門といふあるじは、京に行しとてみえず、浪花にてまれるもの、夕つかたより待つつけしとて、來りもの語れり、物くひ酒のみつゝ、こゝろおちぬ、此知れるもの、みやこに來り居しか、今宵わが此やどりに來れるをはかりしりて、この宿のむかひにやどり、あすはみやこのあないせんとなり、
廿二日よべより雨はれ、曉のほしきら／＼と見ゆるにうれしく、夜あけてやどりを出つゝ、町なみを見るに、小家かちにわびしきさまなり、おやき(餅也)、火打鐘(深草燒、繪草紙類などいふ)城州伏見住、文珠四郎包光とかきし標ある鍛冶あり、勝念寺などいふ寺も見ゆる、左京大佛街道、大津道右京橋ふねのり場といふ石もたてり、案内のもの、爰は榎木町とていにしへうかれ女のふしとなるか、今あれたるさま見よといふに、竹のはやし麥の畑あり、左のかたに明石屋といへる家一軒残れり、木戸の如きものあるは、くるはの門なるべし、深草の墨染さくらはいづこと問ば爰なりといふに、下りて寺に入る、墨染寺といふ、甲斐の身延山

の末寺にして、京都妙傳寺の支配なり、名におふ墨染さくらは枯て植そへしは一重のさくらにて、すでにちりぬ、かたへに咲る一木の花、今をさかりにて、世にはゆる墨染の種なり、猶北さまにゆきて見れば、道のべに深草焼の土偶人をひさぐ家多し、右に寺あり象王窟といふ額有り、又清涼山といへる石標も見ゆ、木戸を出れば、自是南伏見支配といふ石表あり、藤森の社の裏門よりいりて、崇道盡敬天皇のみまへにぬかづき表門に出づ、右に百丈山石峯寺あり宗、自然の石のかたちもて羅漢のさまをうつし、少しづつ彫琢をくはふ、山のあいだ道のくまゝにたてるさま髣髴として佛體をそなふ、涅槃の像などことにあやし、米三翁といへる碑もみゆ、寶塔寺の前より稻荷山にいりて東福寺に出る道を牧童にとふ、和泉式部か若かりしよりの事思ひ出らる、稻荷の社にぬかづきて東福寺にいれば、今年開帳ありて、五大堂、開山塔、客殿、傳衣閣、方丈法堂、佛殿、山門ことごとくもろくの寶物をかゝけて人々に拜せしむ、また朝のほどなればまゐり來る人もまれなり、佛像畫畫の幅一々に記しもつくさず、くはしくば靈寶の目錄に

あり、げに雲烟の眼をすき百鳥の聲をきくがごとし、中にもこゝろにしみてわすれがたきは、兆殿司の大涅槃像維八間樓四閣下のかたはたいみ又大觀音十八天の像、五百羅漢五拾幅、同下繪五拾幅、また傳衣閣にてやありけん、山門にてやありけん、堂の板壁に殿司の書すさみたる羅漢の像、氣韵生動の粉本といふべし、虎關禪師の元享釋書は草本のまゝにて點など加へたり、進學解と同じ筆なり、俊成卿女淨如尼寄進狀は假名もてしどけなく書つらねしが、父のみはかの地の四至をしるせるなり、いとまあらばうつしものとめまほしけれど心あはたしくてやみぬ、その外張即之、蘇東坡の筆、吳道子、張思恭、李龍眠、呂紀、林良、周文、顏輝等の畫見る目もあやにして、一々に記しかたし、渡宋天満宮の事は兩聖記にも見えて、開山無準禪師の事いまさらいふにおよばず、方丈の柱は朝鮮木にてたてしといふ、天井に大谷刑部の名ある堂もありしがわすれたり、いそぎて京に入らんとするに、巳の時ばかりなるべし、七條河原をわたりて、かの石川五衛門が烹られし跡を見つ、珠數屋町に出て六條東本願寺に至り、名におふ門の彫物を見、西本願寺

の門を見れば、此頃あらたに營み建て、三月廿六日の供養ありとて、いまだかこひをとらず、されど東の大きな門にはたちも及ふべからず、千本通を過て兩町奉行曲淵和泉守の廳に告げ、又所司代の廳にも告ぐ、まづ公の事おはりぬれば今宵大津にとまるまでは、かしこゝ都のさまも見まほしく、堀川を北へ行く道のほとりの酒家にていこふ、むかひに東山遠く菜花地にみたり、北山等持院に開帳ありとて、て行くに、竹林の見わたさるゝは浴外のまるしにや、等持院に唐門あり、中門あり、中門より入りて法堂にいたる、爰に足利家代々の木像あり、所謂

- | | | |
|--------|--------|--------|
| 等持院殿尊氏 | 寶篋院殿義隆 | 鹿苑院殿義滿 |
| 勝定院殿義持 | 長得院殿義量 | 普廣院殿義教 |
| 慶雲院殿義勝 | 慈照院殿義政 | 常徳院殿義尙 |
| 大智院殿義親 | 惠林院殿義材 | 法住院殿義澄 |
| 萬松院殿義晴 | 光源院殿義輝 | 靈陽院殿義昭 |

等なり、等持院殿の柔よく剛を制させ給ひし氣象その面を見るが如し、慈照院殿の面長にみえ給ふと、靈陽院殿のふくらかに見え給ふは、今も猶目にあり、堂のうしろは衣笠山にて、山のうへにも幟なとたて

、山にのほるべき道見ゆ、金閣寺のかたに行く道ありて、石の表たてるを見て、野道をつたひつゝ行て寺門にいたる、案内のものそのよしをつぐれば、尼あり、庭の戸ひらきてみす、池の心ひろく見わたされ、九山八海の名におふ赤松石島山石といへる奇石こそへもつくすべからず、金閣は三重にして、第一を法水院といふ、彌陀の三尊、夢想國師の像、鹿苑院殿義滿の像あり、第二を潮音洞といふ、自然木の觀音、四天王を安す、第三に究竟頂といふ、後小松院の勅額あり、板敷三間四面の一枚板にして、四壁ことごとく金箔にてたゞみたるが色落て光なし、閣を下り、岩下、水安、民澤のわたり夕佳亭をもみつゝ、龍門の瀑といへるを見て裏門を出るに、さくらの花さかりなり、是より平野社にまうでぬるに、こゝにも櫻の花多し、やゝさかり過たるけしきなり、北野の天満宮の東門より入て、御本社の内陣に跪きてふしをかむ、これまであまたの天満宮を拜せしかど、こゝを北野ときくにもそゝろさむき心地ぞする、末社をめぐり表門を出、影向の松を見る、宋紫石か竹を畫けるを石にきさみてたてるあり、又龍草廬が七十の壽

をなせし事を文に書て祝壽の碑といふをたつ、松屋町、今出川町などいふ所を西さまに歩みつゝ、御所の御構のうちにいり、仙洞御所女院御所禁裡の南門から門公家門臺所門などいへる御門ある御築地のもとを見めぐりて、百萬筒屋敷といふに、非藏人羽倉豊前といふものあり、こゝに上田秋成翁號餘齋又號無のかくれすむときき尋ねとひ、日もくれか、ればいそぎ加茂川をわたり、下加茂の社吉田の社をとほく見やり、聖護院の宮の前より南禪寺にかゝる林の中に丹波屋といふ茶屋あり、名におふ南禪寺豆腐を味ひ、酒のみものくひて、しばらくけふのつかれをやすむるに、庭に躑躅の花さかりにして、床几のもとをながるゝ水のきよき事、他國のおよぶくもあらず、粟田口山科をこえて、日すでにくれて道のほどもたとくし、やうく戌の刻過るに大津のやとりにつく□□屋□□□といふものゝ家なり、

廿三日晴、よべのつかれに寝すぐして、いまだ驛中を出ざるに辰の時のかねをきく、驛のさまみやこに近ければ、なべてのひなびたるさまにはあらねど、市中の招牌にもんめん本絲あり、ゆうとうふありなど書

るは、此所の郷語なるべし、萬袋ものなどかけるは京攝の風なり、右に平野大明神精大明神蹴鞠之神社とかけり、左に天神宮あり、膳所城の大手を出て、左に稻荷社あり、右に走井五百羅漢建立といふ札あり、又妙見大菩薩あり、左に若宮八幡あり城門を出て打出の濱なるべし、湖水のけしきは去年も見しかば、くはしくは書す、三上鏡の山の邊に朝日うつらふさまいふもさらなり、粟津の原をこえて、右のかたに石山にゆく道あり、爰より拾三町といふ、去年見ざりし事のこり多ければ、こゝに興かくものをまたせて、かちよりゆく右は山のそばにして、左は勢田の川なり、右に國分寺道あり、かの芭蕉翁が幻住庵記にかける所なるべし、こゝにして一ツの古瓦を拾ひ得たり、かの國分寺の瓦にや、まうでし人の携へ來りておとせし成べし、右のかたの山ぎはに石亭翁登遊碑あり、正四位藤原良直撰井書とあり、文長ければ記さす、翁は藤原族木内氏とあり、すぐに行く道あるを人にとひしがわすれたり、左右に七軒の寺家あり、右に二王門あり石山寺と言額あり、門を入て左右子院四軒あり、家居のさまもつきくしく見ゆ、左の

かたの奥なるは別當なるべし、知行五百七拾九石餘ときくもむべなり、右のかたにたてる石黒くさかしくみゆ、坂をのぼれば高さ丈にあまれる石つらなり時り、本堂は南向にて本尊は觀世音とかや、紫式部源氏の間といふ有りて、窠頭口に翠簾をたれたり、本堂に額有り、其文にいはいはく、

江洲北郡淺井備前守息女亞相

當寺諸伽藍者

秀頼卿御母堂爲二世安樂御再興也
とあり、拜殿もあり、三拾八社の明神多寶塔又庫等あり、鐘樓の鐘は人びとのつく事をゆるすとみえて、かはるがはるつく音かしまし、早鐘無用の札立たるもおかし、古き五倫塔あり、本堂のうしろにしめ垣して、なぎの葉のごときものを植たり、いかなるゆへを知らず、楓の木多し、石のはさまに質おちておのつから生ひ出たる多し山の上より、にはの海を見渡すに、げに月の夜はあかしもすまも外ならぬ詠なるべしと思ひぬ、もときし道より勢田の小橋をわたり、大橋の菫法師の年月いかいならんと見るに、近頃修理せしと見えて寛政五年といへる文字をえりたるが、輿の

戸より見やられたるもおかし、右に田上山不動寺へ二里半といふ石表あり、又鳥居もありて、右しがらき道とえりたる石も見ゆ、大かめ川をこえて、左に池あり池の中に宮あり、野路の砂川をわたりて草津の追分なり、右東海道いせ道、左中山道北國きそたが道といへる石表たてり、すなはち、左の方中山道の方に入るに、にはかにひなびたるさまにして、東海道の賑ひには似もつかず、草津川をかちわたりして右に寺あり、左の方に自是北膳所領といへる石表あり、右に神社あり、松原より右に三上山、左に比良のたけ見ゆ、人家あり、水車あり、澁川村といふあたりなるべし、右に和中散うる家あり、せさいとまるせり、中澤の立場を過て、三上山の形ちかく見ゆ、左は高く、右はひくくしてふたつにわかれたり、かさ川村を過ぎて、右に大寶天王宮あり、左にへそ村齋樂ありて、栗本郡中村氏製とあり、自是北淀領といふ石表あり、右のかたに鐘樓みゆ、このあたり閻魔堂村とて、右に閻魔堂ありといへと見過しつ、從是北宮津領といふ石表あり、一里塚標をへて守山の驛なり、驛中に表具師ありて、暖簾に山本とあり、又八幡毘弱ありとい

ふも見ゆ、右に法華寺有、土橋ある小川をわたりて、左に蓮如上人御舊跡金森堂へ八町といふ石表あり、又志那海道へ行道あり、右へ曲りて、右は中山道このはる道といふ石表あり、御刀脇指拵所といへるも二所ばかり見ゆ、又帆柱觀世音といふ石表あるは、慈眼寺といふ門に興福院といふ額あり、藥師如來もあり、此あたりの制札に主計とあるは私領なるべし、右に相生松あり、左に社あり、從是西宮津領といふ石表あり、左に金毘羅大権現あり、野洲河原ひろくしてむかひの河原に布をさらせるあり、假橋よりわたれば野洲村の人家なり、むかし平相國入道にめされし祇王は野洲のものなり、今も祇王塚といふありときくにも、此あたりなつかしく、右のかたにむせきの見ゆるはその跡にもやと見やりつゝ過ぬ、妓王塚の事は東匡の輜軒小録にもしるせり、從是淀領といふ石表あり、左へ曲れば右に寺あり、門に釋迦如來といふ石表あり、右中山道たが北國道左八まん道といふ石表あり、右へ曲り行に三上山漸く跡のかたに見なされて、はげ山の形ち近く見ゆ、元山のふもとに小松多し、左に塚の如きものあり、又地藏あり、鳥居に石垣

ありて遠く見ゆる神は何ぞとへは、ふじまといへり、坂を上れば、やのむね川といふ、水なし、坂をくだれば人家あり、やのむね川火打所といふ看板あり、此所の名物なるべし、右にはいわくから藥師道あり、又岩くら藥師是より七町入と書し石表もあり、自是西小堤村自是錦織寺領といへる石表あり、爰は篠原堤とて、右の方に實盛か首洗池ありといへど、實盛がうたれしは加賀國篠原にての事なりとぞ、一里塚をへて砂川を渡る、これも又水なし、左右に元山ある中をゆくに、右に松多し、鏡の宿は鏡山のふもととなり、人家わびしきさまなり、鏡山名物みりん酒しようちうと書ける看板かけしやどりにて携へ來りし泡盛酒をのむ、庭は山のふもとにして、躑躅花さかり、向ひの人家の屋のうへを越して松山の見ゆるは前栽の築山に似たり、たちいで、右につらなる近き山の上は石灯籠のあるをさして鏡山といふとぞ、右に是よりにわうへ壹町といふ石表あり、左に寺あり、砂川あり、善光寺川といふ、右にみなくち道、是よりいせ道と云しるしあり、左に正一位若宮大明神あり、横關川は舟の上に板はし、わたれり、馬淵村の人家

にぎはし、左に八幡宮あり、右にたがのよつきくわん音道あり、又いわくら觀音道あり、同じ道に日像菩薩開基之靈地具足山妙感寺是より八町とまゐる石表あり、父母世にいませし時信じ給ひし御法なりと思へど甲斐なし、右のかたに小田をへだて、近く見ゆる元山あり、馬淵山といふとぞ、ふもとにむらしげれる所あり、寺社のやうなるもの見ゆ、長光寺といふ寺ありとぞ、道のゆくてに喪を送るものにあひぬ、先にたてる女二三人白き衣に白き帯して白き練のかつぎを着たり、次にいろいろきたる男四五人ばかりあり、又まろく短き衣を上に着たるもの一人、鎌をかたにして火繩をもち、むまやちより右のかたなる細き道のかたにゆきぬ、楯はすでに野べに送りしと見えたり、禮失してこれを野に求むといふ事もおもひあはせらる、左のかたに社あり、武佐の驛に在る、右に妙光寺道あり、左に佐々木社に拾九町といふ石表あり、延喜式神名帳に近江國蒲生郡木貴神社とあるは是なりとぞ、今夜は上田屋五左衛門といふ家にやどる、此頃の風の病におかされて客をとどむる宿すくなしといふ、此あたりの地にすくもとい

ふものあり、里人これをほりて薪とすといふ事、貝原翁の木曾路記に見えたればこれを問ふにしらす、武佐升うる家やあると問しになしといひき廿四日。天氣よし、宿はづれの左の方に制札あり、石垣にてかこひ、又堂の如きものあり、大木あり、楯に似たり、右に八日市道あり、左に寺あり、又高き山の上は木立あり、箕作山とて佐々木承禎の城跡といふ、是につきて見ゆる山は觀音寺山成べし、右の方に山見ゆれど名を知らず、此あたり西生來村といふ、左に東光寺眞音あり、又神社あり、右に寺あり左の方に茂れる森あり、松多し、これはいはゆる老曾の森なるべし、西老蘇東老蘇の村あり、左の方にさしりて鳥居の見ゆるに額あり、興より過しかば文字さだかならず、是を問へばかみみの宮といへり、左に大きな松あり、觀音寺山に行く道なり、西國三十二番觀音正寺是より拾五町とあり、此あたり人家にて早稻を袋にいれてうるもの多し、又紺がすりのしまおりしたる端物帷子地などうる家多し、爰は高宮の織もとなりといふ、清水がはなの立場にぎはし、道の左に右京道左八幡道とるれる石表あり、町屋村も又

にぎはし、右の方に右京道左いせ^{日市}の八道と書る石あり、位田村をすぎ小幡川の石橋を渡り小幡村に在る、左の方のある人家に蠟燭のかたをつくりて生掛蠟燭と書き、彦根きやらの油とかけるあり、右に竹林多し、中村を過れば瓦師あり、村のはづれなる左の方に、朝鮮傳來即功しやうき散といへる看板あり、ち川のはは三町ばかり逆臺といへるものに輿をかきのせゆく川を越せば越智川の驛なり、驛もまた賑はしからず、されどきね屋銘酒琴のねとかける招牌には心ひかれ侍り、中宿くつかけ村を過て、右に旗神豊満大社あり、土橋村をこえてうたつめの橋をわたる、これうそ川の流なり、枝村をすぐれば右に寺あり、又石灯籠有るも見ゆ、四ツやを過て松の並木の間を行くに、鉦太鼓の音するを何ぞと問へば千度村に祭ありといふ、ゆくゆく見れば農家のかくれたるかたに物の音きこゆ、是もまた祭なりと思ふに、一里塚をへて石田村にいたり、松原をこえて四拾九院村といふにいたる、左のかたに見ゆる山を荒神山といふ、又元山あり、松の生たるも見ゆ、松原を過てあまご出村なり、又松原をすぐれば左に逆如上人

御影奉加當村金光寺といふ觀化所あり、つら町の名物はつら織、行李團扇、状さしの類なり、松原をへて左に寺あり、一里塚をへて松原をすぎ高宮川をかちわたしにて行、是犬上川なり、右に高野世繼觀音道あり、高宮の驛兩がはの町にぎはしく、高宮島の布うる家多し、宿の中なる右のかたに大きな石の鳥居あり、多賀大社といへる額あり、是より貳拾町ありと云、又多賀大社道あり、左の方の木の間より遠く城の見ゆるは彦根なり、そのさま玉造の方よりして大阪の城を望むが如し、又ふる城といへる山あり、これ佐和山なりといふに、石田治部少輔が事思出らる、大堀村をすぎ左のかたに輿ふかく石坂の見ゆるは岩清水大明神なり、大堀川は土のかり橋よりわたる、右のかたに高き山あり、大堀川の岸に近し、松原をこえて地藏村を過ぎ、又松原をこえ行くに彦根の城近く見ゆ、山城なるべし、左に小社あり、原村を過て左に八幡宮の鳥居たてり、一里塚をすぎ左右に山近し、むかひのかたに遠く白く見ゆるは湖水なるべし、左の山上に社あり、石坂高く見ゆ、山はみな赤土なり、また一村あり、小野の宿といふ、

ある藥舖のみせに石たて、小町丸といへる三字を彫れり、又金香圓といへる藥うるは名におふ赤玉といふ藥なり、鳥居本の驛^{又鳥本}は多賀明神の鳥居この所に有しゆゑにかく言とぞ、驛の中なる左のかたに彦根道といふ石表あり、此驛のうちに赤玉の藥賣る家多し、右に仙教丸といふあり、左に神吉丸といふは寺村義水なり、又神教丸といふは三裏清菴なり、次に神教丸といへる看板を出せし家あり、是本家なりといふに一囊もとめて家づとす、此驛にまた雨つゝみの合羽ひさぐ家多し、油紙にて合羽をたゝみたる形つくりて合羽所と書しあり、江戸にて合羽屋といへるもの、看板の形なり、此油紙にてつくりしを見てはじめて合羽を疊し形なる事をしれり、山を右にして田を左にして、ゆくゆく矢倉川をわたる、石橋なり、左に石表あり、北國米原きのもと道と云れり、下矢倉いとふ所より坂をのぼる事高し、左右の岨に石の碎けたるあり、是磨針峠なり、輿より下りてあゆむに腰つかるゝばかりなり、登りつくして左のかたの茶店を臨湖堂といひ、右のかたを望湖堂といふ、童驛書とあり、屏風にかける詩を見れば琉球國の人なり、

堂在嶺頭縦目初水光山色任卷舒
湖中竹島萬粧出月裏彦城畫不如

中山梁素園題 延福私印

中山素園とあり

また 四時風月助吟情

また 展開風月添詩料

また 糊點湖山歸畫圖

また 愛景茶寒香欲散

また 聽詩酒醒酌添吟

是もみな同じ名なり、望湖堂よりみる所、西南に比良のたけ遠くそびえ、それより南につらなる山々近きあり、遠きあり、山のふもとに人家あり、磯村といふ湖の中にさし出て高く見ゆる瓦ぶきは寺などにや、田面はるかに見わたさる、北の方山めぐりて中にもまろく見ゆる山をとへば山もと山といふ、具原の記には小谷山としるせり、そのつらきに月出か崎あり、西北に遠く見ゆる山には今津、貝津のわたりにて若狭のかた也と云、すべて山は四方をかこみて湖水の中央にたゝへたり、北の方に一點のみどりの色水面にうかべるは竹生島なり、此島もとは智福島とい

へるを後に今の文字に書あらためしとぞ、後小松院
 宸翰の竹生島縁起にはしるせり、一とせ江戸目白不
 動にて開帳ありし時、不思議に此縁記をうつせしな
 り、南に奥の島竹島ありと、貝原の記せれとさだかに
 も見とめず、磯村の出はなれより北の方につゝき
 て長き洲ありて水草生茂り湖水を横きるが如し、見
 めもろこしの西湖の十景も是にはよもすぎじと思は
 る、山を少しく下りて又高きにのぼる、小すり針とい
 ふ、此山を下りゆく事長くして松なみを過て人家あ
 り、元番場といふ、此嶺をすぐるに道の左右に面白き
 草花あり、名はわす根こしてうへんと思ふに、輿人の
 いふ、旅人みな携へ行きて植れど生長する事なし、
 かゝる石砂まじりの地にあらざれば生ひ出すといへ
 り、左の方にきりたてたる如き高き山あり、木立あ
 り、是淺井の城跡なりとぞ、番場の驛にいれば右に八
 葉山といへる額かけし寺あり、これ蓮華寺といふ道
 場なり、元弘の昔六波羅の越後守仲時此寺にて自害
 せしときけば、たちいりても見まほしかりしが、輿を
 飛して行過ぎしこそほるなけれ、門前に下馬札など
 も有き、此驛にかつげの薬足のいたみに妙薬などい

へる看板多し、一里塚をへて門根村なり、樽水とい
 ふを土橋よりわたりて樋口村あり、名物あん餅饅頭
 あり、溝あり、清水ながれてきよし、牛打村を過て松
 原を過れば右に寺あり、さくら花さかりに見ゆ、左に
 高くそびへしは伊吹山なり、ところどころ雪のこれ
 り仁良川をわたる、土橋なり、自是北郡山領といふ石
 表あり、小川をわたり一里塚を過れば人家あり、名物
 くさもちあり、醒井の驛に在るに右に水のなかる、
 音きよし、これ醒井の下流なるべし、この驛にさめ
 がい餅うる家多し、とら屋といふも見ゆ、又寒さらし
 ともいふ、伊吹艾ひさくもの多し、右のかたの水の中
 に日本武尊御腰掛石といふありて、その側に地藏堂
 たてり、額に濃州大垣石川日向守建立也と書り、醒井
 の水は古へより名高き所なり、日本武尊伊吹山にて
 大蛇をふるて山中の雲霧にあひ給ひ、御心地なやま
 しかりしが、此水をのみて醒給ひぬとなん、小坂を
 あがりて右に山あり、左に田あり田をへたて、山あ
 り、一色村をすぐ、從是南郡山領とるれる石表あり、
 一里塚をへて左に寺あり、八幡宮あり、此あたり大
 なる松の木多し、松原をへてあづさ川をわたる、土橋

なり、此あづさ川道の右の方なる山々のもとをなが
 れて、又驛路にむかふ、ゆへに柏原迄の間に二度わた
 るといふ、梓村をへて自是東郡山領といふ石表あり、
 粉河坂を上れば左に山あり、明星山薬師道あり、松
 並をへ一里塚をこえて柏原の驛につく、驛舎のさま
 にぎはし、伊吹艾をひさぐもの多し、わがやどれる
 かたは本陣にして、何某辰右衛門といふ、上段と覺
 しき所を避て次の間にやどれり、なげしの上に窓し
 關札を見れば、紀伊殿休薩摩中將宿日光御門跡御宿
 西園寺殿姫君御宿又大宜見王子宿とかける札ある
 は、うるまの人なるべし、醒井のほとりより小雨ふ
 りしが、こゝにいたりて雨したる音す、あすの道
 めかりてあゆみくるしからんなど、從者のわびあへ
 る聲するもことほりなり、
 廿五日。よべの雨やまず、猶ふりしきればみな雨つ
 しみして出たつ、驛を出て左の林の中に小社あり、
 又法華經萬部讀誦廻向といふ石たてり、松の並木の
 もとをゆくに左右に山ちかく見ゆ、人家あり、長久
 寺村といふ、堀田豊前守といへる制札奉社たてしは
 宮川領なるべし、名におふ寝物語といふ所は、人家

の間三尺ばかり隔て、美濃と近江の境なり、左の方
 に寝物語並車返しの由来をひさぐ書付ありしが、ま
 だ朝のほどにて、雨さへふれば門もあけず、輿はと
 く行過ぬ、車返しといふ坂は今須峠ともいふ、上り
 下りともさのみ事なし、小流あり、土橋をわたり
 て今須の驛口にいる、大きな家の招牌に極上合羽
 所と書て、側に不破屋としるせり、不破の關屋の跡
 も程ちかければ、所からの名ならめと、雨皮にはよ
 き名なるべしとほゝるまる、右に親鸞上人御舊跡聖
 連寺あり、一里塚をへて坂を上る、今須の驛は御代
 官多羅尾四郎次郎の支配なるが自是東竹中主殿領分
 といへる榜示あり、松原をすぎて山中村にいたる、
 ある人家のうしろの方に苦むしたる石の五輪の形と
 おぼしきが三ツはかりならひたり、一ツは常盤御前
 の墓なりといふ、のこる二ツは侍女にてやあるらん、
 おもての人家に爐を圍みて老たるうばの茶をのみ居
 るさま何となくあはれなり、坂を下りて又上り又下
 る、峠村といふ所にて峠の坂といふ川あり、いはゆ
 る關の藤川となん、里人は峠の川とよひならはせり、
 此川より西竹中主殿の領せる所なり、板橋をわたり

て坂を上る、大關村といふ、これ不破の關屋の跡なりといふ、軒端くちたるあばらやにうりゑといへる札出したるは、飛鳥川ならねど、せにかはりゆく宿なるべし、かゝるわびしきやどをうりていづくにさすらひゆくらんと思ふに、涙まづ落ぬ。又左の方の人家に招牌たかくかゝりて名代わらぬち二十四文と書たるは、いかなるわらぐつにやとおかし、土橋をわたれば關ヶ原の宿なり、右のかたに南伊勢まきはら三みなど道といへる石表あり、左に北國越前道といへるあり、竹中氏交替符合にして此地を領せるなりより使來りて安否をとふ、一里塚をへて驛中近頃焼たりとに見えて、家居まばらに見ゆ、南に見ゆる山を南宮山といふ、爰は慶長の年石田三成世をみたりし時、ふたらの山の神一たひ怒りましゝて、天か下おたやかに治りし事思ひ出るにもそゝろにかたじけなくおそれみく、輿の中に蹲りてすぐ、野上村を過れば右のかたに南宮へ近道八町といへる石表あり、左右ともに林なり、左に稻荷の神社あり、小流をわたりて垂井の驛に入る、右の方に小社あり、左に寺あり、右に石の鳥居たてり、こゝよりも南宮の山へ八町あり

といふ、驛中に關孫六兼元出店と札かけし家あり、あい川をわたる、土橋四ツばかり所々にかけわたしたり、これ垂井川なりといふ、右に追分の岐路ありて、左木曾路谷汲路としるせる石あり、松の林の中をゆけば一里塚あり、右の方に熊坂物見松とて人に知られる松ありしが、近頃枯たりといふ、左に國分寺道あり、青野村は人家すくなし、松の並木の中をゆくには田島ばかりに見わたされて山を見ず、左は田をへだて山ちかくみゆ、土橋をわたりて青墓の宿なり、左の方に弘醫山圓願寺といふ廢寺あり、義朝朝長義平の墓ありといふ、昔は北山の麓にありしが、近頃爰にうつせりといふ、雨降まさりて輿の戸もあけがたければ見過つ、右の島の中に一本の松あり、照手の松といふ、側にてる手の清水もありといふ、右に梨の木の枝しげきを棚に架したるあり、此あたり所々に見ゆ、右に是より東大垣領といへる榜示あり、左に寺あり、如來寺とて善光寺のうつしなりといふ、右の島に塚のごとく木の茂れるあり是車塚なるへし、赤坂の驛にいれば、戸田家正殿の領分大垣より足輕二人を出してさきをおはしむ、左に谷汲觀

音道あり、是より左右ともに田のみにして、山は雨雲へたて、見えす、右に信州戸隠の小社あり、又梨木の棚あり、左の方に見ゆる山を虚空藏山といふ、一里塚をへて青木村をこへ松原を過れば左右ともに田なり、土橋ふたつばかりわたりて、左の人家にまた梨の木の棚みわたさる、左右の田をへたて、山を見ず、松原を行く事久しくして、やうく三ツ屋北方村の立場にいこふ、天のふし種といふ看板あり、雨ふる事甚しく、雨つゝみもしと、にぬれぬ、堤に上りて行く事ばかりにして、右は田の面ばかりに見え、左はくぼかぼかなる池に柳多し、堤を下り池の中道をゆく、左右ともに柳多し、右のかたに大垣の城近しといへと、雨にへたて、見えす、ろく川といへるは株瀬川なりといふ、ふし川に似て流れゆるく中流のみ急なり、舟にてわたりむかひにつく、蛇籠あり、ろく村を過て左に社あり、又寺あり、左右に竹の林あり、細き竹なり藤波林堂町はか細き堤をつたひゆけば松原長く左右ともに畑なり、土橋をわたりてまた畑を左右にし、汗池の堤の上をゆく、右に自是西大垣領といふ石表あり、美江寺の驛は戸田家正殿の御預り所なり、一里塚をへ

て左右ともにみな畑なり、山遠くして見えす、松の並木をゆく事長し、ぼんでん村をへて板橋をわたる川をいつぬき川といふにや、なます村を過て松原をゆく、合渡の驛を過ぎ、合渡川を舟にてわたり、松の林をゆけば左に天満宮あり、又寺あり、だらり村本庄村をこえて一里塚あり、やうやう加納の驛につく、城下長くして人家多し、左の方に城ありと見ゆ。右に寺二ツ左に寺一ツ社一ツみゆ、竹屋口口口が家にやどる、夜にいりて雨はれたり、宿のさまきよらかなり、床に月儂の畫る山水圖あり、襖の畫も山水なり、あるじに問ふに月泉の弟子の畫かけるなりといふ、二十六日の曉起出て見れば、殘月の影軒端にかすかなるに力を得て出たつ、きのふの雨に道はぬるれど空は晴ぬ、城門を右にし橋をわたりて左りに曲りゆく、左に社あり、右岐阜道左中山道といへる石表たてり、右にまがりつゝ行けば右のかたに親鸞上人御舊跡あり、木戸を出て右へまがり土橋をわたりて右へ曲る、又土橋ある川をわたり、右に熱田への道あり河手村に人家多し、上々にこり小賣一升につき代二十文としるせり、左右ともに畑ある所をゆく竹林

多し、朝日の影さしいづるに、左に山近くみゆるは稲葉山にや、信長公天守の跡ありといふ、山はけはしく見ゆ、金花山といふとぞ、岐阜惣社ありて麓に長柄川なかるゝと云、松原をゆけば左に山々つらなれり、更木山は富士のかたち似かよひたれば美濃富士とよふ、笠松の方より見るによろしといふ、左に親鸞上人御舊跡あり、又社あり、右の畑に潦水みなぎりて見わたす所に山なし、細島村を過て切通しの立場なり、右に戸田家正殿の制札あり、むかふに鳥居の見ゆるは手力雄神なり、里人は手がらの宮といへり、倉賀野をこえて自是東高田村地内といへる榜示あり、堤ある所前の土橋をわたり田間をゆく事長し一里塚をへて新加納村にいたる、人家すくなく、松原を過て右に高き山あり、にる山といふ、左右ともにひろき野なり、此あたりより鶴沼までの間を各務野といふ、三里四面ありといふ、躑躅所々に花さく、右に貳本の松あり、更木新田の立場にいこふ人家四五戸あり、あんころ餅木ちん晝たき仕候などいへる書付を出せり、猶も野をわけつゝ行けば松多し、六軒茶屋の村はわびしきさまなり一里塚をこえて左に芝山近く見ゆ、藤波記にのぎ山とていにしへ大福長者の

ありしその庭山とかや、里人はいへりと云るは、此山をさせるなるべしと思はる、松原を過て、左に自是東尾州領といへる石表あり松原をへて貳拾軒茶屋にいたる、自是鶴沼なり、一里八町といふ一里塚をへて左に高く石ある山あり、あたご山といふ、自是西辻甚太郎支配所自是東尾州領といへる榜示あり、ば村をへて左に庚申とかける石あり、又あたご山の鳥居たてり、天王社の瓦家根見えて門有、右の方に大きな長家あり、此村の大姓なるべし、左に大きな寺見ゆ、坂を下りて右の方に田面をへだて、はるか塔の如く見ゆるは犬山の城樓なり、山のうへにつくりたれば、いや高く見ゆ、板橋ある川をわたりて鶴沼の驛にいる、驛のうちに溝ありて道をわかつてまた宇留馬の驛ともいふ、源重之があづまちに、こゝをうるまとよみし所なり、驛の長出てよべの雨に行先の川水出て道ふさがり、まばらく爰にいこはせ給は、その所見に人遣し置たる便しるべきといへど、とまれかくまれゆくべき所までゆかんといひてゆく、小坂を上れば左右みな山にして、赤土のへなある道をゆく、長き坂を上り下る天王坂といふ、左のかたに溜池あり、観音坂を上れば左は數丈の岩高く

登へて岩のうへに松など生ひたり、種しあればこゝにもといへる歌も引出つべし、右は谷ふかくして木曾川みなぎり流れ、川の向ひに山つらなりて、木々の若葉風にそよぎ、麓にあづまやなどの見ゆる、此頃人のもてはやせる唐書といふものに似たり、川の中にも、奇石怪巖所々にありて、岩にせかるゝ波の音かしましきまで聞ゆ、岩のうへには草木茂りて、松の梢の高う見ゆるは、席上にささげ出たる洲濱のごとし、岨つたひの道ほそくして昔滑らかに、馬車の通ひ危うければ、かちよりゆく、左の岩の中に観音あり、岩の上なる道よりのぼり見るに、翁と童と岩屋のもとにありて、線香をひさぐ、岩のしたゝりをもて手水とす、岩の上より聲のかぎり往來の人をよびて、こゝに正観音たゝせ給ふ、道はゆきぬけにして、跡のかたにもとる事なし、參らせたまへとすゝむ、旅人のならひにていさゝかにも行戻る事をいとへはなり、ゆきくゞて砂川あり、木曾川のながれなり、さきに鶴沼の驛にて水出て、道ふさがれりといひしはこゝの事なり、朝にそゞり夕にのぞくは雨水のならばしなれば、水あせてかちわたりすべし、大きな木をわた

して與よりゆく事あたはず、ゆへにかくは立るなるべし、驛の長より人を出してそのよしをまうす、勝山村の立場に餉あさりていこふ、左の方に右江戸木曾口道、左せき郡上道といふ石表あり、右は竹の林しげりて林の外に木曾川ながれ傾性從來水竹居といへる杜詩の心もおもひあわせらる、こゝに竹細工の名物ありとき、尋るに見えず、とりくみ村にいたれば、左は高き山にそひ、右に木曾川ながれたり、右小出大助御預所左尾州御領といへる榜示あり、さかくらを過て橋あり、左かたに少く引入りて社あり、寺ありいりて見るに薬師佛あり、弘法大師の作にて芳春寺といふ寺なりとぞ、むかふに遠く見ゆる山あり、左は白く右は青し、白きは雪ののこれるにて木曾の御嶽、青きはよながたけとて大井中津川のわたり、ちかき大きな山なりといふ、大田の驛には成瀬隼人正竹腰小源二と書る制札あり、宿を出て堤のうへを行く、右は木曾川にして、左は高き芝生なり、一里塚をへて左の方の河原をつたひ、小石まじりの芝原をゆく、所々に小松生ひたり、大田川をわたるには壹町ばかり川上より舟に乗るに、流れ急にして目くらめく

ばかりなり、此川は、木曾川と飛彈川と落あひて流るゝゆへにかくの如し、向ふの岸より清水ながれ、切たてたる如き岩の上に躑躅花さけり、漸に棹さして向ふの岸につく、岸を上りて左に淺間の社あり、今渡村の立場をこえ二軒家といふ所に相生の松あり、今道より左の方なり、左の方に高く見ゆる山は森武藏の城跡にして可兒寺といふ寺ありと云、さきに見しよながたけ、おんたけの山を見やりつゝ、坂を上り下りて伏見の驛なり、山城の伏見には似もつかぬわびしき村也、自是尾州領といへる石表あり、右は小高き芝生にして左は田なり、山遠くして見えす、右に流るゝ川を可兒川といふ、大田の下にて木曾川に落るといふ、一里塚をこえひる村をすぎ、左に八幡宮あり、可兒川は右の麥畑のかたにながれ行て、むかひに山あり、松原をへて合渡村中村をすぎ御嶽の驛につく、驛の入口に左大やくし可兒大寺といへる石表あり、今宵は此驛にとまりを定めしが、日もいまだくれねば宿を出て可兒大寺に參る、古き堂なり、本堂拾四間に拾間ばかりなり天正九年此驛にすめる玉置與次郎、市場左衛門太郎といへるもの志をあはせ

て作れるなりとぞ、本尊は四尺五寸の樂師にして、尼が池といふ所より蟹にのりてあがらせ給へるよし縁起には記せり、宮殿は、大久保石見守石原清左衛門の造營なり、大寺山願興寺といふ、堂の右の方に引りて別當あり、傳教大師の開基にして古き寺なりといふ、堂の前の左右に不動と觀音を石にゑりてたつ、尾陽泥江朽菴東甫とまゑせり、父母の追福のためにたてしといふ、背に藤益根の文あり、この驛の入口は此二月焼たりとて、あらたにいとみなたつる家々も見ゆ、今宵の宿のあるじを□□□□□□といへり。二十七日。天氣よし、夜あけてたつ、驛を出て山あひの田道を松の並木にそひてゆく事數拾町、右の方に小社二ツばかり見ゆ、みたけ山はいづくぞと興かくものにとへば、右の方に高く聳へたる山なり、木立まげりてみゆ、八月朔日に祭ありなどかたる、一里塚をへてまろき形したる山のふもとを右にしてゆく、丸山といふ稻荷の社ありときく、ながれにかけし板橋をわたりゆくに、從者のいふ、これよりあとの田の中に和泉式部の墓ありといふ、心もつかで見すぐしつ、和泉式部の家の跡に堂たてゝありなど興かくも

のかたる、人家あり、井尻村と言、左の森の中の石坂高うして三級ばかりに見ゆるは天王なりと云、坂口にかゝれば興より下りてのぼるをさいと坂といふ、山の岨より清水わき出て履をうるほし、あゆみくるしければ、岨の中なる草むらの中に人のふみわけたる跡をとめてあゆむ、しるき昔のやうなるもの草木にかゝれり、躑躅すみれなど咲たるも興あり、人家あり、齋藤村といふ、右の方なる石の中に觀世音をおけり、猶のぼりゆく、坂の名をとへばおと坂といふ、此坂の右の方は谷にのぞみて、亂石の間を水の流るゝさま、さながら庭のやり水のごとし、ゆきくゝて十本木といふ立場にいこふ、庭に一本の花さけるを見れば伊勢櫻なり、右にわき出る水あり、地蔵を置く側に一番の清水といふ文字を石にゑりてたり、是はあるやん事なき御方實方の、此道に行なやませ給ひてみ心もつかざりしを、此水をのみ給ひてよみがへらせ給ひしより、かくは名付たりとか、人家あり、善知鳥村といふによりて、是より上る坂を善知鳥坂といふなるべし、藤波記にも見えたり、鶴沼の長坂をうとう坂ともいふとは、具原氏の訛にもやあらん、も

ちの木坂を下る事急なり、左は岨右は谷にて谷あひに田あり、谷のむかひはいく重ともなく山かさなりて、さながら深山幽谷といふべし、人家あり、津橋村といふ、流れにかけし津橋をわたりて、小石まじりの坂を上る事數町、藤あげ坂といふ、是より小坂をすこしづゝのぼりゆくに、細久手の驛までは猶一里ありといふに、足もつかれぬれば、又興にのりてゆく、梅の木といふ坂を下る事長くして、左の岨に大石あり、土橋をわたりて平岩村にいたる、左の方に遠く見ゆる山は苗木山なりとぞ、又すこしのぼれば谷を右にし岨を左にす、すべて御嶽より細久手まで三里のあひだのぼりくゝて下る事は僅に八町ばかりなりといふ、細久手の驛に入れば、左の方なる林の中に鳥居あり、石坂の見ゆるを何ぞと問へば産土の神なりと答ふ、驛舎のさまさびし、お六櫛をひさぐもの多し、松の間の山道をゆくに左右みな谷なり、此あたりより馬酔木の多し、董、澤き、やうなどいへる花もあり、左右の空につゞきて遠山つらなれり、一里塚をこえて芝山の脊をゆく事長し、左の方に小き池あり、杜若生ひしげれり、池の中に辨財天の宮あり、

なを松並の中をゆきて人家わづかに二三戸あり、人のすめるはたゞ一戸なり、一つ家の立場といふ、右の方に遠く笠の如くみゆる山を笠着山といふ、夫より猶右のかたに雪をいたゞけるは御嶽なり、猶琵琶坂をのぼる事數歩、琵琶峠といふ道に石多し、山の嶺より見れば、もろくの山遠く見わたさる、爰よりは伊勢尾張の海も見ゆと云、是より坂を下る事拾町ばかり、山には大きな石いくつとなく長櫃の如きもの、俵の如きもの、數をしらず、道の左にたてる大きな石二つあり、一つを烏帽子石といふ、高さ二丈ばかり幅は三丈にあまれり、また母衣石といふは高さはひとしけれど、幅はこれに倍せり、いづれもその名の形に似て、石のひまゝに松、その外の草木生ひたり、まことに目を驚す見ものなり、ゆきくゞて大久手の驛に入る、左の方に鳥居見ゆるは何の社にや、驛の中なる左のかたに大きな杉の木あり、木のもとに神明の宮をたつ、驛舎のさま細久手に似て夫よりも人家すくなし、是よりいはゆる十三峠とやらんをこゆべきに、飢なばあしかりなんと、あやしきやどりにいりて晝の餉す、庭に石楠ぐさの

花さかりなるにも、わがやどの花はいかゞならんとしのばし、道の右に山の神の社あり、例の輿より下りてあゆむ、輿かくものに委しく問ひて、十三峠の名をもしるさまほしく思ふに、たゞに十三のみにはあらず、くはしくもかぞへきこえなばはたはばかりもあらんと、輿かくものいふ、はしめてのぼる坂を寺坂といひ、次を山神坂といふ、まかりまかりて、のぼりくだり猶三四町も下る、坂の名をとへば、しやれこ坂といふ、右の方に南無觀世音菩薩といふ石をたつ、向ふに遠く見ゆ山はかの横長たけなり、地藏坂といふ坂を上れば、右に大きな杉の木ありて、地藏菩薩立たせ給ふ、又俗におつるが茶屋の坂ともよぶは、おつるといふ女の茶屋ありしより、かくいひならはせしとぞ、すこし下りて又芝生の松原をのぼりゆく事四五町、あやしき石所々にそばだちて赤土多し、曾根松の坂といふ、又坂を下りてゆくに、左のかたの石より水ながれ出るを、順禮水といふ、つねにはさのみ水も出ねど、八月一日には必いづるといふ、むかし順禮のもの、此日此所にてなやみふしけるが、此水をのみて命たすかりしより、今もか

かる事ありといへり、一里塚をすぎ、樫の木坂を下りて、俗に炭焼の五郎坂といふを下れば、炭焼の立場あり、左に近く見ゆる山は権現の山なり、しばし立場に輿たて、いこふ、岨をつたひて細く流る、水に櫻の花のちりかゝるが、さゝやかなる土くれにさへられて、めぐりめぐるもあり、又はさきにながれ行く花ひらの跡より、流る、水にせかれて、おくれてちれる花ひらのよとむまもなく、こえゆくを見るに、桃花水になかれて杳然として去、别有天地非人間とひとりこたる、鞍骨といふ坂をすこし上り、権現坂を下る事五六町あまりにして、人家三四戸あり、大くごといふ、是より左右の谷にのぞみて山路をゆく新道坂を下る事三町ばかりして、茶屋の原といへる平地を得たり、向ひ茶屋の坂を下る事急にして、すこしく上る坂を茶屋坂といふ、こゝにはが茶屋とてあり、又坂を下ること六七町あまり、猶名もしれぬ坂を下りて深谷村にいたる、人家拾餘戸あり、左右に田ある所をゆきて土橋をわたり、やゝ下りゆきて、又黒すくもといふ坂をのぼる、猶のぼる坂をべに坂といふ、左のかたに蘆のかりぶきして餅うるうば三

人ばかりあり、一里塚をこえて大井まではいくゞく里ととふに、二里ばかりありといへば、又輿にのる、是より下りゆく坂の名をとふにしらず、人家一二戸あり、よつやといへる所にや、爰にも一木の伊勢さくらさかりなり、いせさくらとはおほりに近しいへる事よし、爰も又美濃の國なればさもあらんかしと、ひとりゑまる、うつ木原といふ坂を下りて石はしる音すさまじき流あり、わたせる橋をみだれ橋といふ、みたらしの坂といふを上る事五六町にして、山のいたゞきより見れば、左右の山ひきく見ゆ、やゝくだりゆきて、右の方に石の灯籠ふたつたてり、いせ道と石にゑれり、こゝに假屋して伊勢太神宮に奉納の札をたつ、道のべに一重の櫻さかりなるは遅櫻なるべし、一里塚をへて人家あり、巻かね村といふ、追分の立場といふは、木曾といせ路の追分なるべし、爰にもお六櫛をひきてひさぐ、なをも山路をゆきくゞて又一里塚あり、はじめの道にくらぶればいと近し、松の間をゆきて六七町も下る坂を、西行坂といふ、左の山の上に櫻の木ありて、西行の塚ありといふ、圓位上人は讃岐の善導寺にて終りぬとき

くに、こゝにしも塚ある事いかならん、折から谷の鶯の聲をきくもめづらしく、頃は彌生の末なるに、遺賢在野といふ事も引いでつへし、砂石まじりに流るゝ水にかけし板橋をわたりて中野村あり、右のかたにたてる鳥居は、産土の神なり、又ほそき流のはしをわたりてゆきつゝ、大井川の板橋をわたり、大井の驛につく、けふは道のほど八里あまりなれば、また未のなかばばかりなるべし、

廿八日。天氣よし、大井の驛を出て寺坂を上る藤波八重羽の一里塚をへて、右のかたにすこし引入て石塔あり、文字なし、これ彌津甚平の墓なりといふ、松原をへて小流をわたり、左に五百羅漢建立といへる札たてり、人にとふに、是より八町ばかりありといへばゆかず、右のかたに近く見ゆる山は、一昨日より見る横長たけにして、中津川馬籠をへて跡に見なす山なり、又このかたはらにも、一ツの山見ゆるは何といへる山にや、茄子川村といふにいたれば、道中をたてに流るゝ溝あり、左の方にめづらしき看板を出せり、濟家洞家儒者様御如意勿細工所と書り、立よりて見れば梅の木と梨の木もて作れり、坂本の

橋を渡り、けわしき坂をのぼりて、坂本の立場にこふ、爰は大井村千旦林の堺なり、坂を下れば左右ともに赤土の小山なり、田ある所は田の水まで赤く見ゆ、此あたりの畑に猪よけの木多し、人家まゝあり、右は畑ありて山ちかく平なり、左も山平にして長く、畑をへだて、見ゆ、八幡宮あり、此あたりに牛に荷を負はせて四五疋ばかりつらね、牛飼はた一人先にたちて来る、我來れるを見て、聲かくれは牛の角を右のかたにそむけて、細き道を過すさまなれたり、右はたに人家まゝあり、左に松のなみたてる山ありて、垣の如し、板橋をわたりて坂を上ればこしつかの立場なり藤波此邊とところどころに桃花さかりなり、此立場の坂上に千旦林手金野村堺といへる榜示あり、左の方の跡の方をかへり見れば、丸く高き山あり、お笠着山といふ、俗に太神宮の笠めじ山といへり、坂を下れば駒場村なり、又坂を下り四曲ほど曲りて、左に馬頭観音とされる石たてり、左右に田ある道をゆく、右に山ちかく見ゆ、人家まゝあり、小流あり、板橋をわたる時ありて水出るにや、蛇籠などふせたり、坂を下れば左右ともに畑な

り、左へわたりて中津川をわたる、橋あり、河原に石多し、水いすれば往來のなやみありといふ、又小流をわたりて庚申の字される石たてり、中津川の驛の中をたてにさかひて小流あり、驛舎のさまにぎはし、右の方の人家に金龍山あんもち松屋といへるあり、左に菊屋といへる家ありて、楊弓など見ゆ、二八うんどん蕎麥といへるもあり、瀬戸物の陶器多し、小流をわたる橋あり、石多し、右に扇屋といふありて、人參康濟湯といふ藥あり、左に本家岡崎つもとといへる招牌を出せり、十八屋といへる家三戸ばかり見へたり、驛を出て寺坂といふを上る事五まがりして、後のかたをかへり見れば、中津川の驛、目の下に見をろさる、すべて此わたりより家居のさまよのつねならず、屋の上には、大きな石をあげて屋根板をおさふ、寒甚しければ瓦を用ゐがたく、壁の土もいて落るにや、板をもてかこめり、右に小社あり、人家一戸あり、名物なには餅とくさ餅といへる札を出せり、わびしさまなれば味ふに堪ざるべし、左右ともに畑ある所をゆく、左に中津川泉御番所あり、本家お六櫛栢屋忠兵衛といへる招牌あり、

これよりゆくての驛舎ごと、お六櫛をひさぐもの多し、いづれか本家といふ事をしらす、坂を下りて板橋をわたる、小流なれど河原に石多し、松の並木のもとをゆく、人家あり、本家秘傳狐齋藥といへる札あり、是又お六櫛と同じく所々に多し、坂を下れば小流あり、土橋をわたるに河原に石多し、又坂を上ればわびしき人家あり、右の方に一命石といふものをうちならして、人にしめす、その石の音かねのひびきに似たり、これは天明五年の頃、尾張國にカクメイ行者といふものあり、今まで人の上る事を得ざる木曾の御嶽にのぼりてこもりし故其行法いぢるしくて、石の音金のひびきとなれりといふ、一里塚をへてよ坂といふ坂をのぼる、曲折して長し、よ坂をまがりて、下れば左右に畑あり、又坂を下りて小流あり、板橋をわたりて左を見れば水車あり、又坂を上りて落合の驛にいれば、左に藥師堂あり、驛の中に例のたてになかるゝ小流あり、木曾川にわたせる橋を落合のはしといふ、橋杭なし、釜か橋ともいふ、河原に石多し、貝原氏の記に、是信濃の安曇郡と美濃の堺なり、是より東は木曾なりとあり、

されど今は美濃と信濃の界は十曲峠にあり、石まじりの道をゆくゆき坂を上り、山中坂を三四町ばかりまかりてのぼれば、落合の驛舎ははるかなる下に見ゆ、此あたりより道いよ／＼けはしく、爰を十斛峠といふ、左に狐齋薬あり、右のかたに薬師堂あり、行基菩薩の作るなりといふ、此所に札たて、是より東北湯船澤兼好法師の古跡なりとしるせり、かの思ひたつ木曾のあさきぬあさきのみと、きこえし所なるべしとゆかしく、輿かくものにとふに湯ふね澤は橋より一里あり、熊か洞立岩などいふ所ありとかたれり、猶松の林の中を上りゆくに、右は山左は谷なり、むかふに近く見ゆる山あり、す山と云、草木しげれど大きな木なし、道に大きな石多し、又石まじりの坂をのぼる事長し、左に人家一戸あり、きつねかうやくをひさぐ、ゆく／＼道をのぼりて立場あり、同じ齋薬をうる看板に十曲峠とあり、爰に此所美濃信濃國界と書たる榜示あり、かゝる國界を石にもゑらすして、いさ／＼かなる木をしらげて書つけしもおかし、猶亂石の中を上り／＼てゆけば、右の方に緋桃、梨花さきみだれて、左にひなびたる人家

あり、右に小社あり、此邊の人家に串柿うるもの多し、すこし下りて、左右ともに田畑見ゆ、土橋をわたりてすこし上れば、畠の中にいくつともなく、大石よこたはれり、昨日見し烏帽子石母衣石の如きは、よのつねなり、大きな長櫃を荷ひすてたるごとき石多し、右のかたに樋に水をひきて水車をめぐらせり、坂を上りて曲りて馬籠の驛あり、驛舎のさまひなびたり、飯もりてうる家に、御支度所といへる札を出せり、又うり銭ありなど書付たり、宿のうちより坂を上り、宿をはなれて又ついであかりなる坂をのぼる、これ馬籠峠なり、木曾のみ坂といふは、是なりとぞ、人々はしき道にゆきなやめるに、雨さへふり出ぬ、山あひの道をゆくに、水岩間を流る、又岨を右にし谷川を左にす、右に石坂あり緋桃の花さけり、右に人家一戸あり、左に石坂あり、や／＼ゆきて右に畑あり、妻籠峠を上り下りて、谷を左にし岨を右にす、山あひふかくして下りゆけば、左に大きな板一本あり、又坂を下りゆけば、單瓣の桃の花さかりなり、立場あり、一石朽と云、人家多し、ほうの木坂を下りて曲り谷川の橋をわたる、此あたり

より妻籠までは、左右前後ともに山あひなり、又谷川を右にしゆきて、小橋をわたれば、谷川左に流るゝを又棚橋をわたりて、谷を右にし又橋ありて谷を左にす、くだり／＼て曲谷にいれば、山は頭の上をおほへるが如し、橋ありて流を右にしゆく、左の岨にけはしき棧道あり、柴もて岨につくりかけて下は不測の谷にのぞむ、右の石の上に生たるさくら盛なり、猶も山を右にし谷を左にしゆけば人家二三戸あり、立場あり、谷の原といふ、又曲折して下れば、右は山左は谷にして、道のほとりに大きな石三ツ四ツたり、又上りて一里塚をこえ、又山の岨つたひのかげみちにけはしき棧道あり、人家二戸ばかりいたや花やの立場といふ、谷に下りて柴橋をわたり、谷を右にし山を左にして板橋をわたりゆく、妻子橋をわたりて右の山に大石あり、猶もふかき谷川の際に下りて、亂石の中をゆく、谷川に大石あり、左の竹の林のかたはらに大きな立石あり、右に太神宮あり、藤波記に、妻籠の宿のすゑに大竹の林ありといへるは此あたり、の事にや、妻籠の驛は馬籠ともひなびたり、驛舎のかんばんに膳めしうり銭など書けり、又名物合

もろ白とかけり、坂を上れば左右に大石ならびたり、大きな牛をも隠しつべし、山を右にして谷を左にしゆけば水の音遠し、猶山間をのぼり下れば右に大石あり、橋をわたりて谷を左にしつゝ、行に、牛飼一人に牛四五疋ひきつれ来り、例の聲かくるをまちて、牛は道のかたはらに角ふりをむけてたつ、右は山の岨みちにて左は深き谷にのぞめば、あやうき事はんかたなし、山間を上りゆく、左に躑躅花さけり、坂を下れば人家あり、又小橋をわたり山路を上り又下る、左の方に山見ゆるは木曾の古城の跡にや、人家二戸あり、坂を下れば左の谷に大なる石みだれふせり、右にも大石あり、藤花さかりなり、こゝに野飼と見へて二ツの馬はなれ来れり、先なるは子にして後るは母なり、や／＼と聲かくるに、子はまた駒なればかろらかに土手をこえゆくを、母はかたち大なればつゝきてこゆるになやめるさまなり、かゝる危き岨道をこゆるに牛馬さへまよひ来ぬる事、よもつ國のかたかきたる書みる心地す、人家二三戸あり、左右ともに大石多し、右に人家三戸ばかり見ゆ、みな板はめなり、左に石坂見へて小堂あり、これ観音堂にや、左右ともに大

きなる石ある所をわけゆきて合戸村といふ立場あり、人家わづかに二三戸なり、名物まんぢう、あんもちと書つきたる札あり、試にあんもちを味ひ見るに都にはづる事なし、東海道にもかゝる餅はまれなるべしとおもはる、猶山を右にして谷川を左にしてゆけば、又そばつたひのかけはし二所あり、又谷あひふかく下りゆきて、なほ山路にそひて下れば、左の川はいひろく見えて音高きこゆ、右のかたの山のかげに緑さくらちりしはれたり、雨いやましにふり來りて行なやめり、和合村といふ所の人家に和合諸白といへる招牌の出たるを便よしと、しばらく輿をといめていこひ、名におふ諸白の酒を味ふに、雲南の麴米春にもをとらず、是をあるじにとへば、此谷合の清水もて醸しなせりといふ、さきに味へる餅と此酒をあわせて二奇といふべし、飢たるもの、食をなしやすく、濁せるもの、飲をなしやすきたぐひにはあらさず、輿の籠をもる滴に衣の袖も露けく、出入ごとになやめり、右に團原先生碑といふ石あり、左のかたの山々を見れば雨雲しきりにたちのぼりて見るがうちにくらうなりゆく、見戸野の驛舎わびしき所なり、へに坂

を下れば、右は山のそばにして左の川はいひろく音高し、小橋をわたりて左の方に竹あり、人家まゝあり、川水の色青きは深き淵なるべし、板橋あり、谷川の流にかけて木曾川に落ちる水なべし、中河原といふ立場にいこひ、今宵とまるべき野尻の驛までいくばくあると問ふに、猶一里半なりといふ、右は山ぎしにそひ、左は木曾川にのぞみてゆく、岸に竹多し、中原といふ所にあん餅あり、十二河原には人家まばらに多し、橋あり、谷の水山よりみなぎりをつる音高し、山を右にし川を左にしてゆくに大石あり、野尻の新茶屋といふ立場にいこふ、野尻まで二十町に近しいふに、力を得て輿をはやめてゆく、野尻の驛の本陣森庄右衛門が家にとまる、こゝも板ばめにして壁を見れば、去年京尹より執政にめさせられし時、一夜やどらせし所なり、げに旅にしあればかゝるいふせき所にもやどらせ給ふものかな、夜もすがら雨ふる音谷川の流とひびきをあらそへり、いづれの時にか、西の窓の灯かゞげて巴山夜雨の時をかたるべきともいはまほし、

壬戌紀行下

三月廿九日。まだくらくらきに、野尻の宿を出で、倉の坂とつね坂といふ長き坂をくだる、きのふの雨に道あしければ、輿かくものふみやまちて輿を落す、危き事かぎりなし、是より道は何かしの山莊の庭山を見ることく、石あまたある中をわけゆく、左は木曾川にして水の音たかく、右のそば道、左の岸に山吹の花多し、右はそば道にそひ、左に欄干ある橋(藤波記に關山橋とあり)をわたりてゆけば、道の左右に大きな石そばだてり、むかふに見ゆる山は今井四郎兼平が城跡なり、板屋敷戸あり、弓矢村といふ、ある家に銘酒松のは酒ありとかけり、左に水車あり、右のかたの石のおもてに絶三戸之罪とゑりて、左右に元祿十五年壬午八月日、村中善男善女等とあり、たゞに庚申塚とはかゝで、いかなる事を好めるもの、しわざにやとおかし、山を左にし小流を右にしゆけば、まばらく木曾川の流を見ず、平澤といふ立場にいこふ、あるとし羚羊の皮、熊の皮はた熊膽とを持出てめせめせ

とす、む、是より熱川のあたりまで、立場にいこふごとにかくのごとし、左の方の岨みちにそひ、右の方の田の面を見るに板屋まゝ見ゆ、田をへだて、山々に櫻梨の花さかりなり、藤波記に櫻の並木あり、此並木は川のむかひに智光寺といふ寺あり、あるじの僧の手づから植し櫻の、かくおひたちたるなりとあるは、此あたりのなるべしと思はる、人家ある所を過て、岨を右にし畑を左にす、畑のむかふの谷をへだて、山あり、山吹紫躑躅の花多し、左に人家數十戸あり、大嶋村といふ、こゝにいたりてよべの雨またく晴れて、朝日のかげ見ゆるもうれし、伊奈川といふ川、伊奈といふ所よりながれ出て木曾川に落ちるなり、長き橋あり、^{十六間}伊奈川橋といふ、前後の岸よりゆき桁をはね出して橋株なし、いな川村の人家をすぐ、右の方には是より岩屋観音道といふ小坂を上りて、右は岨左は木曾川なり、山あひを行めぐりて須原の驛に在る、さし入の右の方に禁葷酒といへる碑あり、すこしひ^い、あ、あ、大きな寺あり、定勝寺といふ、小高き所に鎮守の堂あり、右の方の墓所のうちに大きな櫻一もとありて、そのもとに墓あり、これ木曾殿の御廟所

なりといふ、藤波記に、本堂に眼さし物おそろしうして、淺黄のすはふに松竹書きたるを着たる繪像あり、さすがたい人とは見えざりしまゝ、かたへにある法師にとへば木曾義有の影なりといへりとあり、こゝに木曾殿の御廂所といへる義有の事にもやあらん、先をいそぐ道なればくはしくも問はず、驛舎をいで、右は山左は川なり、和村の人家を過れば、岸に竹の林あり、るげの坂を上りて又下れば、岨を右にし川を左にす、川にのぞめる百丈の岸の上をゆくに、柴ふわたるかけ橋あり、あやぶみくわたりゆきて、岨つたひに岸に下りゆく道より見れば、大淵といふあり、淵ひろくして、岸にたてるの岩けしきよのつねならず、また椽坂とかやいふわたりをのぼりゆくに、川のむかひにたてる岩石數十丈、松その外の木あまた生ひたり、右のかたに水車あり、此所松淵となり、ゆきくわて又かけ橋あり、立町の人家數十戸にぎはしき立場なり、左右に大木二本あり、板と見ゆ、山あひをゆき、めぐりのほり下りて萩原にいたる、人家十餘戸わびしきさまなり、此あたり山吹の花多し、又もけはしきかけ橋をわたりて左の方の淵にのぞめば島

あり、松をひしげりて、巖そばだてり、巖にせかるゝ水の音つよく、澤中の雷きくかと疑ふ、波のいろは、雪をちらし玉をくだく、右の方なる岩山の上より瀧ふた筋にわかれて落ちるさま、白き布をさけるがごとし、是小野の瀧なり、長さ三丈ばかりもあるべし、こゝれまでの山路に橋ある所は、多く山より水みなぎり落ちて、木曾川に流るなり、されどかゝる高き岩よりたうち下れる飛流を見ず、左に茶屋あり、隙子に名物小野の瀧蕎麥切とかけり、三四町ゆきて、なめ川の橋とて大きな橋あり、前後の岸よりはね出して株なし、坂を上りて松原をゆけば、右の土手に赤松そびへたてり、此松によりて上松の驛ありとぞ、ゆきくわて左の方に臨川寺といふ寺あり、門前の人家に蕎麥切を賣る、名づけて寐覺そばといふ、爰は名におふ浦島が寐覺の床といへる所なり、鳥居をいりて左に辨天の堂あり、これ正徳二年尾張黃門吉通の御建立にて、本堂前なる松も手づから植給ひし所なり、浦島寐覺の床を見よといふ、かの松のもとより岸にのぞみて見おるせば、大きな岩なり、岩の上に松

生ひしげりて辨天の小社あり、床岩、象岩、まないた岩、屏風岩、獅子岩、たゝみ岩等をのくその形ありといへど、ことごとくは見わかず、まろき穴のあきたるを釜岩といへり、むかふの岸は、數十丈の岩そばだちて松生ひしげり、峯のあらし谷の水音にひききて、うき世の塵をも洗ふべし、これ床山なりと云ふ、藤波記には臨川庵と見えしが、そのうち寺とはなれるなるべし、貝原氏の記にも臨川寺とあるせり

藤波記は明暦元年
貝原記は貞享二年 是より上松の驛まで十二町ありといふ、坂を上れば左の方に番所あり、坂を下れば上松の驛なり、御休所と書し札いだせる家多し、土橋をわたり長き坂を下れば、道に白き砂あり、人家あり、桃李の花さきみだれたり、むかふの岩より水のながれちるさま清し、又人家あり、彌生の新茶屋といふ、炭餅をひさぐ、けふ三月盡なり、彌生の名もゆかしけれど、炭の味は伯夷ならねばしらす、右の方に、高さ數十丈もあらんと見ゆる巖の面を平らかにけづりて文字をえり。

此石垣
慶安元

戊子年
六月良辰成就
焉畢

例のふるきを好む病やます、懐にもせし墨もて打んとするに、下のくだりの文字のあたりまで、やうやうに手のとくほどとなり、石のおもてもあらくし、とても摺うつすべくもあらねばやみぬ、深山の雲のたちるに雨さへばらくとふり来れり、まことや、木曾のかけ橋の名のみことくしういひもて傳ふるは、わづかに十間ばかりの板橋なり、川のかたに欄干あり、昔はあやしき所なりしを、尾張の君よ此橋をかけ給ひ、岸のもとより石垣をつきあげて、橋をかけたなり、今まで過來し道のかけはしは、山のそば道に柴をよせてみれば、あやうき事かぎりなし、見る所のきく所に異なる事、これにてもえらる、ゆきくわて御嶽の雪しろく見ゆ、左の方に御嶽山權現の鳥居たてり、猶岨を右にし川を左にしてゆけば、所々に桃李の花さかりなり、中平村の立場をすぎ坂を下りて福島の驛に在る、八澤町などいふ所を過て

右へ曲りゆく、人家にぎはし、こゝは福島の關のこなたなれば、夕ぐれに關越かねるものなどやどりとる事多ければ、かくは賑はへるなるべし、福島の御關所は尾張の山村氏の守る所なり、まづ御用の文書いれたる長持の櫃を先にたて、そのよしを告るに、しばらく關の戸口にまたせて、さきさきの例など下づかさに尋ねとふさまなり、やゝありて通ふるべきよしをいふ、下づかさのもの階に下りて會釋す、關を越て上田村にいたる、こゝに今井四郎兼平か父、木曾仲三兼遠が屋敷の跡あり、道より左の方なり、木曾義仲の父帶刀先生義賢、悪源太義平にうたれし時、義仲二歳なりしを、母抱て信濃に下り、仲三兼遠が養育にてひとゝなり給ひし事思ひ出て、里人にとふにしかまかといふ、上田村を出て右のかたに天満宮あり、石坂高し、これ木曾義仲を祭れるなりと里人はいへり、我かつて義仲論つくりて、その志を哀めり、今この所を過て懷舊の善念をのぶる事を得たり、上田橋をわたりて小澤村の立場にいこふ、こゝに駒石石作先生の墓といへる碑あり、石作士幹諱貞稱貞一郎とまゐる、寛政八年丙辰三月紀徳民の文なり、是より右

の方にむかへば此頃見つゝ來し駒が嶽近し、山の上の雪あり、あまりに面白ければ矢たての筆とりいでゝかたをうつせり、駒が石といふ石山のうへにあり、左の川をへだて、むかひの山の腰に大なる岩さし出たり、藤波記にはゆる明星岩なるべし、橋をわたれば原野村なり、人家數十戸左右にならべり、みな例の板屋なり、七里番といへる札かけたるは尾張の脚夫にや、右は岨左は川なり、橋をわたりて亂塔あり、宮の越の驛を過て、右の畑に樋口次郎がやしき跡あり、左に徳恩寺といふ寺ありて、巴、山吹二女の墓ありときしが、いそぎて見すこしつ、宮の橋の前なる右のかたの細き道をゆけば八幡宮あり、是木曾義仲を祭れるなり、鳥居のもとに松たかくたてり、橋をわたりて左の人家を徳恩寺村と云、右の川にふかき淵あり、うづまく水の音高し、是を巴が淵なり、右の方に丸く高き山あり宮の尾と云、坂を上り、くだりて川を右にしてゆけば、大なる岩をばだてり、上に大きな丸山あり、松の尾といふ。下吉田の人家わびしき所なり、吉田橋をわたり、川を左にし又小橋をわたり坂を上れば上吉田の立場なり、川

ぎしにそひて山路をのぼり下りゆく、左の木曾川にわたせる橋あり、この橋をわたれば、昔といふ所にゆく道といふ、橋をわたらずして、右の岨にそひゆけば怪き巖そばたり、夕日のかけ山のはにかくるゝに、けふは彌生の小盡なり、さすがに春のなごり覺えて、かへり見がちにゆく、藪原の驛にいれば、驛舎のさまにぎわし、お六櫛あら、ぎの箸ひさぐもの多し、此所より諸國につたふといふ今宵は米屋何がしが家にやとりぬ、あるじまめやかなるものにて、何くれと物がたれり、お六櫛の事をとふに、お六といへる女はじめてみねばりの木をもて此櫛をひき出せり、しかるに此あるじのおぢなるもの此業をつぎて、みねばりの木をつげの木もて此櫛をひき、諸國にひろめしより、あまねくまれりといへり、藪原またやご原ともよぶ、

四月朔日。晴たり、宿を出て左に石表あり、右江戸井善光寺道、左飛騨みちとるりつけたり、坂を上れば鳥居畔なり、六町ほど上り左へ曲り右に折れ、又左へまがり右に折れ、又左へ曲り右にすこしゆく、又左へすこし曲り右にすこし折れゆく事二度、又

左右に曲る事長し、又すこしく左右にまがり左へすこし曲りて右に長く折れゆけば山の頂なり、こゝにしてかへりみ見れば、左の方に遠く駒が嶽をびへ、右に飛騨の乗鞍が岳長く横たはれり、ともに雪をいたく、此時の道はつら折なれど、道はいもひろく清らにして他に異なり、木曾義仲の硯水に用給ふといふ清水ありときしが、見すぐしぬ、三軒屋の立場にいこへば、例の熊の皮熊の膽めせとす、む、此あたりより、やうく木曾の谷を出はなれて木曾川をへだつなるべし、矢立坂を上り下りて左の方に鎮大明神の社あり、鳥居よりいりてぬかづきつゝ、奈良井の驛舎を見わたせば、梅、櫻、ひがんざくら、はた、李のはな枝をまじへて春のなかばの心地せらる、驛亭に小道具をひさぐもの多し膳、椀、辨當箱、盃、曲ものなどみな此邊の細工なり、されどたくみあしくして會津細工のもの、ごとし、驛舎も又賑はへり、左のかたに寺みつばかり見ゆ、坂を上り岨を左にしてゆく、奈良井の橋をわたり、石川の水を左にしゆく、平澤村といふにいたるには、畑よりすこし上りたる道なり、右に諏訪大明神の宮

居あり、御柱とて柱四本たてたり、土人諏訪明神の母君なりといふ、此村の邊り山椒魚といふ物をひさぐ、箱根山にて見し魚なり、又奇石をひさぐものあり、一昨日和合村にて買ひし酒とり出てくむ、熊の皮めせとす、むる事例のごとし、すは坂をこえ、橋をわたりて押込村を過ぎ熱川の驛に入る、驛の中に用水の溝あり、驛をはなれて小たかき所に番所あり、尾張より番をすて曲物の器を改るといふ、犀川を右にし、ばん坂といふ坂を上り下りて人家あり、椽の木といふ、猶川を右にし山を左にして中畑村にいたる、是より岸高き所に上りまがりて人家あり、また橋をわたりて片平村の人家なり、左に白山権現の社あり、橋をわたればさえ木川左にあり、立場あり、櫻澤村といふ、かの熊の皮熊の膽めせとす、むるも安までなりといふ、坂を上りて高き岸の上をゆき、又まがり折れて下る事急なり、塚橋といふを渡るに、自此橋西尾張領自此橋中東松平丹波守御領所といふ標あり、此川も木曾山より出る川なりといふ、是より東は松本の領にして木曾の堺なりとさくもうれしく、猶山を右にして川を左にしてゆ

くに、川の向ふはみな山なり、右に熊野の宮あり、此邊右は岨山にして左はながれの畑なり、畑のむかふに犀川ながれ、川のむかふは又山なり、高き所にのぼり下りて立場あり、ひでまは村といふ、爰にも猶熊の皮めせといふもうるさし、されど是より東にはなし、一里塚をこゆれば左右ともにみな畑なり、右のむかふに山つらなり左に川ながれ、川の向ひは又山なり、土橋をわたれば大石左右にみだれふして又山路にいかと疑ふ、右の森の中に観音堂あり、土橋をわたりて右に八幡宮あり、長久寺といふ寺の屋根見ゆ、本山の驛にはうんどんそば切しつぼぐといふ看板多し、江州日野定宿多し、驛をはなれて左右ともにうちひらきたる畑見るもめづらし、山々遠くつらなれば鶴沼よりこのあたりまで、みな山あひゆきめぐりて木曾川の流にそひ。巖石のなかをふみわけしが、かの嶮棧を行過て褒斜を出るといひし唐詩をよむがごとし、右に薬師堂あり、坂を下りて右に瀧大神あり、橋をわたり右に地藏山あり、黄檗宗の寺も見ゆ、又社あり、洗馬の驛々は松本諸白うる家多し、追分荷廻し所と書し札ある家も見ゆ、左の

方に太田の清水といふありて木曾殿の馬を洗ひしより、洗馬の名ありとぞ、右に神明あり、左に善光寺道あり、右へ曲り坂を上りて、岨を右にし左はがけなり、がけの下に畑あり、是より東は桔梗が原とて古戰場なり、北に飛驒の乗鞍が岳駒が岳の雪はるかに見ゆ、原の間渺々として、左右ともに麥畑菜圃なり、山遠くへたゞりてながめはるかなり、二軒茶屋の立場にいこふ、桔梗原名物さとう餅、あは餅、せうちうといへる看板かけたり、一里塚をこえて大門村にいれば桃の花さかりなり、右の方にはるかに寺見えて、彼岸櫻さきみだれたり、左に柴宮八幡宮あり、右松本道中山道といへる石表もあり、土橋をわたり大小屋村にいれば左右ともに田なり、左に正八幡式内大宮阿禮神社います、鹽尻の驛は、去年の冬左かほの民家やけて、あらたにいとみなたつもあり、右の人家の障子に名酒菊波きせ川はつかすみなど書つけたり、晝御支度所御休所など書しもあり、右に三河道左に寺あり、土橋をわたりて柿澤村なり、右に二人のたてる形ちをゑりたるは道祖神にや、江戸なる道灌山にて、近頃ほり出せるものに似たり、

左右ともに畑にして芝生の小松ある所をゆく、左に庚申二十三夜塔あり、鹽をつけたる馬引つらねて来たれり、是は東海道の沼津より甲州の鎌澤まで船にて廻り、それより馬につけて松本の城下にゆくと云鹽二升價百文位なり右のむかふに、山ちかく見えて芝生ひ小松とところとあり、大木なし、人家あり、立場なり、是より鹽尻峠へ二十四町のぼるといへど、つまさき上りといふものにて、さのみけはしきにもあらず、左にいの字山といふあり、げにもいの字の形したる芝山なり、一里塚をこえて小流あり、板橋を渡りて立場あり、左の山に淺間社の鳥居たてり、是より漸々山を下りゆくに、むかふにまろく見ゆるは、名におふ諏訪の湖水なり、右は谷ふかく左の岨にそひつ、ゆく、左に鳴澤権現道あり、四ッ屋の立場を富士見茶屋といふ、此前の山の上より見しに、むかふの右の山の上より、富士の山のかたちしたる山ほのかに見えしがたちまちに雲たちおほひて見えずなりしは、わが僻目にや、左の岨に熊笹多し、そはつたひに湖水のかたにむかひゆく、右に横たはれる山あり、山のあなたは高遠のかたなり、左にさし出た

る山あり、是上諏訪の山なり、山のふもとに白く見ゆるは諏訪の城なり、湖の中にさし出て繪にもかまほし、山のあなたに見ゆる山は八ツがたけのみねなり、右のふかき谷は湖水の岸につまきて田なり、東堀村の人家賑はし、あひの宿なりといふ、左右ともに、田の中をゆきく、湖水のほとりに出て、橋をわたりゆけば、下諏訪の社左に見ゆ、大川のなみ木十八町ありといふ、古歌に、「信濃なる衣が崎にきて見れば富士のうへこぐあまの釣船」といふを、跡なる茶屋の障子にかきてありしなり、下諏訪の驛舎にぎわし、秋の宮の前をすぎて檜物屋口口家にあどる、宿のむかふに温泉あり、宿のあるじ、風呂たて勞をはぶきて温泉に浴せしむ、けふ鹽尻のみねを下る頃より雨ふり出ぬ、まこと、木曾路の山を出しより山吹の花を見ず、けふみし所に竹なし、寒氣甚しく綿入れたる衣みつすかさねて猶羽織を着たり、衣更の事などは思ひもよらず、(信濃地名考或曰若櫻宮天皇御製すわの海衣かさききてみればふしのだけこぐ海士の釣舟、これらの歌いとふかしき事なれど人口にあれば暫く、に記すとあり、茶店の障子

には西行の歌と記せり)
 二日雨やまず、人々雨つゝみして出たつ、輿にも雨皮かけて、窓の簾の上にも軒をはり出たれば、ながめをさへへられ出入毎に雨したゝりて、かちより行がたく、輿の中にかゝみ居つゝ、猶あらじに左右をかへり見れば、右に引接山といふ額かけし寺あり、左に社あり、大木たてり、右に石坂見ゆ、庚申といふ字ありたる石あり、やうく左に湖水見わたされ、昨日右に見しものをけふは左に見つゝゆく、右中山道左諏訪大神道といへる石表あり、諏訪大明神へ三町といへる書つけもありしかど、輿より出べくもあらず、御社の屋根をはるかにながめて見過しぬ、岨を右にし谷川を左にす、田川といふとぞ、川のむかひは山なり、一里塚をこえて右に小諸道あり、(再按小諸道と見しは誤なるべし)、又諏訪大明神あり、山道を上り下りて左の川岸にそびゆく事や、久しくして、落合の橋をわたり坂を上る、右にたてる巖を見るにへなの塊に似たり、すこし下りゆく事長くして、一里塚あり右木枯、赤坂を上りて又少し下りて又上りゆく小流あり左堰、土橋をわたりて左に観音

堂あり、豊橋の立場は茶屋四五軒ありて、いこふによろし、坂を下りて谷にいれば橋あり、左のかたに右は中仙道左は山道としるせる石表たてり、ふかき谷を右にして岨傳ひの道をゆく、道に熊笹生ひしげり、谷の水音ひきあひて雨雲の霧にむせぶ、左の岨に獅子の臥したる形ある岩あり、香爐岩といふ、藤をかゝけて見るといひし峯の雪もなつかし、輿かくもの、わが此岩の名をめづるを見て、猶ゆく先には樽岩惠比須大黒などいへるめでたき岩の候といふもおかし、猶谷川を右にし山を左にしてゆけば道もさりあへず、巖石のくだけ落たるありて、かち人のあゆみくるし、左の岨に栗の木の枝を垂れて、垂絲海棠のごとく見ゆる木二もとありしはいかなる木と問へば、栗の木なり、むかしより天狗のやすみ所といひならはして、かくのごとくにしたれたりといふ、又大なる樅の木二本あり、山水のみなぎり落る所にかけし大橋をわたりて、坂をのぼれば道に碎けたる石多し、雨さへつよければ人々の行なやむもことはりなり、ほうろく坂を上りて山あひを曲り猶山にのぼる事高し、道をはさみて熊笹多し、餅屋峠を上り

て西餅屋村の立場にいこふ、こゝに名物の水餅あり、一袋かひて輿の中にをさむ、袋に日野屋六兵衛とあり、一里塚に木なし、又小曲り大曲りといふ道を上りてゆけば、左の山ぎはに鳥居あり、四本柱たてしは諏訪明神なるべし、猶山にのぼる事久しくして、左右に芝山ありて草木なし、碎たる石のみ多し、右の山の半腹に大きな岩あり、新道坂を上りてついにのぼる道をやうちに、深き谷より一むら雲のたのぼるを見るがうちに、風冷に霧なまぐさくして、衣の袖もうちまめれば、輿の戸たて、うつぶしにおるに、猶すゝみがたきは雲のちかく行かふなるべし、雲は梁棟の間に生ずといへるから歌の心も思ひ出らる、此あたり、ことに碎けたる石のつもれるをふみわけてのぼる事はし、絶頂にいたれば、榜示株たて、自是東籬笠之助御代官所と記せり、是より西は諏訪峠にて東は和田峠とぞいふなる、ふもとよりこゝまで三里三町のぼれり、げにけふの天気には雨にきる籬笠の名もつきつきしかと思はる、山かげに白く見ゆるは、みな雪の、これなるなり、衣をかさねて肌寒く、卯月の空とおもはれず、東餅屋村の立場

里塚をへて木枯見ませ村の人家をすぎゆけば左に寺あり、ゆき〜て筑摩川ながる、河原廣し、大橋小橋をわたりゆく、橋の前に駒よせあり、鹽名田の驛舎わびしき所なり、雨またふり來れり、坂を上れば右の山に正一位瀧大明神あり、驛舎の中に名物相木そば、銘酒松瀬川あり、こゝにも新華臺とかけの門牌あり、下には椏の葉をしけり、左右は田面にて左に社あり、むかふ人家に水車四ツ五見ゆ、左に櫻の八重も一重も咲みだれて、流に臨めるけしきは見所あり、猶岨道を右にとりて坂を上る駒形坂といふ、左の松山のすこし小高き所に駒形大明神まします、下塚原村を過て左右はみな田なり、右に寺あり、左の田中に小社あり、一里塚をへて木枯左右をのぞめば田面はるかに見ゆ、小流あり、上州高崎清海寺留場あり、人家まゝあり、左に社あり、すべて田の中所々に塚のごときものあり、爰を平塚原村といふ立場なり、一里塚をこえて木枯右に相生の松あり、又社あり、左の方に淺間山見ゆ、岩村田驛には信濃國佐久間郡岩村田驛といへる榜示をたつ、驛の中をたてにゆく用水の溝あり、右の方に右甲州道左中山

道とかける石表あり、驛舎のうちに髮結所あり、そるは千年かみは萬年とかけるも、田舎人のたはふれ事と見へておかし、右に下仁田道あり、左に社あり、驛中にすべて市人の家多し、げんきかな染取次所小諸本町などいへる札あり、右に一禪寺あり、門に東山禪窟といふ額をかく、左に禪光寺道あり、右に住吉大明神あり、驛を出て左右ともに田畑見えてうちひらきたる所なり、左のかたに淺間山を見つ、ゆとぞ、右に一つの山近く見ゆ、三井の何某の城跡なりとぞ、此うちに富士の山の形ちしたる山もありしといふ、すべて道はひろくして人家なし、小田井の驛にいれば一重の桃花さかりなり、驛中に用水あり左右の道をさかへ當國名酒松本諸白とかける招牌あり、又須坂松本上諸白とかけるもあり、左の方に八がたけ飯盛山などいふ山々見ゆ、ませ口村の人家を過て左右ともに芝原なり、畑などにつくれるもあり、一里塚をこえて道ひろくたひらかなり、大久保といふ所を過て左は淺間山のみもととなり、ふもとに林あり、牧野虎之丞の林なりといふ、山のいただきまでは一里ばかりのぼるといふ、四月八日にのぼるとぞ、山

はいたりて高けれども、麓の地高き所ゆへさのみ高からぬ様に見ゆ、山の上はつねに烟立のぼりて草木なし、赤き水ながれ出る所あり、血の池といふ、燒石の色黒く見ゆ、麓に寺あり眞樂寺といふ、追分の驛にいれば中山道追分宿自是東榊原小兵衛支配所といへる榜示あり、左に北國善光寺道あり、是によりて追分といふとぞ、淺間山より右の方からほりといふ山あり、此山の右にあたりて石のたちたる九き山あり、も澤といふ驛舎のさま賑はし、名物そば、うんどん、銘酒須坂松本もろ白、また松瀬川といへるもあり、左に禪寺あり、右に諏訪大明神あり、左に淺間道あり、芭蕉翁の句塚あり、上の方は見過しつしや道のほとりに馬頭觀世音とゑりたる碑三所ばかりあり、又二十三夜塔とゑりしも見ゆ、左右ともに芝原なり、淺間山のやけ石多し、一里塚をへて木枯右に自是左上州大さくさつあかつま道とゑれる碑あり、かりやと村の人家をへて左に社あり、遠近宮といへる額かけたる鳥居たてり、是はかの遠近人のみやはとかめぬといへる歌をさゝあやまりて、淺間の山のほとりにたてしなるべし、和歌の浦のかた

男波伊吹山のかくと谷と同日の談なるべし、野原を過て人家あり、古宿といふ坂を少し下りゆけば、左の岡に堂あり、沓懸の驛は人家まれなり、驛の中に用水流る、事前のことく、驛舎のさまわびし、神風丸といへる樂賣家ありて、疊御望次第などかける障子もことやうなり、左に社あり、又寺あり、長念山といふ、又八幡あり、小流の土橋をわたる、右に水車あり、又一里塚右のかたなる古道にあり、左に丸くはなれたる山あり、はなれ山といふ、道のほとりに近し、左右ともに畑ある所をゆきてすこしばかりの岨道をのぼれば、左右ともに芝原なり、前澤といふ村人家あり、左の岨に社あり、右は又芝原なり、鹽澤村の人家をすぎ、むかし源頼朝卿此あたりなる鹽澤に狩し給ひし時、御膳をたく料に此村の水を用ひしが、鹹き味ありしゆゑに鹽澤といふとぞ、右のかたなる佛岩といふ岩山に窟岩といふ岩あり、その御膳を炊たる所なりといふ、小流あり、石橋をわたりて輕井澤にいる、こゝはあやしのうかれ女のふしどときけばさしのぞきて見るに、いかにもひなびたれど、さすがに前の驛より賑はしく見ゆ、障子に

國の名物二八そばとかける多し、白井峠にのぼらんとして興より下り徒よりゆく、ひぢり澤よりから澤といへる長き坂を上るに、此頃の寒さに衣をかさねたるがやゝあつき心地すれば、立場の茶屋にいこひて衣ぬがんとするに、道のほとりに麻上下着て出てひさまづくものあり、誰ぞと問へば此山の上なる熊野権現の神主なり、おのがやどりに案内して晝のやすみとらせんといへど、今日は熊野権現の祭とて太々講とかや、社をむすべるものよりつどひて、神樂をすゝめ酒のみ物くふさま見ゆれば人だち多き所にまじはらんもうるさく、漸々にすかしこしらへて権現の社にもまうです、峠の立場にもいこはずして行過ぬ、左の山ぎはに二王堂あり、金剛力士の像古く見ゆ、此所信濃と上毛野の界なりといふ、はつ坂長坂をこえて笹澤といふ所に至る、清水ながれ出づ、丸き山あり子持山といふ、姥かふところばらむきが平などいふ所をすぐ、このあたりより香妻のかたをながめやるに、日本武尊の昔思ひ出らる、春のなごりのかすみわたれる山々のけしき、いふもさらなり、山中坂を上りて立場あり、賑はしき茶屋なり、餅う

る家あり山中村といふ、八重さくらの花今を盛なり、まこめ坂を過て右の方にいとけはしき岩山ならびたり、御はやしの山といふ、麓に御林あり、板倉伊豫守の御預なり、八人山伏といふ岩ありて、八つの岩ならびたり、又地藏岩といふあり、そのうしろは妙義の山なりといふ、是まで岩山を見しかど、かゝる険しき岩の色黒きが雲をしのぎてたてるを見ず、唐書にかける山のごとし、入道がくぼをすぎてくりから平にいたる、是より左のかたを見れば、又さかしき岩あり天狗岩といふ、そのむかふに榛名山あり、赤城の山もつらなりて見ゆ、ゆきくたへちに絶壁にのぞむ、爰を座頭ころばしといふもむべなり、目しひのものはおちいりぬべし、細き道を左にとりてかんば坂をすきゆけば左右ともに深き谷にして、たゞ一筋のはそき道あり、堀切と名付く、昔豊臣氏小田原を攻め給ひし時、大道寺駿河守政繁此坂を堀切りて北國勢をふせぎしが、上杉景勝、前田利家のためにやぶられしとなん、まことにさかしき切所といふべし、はんね石といふ所には石多し、観音あり、風穴などいへる谷々をこえて、赤土坂を下

り松木坂を下りゆけば左に鳥居あり、坂本の驛につく、今宵は肥前少將泊といへる關札ありて、本陣脇本陣よりはじめて諸士のやどりみちくたり、かなき屋七右衛門といへる宿にとまれり、庭に躑躅の花紅なり、
 四日 的空曇り夜あけてたつ、驛のうちに例の用水の溝あり、驛を出て又人家あり、原村といふ、薬師坂を下り川久保橋をわたりて横川の關あり、關のあら垣のもとにたゝすみて、御用の書物おさめし長持の櫃を番所の前にかきすえさせ、従者をしてその趣を告しめしに、御用の文書をさめたれば長持の櫃の中をばうかはず、されど關の法なればこれが鎖をひらく、あらたむるよしをいひて通る事をゆるす、横川村を過て左に社二つあり、山の岨を左にし川を右にしゆくに川のむかひに黒き岩山二つばかり峙り、これ板倉伊豫守の預り守る御林山なり、坂を下りて左の岨に足の踵の形して、くぼく穿てる石あり、俗に百合若大臣の足跡石といふ、右のさかしき岩山に穴二つあり、西なるは大に東は小さし、是は射ぬけ山とて百合若の射ぬき跡なりなど、興かく者の

かたるもおかし、もろこしの明月峽のたぐひなるべし、右に妙義道あり、わづかに一里半ありといふ、坂を下りて橋をわたる、左の林の中に石坂高く見え、鳥居たてり、碓氷権現なり、右の川にわたせし橋をわたりて坂にのぼれば川を見ず、梨の木の立場をこえ、小橋をわたりゆけば右に茶釜石といふ石あり、是をうてば鏘然として聲あり、さきに中津川と落合の驛の間に見し一命石に同じ、丸山坂を上り下りて左に小社あり、左右はみな畑なり、五領村の人家を過、鳥井坂を下りて又左右の畑を見つゝゆくに、右に見えし岩山見えすなりぬ、右にながる、川を碓氷川といふ、坂をめぐり上りて川を見ず、新堀村を過て左に八幡宮見ゆ、人家多し、左に關左法窟といふ額かけし寺あり、松井田の驛にきはへり、障子に本饅頭など書しも見ゆ、すねりあらひはりなど書るもあり、煙草賣るもの、障子に切粉師と書たるもおかし、浪花の具足屋町の錐うるもの、看板に打込司と書たると同日の談なるべし、左に榛名道あり、これより六里と去るせり、猶岨を左にし川を右にしてゆく川のむかふはみな畑なり、此あたりより雨ふり來

りて右に見えし妙義の山も見えず、白雲山の名にし
 おふ雲のうちにかくるゝもほいなし、あふ坂といふ
 坂をまがりてくだりゆく、これより江戸迄平地なり
 とさくもうれし、ささしもさかしき山路をへつゝか
 け橋の危きをわたり來し事、今さらに思へば、痛定
 りて痛を思ふといひけん昌黎のことばも思ひ出ら
 る、人家あり、左右の岨をすこしばかりのぼり下り
 て右に谷有、又妙義道あり、琵琶の窪といふ所は人
 家多し、麻繩のみ水呑などいふものをひさぐ、左の
 方に寺二つあり、雨、霧の如くふり來りておやみ
 なければ、雨つゝみしてゆく、左に社あり、又田舎
 にはめづらかなるからくり的といへるもの左右の
 人家にあり、是は妙義に詣ぬる人多ければにや、
 左右ともに畑にして人家まゝ見ゆ、右に檜の木のな
 み立る構あり、萬福寺といふ寺なり、眞言寺領三十五
 石ありといふ、左に小社あり、又地藏堂あり、八本
 木の立場にて右の方に藤の棚ある家あり、たちいり
 て見るに花さかりにして、躑躅、牡丹咲みだれたり、
 まばしいこひていづ、左に稻荷の社あり、一里塚あ
 かし右をこゆれば左右ともみな畑なり、左の人家に上

原市宿八本木鎌と云鍛冶あり、こゝにも網と麻繩を
 ひさぐ、また樓門ありて時鐘といへる額かけしも見
 ゆ、左に伊丹諸白の招牌あり、これより檜原の中を
 ゆく大木多し、左に社あり、人家四五戸あり、猶も
 檜のなみ木をすぎて安中の驛にいる、左に社あり、
 又大師堂あり、又左右に寺あり、左右ともに畑の中
 をゆくに左に寺見ゆ、安中川を橋よりわたりて人家
 あり、中宿村といふ、左右に畑ありて、左に川なが
 る、きり岸高く見ゆ、右に寺あり、板はな川の橋を
 わたれば板鼻の驛むげに近し、驛舎を出て、麥畑の中
 へ行けば橋あり、新建石ばし木嶋七郎左衛門供養
 塔とへる石たてり、げに累々たる石佛をつくらんよ
 りは橋たてし功德はまさりぬべし、左に八幡宮あり、
 大門に檜の並木つらなれり、右のかたに川水ながれ、
 左に富士を祭れる社あり、藤塚村の人家を見るに、
 竹の籬にほりすかして繪のかたちしたるをひさぐ、
 右に若宮八幡あり、鐘樓ありて木立物ふりたり、左
 に八幡山常安寺といふ寺あり、門に掲げし八幡山の
 額に藤煥圖家とあり、是は徂徠の門人東野の名なり、
 いかなるゆかりありて此所の額をや書けん、豊岡村

を過て右に大日堂あり、ゆきく右の方に見ゆる
 城は高崎なるべし、高崎川の橋をわたる、鳥川とも
 云、高崎の驛舎にぎはし、江戸にかへりし心地ぞ
 する、精太織小間物樂店など見ゆ、當國館山名沼田
 たばことかける障子もあり、赤坂町に書肆あり、三
 河屋喜八といふ、中山道にてはじめて書肆を見る、
 本町一丁目より三丁目にいたりて曲れば、左に前橋
 道三里といへる石のしるしたてり、田町をへて左に
 寺あり、連雀町にも又寺あり、右に田舎屋といへる
 本屋も見ゆ、諏訪大明神の社はちさき土藏づくりな
 り、新町にも又寺あり、此驛を出て兩行の檜みちを
 はさめり、左右ともに畑なり、左の木の間より淺間
 山遠く見ゆ、此あたりは檜に松の枝をまじへて風す
 しく、麥の青葉のそよぎわたるにはじめて夏に入
 りし心地す、石橋をわたりて勝澤の立場あり、一里
 塚をへて右の方をかへり見れば高崎の城まで見わ
 たさる、倉加野の驛の本陣には松平右衛門佐殿宿ら
 せ給ふ肥前少將御嫡子、今宵は脇本陣□□□□が家にや
 とる、庭に牡丹の花さかりなり、宿のあるじまめや
 かなるものにて酒すゝめ物がたれり、此わたりには

塚の様なるもの多し、去年も土にてつくりたる馬の
 形したるもの堀出せり、下佐野にての事なりといふ、
 佐野の舟橋も近しときけど、歸るさいそぐ旅なれば
 立よりて見ず、のこり多かる事なるべし、
 五日。晴たり、小橋をわたりて左の方に、右江戸道
 左日光道といふ石表あり、道のゆくての右のはたに
 塚の様なるもの多し、左右の麥畑を見やるに實のり
 よく見ゆ、松の下に自是西高崎領といへる榜示あり、
 中里村をすぎて群馬郡岩鼻村といふ榜示あり、左に
 淨土宗の寺あり、十王堂もあり、小坂を下りて柳瀬
 川を舟にてわたる、此川は鳥川とかんな川の落合な
 りといふ、道の右に右立石金毘羅道右藤岡道左中山
 道江戸道といふ石のゑるしあり、わが甥松田信義吉
 耶縣の會にしたがひて、ひさしく藤岡にうつり居し
 が、去々年の春江戸にかへりて身まかりぬ、今此藤
 岡道といへる石のしるしを見て往來みな此路生死不
 同歸といへる詩も思ひ出られつゝ、羊公の碑にはあ
 らねど涙まづ落ぬべし、人家あり、中嶋村の立場な
 り、左右はみな麥畑にして桑をもて垣とす、左に鳥
 川ながれて岸高く見ゆ、右に小社あり、立石新田を

へて左に辻堂あり、また稻荷の社あり、小流あり、橋を渡りて新町の驛をすぎ驛舎長たくつゝ、けり、左に寺あり、又宿助郷人馬札揚所といへる札かけし會所あり、上野國緑野郡稻垣藤四郎支配所といへる榜示たてり、芝原を左右にしつゝ、ゆきて神奈川をわたる、河原廣ければ板橋二つばかりわたる、是上野の國と武藏との堺なりときくもうれしく、一年の役つゝ、がなくしてわがうぶすな國にかへりぬる事をよろこぶ、人家あり、勝場宿と書るを今はかつば宿とよひなまれり、右に日本武尊舊跡式内青坂三所稻實神社南九町ほど、かける札をたつ、ゆきても見まほしけれど力なし、此あたりの人家に屋根板、蠶籠の類多し、左右は例の麥畑に桑の垣なり、左に堂あり、左に愛宕山の鳥居あり、右に大きな寺の大門見ゆ、左に伊香保道あり、人家あり、かなくぼ村といふ、左に八幡宮たゞせ給ふ、鐘樓もあり、ある人家に品々油しめ所といふ札あり、石神村の立場を過て右に辻堂あり、左へ曲りて右の小高き所に鳥居あり、富士山といへる額をかく淺間の社なるべし、猶麥畑と桑の木の中をゆく、右に小社あり、一里塚標をへて

右に八幡山あり、小嶋村の人家をすぐるに道の中に大なる松一本あり、袖すり松とも又は加賀のすて松ともいふよし、松のもとに牛頭天王の小社あり、本庄の驛舎にぎはし、御代官榊原小兵衛支配所なり、南町本町臺町などあり、左に金さな大明神あり、又雷電の宮あり、又大きな寺ありて樓門たてり、右にも寺あり、驛舎のうちに書肆あり、文廣堂といふ米屋又新古本屋林屋といふも見ゆ、江戸兩替町下村山城油ありと書し招牌あり、薬ひさぐもの多し、是より麥畑桑垣を左右にして小坂を下り小橋をわたり一里塚標をこゆ、左に堂有、人家あり、榜示堂村の立場なり、麥畑をへて左に鳥居あり、人家あり、牧西の立場といふ、ゆくての道に榜示杭のたてるを見れば、自是東北黒田豊前守領分とあり、是より西北と書る所もあり、自是西北遠山富次郎ともありき、小山川あり、河原あり、橋よりわたれば、自是東南數原通玄知行所又は曲淵市左衛門ともあり、又は黒田豊前守領分ともに入交りたり、小社を左にし岡村の人家をすぎ、右に聖天あり、また寺あり、又社あり、榛澤郡惣社島護大明神、天津彦少瓊々杵尊と云

るせり、岡部村のさし入に土手あり、道は、ひろし、爰は安部攝津守の領する所なりとぞ、爰は岡部六彌太忠澄の舊跡なり、その墓の跡もとほまほしく、左の方の菴にいりて尋るに童子をして案内せしむ、つらなれる墓あるあたりをおくふかくいりて見るに、五輪苦むしたるが三つばかりならびたり、一つの石に、慶基といふ字と明徳四年癸酉十月三日といへる文字、かすかにのこれるはその子孫にや、今もその跡岡部内記といへる人いまそかりけり、菴の隣にある寺を玉龍山普濟寺といふ、これその寺なるべし、土手を出れば左右ともに人家すくなく、畑には麥、垣には桑多し、宿禰村の人家またわびし、左に寺あり、社あり、右に寺あり、深谷の驛は榛澤郡にして御代官野口辰之助支配とある榜示見ゆ、左に社あり、驛舎の道の中に苔蘚疊俵やうの物、又はくだ物青物をつらねて賑は、しきさまなれば、興かくものにとへば、爰は五十の日に市たちて賑は、し、けふは五日なればかくつどへるといふも所からおかし、ある家のみせの先なる株に、今より三年が間馬つなくべからすとかけるもめづらし、小橋をわたりて人家を

すぎて左に観音堂あり、是より左右に松杉柏などならびたてる中をゆくに、左に芭蕉塚あり、又麥の畑の中をゆけば、左右に桑の垣あり、東方村の人家をこえて左に堂あり、左右ともに松の林にくさくさの木交りたる所をゆく、ある人家に太鼓三味線はりかへといへる札出せるあり、此あたり童のはくわら履をつくりて賣るもの多し、かご原村におほり村をすぎ、右に知番山といへる額かけし寺あり、高柳村のきぐわ村の人家をすぎ砂川をわたり、新島村の立場をこえゆけば、右に寺あり、自是南忍領といふ石表あり、一里塚標をへて左に自是東南忍領といふ印あり、爰の人家に齊田鹽安賣一俵四百三十二文一升廿八文といふ札あり、石橋をわたりゆけば小川ながる、熊谷の驛にいれば道は、岡部よりもひろく、人家ことに賑ひて江戸のさまに似たり、木戸にいらんとする左の方に逆生寺見えしが、日高ければ宿につきて後に見んとてゆき過しぬ、人家に即席御料理など書る看板あり、藥賣るもの、軒に出せる招牌に、藥種とかける文字はじめ楷書に書て、江戸の藥舖に異ならず、去年東海道よりはじめて、京大坂の町々をも見しに、藥

種の文字はかならず草書にかきて見えしが、けふはじめて江戸にいれる心地す、かばかりのものも故郷なつかしく覺ゆるは旅人の心なるべし、布施半藏といへる宿にとまり定めて湯あみ物くひ酒のみなどしつゝ、まだ日も暮れねば蓮生寺のうら門より入て見るに、本堂の額熊谷寺の三字は支那傳法沙門高泉書とあり、門の額は蓮生山の字なり、日くれかゝりて筆者の名をわかつたず、熊谷蓮生法師の事は人みなしる處なり、この所に終りける事委しくは縁起に見えたり、けふ一日のうちに岡部六彌太忠澄の墓をとひ、熊谷次郎直實の寺を見る事、思へば不思議なる事なるべし、又高城宮といふもあり、いかなる神なる事を知らず、

六日。天氣よしつとめてたつ、左右に田あり、小流あり、石橋をわたりて麥の畑ある所をゆく、此あたりより東の方に桑の垣あるを見ず、一里塚をこえ戸田八丁村ばら村の人家を過て右に社あり、藤花さかりなり、自是東東口院領といへる榜示あり、長き土堤あり、これ熊谷のぼりゆけば右に社あり、ゆきゆきて堤を下れば久下村の立場なり、左に寺あり、

ある人家にあら川うなぎといへる札たてしあり、又堤にあがりてゆけば皂角の木多し、左右ともに田なり、一里塚右側なり左田をへて長き堤をゆく、又堤を下りて吹上村の立場なり、足袋賣るもの多し、又忍領吹上村ふくびやうの妙樂釜屋源兵衛といへる招牌あり、自是南何がし四人の知行所といふ榜示あり、名はわすれたり、また自是東大岡主膳正知行所ともあり、麥の畑を左右に見つゝゆけば、自是西左熊谷道自是西忍道また左忍行田道、右熊谷道といふ印もあり、右によしみ道あり、自是下山平右衛門知行所といふ書付もあり、左の方に諏訪の社あり、武州足立郡箕田村八幡と書る札たてり、又一の碑あり、
武藏州足立郡箕田邑田間有一小竹叢名爲射貫相傳昌平之際源公經基爲鎮在于此邑公嘗歸依三寶欲營無量壽堂因卜其地乃執弓跨馬出于城外北面發矢驗其所築而建焉今觀此叢縱橫有畫密若束箭云云 文長けれ ば下畧す
寶曆九年己卯九月 前龍淵指月老納 東都龍齋山維碩書

の如し、碑文のごとくならば六孫王の舊跡なりと思ひて、一枝をりて家産とす、左の方に新西國第七番吹張山平等寺といふ寺ありて、開帳といへる札をたつ、されど詣づるもの一人だになし、渡邊綱守本尊なりといふ觀世音なり、ゆきくゞて從是東光徳寺領といふ榜示あり、また自是西ともあり、右に寺あり、左に石尊大權現の堂あり、鴻の巢の驛は淺岡彦四郎御代官所といへる榜示たてり、左のかたに社見ゆ、驛舎のさまひなびたり、小川索麴行田營藥などいふ書付見ゆ、左に寺二つばかりあり、右に勝願寺あり、下馬札をたつ、右のかたに自是西北勝願寺領といへる榜示あり、左の方に自是東藤堂肥後守領分とあり、右にちよぶ道よしみ道あり、左に岩槻道あり、左右ともに麥の秋なり、自是東北日下部權左衛門知行所といふ榜示あり、深井村を過て人家あり、あづま村の立場なり右に淺間の社あり、富士山といふ額をかく、鳥居左に寺あり、右に三上因幡守知行所といふ榜示あり、左には自是川越領とあり、又四十八願所第二十三番勝林寺といふ寺あり、松杉のなみ木ある所をゆけば左に小社あり、寺元鶴巢といふ所に

人家あり、下中丸村を過て日下部權左衛門知行所といふ榜示あり、又自是西北牧野大内藏知行所、中山道足立郡桶川宿淺岡彦四郎御代官所といふ榜示たてり、桶川の驛わびしき所なり、爰にて晝の餉す、右に寺あり、門に清水山といふ額かゝれり、左右は畑なり、町屋村の人家をすぎて、自是東南紀伊殿鷹場といふ榜示あり、是より左右は原にして雑木の林もあり、自是東南上尾宿御代官淺岡彦四郎支配所と書る榜示ありて、右に淺間の社あり、又四十八願所第十六番干菜山十連寺是より十八町としるせる榜示あり、左の方に自是東南遍照院領といへる榜示あり、上尾の驛舎ひなびたり、又淺岡彦四郎の支配なり、ある人家の障子に御茶漬十二文、二葉屋活花定會と書るあり、左に寺あり、爰に紀伊殿泊といへるせき札をたつ、人家にも中張紀州役所といへる書付見ゆ、明日は紀の國の大守江戸をたち給ひて、木曾路を過給ふとぞ、驛の中に一里塚あり、松左右ともに雑木の林ある所をゆけば、左に社あり、人家あり、天神橋の立場といふ、左右ともに林多く人家なし、時々茶店など見ゆ、左の方に武藏國一宮是より武町大門

鳥居へいつると書し札たてり、ゆきて見まほしけれど大宮の驛に入らざれば、夫馬をかふるわづらひあり、力なくて見過しぬ、大宮の驛舎も又ひなびたり商人すくなし、一せんめしなど書る札所々にあり、左の方に石表あり、左武藏國大宮氷川大明神本地正觀音とえれり、是大門なるべし、是より十八町ありといふ、土橋をわたり如しゆけば、自是北早川八郎左衛門支配といへる榜示あり御代官、左右に楡のなみ木あり、くさくさの木もまじれり、人家もまゝ見ゆ、右に足立坂東第二番觀音といへるまゝあり、聖徳太子の作なりといふ、右に寺あり、二王門あれど扉をとざせり、左に小社あり、一里塚松をこゆれば浦和の驛なり、右に正一位稻荷社あり鳥居丸うる家あり、王子月參宿と書付し札ある家を見て、やうやく江戸に近づきぬる心地して先うれし、爰に紀伊殿休といへる札をたつ御晝のもの參らせらるなるべし、左に若葉の林まげりあひて林の陰に茶屋の床几など見ゆ、月の宮二十三夜堂なりとぞ、左右ともに畑ある所をゆけば、右に武州足立郡岸村早川八郎左衛門支配といへる榜示たてり御代官、左に自是北南東

紀伊殿鷹場と書る榜示あり、人家あり、右なる大和屋といへる家に本家しつ御樂といへる札を出せり、右に社あり、少し坂を下れば、焼米をうる家あり、よりに焼米坂といへど本名は浦和坂なり、左右の田の中をゆきて土橋をわたれば右に社あり、辻村の立場をすぎ一里塚松をこえて蔵手村をすぎ蔵の驛につく、中山道蔵宿本彌三郎支配といへる榜示あり、右に法華寺あり、今宵は蔦屋庄左衛門といへるもとに宿れり、あすは故郷にかへるまうけとて從者も髪ゆひ顔そりなどしてさわざあへるに、御代官岸本に屬せる者手附須永來り、あすは紀の國のかうのと明六時に邸中を出させ給ひ、四時過る頃には此驛を通らせ給ふべしといふにぞ、あすはとく起出て戸田の川をわたり、板橋の驛をこえなば晝の頃にはやどりにかへりぬべしなど、とり／＼に物語るに、江戸より相知れるもの二人三人來れりとさくもうれし浄榮寺酒肴さへ携へたれば、もろともに酒くみかはしつ、一年のうさをはらしぬ、七日。天氣よし明はてぬまにやどりを出て、元蔵をこえ堤村をへて戸田の川を舟にてわたる、此川上は入

間川にして末は隅田川なり、志村のあたりにて男御井上致鈴木文などの迎ふるに行あひぬ、弟榮名甥野村氏智伊藤綱達もまた來れり、嬉しなどはよのつねなり、おの／＼一年恙なかりしよろこびをのべつ、板橋の驛につく、橋をわたりて左なる酒屋にいこひて、もろ人酒くみかはしつ、紀の國の守の通らせ給ふほど過して庚申塚のかたの道にいり、池袋村を過て護國寺の門前にいこふ、去年神無月の頃生れしとき、しうまご抱て娘なるもの來れり、近くすめる孫女二人もともに來れるを見るに、わづかひととせのほど、はいへど、たけ高く生ひたちたる心地す、音羽町より改代町をへ江戸川をすぎ小石川のわたり官長柳生主の廳事に告て家にかへれり、僮僕よろこびむかへ、稚子門にまつといひけん、親戚の情話をかきもつくさじ、庭の櫻はちりはて、青葉になりしかど、石楠草の花さきのこりて小百合葉の蒼なつかしげなり、先かわらけとり／＼にしたしき友どち入來りて、日のくる、もしらず、そこともわかぬ醉心地に、なほも旅寐の心地なるべし、

壬戌紀行二卷淨寫畢時享和二年季夏十日也

附錄

題屏風畫柳留別浪華諸友

去年東出江都時。都門楊柳綠如絲。今歲西辭浪華日。春風又入綠楊枝。楊柳風流雖可愛。無那年年縮別離。還鄉欲見舊相識。此地又別新相知。旅館屏風寫楊柳。依依似柳離筵酒。明日我爲落絮飛。坐客對之相思否。

春雨將辭客舍口號

春雨霏霏出浪華。扁舟行上淀河涯。一年風色如彈指。昨日開花又落花。

すみなれし旅のやどりをたち出る

袖も濡けき春雨の空

たひ衣きその山路にきくわたる

雲のかけはしふみならしてん

淀河舟中

百丈牽舟遡淀河。神碕江口雨中過。兼葭出水通津澗。唯見長風起白波。

其二

前山如笑逼船艖。遠近分明黛色雙。碧瓦凌雲知寶寺。烟和密箒隱長江。

共三

岸上青松紫藤。歸舟空繫暮雲層。打頭風起無邊雨。咫尺雄山不可登。

ますらをはよとの川邊をいくかへり

ひくてふ舟のつなてくるしも

伏見にやとりけるに去年の春やとりし家なり

くれ竹のふしみの里に玉筍

ふたゝひよをもこめてあかしつ

墨染寺の櫻を見て

かきうつす筆もとりあへす墨染に

咲てふ花をめつることのは

過百丈山石峯寺

五百應身不雕琢。依稀具相石峯幽。從來一字無言說。萬壑千巖共點頭。

東福寺觀兆殿司涅槃像

兆公遊戲涅槃圖。東福名藍不可無。五彩丹青稱絕妙。天之所賜現山隅。

等持院

等持深院蓋山陰。俯仰門庭見古今。洛下將軍十五世。長留遺像託祇園。

金閣寺

過鏡山下飲酒家

黃公壇酒驛亭間。黑主歌詞石鏡山。山色年年長若此。不知行客損紅顏。

箕作山

道左箕山列古松。猶餘絕壁似崇墉。當年淡海鶴鷗氏。此地橫戈且闢鋒。

磨針嶺

仰望丹不梯易行。磨針嶺秀石崢嶸。中山道上東歸客。到此寧無叱咤情。

望湖亭

望湖亭望琵琶湖。湖上烟雲入畫圖。萬壑千峰爭勝絕。何如竹島望中孤。

春雨過關原

滿天春雨入關原。山自南宮接大垣。二百年來無戰伐。誰知此地定乾坤。

みのゝ國にて物見松かれしとききて

くま坂の物見の松もかれにけり

何いたつらに年をぬすまん

過各務野

日出幽篁裏。晴光射籬籬。露新松楚楚。野曠草纖纖。

昔聞金閣寺。今見北山傍。不識英靈盡。猶餘壯麗光。欲摩究竟頂。已上一初規。石象峯巒峙。池牽菱荇長。天紳垂瀑布。霞綺綴林芳。鳥雀鳴愈靜。丹青落更荒。經營安古佛。警蹕駐先皇。異域傳名姓。遙稱恭獻王。

北野天滿宮

平野社

行過平野祠。已老百花枝。寄語紙川水。再遊遠幾時。過上田餘齋告別

禁城東畔訪茅茨。逢著仙翁告別離。欲向大津投驛舍。匆匆分手去天涯。

過湖上

琵琶湖上靜朝暉。石鏡山頭帶翠微。若得并刀能截取。爲兒携去寫依稀。

石山寺

石山含石石巖巖。紫氏遺文五十函。千古長懸明月夢。覺來湖上送風帆。

草津道中

山兀含奇石。松新上翠微。回看松嶺色。乍失是耶非。

凉水還爲薄。連山走不尖。回頭思昨雨。轉覺興情添。
百草のなかにまされるいはつゝじ

いはねと色にいて、見えけり

観音坂

観音坂曲踏丹梯。下有奔流百丈谿。石上長松藏洞壑。
蒼苔碧溜氣凄凄。

十三嶺

一のみの清水といふあり

たび衣きてはなやめるひとのみの

清水にしばし袖やひちなん

岐岨山中

和合村に美酒あり

あめつちのやはらきあへは味酒の

みやまのおくも外ならぬかは

雨夜次野尻驛

蘇水潺湲屋後流。更添春雨響牀頭。通宵輾轉纔爲夢。

夢繞千山萬壑幽。

野しりのむまやちをたちいづるに空はれれば
されことうた

雨はれてけふは天氣もよし仲に

またるゝものは朝日將軍

寐覺牀

一曲清流激翠屏。仙人床上睡初醒。雖僧引入臨川寺。
指點千巖說異靈。

三月盡過叢原

岐岨風光物候遲。桃花猶接李花枝。夕陽已在前山頂。
正是三春欲暮時。

やふはらのやふしもわかぬ山中に

春の光を見はてつるかな

岐岨懷古

祠前松檜萬峯雲。馬上桃花二女裙。唯有岐蘇諸父老。
至今猶說旭將軍。

きさのさしくしはからうたに見え、ゆつのつま
くしは神代にきく、こゝに木曾のお六といへる
女、みねはりといふ木をもてつけの小櫛をひき
いてしより、今はもろくの國につたへて、西よ

り東よりもとむるものそのくしのはをひくがご
とし、

たび人につけのくしやみねはりの

木曾路はこゝとさしてをしへん

是は叢原の驛のあるじの伯父なるもの足たゝす
してありしが、お六がつくれるみねはりのくし
を見て、黄楊の木にてつくり出し、かつみがき
をだにくはへて、諸國にひろめしより世につた
はれりと、あるじのかたるにまかせて書て贈り
ぬ、

卯月朔日奈良井といふ所に梅花のさかりなるを
見て

旅衣かへんとすれば咲梅の

折やたがへし木曾の山道

桔梗原

桔梗原頭草色平。甲陽甘子建功名。只今惟有麥秋色。
北望難分松下城。

鹽尻嶺望鷲湖

聞道鷲湖在信陽。行過鹽嶺蒼蒼蒼。陰雲不辨芙蓉色。
背面佳人隔淡粧。

香爐巖

香爐巖上倚林巒。煙雨霏霏四月寒。不是自家詩句雪。
慙慙更撥轡籬看。

雨中自諏方嶺踰和田嶺

曲嶺名從絶頂分。諏方山上雨紛紛。眼前長見三冬雪。
脚下頻生一壑雲。自有陰厓含朔氣。更無新樹動南薰。
不知晴昔芳春盡。猶澁鶯聲處處聞。此曲田和

行なやむ山路に雨のふる畑を

なをたちのぼる峯のうき雲

みやこには卯の花くだしふる雨を

山陰しろくきえのこる雪

碓氷嶺

行下肩輿躡履行。碓氷山上路崢嶸。武尊一有吾孀歎。
不改東方萬古名。

望月といふ所にやとりて

もち月のみまきの名のみとしふりし

隙ゆく駒のかけだにもなし

淺間山を見て

ふしのねの烟はたへすなりぬるを

あさまの山そとことには見ゆ

出高崎城望淺間山
大麓逶迤似可攀。兩行松檜驛亭間。遙看絕頂烟光白。
遠近誰無識此山。

さの、舟はしのあと近しときけど、かへるさを
いそぐ旅なれば、行て見がたし、
見ねはこそ心にかゝれいにしへの

さの、舟橋とりはなしても

度神奈川是毛武國界

浪華歷京洛。江美信毛間。一度神川水。東南是武關。

四月六日次巖亭明日將還鄉里喜賦

春餘投宿巖微亭。一道林陰麥氣青。晝錦明朝還故苑。

親朋滿室酒盈甌。

たちかへる木曾の麻衣あさからぬ

めくみやひるの錦ならまし

壬戌紀行所附詩歌頌行囊加筆削俯仰之間恍如再

涉岐蘇之險矣時享和二年秋八月十一日清晨

蜀山逋客

革命紀行

甲子孟秋發江戸至長崎途歷東海道而至京攝也往歲辛酉紀行既已盡之今歲一校補其所闕矣若夫西海之行則所未曾見也與中所筆零細叢殘恐其失之仲秋舟發室津至小倉舟中無事起筆於阿伏兔巖下以紀所見名曰革命紀行革命者何紀時也文化改元甲子八月二十六日南畝太田覃書於加室舟次

革命紀行

八月十八日の朝、浪花の道修町^{三町のやどり所會}を出て、北野におもむく、雨ふる事まきりなり、大融寺のかたはらより田圃をゆく、讚場のわたり小萩多く植たる寺あり、いにし西の年はつきもちに近き夜、こゝにて馬田氏^{昌調號}と、もに酒くみし事など思ひ出らる、まばら行くて一村あり、銅局のものこれかれ袖もまといにこの所にまち居れり、これと手を分ちて十三川を船にてわたり、又田づらを行、左に三社山十樂寺あり、本尊は樂師如來とかや、右に妙榮山法光寺の假堂あり、三津屋村をすぎ、かぢま村をへて、神崎川あり、船より上れば尼ヶ崎より馬役遠見のもの來れり、この所人馬の繼場なり、右中山左尼崎道とゑりたる石ぶみたてり、堤を上りて左にゆけば、自是南國役堤と記せる杭あり、堤を下りて田間を行に、自是東尼崎領自是西他領入組とゑれる碑あり、雨はれて日や、出るに又碑あり、自是西他領入組、自是東尼崎領自是北他領入組と鐫れり、又攝

州大師巡八十八ヶ所といへる碑もみゆ、土橋をわたりて長す村、大物村をすぎ、大物の浦もこのあたりなるべし、尼崎の城下に入れば、建つゝきたる人家にぎはへり、すべてこの人家には、家の内の勝手口に暖簾かけたる家多し、家名なし 右の方に城の櫓みゆ、大黒橋をわたり、城をめぐり橋をわたりて市中をゆく、右に貴布禰神社あり、城門を出て土橋をわたり、松の並木をゆく、西新田村に人足の札引かへ所あり、東新田村の堤を見れば、人足五十人といへる札たてたり、武庫川をかちわたりてゆく、左に一むらの森ありて、石の鳥居あり、岡太社といふ碑たてり、ある人の云泉屋仁 此社の前を嫁入のもの、與忌て通らず、通れば必不縁なりといふ、むかしは此神の前を過るに、裳の前をかゝけて醜を露はしけるより、岡太社とかきて、おかしの社といひけるとなん、今も裳をかゝげて過るは、その遺風なりとぞ、又自是東尼崎領とゑりたる碑あり、一村名なき を過て枝川にいたる、かり橋あれどかちわたりせり、又一村名不知 を過て右に寺あり、石橋をわたりて西宮の方に向かふ、此わたり濱の手鳥屋は西瓜の名物なり

ときく、西宮脇本陣壺屋源兵衛がもとにいこひて晝餉す、泉屋雨柳眞兵衛 今宵兵庫まで所用ありてゆくとて、雨づゝみのしたに酒壺を携へ、蒲鉾といふものを肴に酒をすゝむるもうれし、こゝは大坂市令の支配なれば、市令の吏二人河合善左衛門 島田小兵衛 來りてそのよしをつぐ、西宮太神宮は宿はづれにあり、石の鳥居の前に駕籠たてゝかちよりあゆみ、西宮の神前にぬかづく、宮居はよろしけれど人げなく神さびたり、池に辨財天あり、八幡宮もあり、神主の家と思しき所の入口に、關屋といへる札はれり、その前に制札あり、ゑびすの御うちの札、外よりいだす事かたく停止の事、月日關屋とゑるせり、従者をして御影をこひて收む、隣に樂師堂あり、すべて此市中に木の輪を厚くしたる三輪の車あり、猶も田面をゆけば右に甲山ちかくみわたさる、まぶ川をかちわたりして、又小河を渡り田間をゆけば人家あり、打出村といふ、虚無僧本寺京都明勝寺留場といふ札たてり、右に社あり、右に石碑あり、すぐ兵庫道右大坂西宮道とゑれり、鳥かひ川にかり橋あり、かちよりわたりて蘆屋村に在る、こゝにおかしき招牌あり、表具處嫁入道具

ありとかけるさまひなびたり、村はづれに四辻あり、左右車道すぐ兵庫道あし屋の里とかける杭あり、蘆屋川をかちわたりしてゆけば、左に海ちかくみゆ、右に稻荷之社自是三町とゑりし碑あり、又自是東尼崎領自是西尼崎領他 とゑれる碑あり、又ゆきくして自是西尼崎領、自是東尼崎領、入組とゑれる碑もあり、片町といへる村をへて、小流を渡りて右に寺あり、木村周藏とかける制札あるは、御代官所なるべし、住吉川や、大なる川原なり、板橋あれどかちわたりす、人家あり、茶屋ありて賑へり、こゝに兎原住吉の四社あり、訛りて茨住吉といふ、駕より下りて入る、右に社あり、左に池めいたる所に長き石あり、さゝれ石といふ、拜殿のわきより入て同社の前にぬかづく、神さびたるけしきいはんかたなし、社をうちみつゝ、ゆく、右にまやさん道といふ碑たてり、これ佛母摩耶山初利天上寺なり、又右に一王山小善寺道、川上八丁といへる石表あり、石屋川をかちわたりて田面をゆくに、人家あり河原町といふ、都賀の川をかちわたりして又人家あり、小流を渡りて左に、自是敏馬神社道みぬめの浦道といへる石のゑるしあり、左

に石あり妙見大菩薩七面大明神とゑれり、右に摩耶山道あり、左の方の人家にそひて海濱に出るに、波路はかるなり、これまでの濱邊に家藏多くたてつゝきて、賑へるさまにみわたさるはみな酒つくる家にして、江戸の酒うる問屋にて、灘目といへるものなるべし、右に摩耶山ちかく笠てみゆ、十八町のぼるときく、生田川の水あせてかちわたりするに、かの大和物語にみえし兎原をとめが事など思ひ出さる、右に生田の森あり、生田太明神の石の鳥居たてり、宮居は三町ばかりも引入りて、籠の梅などありとき、しが、日ぐれなば先をいそぎて見すぐしつゝ、大内をゆく、左右に櫻の並木あり、春のさかり思ひやらる、右に中國海道といへる石表あり、左のかたに自是西神戸村といへる杭ありて、人家にぎはしくみゆ、音にきゝし楠子の墓にまうでんとて、かちよりあゆみゆく、道にて日くれぬれば灯かゝげてゆく、右に三宮大明神あり、神戸村を出てはた中をゆき、道より右の方に三町ばかり入て堂あり、堂のうちにみそかあり、くらうして見えわかねば、灯高くかゝげさせて格子のうちをうかがひみるに、花かめに松二も

とたて、碑の跡の龜のあたりをおほへり、やうやく眸を凝らしてみれば、嗚呼忠臣楠子之墓といへる文字かすかにわかちぬべし、背面の文みてもよみわかつべくも覚えねば力なし、さきに浪花にありて碑の面背ともにすりたるを得しかば、家に藏をきつ、たいその形をだに見る事を得るも亦可なるに似たり、そもく南北の皇統天下の安危、この君の一身にかゝりて、その子その孫まで、世々その志をかへざりし事、もろこし異朝にもたぐひなければ、今さらいふにをよばず、水戸黄門義公の、比干が墓になぞらへて、この石ぶみをたて給ひしもむべなりけらし、湊川をかちわたりして、兵庫の宿につく、驛舎のさま賑はし、御神燈といへる提灯軒にかゝげしは、いかなる神の祭にや、脇本陣明石屋惣右衛門がもとにやどりぬ、此宿のうちに平相國精盛の墓ありといへるを、朝とく出たちぬればまらずして見すごしぬ、

十九日 空晴たり、卯の時すぐる比やどりを出て、西柳原町を過ぎて左に恵比壽の社あり、右に寺あり、惣門を出て筑島をゆく、左右ともに田面にして、稻

葉の露をわけつゝゆけば、むかふに高くみゆる山あり、たかとり山といふ、右に明泉寺大日道并太山道といへる石表あり、猶田の面をゆくに左右に溜池あり、土橋をわたりて左に、前武州刺史知章墓といへる石ありしと従者のいふを、まらずして見過しぬ、右に攝津國本宮長田大明神の石の鳥居あり、大門長くして本社を見ず、右に溜池あり、又自是大山道といへる石表あり、人家ある所にて朝の雲はれ日出ぬ、左に溜池あり、右に石の鳥居あり、側に石表あり、從是勝福寺へ三町餘平相國兵庫築嶋本尊とまらせり、此寺には平家の寶物あまたありといふ、三の江川をわたるに小橋あり、これより須磨の浦なりといふもゆかしく、天井川といふを渡れば、水なくして砂石のみなり、人家ありこれ東須磨なり、仰きみれば須磨寺のかたにあたりて、有明の月の残りたるまことに千金といふべし、こゝに名物根元松風味噌仕込所、東生田村ま屋儀左衛門といへる招牌を出せしもおかしく、立より見るに、曲物に麥糍のあまき味噌をいれたり、又村雨漬といへるは同じ味噌に茄子大根などつけたるなり、又須磨浦古跡記とい

ふものをひさぐ、左に綱敷天神の宮あり、濱邊の森なり、須磨寺みんとて案内のものを先だて、ゆけば、あるしれぬ事いひつゝくるもおかし、中にもおかしきは行平月見の松、同きぬかけ松、源氏のやしき跡などいふも、夢中の夢うらなひなるべし、すまの馬場先に重衛腰かけ松といへるあり、三位中將重衛庄野太郎家長にいけどられ給ひ、まばらくいこはせ給ふ所なり、此とき里人濁酒をさしければ

さゝばろや波こゝもとをうちすきて

すまでのむこそこり酒なれ

とよみ給ひしなど、だみたる聲にうめき出せるもおかし、まこと須磨寺は上野山福祥寺といふ、道より三町ばかりも引入たる所なり、門なる下馬といふ字を石にゑれり、門の額は平家の馬盤にして、躑躅の木の大なる木なりとぞ、徑三四尺もありぬべし上野山といへる家あり、左の方し世にいひつたへる若木の櫻數株あり、欄をもてかこふ一むら竹のまげれるを、源氏やしきといふ、華嚴院櫻壽院といへる二坊あり、本堂の額は福祥寺の字なり、權大納言豊臣朝臣秀頼卿再興千時慶長七季寅閏十二月如益珠日

拜書とまをせり、寺僧にこひて寶物をみるに、本尊聖觀音は海中より出現せるとかや、青葉笛は弘法大師の作、高麗笛は學祐僧正の作にて、みな敦盛の秘藏せられしものなりとて、厨子のうちに安置せり、敦盛の畫像は熊谷の筆也といふ、絹の地なとあらくして古くみゆ、同甲冑は敦盛の着物とはいへれど、兩袖と思しき所にちいさき幡やうのものつけしは、追善のために納しものともみゆ、赤旗の名號は法然上人の筆にして、爲教盛空顔憐清菩提書之源空とまをし、和歌

音壽丸よにこそすりてたへいりて

みたれ蓮にとともに生るも

又保呂衣の名號は蓮生法師の筆にや

法の水すみと硯てかきをくも

心行具足阿彌陀佛力

とかけり、中にもあはれに覺えしは、敦盛幼少の手跡にて

庭雪

音壽丸

よしやたゝとはれても又なぐさめん

おのれあとなき庭の白雪

寄松祝言

みとりなる松も千とせのいろみせて

ひさしかれとやのきの松風

筆つきうるはしく、いかに古くみゆ、又若木櫻制札とて、紙に書しものあり、須磨寺櫻とかきて、此華江南所無也一枝於折盜之輩者依天永紅葉之間伐一枝者可剪一指壽永三年二月とあり、われ此制札の文をうたがふ事久し、下學集に江南所無は梅の名と記せるか如く、范曄陸凱が故事によらば梅なる事明らかし、いかなれば此制札に櫻とはかけると、よくくみるに須磨寺櫻とありて、文字さたかならず、櫻といへる文字の中に紙のやふれあり、もしくは梅といふ文字古くは萩とかけるにより、下草體に梅とかけるを櫻とよみしなるべし、源氏須磨の巻に若木のさくら咲そめてといへるに附會して、光源氏を源九郎とあやまれるにや、櫻に江南所無の名ある事いまだかつて聞ざる所也、戯れに梅一もとを植て、此華泰山府君なりともいはまほし、次なる堂に敦盛甲冑の木像あり、顔色うるはしく古きものとみゆ、鐘樓にたちよりてみれば、鐘銘に攝州矢田郡丹生山田庄原野

村安養寺鐘とあり、鐘掛松在、鐵拐峯源義經軍畢後命士卒被納置于此寺者也といへる札たてたり、松あり義經の腰掛松といふ、一むら竹あり神功皇后の釣竿竹と名づく、林の中をゆけば右に鐵拐か峯高く聳へ、一の谷二の谷もこのあたりなり、右に畑村にゆく道あり、かの松風村雨二女は多井畑村のものなりと古跡記にかけけるは、里人のいひつたへしにや、三の谷の上に内裏の跡あり、又敦盛の首塚といへるあり、此林の中に防風といへる草多し、里の子これをとりにひさぐといふ、此邊に白き砂と赤き土くれと堺をなせる所あり、白はた赤旗の色にあへしといへるもおかし、濱邊に出れば敦盛の石塔あり、臺座は地にうつもれてみへず、たゞ梵字のみるれり、こゝに蕎麥むぎひさく家あり、あつもりそば、熊谷ぶつかけなどいへるに興さめたり、こまかへ給へひらにひら山といへる古歌もあれば、久しき事とみえたり境川あり、これ攝播の堺なりといへど、いさゝかの砂川なり、鹽屋川を渡れば、制札の末に左兵衛とあり、これ松平左兵衛督の領する所にして、すでに明石の浦なる事をしれり、けふはひわたるほと近しいひけ

んことのはも思ひ出つ、人家あり鹽屋といふ、高き岸を右にし、濱邊を左にしてゆけば、右の岸より水ながれ落る所二つあり、一つは小町の瀧といふ、げに垂水村といへるもことはりぞかし、この邊左に淡路島ちかくみえて、うしろに遠くみゆるは四國なりとぞ、かたへに長くさし出たるは、紀州のかたなりといふ、須磨の關屋のあと、須磨寺の前にあれど、かよふ千鳥のなく聲にといへる歌など思ひあはするに、このあたりの險しくせば所ならんもえらす、左の濱邊に人家あり、たるみ川を渡る、小橋あり、たる見の立場賑はし、右に由向大明神の社あり、小流の石橋をわたりて右に石坂あり、坂の上に塔あり、これ仲哀天皇の塔にして、垂水の山の上なる千壺といふ所に陵ありといふ、や、ゆきて右に松原あり、枝しげり根蟠りて、手の舞ひ足の踏かと疑ふ、これ世の人のめであへる舞子の濱ならし、左に淡路島むけに近く、眞帆片帆の舟行かふさま、景色いはんかたなし、濱邊に酒店なとみゆ、小流あり、橋をわたれば、明石の遠見のもの來れり、山田川の橋を渡りて大藏谷にいれば、にきはへる所なり、右に八幡宮あ

り、紺屋五郎兵衛が家に晝休みして餉くふ、庭に蘇鐵あり、石あり、沙羅園といへる額かけたり、書院の床に等舟齋春英か書かける大黒天あり、横幅なり
東方崇大已貴神西域信摩訶伽羅天所祀雖殊哉其實
豈判然克敬克虔則致財不翅百千介福綿也斯保萬年
梁田邦兼拜贊とあるは、蛻巖翁の嗣にや、次の床に蝶護花の三字を掛たり、關思恭か書なり、此あたり
にひさぐ所の南瓜をみるに、長くしく大なる瓢箪のごとし、これより右のかたにさし入て人丸社ありと
きいて駕籠より下りてあゆむ、左のかたに忠度塚道といふ石表あり、又護國の神の祠あり、石坂を上りて人丸社あり、宮居のさまつきくし、大きな石碑たてり、林春齋の文にして、寛文四年甲辰明石城主日向守源信之と記せり、次なる堂に額あり、人鷹山とかけり、堂の前に梅の木もて、船の形をつくれり、かのほのくといへる詠によれるなるべし、山の上より明石の浦見わたされて、勝地といふべし、坂を下りて明石の城下の諸士のやしきをすぎ、土堀へり、城のほりの前をすぎて、城の町をすぎ、市中長くして賑ひあり、右に稻荷大明神あり、城門をいで

明石川をわたりて西新町長し、門を出て田間をゆく、萩の葉風にそよまひて物さびしき所なり、明石の巻の岡の屋の事なと思ひあはするに、これより加古川のほとりまでの人家のさま、みな土塀にして、農家となく、市中となくみな土もてぬりこめたり、かの入道が娘こませたる方なる月いれたる、真木の戸口もかくやありけんといふ、田間をゆきくして右に高野道場といへる石表あり、坂を上りいて人家あり、例の土塀なり、田間をゆくに又萩の葉をよく松原を行く、右に溜池ふたつばかりあり、左の方に海や、遠し、人家あり中谷といふ、又田間をゆきて一村あり、人家あり数丁ついでけりのり田といふ、ある家にまんぢうきつてありといへる札あり、右に寺あり、石橋をわたりて人家あり大くぼと云、又石橋を渡りて、左右に一里塚の松あり、人家まゝみゆ、田間をゆきてかなか崎にいたる、人家多し、そば麥うるもの多くみゆ、左に大山寺道あり、又田間をゆけば人家あり、長池といふ、加古川の驛より遠見のもの來れり、又田間をゆくに、左に海遠く見わたさる、人家あり、小流を渡りて左右に一里塚の松あり

り、人家あり、左のかたに海みえく、小豆島江島などはるかにみゆ、北風はげしくて肌寒く、駕籠の中に躡りゆく、人家あり山之上村といへる杭あり、制札の末に雅樂とあるは姫路領なるべし、又田間を行て人家あり、高島といふ、これより加古川まで一里あまりといふに力を得て、駕籠をはやめゆく、右に小社あり、寺あり葎酒の禁の石表あるは禪寺にや、又田間をゆきて右に八幡宮あり、人家あり三ツ谷といふ、やゝにぎはへり、田間をゆけば人家あり、野口といふ、右に小社あり、人家あり坂本といふ、右に山王五社宮あるによれる故なるべし、右になこちてうにん寺といふ寺ありといへど、人夫の聲詠りて聞とりがたし、此家に根本、無類野口張きせるといへる招牌ありき、又田間をゆきて石橋を渡りて人家あり、田間をゆくに左に自是刀田山、尾上高砂道あり、小流の石橋を渡れば左右に一里塚あり、加古川につきて鍵屋傳兵衛かもとにやどり、今宵はこの比のやどりに似ず、雨戸のどさしもあらはにしていぶせきやどりなり、床に忍の字の掛幅ありて、百戦百勝不如一忍萬言萬舌不如一黙といへることばありき、

ある禪僧の筆なり、

二十日 寅の時ばかりに、燈かゝげて出たつ加古川の河原廣くして、東海道の天龍河に似たり、田間をゆくに人家あり、平津と云、左に石の鳥居あり、これ石の寶殿に出る道なり、人夫のものにたづねしに、これは畔道にてあしく、これよりさきにゆく道ありと欺きて、石の寶殿と會根の松をもみすに過せしもほむなし、すべて加古川の驛の長人夫ともに、過し明石にくらふれば、無禮なるもの多し、神爪村をすぎ、石橋を渡り、魚川村の人家をこえて、田間をゆきて、又人家あり、いづれもきのふの人家に似て、土塀をもてかこひ、あるは土もてぬりこめたる家なり、石橋を渡りて左の道をかへりみれば、石の寶殿會根の松道とあり、人夫にとふにこれより石の寶殿は一里ばかりあとにして、會根のまつは十四五町もへだれりといふもにくし、まめ崎といへる村にて、人夫の札引替所あり、田間をゆけば人家あり、姫路の城の天守近くみゆるもうれしく、夜も明はなれたる田間をいそぎて、御着といへる宿につく、宿の中なる土橋をわたりて、天守いよゝみゆ、左右に一里

塚の松あり、これより繩手道をゆくに、人家あり、山繩といふ、江戸但馬合羽烟草入所とかける招牌もめづらし、左の山に大石あり、法華の題目ゑりたる二ツあり、又爲瀧死善堤と鐫りつけたるもあり、石佛も多くみゆ、堤を下りて市川の河原をゆく、河原廣し、いにし七月水出て、田島あまた損せしとぞ、もとは丹波の黒井といふ所より、寶螺ぬけ出てかくはなりしといふ、堤を修め道つくれる所みゆ、これよりたゞちに望めば、姫路の城の天守高くみわたされて、風景いはんかたなし、川をわたりて姫路の城下に入りて、鍵屋久兵衛がもとに晝餉す、姫路の國家老川合氏、半之助 號白水は年比相應なるものなり、けふ此城下を過るをきいて、佐々木源八といへるものを使として、高砂染絹一段と、千代鶴と名つけし酒一樽を贈れり、ことし七月十日姫路侯の母君うせ給ひしかは内々の事なり詩つくりて使につけてかへせり、城門を出れば田の中にちいさき庵あるを見るに、瓦ふき又は茅ふきにして、三方は土もてぬり、たゞ一方の口をひらけり、わづかに膝をいなるばかりにて、門田もる庵なるべし、これまでの田面に見ざる所なり、又牛に薪をつけ來るもあり、薪

を肩に荷ふもあり、いづれもたけ長き薪なり、田間をゆく事数町にして人家あり、下手野と云、左右に一里塚の松あり、小流の石橋をわたりて河原に出れば、青山川なり、かちわたりしてゆけば、自是西民部卿殿領分とかきし杭あり、青山村の人家を過て、左に書間道あり、こゝに小流あり、輿かくものいふ、これは小き流なれども、峯さき川といふ川なりと、むかひの二の山に水落し跡あり、これによりてかくはいふ歟、又田間をゆけば坂あり、山田の坂といふ、三曲ばかり上りて、上に自是東民部卿殿領分といへる杭あり、山はみな赤土の石山なり、坂を下れば七曲にして、上るよりはやすし、左に溜地あり、又坂のきしに大きな石あり、田間をゆけば人家まゝあり、坂を下りて田間をゆくに人家あり、大たといへる所なりとぞ、石橋ある川を渡りて制札あり、建部内匠頭の領する所なり、又田間を行て斑鳩といふ所に至る、人家多し、右に聖徳太子の灯籠あり、引いりて塔みゆる寺あるはこれなるべし、これより田園を行に又例の廬舎あり、左右に一里塚の松あり、あそ川を渡る、水ありて假橋二ツあり、田間をゆ

きて人家あり、門前といふ所なり、右に寺あり、制札の末に淡路とあるは、脇坂淡路守の領する所なるべし、又田間をゆきて人家あり、正條川の河原廣し、舟にてわたる、こゝに脇坂の臣三須岡門 出てそのよしを申す、この川を渡りて中國の陸路は、片島の方へゆき、船路をゆくには室津の方にゆく、岐路なり、人馬もまたこゝにてつげり、船路のかたにゆくには、川を渡りて左の方にゆき、岨を右にし川を左にす、岨に松あり石あり、ゆきくゝて右は山、左は田圃の細道をゆく事一里ばかり、田のむかふにも又山ありて、松生ひしげれり、やうく人家ある所をとへば、馬場といふ所なりとぞ、この立場にして酒のみつかれをいやす、いとけなきわらはのあるを見て、くだものあたへなどして心を慰む、左に寺あり、これより高き山にのぼる、道を冬坂といふ、かちよりゆくにあゆみくるし、やうく山を下る、山ぎはより室の津の海見わたされて、信濃の鹽尻峠より諏訪の湖見る心地す、左のかたに相生町、野瀬町といへる杭あり、これより坂を下る事七曲にして、急なり、鳩胸といふ所なりとぞ、又駕籠にのりて室の津にいたれり、

此地のさまを見るに、海より深く引いりて、まことに山のふところといふべし、船かかりの場はこれに過たる所あらじと思はる、驛舎のあるじは野本圓十郎といふ帯刀のものなり、もとは赤穂のものにして、本姓を前川といふ、十とせあまりさきに此地に來りて、従父のために養はれしかば、その姓を習せるなり、名は朝宗、字は東伸、仙山と號す、學を好み詩をつくり、夷歌をもよめり、屏風ふすまやうのものまで、詩歌の類を書しをけるをみるに、まことに好士といふべし、赤穂鹽に夷歌をへて出せしかば、かへしうたし、詩二三首唱和して、旅のものうさをわする、すめきか所のをばしまちかく、千船も、船より來てむかひの山に、室の明神の鳥居みゆ、右は山高くつらなりて、鳩胸のかたにつけり、宵のほどやとりをばいで、明神道といへる原よりいりて、室の明神の社にまうでしに、門あり石の鳥居あり、石坂を上りみるに、右のかたに室の明神五座たゝせたまふ、みあかし四つ五つかゝげて神さびたるさまかの兼好法師が神佛にはよるまうでたるよしといひし事も思ひ出らる、今宵は尙左堂奇南堂など酒くみ

かはし、夜ふけてふせり、廿一日天氣よし、けふは鎮臺の船巳の時ばかりに出給ふよしをききて、朝とく起て、従者をして船に積るべきもの何くれといひをきてんとすれば、心あはたし、肥前少將の家なる、船の事つかさとするもの御船頭下役松村彌惣右衛門 よべより來りてそのよしを申上やうやく晝餉して、午の時過る比船にのる、尙左堂はこれよりわかれて讃岐の國象頭山にまうてんとて、手をわかつ、ふるさとへの文ども、浪花の便にこつてやる、船の名を藤島丸といふ横三間船十 船あまたござつれたり面に十五丁軸に三十三 三十六段の布帆なり十二 紅の絹に茗荷の紋つけたる幕うちて、その下に紺地の布に同じ紋つけたる幕をうち、湊をはなれて、紅の幕を撤し立れり、肥前の御手梶子十人、水主三十八人もろ聲に船こぐめり其聲めいめいといふやうにきこゆ 帆掛てはしる時は櫓をやすめり、左の方の海に江島あり、またなれとみな江島のうち也 小豆嶋もはるかに見わたさる、なばといふ所を右にしてこきつゝゆけば、右にまやこしといふ湊あり、ゆきくゝて備前の國大たぶといふ所に船をとどめて泊れり備前國津より備前國大たぶまで海上五里 岡山の城主平